
モンスターハンター “ 隻腕の狩人 ”

名無し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター “ 隻腕の狩人 ”

【Nコード】

N2985I

【作者名】

名無し

【あらすじ】

ドンドルマの北東に位置する極寒の地、ポケット村。広大な自然に包まれた人とモンスターが戦い共存する世界。そこに新たなモンスターハンターが登場する。だが、彼の左手は…………。

出会い（前書き）

はじめまして名無しです。

初心者ですが少しでも皆さんが楽しめ、かつ暇が潰せるような作品を書いていくつもりです。よろしければ見ていってくださいm（
— m

出会い

——ソコは極寒の地だった。

大陸最大の街「ドンドルマ」その遥か北東の彼方。
フラヒヤ山脈の麓にその村はあった。

繁殖期であろうと、頻繁に降る雪はこの地を永遠の白銀の世界へと染め上げていく。

人間が住むにはあまりにも厳しい土地。

それだけに、ソコに移り住むものは少なく。

今では僅かな人々がその麓にポツンと寄り添うように、暮らしているだけであった。

僅か数戸の村。白銀の世界ではあまりにも小さな場所。

ココを人は——ポケット村と呼んだ。

——気がつけば、ソコは焼け野原だった。

俺達の時代、モンスターが多数存在していたソコではソレは決して珍しい光景ではなかった。

人間の力はモンスターに比べてあまりにも弱い。

故に、こうやって滅ぼされていく村が多いのはある意味当然であった。

この日もそれは突然に起こった。

突然現れた、巨大なモンスター。

古龍観測所すら見逃したそのモンスターは、恐らくどこかのハンターが狩場で討ち洩らしたモンスターなのだろう。

体中が傷だらけで、その口には討伐に失敗したであろうハンターの腕らしきものがあつた。

傷だらけの金と銀の火竜。

その2匹の竜は見慣れた村を一面の廃墟にしていた。

まるで絵本や本でみる、戦場跡のようだ。

現実味が無くなったソレをみて、俺は齒をかみ締めることしかで

きなかった。

——だが、ソレも長くは続かない。

目の前にはその廃墟を作りだした銀の火竜。

ソイツと目があつた以上、俺の悪あがきもコレでおしまいだ。

本来、まだ下位ハンターである俺がコイツと戦ったところで意味など無いとわかっていた。

勝てるはずのない戦い。能力、経験、そして武器と防具。

どれ一つ。奴等。

2匹の火竜に勝てるはずがなかったのだ。

できたばかりのこの村には、上位ハンターはまだいない。
故にこの村を守るのは、俺と数人の下位ハンターのみ。

勝てるとは思えない戦い。だからこそ、せめて。——せめて、村人が逃げる時間を稼いだかった。

だが、何人かの村人は。

それでも、俺達の力になろうと小さな力を振り絞ってくれた。
あるものは使った事もない初心者用のボウガン“獵筒”を構え、
あるものは少しでもナニカの足しにと回復薬を渡すために避難所
と戦場を往復していた。

俺達がいくらヤメ口と叫んでも、危険だと諭しても。
彼らは決して止めようとはしなかった。

——その結果がコレだ。

獵筒を構えた村人は、火竜のプレスに焼かれ。薬を運ぼうとした
者は奴等の毒爪に傷つけられた。

上位以上であろう奴等の前では俺達の防具でさえ紙細工に等しい。
その戦いの中で。只の村人や下位のハンターである俺達が未だ息
があること。それがもう『奇跡』なのだろう。

だが、その奇跡も最早品切れだ。

俺の利き腕である左腕は肘から先がもう——無い。

先程、銀の火竜に噛み千切られたばかりのその腕からは。……
未だ血が止まらずに流れ続けている。

根元で縛った止血の紐も最早あまり意味の無いものと化していた。

そして、俺は……。片手で盾を構えながら、最後の“生命の粉塵”を使う。

“生命の粉塵”それは拡散し触れた者を癒す、不思議な粉。

その袋を口で噛み千切り、周囲にまく。

片手が使えないとはいえ、我ながらみっともない姿だ。

俺のランクでは“生命の粉塵”はたいした数は作れなかったが、それでも最後にいい仕事ができたとおもう。

俺の周囲にいた人間、全てがある程度傷がいたはずだ。

これで、なんとか。

「——スズネ、頼む！」

強く、想いを込めて凝視する。

同じ下位ハンター。ランス使いのスズネに。

俺が時間を稼げるのはこの瞬間のみ。

片手の無い俺は最早、単なるお荷物に過ぎない。

ならば、五体がまだ動くオマエが動けるものを背負ってココから逃げる。

その意図を伝えると、スズネは口から紅の一筋を流しながら肯いた。

彼女が噛み締め、その口から流れる血を見ないフリをしながら、俺は銀火竜に盾を構えた。

本来なら彼女が残りたいのだろう。

豪放で気のいい彼女は他人を見捨てることを極端に嫌う。

それでも、片手の俺では全員を運べない。

治療薬はさっきの生命の粉塵で終りだ。

そして生命の粉塵には解毒作用はないため、急いで解毒薬があるところまで怪我人を連れて行かなければならない。

どの程度かは分からないが、強烈な毒は容易く人間を死へと導いてしまう。

毒爪を喰らうていようとまだ息がある人間を救うタメには、誰かがココでヤツラの気を引かなければならないのだ。

「——ッ、ゴメンね。ケビン——!」

全員を手早く荷車に積んだスズネはそう言いながら、走り出した。その音が遠ざかるのを耳に残しながら、目の前の敵を睨みつける。

やることは決まった。——覚悟もある。

目の前にいるのは、俺では手が届かないであろう巨大な存在。他のハンターにやられたであろう、数々の傷があるうと。片手で武器の無い俺では、手も足もでない。

——ズクン！

心臓の鼓動が上がり、血流が俺の体を駆け巡る。

——ズクン！

回転を上げ続ける心臓は、痛みを脳髄に叩き込みながら、——
逃げる！ 逃げる！ と叫び続ける。

「ッ……、は——」

痛みと出血で目眩がする。今もとめどなく肘から流れる血は容赦なく俺から集中力を削っていく。

……死ぬ。

ソレは間違いない。

只でさえ圧倒的な力量を持ったモンスター。

それも下位ハンターの俺では手も足もでない、最凶の存在。上位クラス。

——それでも、ココを通すわけにはいかない。

最後の覚悟を決めた瞬間。

……音が聞こえた。

全てを許す、優しい音色。

その優しい音色が周囲に優しく木霊する。

その旋律は優しく俺を包み、傷の痛みが僅かに引いていった。

その音と共に、声が聞こえた。

“…………ふん。死ぬのはテメエの勝手だが、——その前に
右に避ける！”

「……………な、に？」

眼前の恐怖である竜より、その声こそ聞かねばならないモノの気がし。

咄嗟に振り向くと、疾風がすれ違うように俺の眼前を通り過ぎた。

「よく頑張ったな、——クソガキ」

そして耳もとで、囁くような、罵倒するような。……………それでいて。愛しむような声が聞こえたのだ。

片手剣使い、ケビンを見捨て私は荷車を引いて逃げ出した。

——時間稼ぎ。

それには、圧倒的なガード性能を誇るランスを使う私が行くべきだと思う。

近接武器でもっともガード性能が高い、ランス。

そして、私の防具は下位とはいえガード性能の高いグラビモスシリーズ。

だが、それでは。この怪我人達は助からないだろう。

ケビンは先ほど私を庇って、左手を失った。

いくらガード性能が高いとはいえ、ダメージを完全に無効化できるわけではない。

戦いの合間に、そのダメージを少しでも無くそうと回復薬を飲もうとした瞬間。

その一瞬の隙をつかれたのだ。

「——ッ、チクショウ！」

自分の迂闊さに腹が立つ。

ケビンが作ってくれた一瞬の隙。

閃光玉によって、動きをとめた奴。銀のリオレウスの前で、私は油断したのだ。

閃光玉によって眼を眩ませようと、その場で動いたり前方にいきなり噛みつき攻撃。

更には尻尾を振り回すなど、通常体のリオレウスでもする行動なのに。

……私は、周囲の警戒を疎かにした。

そして、ランスはその高いガード性能から武器を出すのが極端に遅い。

故に、私にはその牙をかわすことはできず。

ソレに気がついた、ケビンが私を突き飛ばしたのだ。

私の判断ミス。だが、その負債を負ったのはケビンだった。

ケビンにミスの負債を負わせ、そして逃げ出す私。
そのあまりにも情けない姿に、涙がこぼれ落ちる。

——だが、次の瞬間。

私の視界が曇ったためなのか、金の壁が目の前に見えた。
見上げれば、金のリオレイアの姿。
たまたまなのか、それとも奴等の狙い通りなのか。
私達の進路を塞ぐその姿に、更なる絶望が私を襲う。

死ぬことは……怖くない。

ハンターなんて仕事を選んだのだ、いつかこんな日がくることも
覚悟していた。

だが、今。この命は。背後の人たちの命はケビンが助けてくれた
モノ。

ならば、少しでも足掻いてやるとヤツラに盾を向ける。

背後の仲間、それに村人を護る為に。

最後の賭けに出る。

治療薬はもう無い。閃光玉もなく材料は光蟲のみ。

光蟲。それだけでは素材玉がなければ無用の長物。
先ほどの攻撃、それで素材玉が入ったポーチは無くしてしまった。
私の防御力では皆を守ることは不可能。

私達にもう攻撃手段が無いとわかったのか。
奴はニヤリと笑うと深く、深く息を吸い込んだ。

——ブレス。

上位火竜である金のリオレイアのブレスの威力、それは私の盾を
砕き。背後の皆を飲み込み消し炭に変えるだろう。

だがそれでも。……ココで私が逃げ出すことは許されない。

背後の皆を見捨てて、ココから逃げ出せば私が生き残る可能性は
あるだろう。

だが、それでは。皆を私に託してくれたケビンに合わす顔が無い。

「——皆、ごめんね」

最後に、聞こえないであろう皆に謝り。

「馬鹿、スズネ——逃げ……ろ……!!」

出せない筈の声を振り絞る仲間に背を向け、リオレイアが吐き出す炎を見た。

目の前には一面の赤銅色。圧倒的な質量をもちながらせまり来る火球。

ソレを睨みながら盾を構える。
時間が止まる。秒に満ため空白、血管中に血液が疾走する。

「——っ……………!!!!!!」

緊張で息が切れる。息を整える時間は無い。
奴はコチラを休ませる気などない。
左手が熱い。ゼロ秒後の死が見えている。

——連発のブレス!!

下位である私の防具、ソレを突き破るように圧倒的な熱量が私の盾に体に突き刺さる！！

炎は濁流となり私の後方に向かっていく。ソレを強引に押し戻しながら荷車に足を踏みつける。

これなら、私が下がった分だけ荷車も下がる。

私の息がある限り、皆を——護る！

だが、その圧倒的な熱量。それは鎧の内部に達し。その熱によって皮膚が焦げる匂いがした。

皮膚がこげるのはいい。だが、肉まで。まして骨まで焦げたら。

——誰が、背後の皆を護るのだ。

永遠とも思える一瞬、肉が焦げる音と私の骨にヒビが入る音しか聞こえない。

脳裏を掠めるのは残りのスタミナ。

近接武器の中、最高の硬度を誇るランスの盾。

だが、その盾は代償なしで使えるほど甘いものではない。

上位飛竜のプレス。それは疲弊しきった私のスタミナを削り取っ

ていく。

スタミナが無くなれば、飛竜の一撃を耐えられない。
だが、連発されるそのプレスにガードを解く暇が無い。スタミナ
を回復できない。

このままでは……耐えられて、あと一撃。

それ以上の攻撃が加えられれば後ろの皆ごと私も死ぬ。
今、盾をしまい。自分だけが逃げ出せば。

——スタミナを回復させれば！

私だけはきつと助かる。

分かってる、私は頑張った。ココで逃げても誰も私を批難しない。

——それでも、だからこそ。

私が皆を見捨てることは【ありえない】
もう2度と。誰も見捨てない。

残り少ないスタミナを足と盾にこめ。前方の飛竜を睨む。

その次の瞬間。

r f d a s S c h l a f e n v o n E n t w u
(よく頑張ったわね)

——『唄』が聞こえた。

穏やかな楽器の音色、その音色と共に聞こえる歌声。
それは私の体をより強固な肉体とし、そして体中の傷から痛みが
引いていくのが分かった。

私は死んだのか……。

あまりにも楽になった体に違和感を覚え、目の前を見れば。
見たことも無い姿のハンターが踊っていた。
目の前には長い帽子に昆虫のように張り出した不恰好なズボン。

絵本にでてくるような、魔法使いのような。
もしくは道化者の姿のハンターがいた。

「よく頑張ったな、——クソガキ」

その声に振り返り、前を見れば。銀の火竜を叩き斬っている黒い
剣士の姿。

その手には剣と呼ぶにはあまりにも大きすぎる大剣。

帯電飛竜フルフルの素材から作られたその剣の名はフルミナント
ブレイド。

斬撃と共に内臓された電撃袋から敵対するモンスターに電撃を浴
びせる、大剣である。

そのハンターが纏う防具は全身を漆黒で覆っていた。
重量感のあるフォーム。その胴体には倒したであろう飛竜が形作
られている。

そして、その漆黒の防具を何より目立たせているのは深紅のトゲ。
頭、肩、腕、腰。何より胸からは角ともいふべきトゲが突き出て

いる。

1人でしか狩猟は許されていないといわれる飛竜モノブロス。その素材からできるというモノブロスSシリーズを纏っているのだ。

俺より遥かに強いであろう、上位ハンター。

その姿に安堵しながらも、言わなければならないコトを叫ぶ。この強さ、一瞬見ただけでもかなりのものだとわかる。

だが、相手は2匹。

それを知らなければどんな不覚を取るか分からない。

「————気をつけて、もう一匹います!!!!」

「あん? ————ソイツはアレが戦っている奴の事か?」

そう言いながら、後ろを指差すとそこにいるのは金火竜の姿。怪我人をのせた荷車の行き先を封じるように現れたその姿に、俺は自分の考えの甘さを知った。

ヤツラは最初から挟み撃ちを狙っていたのだ。

銀の火竜が追いたて、金の火竜が止めを刺す。
昔からある狩りの方法だ。

それに、ひっかつたのだ。

「おら、さつさといけ。オマエの血も向こう行きや少なくとも止まるだろ」

「——けど、」

「武器のもてないハンターなんざ邪魔なだけだ。とつとといつて治してこい」

「——、わかった。くたばんなよオッサン!!」

「ぬかせ、クソガキ!」

火竜に騙されたこと、今現在。俺は単なる無力なガキであること。その両方に腹を立てながら、それでも上位であろう黒衣のハンターに背を向けておれは走り出した。

久しぶりに見たクソガキに口元の笑いが止まらねえ。

己が死ぬような傷を負いながら仲間を思いやる、馬鹿な考え。最近じゃあ、中々見ないクソガキだ。

片手がもぎ取れてたが、はたしてハンターを止めんのかねえ？

UGYAAAAA!!!

俺の動きを止めようというのか、銀のリオレウスがバインドボイスを俺に叩きつける。

質量をもったその咆哮、バインドボイス。それに剣を盾にしながら受け流す。

ある種のモンスターになると全身を吹き飛ばす、この咆哮。希少種である銀リオレウスはコレでハンターの動きをとめるとい

これに何人のハンターが倒されたのか分からない。

だが、俺には無駄な攻撃だ。

特に久しぶりに気持ちのいい馬鹿をみた俺は、かなり調子がいい。

耳栓のスキルがない以上、大剣を盾にし。

隙だらけになったその翼を叩き切る。

前のハンターがやったのか、それともさっきのクソガキがやったのか。

翼爪は両方とも折れ、翼も傷だらけだ。

数合、斬りあっただけで充分に分かる。元々傷ついていたコイツはもう瀕死の重傷だ。

まだ斬り合って1分と立ってないが、こいつは一度も飛び立とうとしていない。

前のハンターから喰らったダメージがよっぽど酷いのか。それともさっきのクソガキが与えたダメージが大きいのか。

どっちにしてもコレはチャンスだ。

ガキが向こうにいつてまだ1分少々。

後はコイツにトドメをさすだけ。———なんだが。

……………急がないといけねえ。

恐らく、アイツは余計な演奏を増やしてるだろう。金レイアにトドメがさせるとは思えねえ。

早くコイツを倒し、向こうにいかねえとアイツはともかく怪我人とクソガキの命がヤバイ。

俺の一撃に怒り狂い、目の前で威嚇行動をとる銀のリオレウスを見ながら。

俺は最後の二撃を当てるために。肩に剣を置き。力を溜め込んでいく。

――
1秒。

その一撃は全身の俺の力を刃に乗せ。更なる力を剣に伝える。

――
2秒。

相手は空の王者リオレウス。しかも希少種である奴は傷ついた体を引きずり、俺に最後の体当たりを食らわせようとしている。

—— 3 秒。

限界まで振り絞られた力、とはいえ所詮人間の力。
傷ついたとはいえ、空の王者を殺せるとは思わない。

……そうココに、彼女の『音色』がなければ。

—— Z u i h m M a c h t ——

ソコに、流れるのは柔らかな旋律。それは更なる力となり俺の一
撃を更に重いモノとする。

俺の剣に込められた力に本能的な恐怖を感じたのか。
奴は。リオレウスは逃げ出そうと、口にブレスをため。空に浮か
び上がろうとしている。

火竜リオレウスのブレス。

それは爆発力と共にリオレウス本体を飛び立たせ、またそのブレ
スにより下にいる人間を焼き焦がす。

力を溜め込んでいる俺はもう逃げられない。

奴が飛び立つのが先か。それとも俺の一撃が当たるのが先か。
このタメだけは逃がせない。

人間より遥かに巨大な力を持つ飛竜。
その存在を地に落とすためには、こちらこそそれなりのリスクが必
要。

そのリスクをかけた攻撃を更に振り絞り、渾身の一撃を喰らわせ
ようとした瞬間。

——背後から閃光が走った。

奴が攻撃対象である俺に目を向けた完全なタイミング。
その一閃はリオレウスの視界を焼きつくし。
奴は目が眩んだまま地に落ちた。

——ツチ、クソガキが余計な事を。

未だ演奏が終わらない後ろを振り返ることをせず。
誰が、今。閃光玉を投げたのか。
それを理解しながら。

俺は、ニヤケそうになる口元を噛み締め。

「——覚悟を決めな、空の王者。この一撃は、ちょいとばかり……骨に、響くぜ!!!!!!!!!!」

全力の一撃を……リオレウスの鼻先に叩きこんだのだ。

漆黒の剣士にその場を任せ、俺は足をもつれさせながら荷車に向かって走っていた。

その場には相変わらず柔らかい旋律が流れ続けている。
目の前には、金の竜と戦うハンターの姿。

ハンターの武器は狩猟笛。

だが、その戦いは俺のような下位ハンターから見ても無様だった。

定期的に奏でる旋律と、あまりに極端な動きは無駄が多すぎるように見える。

大剣やハンマーのように溜めて一撃の威力を底上げすることでもできなければ、双剣や太刀のように手数が増えたり威力を増すこともできない。

怪我人を護る為にガードすることもできない狩猟笛。

その動きに、そしてその使い手を見て。これは長引くと思い。荷車の人だけでも逃がそうと近づくと。そこには、先程よりはるかに顔色のいい村人達の姿があった。

火竜のプレスに左半面を焼かれた筈の村人。

彼の焦げた皮膚の下からはピンク色の新しい皮膚が見え、再生しようとしている。

毒を受け、体温が下がり震えていた筈の村人の体温は戻り。

まだ危険な状態とはいえ、不規則だった呼吸が規則正しく動いている。

大怪我を負ったハンター達も、幾分だが顔色が良くなっている。

「——ケビン、無事だったのね!!」

俺の無事を喜んでいる気のいいランス使い、スズネが笑いながらこちらを振り向いた。

その手にある盾を構え、荷車を守っている。

「スズネ、これは………?」

毒にやられ死にかけていたり、火竜のブレスで大火傷の傷を負った村人が小康状態なのに驚きながらその理由を訊く。

「見れば分かるでしょ、あの人だよ」

スズネはどこか誇らしげに、それでいてどこか悔しそうに。目の前の狩猟笛使いを指さした。

——狩猟笛という武器がある。

打撃武器であり、楽器である異形の武器。

だが、その複雑な機構により。その使い手はこの世界には数えるほどしかないなかった。

同じ打撃武器であるハンマーや切断武器である大剣のように“タメ”をつくることはできず。

双剣や太刀のように、一定条件で威力を増すこともできず。

片手剣やランス、ガンランス。大剣のようにガードもできない。

近接武器としてとても中途半端な武器、狩猟笛。

——だが、全武器の中。唯一。

そのフィールドにいる仲間全て。解毒から治療までできるのが狩猟笛なのである。

薬を飲む体力も無くなった怪我人も、治療薬が無くなった仲間も。回復弾、解毒弾が撃てるボウガン使いでさえ1人づつしか救えない。

それを戦いながら、同じフィールドにいる仲間全てを回復できる力。

——それが狩猟笛なのだ。

「——だからか」

あの動き、金の竜の動きをかわし。無防備な相手を前にしてまで。その絶好の機会でも演奏を続けるその姿。それは、怪我人を守るうとしていたのだ。

無駄に見えたその動き。それが無駄にみえた己の修行不足を恥じながらもそのハンターから目が離せない。

横殴りに金火竜の頭を殴り、拍子を変え演奏しながら楽器を蹴り飛ばしリズムを変える。

その無骨な動きから目が離せないでいると。スズネから声がかけられた。

「ケビン、閃光玉は残ってる？」

「いや、さつき使い切って今は素材玉しかない」

調査する予定だった光蟲は、左腕と共に奴に食われた。アレがあれば、もう少し時間が稼げたのだが。

「じゃあ、私の光蟲を渡すから閃光玉を作って！」

そう言っ て渡す光蟲の袋を見て、 途方にくれた。

…… 作っ てくれと言われても。

そう思いながら、 自分の無くなっ た左腕を見る。

あるべきものが無い状態。

利き腕をなくしたままで、 複雑な調合ができる自信はない。

—— だが。

「無理は承知だけど、 怪我人は一刻を争う状態なの。 あの人が合図したら閃光玉を投げて避難所まで逃げる手筈になっているから」

そして、 両手が使えるスズネは怪我人を護る為に盾から手が離せない。

片手の俺では盾を完全に使いこなす自信がない。

他のハンターは瀕死の重症。

ここで紛い也にも動けるのは、 片腕の俺のみ。

「分かった、失敗しても文句言つなよ」
「その時は――ケビンが竜を前にして“洩らした”と村中に言いふらしてあげるから」

笑顔でさらりと脅迫するスズネ。

その笑顔に冗談では済ませられない迫力を感じ、苦笑しながら俺は調査を開始した。

――間違いは許されない。

――時間も無い。

俺にあるのは壊れかけた調合器に、片腕のみ。
両足で胡坐をかくように器を固定させ、光蟲をソコにつつす。
絶命時に強烈な閃光を放つ光蟲。

コイツを殺さないように、素材玉に埋め込んでいく。

ネンチャク草の隙間に埋め込み、ピンを抜くと数秒後に絶命し。
強烈な閃光で目を焼く閃光玉。

これはモンスターの目を焼くが同時に、ハンターの視力を奪う可能性もある。

……故に、現在。

モンスターに挟み撃ちされているのは願っても無い幸運となる。

ハンターは俺達に背を向け、モンスターは俺達を見ている。狙ったわけではない挟み撃ちの状態。

この瞬間が絶好の好機！

一つの閃光玉で2匹の火竜の目を眩ませる事ができる。

—— 10秒。

片手が動かない。普段は簡単にできることがこんなにも難しい。

—— 20秒。

慌てるわけにはいかない、俺が間違えればハンターはともかく無関係な村人が死んでしまう。

—— 30 秒。

「ケビン、早く」——できたぞ！」

焦れたスズネの声にかぶせるように俺の声が響きわたる。
俺の声に金火竜が反応する、その口は炎を孕み俺達を睨みつける。

「上等、——今よ——！」

思ったより高い狩猟笛使いの声に驚きながら、俺は閃光玉を上空に投げ。

—— 次の瞬間、光の洪水が俺の目蓋を焼き潰した。

上位の竜との戦い。

その戦いで限界まで神経をすりつぶしていた俺にとって、慣れしただけその光でさえ視界を塞いでいった。

その光は目蓋を閉じていようと圧倒的な光量で俺の視覚を塗りつぶしていく。

そして、次の瞬間。

2匹の竜は苦しげな声と動きを止め。
銀火竜にトドメをさした大剣使いと共に、狩猟笛使いは傷だらけの金火竜にトドメをさした。

最初に返り討ちにあつたこの金と銀の火竜を傷つけたハンター達。そして、微弱とはいえ下位ハンターの俺達の攻撃。

最後に、大剣使いと狩猟笛使いの2人組のハンターによって。
金銀の火竜。希少種である金リオレイアと銀リオレウスは討伐されたのだ。

それが“漆黒の獅子”と呼ばれる黒剣士と“静寂の歌姫”と呼ばれる狩猟笛使いとの最初の出会いであった。

< 続く >

感想は感想提示版にお願いいたしますm (_ _) m
感想をいただけると、作者が狂喜します。

漆黒の獅子「ガッツ」

武器：フルミナントブレイド
防具：モノブロスSシリーズ

静寂の歌姫「シェリル」

武器：ヘビィバグパイプ（自分強化、攻撃力UP【小】、防御力UP【大】、体力回復【小】&解毒）
防具：ミズハ覇シリーズ

ケビン：下位ハンター

一応、主人公。いきなり片手を失うがその中でハンターとして生きるのか。

それとも、違う道を目指すのか。それはこれから明らかになっていくであろう。

赤毛で童顔な（くどいようだが）主人公。

ギザミシリーズ：片手剣使い。普段は太刀だが上位と戦うために盾がある武装を選んだ。

スキル：、業物、砥石使用高速化、防御 - 20

防御力より攻撃力として匠珠を使ったため、上位の竜には太刀打ちできなかった。

せめて、飛竜が来ることがもう少し早く分かれれば違う武装か、防御珠をいれ防御を上げることができたのだが。

スズネ：黒のキリンテール（ポニーテール）

碧の眼をもった美少女。勝気な18歳。

防具：グラビモスシリーズ

武器：豪槍グラビモス（攻：345 毒：200 防：+5）

スキル：睡眠無効、ガード性能+1、砥石使用高速化

強走珠と研磨珠をスロットに嵌めることにより、弱点をなくした。

だが、その力も上位火竜2匹には通じなかったようだ。

R a i n 〵雨に打たれて〵（前書き）

まさかのユニークアクセス2000突破！

皆さん、ありがとうございますm（〵）m

まさか一話目でこんなことになるとはびっくりなのです。

今回は事件後の後始末。

バトルはないですが、少しでも楽しんでいただけたら幸いなのです

m（〵）m

R a i n

ゝ雨に打たれてゝ

——それは、絶望の声と共に告げられた。

モンスターに襲われることが多いこの時代。

大きな町や小さな村には見張り台が備えつけられていた。

古竜観測所の気球だけでは全てのモンスターに対応できない。

故に自分達の住処は自分達で守るのが、私達の常識だった。

ハンター試験に合格して数年。憧れのモンスターハンターとなっ

た私は、多くの人に支えられ。

鎧の覇者とも呼ばれる、グラビモスを倒せるまでになった。

下位のモンスターでは殆ど最強クラスの飛竜。

その装備ができた私は、正直。天狗になっていたと思う。

だから、見張りの人達からもたらされた「見たことがない飛竜が近づいてくる」

という、知らせにも落ち着いて。いや、危機感などなく。……
…行動してしまったのだ。

モンスターハンター “ 隻腕の狩人 ” 2 話

見たことがないという2匹の飛竜。
聞けば姿は金色と銀色の竜だという。

聞いた事がある。

上位、もしくはG級と呼ばれるハンター達の中でも更に選りすぐりのハンターでなければ倒せないという飛竜。
金のリオレイアと銀のリオレウス。

リオレイア、リオレウス。

代表的な飛竜の中でも希少種と呼ばれるこの2匹は、通常の個体

より遥かに戦闘力があるらしい。

そして、希少種と呼ばれるだけあり。殆どのハンターはその存在すら見たことすらない。

この村にいるハンターでその存在を知っているのは私ぐらいだろう。

——次の瞬間。私は村人に説明することなく村人全員を非難させることを決定した。

普段「塔」とよばれる場所にしかない飛竜。

それがでてきたのは、どこかのハンターが失敗したのかそれとも縄張り争いで負けたのか。

それは分からない。

だが、下位ハンターの我々では皆を救うことは不可能。そう決断すると、太刀使いであり片手剣使いのケビン。

そしてヘヴィーボウガン装備のピース、そして弓使いのガトーに時間稼ぎを手伝うように頼んだ。

私の様子によほど危険な状態だと感じたのか、それぞれ装備をそ

ろえに借屋へと向かう。

私も借屋に戻り、装備を整えようとすると。村長が現れた。

村長である竜人族の男性。

相当若く見える外見に反して、かなりのご高齢だときいている。
長命の種族である竜人族は外見では年齢がわかりにくい。

「——スズネ君、希少種が現れたというのは本当かい？」

いつも若々しくニコニコと笑っているその笑顔が、今は緊張から
か険しくなっていた。

……こんな顔もできるのか。

どこか、冷静に考えていると村長は黙ったままの私を無視して話
し出した。

「本当、なんだね」

「……………」

それは最早、確認でしかなかった。

人間より多くの知識を持つという竜人族。
その知識は侮れない。

「それで、どうするつもりなんだい」

「どうする……………とは？」

「戦うつもりなのかい、それとも……………」

答える必要はなかった。

私達ハンターはモンスターを狩ることが仕事。

そして、力なき民を守ることが義務であり。……………誇りなのだ。

「勝てるとは、思ってません。ですが皆さんが逃げるだけの時間は稼ぐつもりです」

「……………やめなさい」

「……………はっ？」

一瞬、聞き違いかと思った。
村民を守るのが村長の役目、それを放棄するのかと。

「君達のような下位ハンターが戦えるような相手ではない。まして時間稼ぎなど」

「しかし、私達が時間を稼がなければ皆が死にます」

「——それはないよ」

今度こそ聞き違いかと思った。

希少種、金リオレイアと銀リオレウス。

この2匹の火竜がココにつくまでの時間は約30分。

貴重品と簡易食料を用意し村人を集合。

移動手段である荷車に乗るのにどんなに急いでも15分はかかる。まして荷車を引くのはポポ。気の優しい草食モンスターで足は決して速くない。

15分程度の距離を離れた程度ではあつという間に追いつかれてしまう。

だからこそ私達が足止めをしなければならないのだ。

そう説明する私に返した村長の答えは、とても正気だとは思えなかった。

「貴重品、それに食料も全部捨てて逃げ出す。」

これなら村の食料である生肉を食べている間に逃げられるはずだし、時間も短縮できる」

「——っな!？」

リオレウス、リオレイア。

この代表的な飛竜は人の気配がない場所では生肉を食べるのはよく知られている習性だ。

コレを利用し、罠に嵌めるハンターも多いという。

誰もいない村。そこに大量の肉があれば彼らがそれを食べる可能性はあるだろう。

だが、ソレは私達の大切な食料だ。

只でさえ資源の少ない雪山。

その麓に住む私達にとって貴重な食料であるポポやガウシカの生肉を無くすことは死に等しい。

第一、生肉を食べればそのまま逃げてくれるとは限らないのだ。家屋が壊され、全てが灰になる可能性すらある。

それに冷蔵され貯蔵した肉より……【新鮮】な獲物を狙われたらどうするのだ!

「——食料はまた溜めればいいし、家はまた作ればいい。だが、命は……」

そう言つて私を止める村長の言葉を、無視し。——私は装備を整えるために走り出した。
必ず止められる。皆を助ける事ができる。そう信じて。

だが、——その結果がコレだ。

黒こげになった、一面の焼け野原。
未だに燃え続けている、全てを無にかえす色。——赤。
家屋から木に火が移り、更に赤く森を彩っている。
そこにあるのは、崩れ落ちた家屋。

全てを焼き尽くす炎の前で、私は村長の考えが正しかったのではないか、と考えていた。

私の考えについて来てくれた仲間達。

ヘヴィーボウガン使いのピースは、金のリオレイアのバインドボイスで動きを止められ。

耳を押さえた瞬間に体当たりをくらった。

ガンナー装備では耐えられず、ピースは瀕死の重傷を負った。

——— すまない。私が村長の言うとおり、動いていれば。

道具屋のオジサンは「——やめて!」と叫んでも。重い荷物を背負ってはコチラにきた。

リオレイア、リオレウス。大型飛竜を倒すために必要な道具。トラップツールやネット。それに回復薬を運んではおいていく。

そんな無防備な村人を見逃すほど、ヤツらは優しくない。

吸い込まれる息。ソレと共に吐き出されるプレス。それからおじさんを守ろうとした弓使いのガトー！

だが、彼はおじさん突き飛ばすのが遅れて。一緒にプレスに焼かれた。

—— すまない。私がココに残ることを貴方に伝えなければ。

「オイラには才能がないから、ハンターになるのは諦めたんだ」

狩りが終わると、そういいながら笑って。私達にホピ酒を一杯づつ奢ってくれた居酒屋のおじさん。

「—— だから、オイラの代わりに頑張ってくれよ」

そう言っていたおじさんは、使ったこともないライトボウガン弾筒を取り出し。

怪我をした3人を逃がそうとし。銀のリオレウスに毒爪で削り取られた。

—— すまない。私が油断などせず、冷静に対処できれば。

傷ついた皆を守るため、私は盾を構えた。

そしてケ빈はリオレウスの動きを止める為に、閃光玉を投げ。閃光に目をやられたリオレウスの動きは止まった。

みんなを下がらせても、銀のリオレウスはまだ動けなかった。

何匹も倒したりオレウス。

その攻撃範囲は体が覚えている。

だから、安全な距離を計り。うまく逃げた。

素早くランスをしまい、回復薬を飲んだ瞬間。

……眼前にリオレウスの顔があった。

そう、私はリオレウスの動きを知っている。

でも、それはあくまでも。【下位】のリオレウスのみ。

上位、それも希少種といわれる銀のリオレウスでは体の【大きさ】が違う。

ソレを忘れ、いつもどおりに動いた私のミスだ。

来るべき衝撃に供え、齒を食いしばる。

だけど、リオレウスからの攻撃は当らず。

——— 変わりに私を庇ったケ빈の手が食いちぎられる映像だけが見えた。

そして、私は。

私を守ってくれたケビンを見捨てて逃げ出したのだ。

—— すまない。私達を助けに来てくれた、あの2人みたいに……私をもっと強ければ。

モンスターを狩るハンター。

その殆どは男性だ。体格、筋力で女性より男性のほうが有利であるからだといわれている。

そんな中。皆、女性である私の言葉を疑わず信じ。私の作戦通りに動いてくれた。

その信頼を、私は……裏切ったのだ。

「—— スズネ!!」

焼け焦げた家屋を見ながら、座り込んでいた私に。ケビンの声が聞こえた。

——なんて顔してやがる。

廃屋の前に蹲っているスズネに声をかければ、このソラと同じ泣き出しそうな顔をしていた。

この村の惨状、全てが自分の責任だと思っているようなスズネの顔。

そんな顔をさせてしまった自分自身に腹が立ち、何も言わずに立ち上がらせた。

金と銀の火竜と戦っていた時には眩しすぎるほどの月光が輝いていた夜空。

それが今は泣き出しそうな灰色の雲に覆われている。

「火災があつたすぐ後はなぜか雨になる」

竜人族に何時か聞いた言い伝えを思い出す。

この空と同じくらい泣き出しそうなスズネにもう一度声をかけ、俺たちを助けてくれたハンターの下へと歩いていった。

大剣使いはガッツ、狩猟笛使いはシェリルと名乗った。

旅のハンターである2人はこのポケット村で宿をとろうとしたとき、

避難してきた村人と村長に出会いクエストを受注したのだという。

ハンターはモンスターを狩る場合、ギルドかもしくは村から依頼されなければならない。

この決まりを守り、簡単なサインをした後。2人はココにきてくれたのだそうだ。

俺とスズネも簡単な自己紹介を終えると。
ガッツさんはボロボロの俺たちを見て、顔を顰めながら怪我人のせた荷車に近づいていく。

「俺は、とりあえず怪我人を避難所まで連れて行く」
「い、いえ。大丈夫です。お2人はお疲れなんですから私が荷車を引っ張り…………——ッ！！！」

スズネの言葉を遮るように、ガッツさんがスズネの足を軽く蹴った。

俺から見ても【力】を入れているように見えなかったその蹴りに、スズネは蹲る。

スズネの防具はグラビモスシリーズ。下位ハンターの防具としては高レベルの防御力を誇る。

そしてガッツさんが蹴った場所は防具で覆われていた。
人間の力で、防具が壊れる筈はない。だというのなら。

「皮膚に軽度の火傷、それに足にはヒビが入ってんだろ」

「——ッ」

ガッツさんの言葉に、スズネは悔しそうに俯いた。
それはガッツさんの言葉を肯定しているのと同じことだ。

「こういう時は動ける奴が動くもんだ、シェリル……お前——
——は？」

シェリルさんにも指示をだそうと横を向いたのだが、誰もそこにはいない。
シェリルさんを見失って視線をさまよわせているガッツさんに、
後ろを向くように指をむける。

「——ッ、お、オマエなあ」

俺の指の先を見たガッツさんは、脱力したように溜息をついていた。

「——ん、避難所に行くんでしょ。とつと行つてきなさい」

そういいながらシエリルさんは、ガッツさんに目もくれず。

倒した金と銀の火竜から素材を剥ぎ取っている。

なんだか、目の色が\$になっているのは気のせいだと思いたい。

火竜の紅玉は高く売れるだとか、裏のマーケットでいくらだったかとか。

そんなギルドナイトに見つかったらヤバそうな話は聞こえないことしておく。

「聞けよ、ヒトの話を」

「聞いたって仕方ないでしょ、この状態じゃ結論なんて一個しかないんだし。ほら、行った行った」

「——ハア。んで、お前らも乗るか？」

ガッツさんは溜息交じりにそう言いながら、俺たちに荷車に乗るように薦める。

今は何とか歩けるとはいえ、スズネは足にヒビが入っているようだし、

俺は片手がない以上早く走ることはいできない。

本来、荷車を引くであろうポポなどの草食系モンスターはいない。すでに村人を乗せたか逃がした後だ。

そして皆の治療のことを考えたら、俺たち怪我人が荷車を引くことは時間の無駄だ。

更に、俺が乗ればその重量ぶんだけ避難所に行くのが遅れる。小康状態とはいえ、他のみんなはまだ危険な状態だ。俺の為に皆の治療を遅らせるわけにはいかない。

「いえ、俺はいいです」

「なんだ。つまんねエ遠慮なんかいらねエぞ？」

「いえ、もう治療する必要はないですし。家に帰ればまだ少し秘薬が残っていますから」

そついいながら、村はずれの俺の家を指差す。

——モンスターに襲われ、村が危険になった場合に備え。ハンターは素早く行動するために村はずれに借屋を借りて住むべきだ。

そつ、村の会議で発言したスズネの言葉に従い。俺たちハンターはそれぞれ村はずれに住むことになった。

その身を盾にし、村を護る為に。

だが、結果は皮肉にも俺たちの家がもつとも損害が軽微だ。
ならば、残しておいた回復薬や秘薬も全滅していることは無いだろう。

「秘薬か。でも……腕は生えてこねえぞ」

そんな分かりきったことをガッツさんが言ってきた。

秘薬、それはあらゆる傷もたちどころに治し体力も平常時の1.5倍にも上げるといふ神秘の薬。

マンドラゴラと栄養剤グレートを調合することでできるその薬は、レシビが難しく中々できないといわれている。

だが、それは。あくまでも傷を塞ぐ役割でしかない。
食いちぎられた【腕】が生えるような効力は無い。

それでも傷を塞ぎ命を取りとめることぐらいはできるだろう。
出血がほとんど止まった俺には感染症を防ぐくらいしか、治療することは無い。

ならば、助かるか分からない皆の治療を優先すべきだ。

「——それに」

そういいながら、解体を続けるシェリルさんをみる。

巨大なモンスターに襲われたすぐ後の村には、小型モンスターが出没するコトが多いという。

死肉を漁りにくるのだ。

シェリルさんなら不覚をとる事は無いと思うが、それでも頭数はあつたほうがいい。

片手の俺でも、閃光玉を投げて時間を稼ぐことぐらいはできるはずだ。

何かあつた時の為に、人手は必要だ。

「私も……」

「ん？」

「私も家に戻れば、回復薬ぐらいはありますから」

お前はどつする？ と、視線で問われたスズネはガッツさんにそう答えた。

スズネの言葉になにを思ったのか、ガッツさんは怪我人を連れて避難所に向かって走り出した。

スズネの横を通り過ぎ、俺の目の前に来ると。

「——お前の役目だぜ」

スズネに聞こえないように囁かれた小さな声に微かに肯きながら。
俺たちは家に向かって歩き出した。

——月が消えた。

曇天だったソラはついに泣き出し、濁った雨で火を消し始めている。
る。

後ろを振り返れば、火竜を解体するシェリルさんの姿。

「何かあれば角笛で報せるから、ゆっくり休みなさい」

そう言って俺たちを送り出してくれたシェリルさんに頭を下げながら、俺たちは歩き出した。

前を歩くスズネを見ながら、ガッツさんに言われた言葉が頭に浮

かぶ。

「——お前の役目だぜ」

腹が立つ。そんな事は誰に言われなくても俺が一番分かっている。
分かっているというのに。

「は——、づつ………！」

肺が爆発する。

ほんの少しの運動ですらコレなのか。
止まっていた血が堰を切って、切り口からあふれ出していく。

まずい、まずはスズネに追いつかないと。
そう思い、足を速めると。

——ズクン！

「ッ——！！」

………ない筈の左手から電流が俺の体を駆け巡った。

痛みを超えた痛みは、電流となって体から胃をせり上げる。

噴出しそうになった酸味の強い胃液を飲み込むと、今度は冷や汗が体中から噴きだしてくる。

滲んだ汗が額を流れ、目に入って視界がにごる。

「は……………っ」

歩くだけ、という運動さえ傷に障るのか。

それとも戦いが終り。体が今頃になって不調を訴えているのか。

戦闘中はマヒしていた痛み。それが家までの坂道を登るたびに疼く。

知らず、歩幅が縮んでいく。

先ほどから降りしきる雨のためか、それとも流れる汗か。視界が滲んで前が見えない。

そして滲んだ視界の先には。

「……………ケビン？」

遅れはじめた俺を心配そうに振り返るスズネの姿があった。
その美しい柳眉を顰め、碧眼が俺を見つめている。

気がつかなかったが、随分長い間俺を見ていたようだ。
俺がなんでもないというように手を振ると、なぜか腕を組んで俺をにらみつけた。

「少し、休みましょう。ケビン、歩くのもつらいんでしょう」
「え？ ……いや、大丈夫だ。コノぐらいなら我慢できる。ソレより今は早く戻ったほうがいい」

村はずれとはいえ小さい村だ。このペースで歩いていけば30分もあればつく。

大通りに面しているため、2人のハンターが必要ということと俺とスズネが住んでいる場所。

通りの反対側が俺の借屋で、こちら側がスズネの借屋だ。

そのどちらでもいいから、少しでも早くスズネを自分のホームグラウンドに戻すべきだ。

そうしなければ、スズネは■■■を吐くこともできない。

ソレをさせるために。俺はココにいるのだから。

「コツチの傷は気にすんな。別に毒が塗りこまれたわけじゃないんだから」

スズネの視線から逃げ出すように歩き出すと。

——ズクン。

「っ——」

……っ。って、情けない。言ってるそばから痛みで視線がブレタ。流しすぎた血と冷たすぎる雨は容赦なく俺から体温を奪い取り。

ガタガタと俺の体は熱を欲して震えだした。

——寒い。

ガタガタと震える体を正気に戻すために呼吸を整える。
喉はカラカラに渴いて、息苦しい。

ガチガチと震えそうになる情けない歯を噛み締め、もう一度息を

吸い込むと。

「あつ——が、は——。ブッ!!」

足りない血に反して、心拍数が上がっていく心臓。
それは肺を圧迫し、俺の呼吸を阻害する。

「——ケビン!!」

むせた拍子に、濡れた地面に足を滑らせそうになった俺を、スズネが慌てて支える。

情けない。スズネと違い足には怪我一つしてないというのに。

スズネに礼をいって歩き出そうとすると、縛った筈の左腕から更に血が流れ出していることに気がついた。

とつくに無くなったかと思っただが、まだまだでるんだな。
そんなつまらないことに感心してしまった。

ふらつきながら、歩こうとする俺の手をスズネが引っ張る。

「ほら！ 無茶しないで。その傷で歩くこと自体が無謀なのよ。素直にガッツさんに運んでもらえばよかったのに！！」

「……かもな。けど、今更そんな事言っても仕方ない。だから少しでも早く帰ろう。俺ならそう【辛く】ない」

「アンタね………！ そんなに血が出てて、辛くないなんて言わないでよ——！！」

なんで家に戻りたがるかなんて知らないけど、今は休むほうが先でしょ……！！」

怒鳴っている。

その様子を見て、ホツとした。

俺が左手を失ってまで手に入れたもの。

コイツの。スズネの分かりにくい【優しさ】を失わずに本当に良かった。

「ちょっと、何笑ってんのよ！？

このまま血を流し続けながら歩いたら死んじゃうって言うてんのよ！

だいたい。アンタ、自分の装備分かってんの。

あんなバカでかい火竜の一撃に耐えられるわけないって気がつかなかったの！？」

「…………あのな、馬鹿にすんな。ソレぐらいあの火竜見たときから解ってたぞ」

上位の火竜の殺気。それを感じてビビらないはずがない。

あんな殺気を出すやつがマトモなはずが無い。ソレぐらいわかる。

まして、俺の装備はギザミシリーズ。

防御力より攻撃力に特化した装備だ。

だが、なぜか。俺の言葉を聞いたスズネの機嫌が段々と悪くなっていく。

なにか、俺は悪い事を言っただろうか。

「—————！　　ならまず自分の身を守りなさい、馬鹿！

それだけじゃない。腕が無くなっても私を庇って。私の防具解つてんの？

グラビモスシリーズよ。下位とはいえ、上位に限りなく近い防御力を誇つてんの。

だっていうのになんだってそんな無茶すんのよアンタは……………！
！……………！

があー、ともの凄い勢いでまくし立てるスズネ。

……………いや、しかし。

実際俺の傷は辛くはない。片手がもげただけで、命に別状はないし。それになにより――

――身勝手な自分が許せなかった。

自分の力を過信して、間違った判断をした私。
しかも、目の前にいるケ빈は私を庇って片腕をなくしたのだ。

止血したとはいえ、それはあくまでも応急処置。
雨が降り出したせいで、止まっていた血がながれているのがこの暗闇でもわかる。

おぼつかない足どりで歩く、ケ빈の目には力が無い。
剣のように細いシルエットのギザミシリーズ。

だが、いまは【剣】というより【歩く屍】にしかみえない。

ケ빈をこうしてしまったのは私だ。

とりあえず、ケビンを座らせて一度体力を温存させなければ。
そう思っているのに、ケビンに言う言葉がどんどん罵倒に近くな
っていくのが自分でも分かる。

わかってる、私が言ってるのはわがままだ。

ケビンは私を助けてくれただけ。

こんなことを言うのは、筋違いだって分かっているのに。

「辛くないなんていわないでよ！　少しは私を頼ってよ！
だって。ケビンには——もう、左手がないんだよ！！！」

なぜ、こんな酷い言葉しか出てこないのか。
私のせいで左手をなくしたケビン。そのケビンに甘え、罵倒する
自分に嫌気がさした。

「辛くないなんていわないでよ！　少しは私を頼ってよ！
だって。ケビンには――――もう、左手がないんだよ！――！」

スズネが当たり前のことを叫ぶ。

俺を睨む眼には殺気すら籠っていきそう。

スズネが言ってる事はわかるし、心配してくれるのは単純にありがたい。

そりゃ、俺だって手が無くなって嬉しいわけはないし。痛いのはいやだ。

そんな分かりきったことを叫ぶスズネ。

その姿はまるで。スズネが己の言葉で自分自身を傷つけているように。

むしろ、俺から【罵倒】されたほうが楽になれるとも言ってい

るようだった。

だけど、スズネは一つ勘違いをしている。
俺は【辛く】なんてない。

だって。

「——だって、スズネのほうが辛いだろ」

そう、当たり前のことを言った。

目の前では呆けたようなスズネの姿。

自分が一番【傷ついている】ということすら気がついていない。
コイツ、そんなことが分からないほど弱っていたのか。

俺より辛い状態のスズネ。

そいつを前にして、辛いなんて泣き言はいえない。

「だから戻ろう。家に帰れば、弱音を吐いてもいいんだから」

…… ああ、だから少しでも早く戻りたかった。

いくらなんでも、スズネがそこまで強くなる必要はないんだから。自分の家、自分だけの部屋に戻ればスズネだって気兼ねなく文句を言える。

村人の前では。——他人のまえでは強くあろうとしているスズネ。

ハンターとして。なにより皆に安心感を与えるために。強くあろうとした。

そんなスズネが俺の前や、助けてくれたガッツさんやシェリルさんの前で弱音が吐ける筈がない。

村の為に生きて、誰よりも強くなって。

単独でグラビモスを倒すほど強くなったスズネ。

皆を護る為にいつも。最前線で戦ってみんなの盾になっていた。

村を護る為に様々な案をだし、いつも頭をいためていた。

—— そんなスズネが傷ついた皆を見て。 胸を痛めていないはずが無いんだ。

「え——？」

なにをそんなに驚くことがあったのか。

スズネは一瞬そう呟いた後、顔を隠すように背中を向けた。

その瞳に光っていた見慣れないものを見つけ、只でさえあがっていた心拍数が更に上がりだした。

「あ—— いや…… えっ、と」

言葉が浮かばない。

今、スズネの瞳に浮かんでいたのは、ひょっとして。

「……………信じられない。男なんかに泣かされた」

スズネは背中を向け、俯いたまま呟く。

「つ、……。スズネ、腕。俺の腕握ってんぞ、お前……！」

「五月蠅い、責任とれ、馬鹿」

「え——ちよつ、傷、傷が痛む……！　　！　　よりにもよつて左腕を引っ張るな……！」

スズネはよりにもよってなくなった左腕。それも肘の傷口近くを握り締めて歩き出した。

歩き出した先は農場。

俺たちの借屋にいく通り道にあるソレは、ここからもっとも近い村の施設だった。

ハンターに貸し出された農場は、2匹の火竜との戦いでボロボロに荒れ果てている。

これは、元に戻るのが大変だとヒトゴトのように思いながら川辺へと歩いていった。

「——あのな、スズネ。今はこんな寄り道をしてる場合じゃ
.....」

「座つて。いいから座つて」

「.....。」

有無を言わさぬ迫力に、とりあえず腰を下ろす。

「で、後ろをむいて絶対に振り返らないこと。私の顔見たらホントに怒るから」

ストーン、と俺が座った瞬間に背後で音がした。

「.....?」

背中合わせて草むらに座り込む。

.....それに何の意味があるのか、どうにもわからない。
スズネはそれっきり黙ってしまふし、振り返るなっていうし。

やる事もないんで、とりあえず降りしきる雨を見上げた。

冷たい感触を心地いいと思いながら、それでも目を開けると。

相変わらず降りしきる雨雲。それを透かすように月明かりが零れていた。

元々薄かったであろう雲の切れ目からは月光の階段が地上に降りている。

雲の隙間からこぼれる光。それを天使の梯子といったのは誰だったろうか？

凄惨な場面ばかり見たからか、それとも今夜の空がたまたまなのか。

「――」

ただ、その美しさに痛みを忘れて息を呑んだ。

背中ごしに伝わるスズネの体温も気にならない。

今はぼんやりと、あらゆることを忘れて藍色の夜空を見上げた。

———そうして、どのくらい時間がたったのか。

黙りこんでいたお隣さんが、落ち着いた声で話しかけてきた。

「———独り言、なんだけど」

……………そうか、独り言なら返事はできない。
黙って夜空を眺めていよう。

「少し、間違えたかもしれない。
———全員が生き残るコトを前提にして好機を探っていたけど、結局みんなが傷ついたでしょ」

ポツポツと語る。

それはきつと弱音だった。

俺があんなこと言っただから告白してるわけじゃない。

単にスズネは、1人で反省するより誰かに反省させて欲しかったんだ。

「…………別に愚痴とか後悔してるってワケじゃないんだけど。私達が残るって言ったから、村人は危険を顧みず助けに来たんだよね。」

だったら最初から皆と逃げ出して避難所まで皆を警備して、それからハンターだけでヤツラを倒しに来れば」

雪国の空気は透き通っていた。

雨にもかかわらず透明感のあるその空気は、その代償とでもいうように俺たちの体温を奪っていく。

俺はともかく、汗をかいたままのスズネは寒いんじゃないだろうか。

…………ちよつと、そのあたりが心配だ。

「結局、みんなを守れなかったんだよね。」

あれだけ偉そうなこと言って、私だけ歩けるぐらいの軽症で。

…………けど、うん……。まいったなあ、やっぱりバチがあったのかな」

はあ、と溜息をつく。

見えないけれど、やはりその息も白いのだろう。

「…………ちよつと。ここ、突っ込む所だと思うんだけど」

「ああ。で、バチってナニが？」

「うん、正直思ひあがってたのかなって。

結局村を守ったのもガッツさんにシェリルさんでしょ。

グラビモスを倒せるんだから、上位の竜とはいえ追い返すぐらい何とかできる。

って強がってみたけど、結局なんにもできなかった。

あんなに偉そうに皆を守るって言ってたのにね」

「――」

……………なんだ。

言ってることは良くわからないが、スズネのやったことは正しい。
スズネは間違ったことはしていない。

皆を守ると誓ったその想い。それはきつと間違いじゃない。

「そんなの今だけだろ、スズネは間違ってなんかいない」

「なんでよ。実際、皆傷ついて、ケ빈は…………腕まで無くして
村だつてあの2人が来てくれなきゃ守れなかったんだよ。

これって、私が方針を間違えたからでしょう」

「それは単に失敗しただけだろ。スズネは間違えてなんかいない。
間違えていないなら失敗しても胸をはれると思う」

——その過程。

己が正しいと信じた道を歩いたのなら、間違いなんてない。
全てを救いたい。そう考えて練られたスズネの作戦に間違いなんてなかった。

「——たとえ結果がどうであれ、スズネが目指したことは間違っていない」

だから——だから、みんながスズネの作戦に従った。
成功しようと失敗しようと。スズネがみんなのことを考えて、考えつくして練られた作戦だから。

「第一、作戦を考えたのはスズネでも。それに逆らう自由だって俺たちにはあったんだ」

「……………」

「それをしなかったのは、俺たちがスズネの作戦が正しいと思っただからだ」

「…………。だけど」

「それとも、その俺たちの判断自体が間違っていた。——スズネはそう言いたいのか？」

「——そんな言い方、ズルイ」

ふて腐れたような声をだすスズネに、笑いながらごめんと謝る。分かつてる。スズネは誰かに責められたいんだ。

こんなことになったのは、スズネの判断ミスだと断じて欲しいのだろう。

誰より皆のために生きていたスズネ。

それだけに、今回のコトに責任を感じ。誰よりも自分の事が許せない。

皆、ソレをわかっているから。誰一人スズネを責めず。

そして、誰にも責められないから。スズネは1人傷ついていた。

でも、傷ついているだけじゃ何も始まらない。

それじゃ誰も救えない。

「――」

「だけど。スズネはこれで終わる気は無いんだろう?。」

「え?」

今、何をすればいいのか。
そんなことは分かっている。

スズネは、今は迷っているだけだ。

「皆を守れなかったから、ハンター辞めるのか? それとも、責任とって腹でも斬るか?」

「………しない、と思う」

呟いたスズネの言葉には力が戻っていた。

そう、それがスズネだ。

しんみり悩んでいるなんてスズネらしくない。

お前はそんなキャラじゃない。

傷つくのもいい。迷うなんて当たり前だ。
でも、傷つけば傷ついた分だけ【やり返す】

それが、スズネじゃないのか。

「——しないわよ、するわけじゃない。」

やられたら倍返しが私の信条よ！ このままで済ませるなんてプライドが許さないわ！！

まずは村の再建、それから私自身強くなって上位、そしてG級に挑戦よ。

——ケビン、アンタも手伝いなさい！」

言ってるうちに元気がでてきたのか。スズネは段々と調子を取り戻していく。

そのスズネの姿をみて、笑いがこみ上げていった。

「ああ。——任せておけ」

雨が上がった夜空を見上げながら、独り言のように呟いた。
スズネは答えない。

片手になってしまった俺に何ができるのか。
今は何も思いつかない。

それでもできることはあるはずだと、足りない頭で考え続ける。

……………。

そしてまた、静寂だけが広がっていく。
スズネはまたも黙り込んだ。
意味も無く夜空を見上げる。

……………
すぐにも家に帰らなくてはならないのに、どちらも立ち
上がれずに背中を合わせていた。

「———そういえば。どうして私を助けたの、ケビン」

「———」

そんなのどうしても何も無い。
理由はそれこそたくさんある。

村の皆を守るためにはスズネの力が必要だと思ったとか、体が勝手に動いたとか。

ソレをいちいち説明するのはなんだか間抜けな気がする。

気がするので、言わなければならない一番大事なコトを言うことにした。

「——俺、今回は片手剣だっただろ？」

「そうね、少しでも防御させるためにそうしてもらったんだけど。これなら太刀のほうが良かったかもね」

「いや、道具が使いやすくなったからそれは良かったんだが。でも片手剣の盾じゃ皆を守れない」

ランスに比べて小型な片手剣の盾はガード性能があまり良くない。

「——だから、私を助けたの？」

納得するような、それでいてどこか訝しげなスズネの声が夜の農場に響く。

それを聞きながら、血が流れすぎて鈍くなった自分の頭を少し振った。

「いや、そうだな。

………そんなのは只の後づけだ。白状すると、ずっと前からスズネって奴に憧れてた」

皆を守るために走りつづけたその姿。

我俥で意地っ張りで、でもそのキツイ物言いはいつも誰かを心配しているもので。

「で、困ったことに同じハンターになって、話してみたら余計に好きになっちまってた」

今、スズネの顔が見れないことに安堵している。

川の水面に映るスズネの横顔。それは暗闇でも分かるほど真っ赤だ。

………きつと、俺の顔も負けず劣らず真っ赤になってることだろう。

「だから死んで欲しくなくて。気がつけば、何も考えずに飛び出しちゃった」

息を呑む気配がする。背中越しに伝わったその動きにまたでかいのがくるなど、身構えた。

「っ——ア、アンタね!!」

そういう歯に衣着せぬ発言はやめなさい。か、考えなしに思ったこと口にすると、

どこかで誤解を招くんだからっ!!!!!!!!!!」

「っ!!!! 招くかそんなの。俺、ホントにスズネのことが好きだぞ」

意地になって即答する。

ウソでも何でもないんだから、誤解なんてあるはずがない。

「ば、ばかつ……………! そんなんだから自殺同然で飛び込んでくるよ、この大馬鹿っ!!!!!!!!!!」

ばかばかと連発するスズネ。
散々な言われようだが、悪い気はまったくしなかった。

夜空は綺麗で、気持ちは落ち着いているし。
なによりスズネがいつものスズネに戻ってくれたことが、本当に嬉しかった。

——月が出ていた。

カケラも欠けていないその姿に今日は満月だったな。と、どうでもいいことを思い出した。

すっかり雨はあがり。俺の体力もどうやら歩ける所まで落ち着いたようだ。

その気配に気がついたのか、スズネから立ち上がろうという気配がする。

「よし、ケビンの言うとおり、そろそろ家に帰りましょうか」

雨がやみ、広がりかけていた村の火事も鎮火したようだ。それをみてスズネはホッとしたようだ。

「ほら、手をだして。その傷だと立つのも辛いでしょう」

よっ、なんて元気のいい声をだして今度は俺の右手を引っ張り上げた。

さっさと歩くスズネを前にして、苦笑が浮かび上がる。これからどうするのか。

村の再建、壊れた施設の整備、足りなくなったハンターの補充。それら全て、私が何とかしてやるとスズネの背中が語っているように見えた。

——そうして、農場を後にする。

散り散りになった雲から月光が梯子のように降りている。子供のころアレに登りたいといって、親を困らせたことを思い出しながら帰り道があるく。

その道中、ぽつりと。

「……………助けてくれてありがとうケビン。その、————助

かつたわ」

照れくさそうに頬をかきながら、俺のほうを見ないで呟くスズネがいた。

< 続 >

感想は感想提示版にお願いいたします。
感想をいただけると作者が狂喜いたしますm(_____)m

< NG シーン >

——身勝手な自分が許せなかった。

自分の力を過信して、間違った判断をした私。

しかも、目の前にいるケ빈は私を庇って片腕をなくしたのだ。

止血したとはいえ、それはあくまでも応急処置。

雨が降り出したせいで、止まっていた血がながれているのがこの暗闇でもわかる。

おぼつかない足どりで歩く、ケ빈の目には力が無い。

剣のように細いシルエットのギザミシリーズ。

だが、いまは【剣】というより【歩く屍】にしかみえない。

ケ빈をこうしてしまったのは私だ。

とりあえず、ケ빈を座らせて一度体力を温存させなければ。
そう思っているのに、ケ빈に言う言葉がどんどん罵倒に近くな
っていくのが自分でも分かる。

わかってる、私が言ってるのはわがままだ。

ケ빈は私を助けてくれただけ。

こんなことを言うのは、筋違いだって分かっているのに。

「辛くないなんていわないでよ！　少しは私を頼ってよ！
だって。ケビンには——もう、左手がないんだよ！——！」

なぜ、こんな酷い言葉しか出てこないのか。
私のせいで左手をなくしたケビン。そのケビンに甘え、罵倒する
自分に嫌気がさした。

■

「辛くないなんていわないでよ。少しは私を頼ってよ！
だって。ケビンには——もう、左手がないんだよ！——！」

スズネが当たり前のことを叫ぶ。

そんな事はわかりきっていることだ。

そりゃ、手が無くなって嬉しいわけではないし。不便だと思う。

そんな分かりきったことを叫ぶスズネ。

その姿はまるで。スズネが己の言葉で自分自身を傷つけているよ
うで。

むしろ、俺から罵倒されたほうが楽になれるとでも言っているよ
うだった。

だけど、スズネは一つ勘違いをしている。
俺は【辛く】なんてない。

だって。

「——だって、痛いのがって快感じゃん」

「……………死ね♪ 変態!!!!!!」

……………その後、おれはスズネのランスによる突撃をくらい。
喜びながら昇天したのだ。

< B A D E N D >

R a i n 雨に打たれて（後書き）

今回はオマケつきです。少しでも楽しんでいただけたら幸いなので
す。 m (m

“雷”——照れと怒り——（前書き）

まさかまさかのユニークアクセス3000突破!!
皆さんありがとうございますm(____)m
さてさて、今回は隻腕の狩人になる前編でございます。

——夜が明けた。

激動の一日が終り、新たな一日の始まりを告げる朝の光と鳥の聲が、意識に滑り込んでくる。

静かな朝の気配。閉じた目蓋のした、眠りについた意識のままで。

俺はこれからのことを考えていた。

モンスターハンター“隻腕の狩人”第3話

半壊したドア。そこから漏れる冷たい風に身震いしながら、朝の空気を噛み締めていた。

昨夜飲んだ秘薬。体力の上限を最大値まで上昇し完全回復すると

いう神秘の薬。

コレを飲んだ俺の体力は、一晩でかなりの所まで回復していた。そしてスズネからもらった薬、活力剤。自然回復力を高めるこの薬は足の骨折くらいなら一晩でほぼ完治するといわれている。コレにより感染症などの心配もないようだ。殆ど塞がった傷。……だが、そこにあるべきモノ【腕】はもうない。

本来、骨にヒビがはいった場合、完治まで早くても一週間かかるといわれている。

ソレを一晩で直す力を持つ効力が高すぎる2種類の薬。ソレを使いこなすようになってきた俺たちは下位ハンターとしてはかなりマシな部類の筈だ。

だが、そんな俺たちでも。ヤツラには勝てなかった。

金と銀の飛竜。

ヤツラによって壊れた施設はどれだけあるか分からない。

村はずれの俺の借屋ですら、ドアは半壊。雨漏りが激しい壁や屋根はどれだけ壊れているのか想像すらできない。まずは借屋の修理、それに村の施設。更には片手で何ができるのか。

ハンターを続けるのか、それとも。

考えることはいくらかもある。………。いくらかもあるのだが――

「——っう……あああああ——アア！……！」

そんな事は関係なく。

雨漏りで湿ったベッドで、悶えている自分がいた。

いや、分かってる。こんなことしてる暇はない。

やらなければならないコトは山ほどあるし、俺自身これからどうするのか決めなくてはならない。

ならないのだが。しかし。

「な、なんで。俺は昨日……あ、あんなことを言っちゃったんだ——……！」

現在、まったく関係ないことで頭を悩ませている自分がいた。いや、我ながら低レベルなことで悩んでいるとは思っ
思っのだが、………しかし。考えて欲しい。

全身血だらけで、汗まみれ。

しかも、カッコイイところは見たこともないハンターに取られ。

拳句の果てに説教した上で、女の子に告白まがいの事をしたのだ

!!!!!!

朝になって、自分のあまりの馬鹿さ加減に憤慨するこの気持ち。

男なら、いや。漢なら分かってくれると信じたい。

……いや、俺だっていつかはスズネに告白しようとは思っていたのだ。

しかし、そのタイミングは。もっとこう。ロマンチックなレストランとか。

夕日が綺麗な海とか、広場とか。

船旅の中で指輪を渡すとか。

カッコイイ場所。とか考えていたのに!!

「——なんで、なんで。あんなタイミングで言っちゃったんだ。俺は!!!!!!」

「なにを言ったのよ、ケビン？」

「あん、……………なにつて。きまつて——つて、うわ——！」

不機嫌な声に振り返れば、腰に手を当てたままのスズネの姿。
俺が活力剤と交換した秘薬。それが効いているのかもうっかり
と歩いている。

というか、何時からいたんだコイツは？

「ば、馬鹿。ノックぐらいしろよ」

「何言つてんのよ。こんなボロ家、どこがドアだかなんて分かる
わけないでしょ」

「——んなもの、見りゃ……………」

……………わかる、と言おうとして。

殆ど残骸しかないドアをみて、言葉を飲み込んだ。

一応半壊とはいえ、熱の余波で壊れたドアは殆ど用を成さない。
というか、知らない人が見たらゴミを捨ててであると間違えても仕
方がない姿だ。

だが、それでも。そこら辺のもの叩いて俺に報せるとか考えなか

ったのかコイツは？

「ん……………？ ちよつとまで」

ということは何か。朝から俺が身悶えていた姿は『ソト』からは丸見えだったと言うわけで。

誰も声をかけてくれなかったのは、俺を変質者が何かと間違えていた——可能性も……………。

「——つう、うわああああ！！！！！！」

叫びたい。いや、もう叫んでいるのだが。

もう、死ぬる。つか、こんな恥ずかしい姿を見られたら俺は生きていけない！

早朝から俺がした不審な行動と、昨夜のスズネに対する告白騒動。その恥ずかしさから俺が布団を引っ被り。うつ伏せになり身もだえしている。

「まったく、何時まで寝てんのよ。とつとと——起きなさい！」

「——寒っ！！！」

つかつかと、俺のベッドに近づき。スズネは一気に毛布をひっぺがした。

雨で湿つていようと、毛布は毛布。まだ雪が残るポケット村では貴重な暖房器具なのだ。

イキナリ暖かい毛布から引きずりだされた俺は。昨夜と今朝の照れ隠しもあり、スズネをどなりつけようとした。

……いや。したのだが。

「——なに、しゃが……………」
「キヤアアアア——！！！！！！」
……………る？」

布を切り裂く女性の悲鳴。というか、現在進行形で叫んでいるスズネの声に邪魔された。

一生懸命になって目を。というか顔を隠すスズネ。しかし、眼のあいだけ指を開いているのでは意味がないと思うのは俺だけだろうか？

「ば、馬鹿！！ 早く隠しなさいよ！！」

叫んでいるスズネの視線の先にあるのは俺の下半身。

だが、俺の姿はそれほど恥ずかしいモノではないはずだ。

昨夜、戦いが終り。疲れきっていた俺は武具を脱ぎ捨てるとインナー姿のまま寝ていたはず。

別段、裸でもないのだから今更スズネが恥ずかしがる筈が………
って。

「——う、うおおお！！！！」

本日、またしても絶叫を上げる俺がいたのだ。

「バ、バカバカ！ 朝からなんてとこ「立たせてる」のよー！！
」

「し、仕方ねエだろ。男の生理現象なんだよー！！」

未だ興奮が収まらないのか。目の前でスズネは怒りまくっている。
朝の男性ならではの生理現象。
それを見てしまったスズネの機嫌は悪く。
しかも。そのすぐ後。

「——なら、指あけてまで見なきゃいいじゃねエか？」

俺の不用意なコノ一言で、更に怒りが再燃したスズネは俺の部屋
にあった備品という備品を全て壊してくれた。まだボロ家だった我
が家。だが全壊一步手前まで追い込んだスズネをとめた俺自身を、
今は褒め称えたい。

「なんか、また妙なことを考えてるんじゃないの？」

ジロ目で睨むスズネにそんな事はないと全力否定する俺。
昨夜、今朝。そしてさっきの不用意な一言でスズネの俺に対する
好感度は地の下にまで落ちた模様。本来、そのコトにもっと落ち込
んでもいい筈なのだが。

……………ぶつちゃけ、不機嫌なスズネが怖くてそんな余裕はありま
せん。

「———？ ならいいけど。ほら、早く行くわよ！」

無くなった左腕ではなく、右腕を掴むスズネ。
まだ片腕になったばかりの俺は平衡感覚がおかしらしく、先ほ
どから転びそうになっている。
それを支えてくれるスズネには素直に感謝したいのだが、ならば
もう少し優しく起こして欲しいものだ。

「ああ、分かってるよ」

「まったく、折角つくった料理が冷めたらどうするのよ」

そう言いながらも機嫌を直したスズネは俺を引つ張っていく。

その明るい笑顔には、先ほどまでの不機嫌さは感じられず。俺は少々ほっとしていた。

久しぶりにアイルーに任せずに自分で食事を作り、少し機嫌がいいのかもしれない。

アイルー。二足歩行で歩くことができる獣人種で竜人族、人間族と交流がありウエイターや商人など多様な職についている。ある程度ハンターとしてのレベルが上がると、キッチンアイルーと呼ばれるアイルーを雇うこともできる。

彼らは食事や身の回りの世話、保存食をつくったりもしてくれるのだ。

スズネは普段。このキッチンアイルーに食事を任せている。

だが、昨夜の襲撃から村民もキッチンアイルーも避難所から戻っていないそうだ。

ハンターでもない人間にとっては夜の雪山は危険だ。

モンスターに襲われる可能性もある。

故に避難所で一晚を過ごし、今日の昼にはこちらにつくそうだ。

「これからが、大変ね」

「……………そうだな」

村人が戻ってきてからのコトを考えて気が沈んでいるスズネ。

その横で俺が「よっしゃ、今朝の行動は誰にも見られていない」と叫ぶと。

苦笑いしながらスズネは右腕を抓ってきた。

俺は「痛い、痛い」と大げさに騒ぎながら。それでも、笑顔が戻ったスズネにほっとしていた。

2人で歩いていく早朝の穏やかな時間。昨夜からは考えられないほど、他愛もなく流れるその刻にわずかな幸せを感じていた。

だが、「冗談ではなくこれからが大変だろう」。

あいつら。ヘヴィーボウガン装備のピース、そして弓使いのガト
ー。

あいつらの怪我がどの程度なのか分からないが、ハンターを続け
られるのかは疑問だ。

それに、俺自身も。

「——着いたわよ。ほら入って、入って」

「わかったよ。つか、本当に食えんのか」

「失礼ね、こう見えても料理は得意なのよ！」

「だけど、久しぶりに作ったせいで量を間違えた……、と」

「——うっさいわね！ おかげで私の手料理が食べられるん
だから感謝しなさいよね……！」

『朝食を作りすぎたから食べにきなさい』そう言って俺をコロま
で連れ出したスズネ。

その相変わらずの不器用な優しさに苦笑しながら、スズネの家
に入ってしまった。

……入っていったのだが。

「——ど、どうかな？ 結構、美味しそうにできたと思うん
だけど……」

俺の後ろでは不安そうに俺に声をかけるスズネの姿。
見えないであろうこの惨状に、どう声をかけるべきか考える俺。

まずは状況を整理しよう。

俺の借家よりはややマシな程度に壊れたスズネの家。
そこには、キッチンがあり。目の前のテーブルには多種多様な料

理皿が乗っかっている。

だが、問題の中身は。

「——おう！ 先に頂いてるぜ、お2人さん」

全身黒ずくめの男、ガッツに食べつくされていたのであった。

「——なんでアンタが、ケビンの料理食べてんのよ！……！！」

俺の後ろにいて、ガッツ（【さん】はもうつけないことに『今』決めた）が見えなかったスズネの怒りが爆発した。あまりの音量に耳を押さえうずくまる俺。高級耳栓でもなければ耐えられません。

つか、本当に体すら動かない自分が怖い。

「まあそう堅いこと言うなよ、朝からこんな美味そうな匂いがしたら我慢なんざできねえだろ」

一方、バインドボイス並みのスズネの絶叫にも平気で耐えてるガッツは、シレっと言い返しながら……まだ食べ続けている。いや、凄い。何が凄いつて、スズネより傍若無人な人間を初めて見ましたよ俺は。つか、怒り狂っているスズネの前でまだ食べ続けているあたり。もう凄いとしか言いようがない。

「第一、俺はオメエ等の命の恩人なんだから、コレぐらいかわねえだろ」

——— 命の代償にしちゃ、しけたメシだな。

笑いながらうそぶくガッツに、言っても無駄だと悟るスズネ。
一方、俺はスズネに口喧嘩で勝てるガッツを「凄いなー」と感心していた。

「それともアレか。嬢ちゃんはその小僧のコレか？」

ニヤニヤと笑いながら、小指を立てるガッツ。

普段なら下品に見えるのに、ガッツがやると不思議といやらしくないのはどういう魔法だろうか？

「だったら、悪いコトしちゃったな。恋人の手料理を横取りなんてした日にゃ目覚めが悪い」

「——私とケ빈はそんな仲じゃないわよ！！！」

ゲラゲラ笑いながら、俺たちをからかうガッツにスズネの怒りが炸裂した。

だが、怒り狂うスズネをみて。更に面白そうに笑うガッツにスズ

ネは何かを言うことを諦めたようだ。

「…………ハア。もういいわ。まだ鍋に残ってるから、ケ빈はそこでまってる」

「ああ。ワリィな、スズネ」

そう言いながら、スズネは俺の分を皿に入れに行く。

怒りを叫びで発散させることができたのか、スズネはやけに上機嫌になり料理を取りに行く。

一方、昨日の告白を今。間接的にはいえはつきりと断られてかなり凹んでいる俺がいた。

いや。分かつちやいるんだ。

血だらけで、汗まみれ。しかもクソ臭い農場で告白したって成功するはずなんかないって。

あの時は出血が酷くて、頭に血が回らなかったから気がつかなか

ったけど。

よく考えたら酷い状況なんだよな。

そんな状況で、告白したマイナス点を少しでも挽回しようとした時に。

「——なんだクソガキ。まだ、あの嬢ちゃんに手をだしてなかったのか？」

「るせエ！！ オッサンが来なけりゃ、まだ挽回のチャンスはあったんだよ！」

怒鳴り声と共に近くにあった、女王エビの尻尾を投げつける。
ソレを軽々とかわしながら、ニヤニヤ笑い続ける黒づくめのオッサン。

「なんだ情けねえ。昨日のウチに押し倒せつ、ボケガキ」

「ドコの原始人だよオッサン！ 第一、片手じゃ返り討ちだつたの！」

セクハラしか言わないおっさんに、俺は一般常識と炎熟マンゴーの皮を叩きつける。

つか、両手がそろってても負けそうなのに片手でスズネに勝てるかっての。

「—————ったく。なに、馬鹿なコト言ってるのよ2人とも」

溜息と共に料理を運んできたスズネに、一時オッサンとの舌戦を休止する。

せっかくスズネが作ってくれた料理。おっさんのツバなんか入った日には泣きたくなるし。

それに……残り物とはいえ、スズネの料理はとても美味そうだった。

プレスワインで蒸したプリンセスポークはその独特の香りから俺の食欲を刺激し。

炎熟マンゴーを氷結晶で冷やしたシャーベットは、味もさることながら見た目でも俺を楽しませてくれる。ロイヤルチーズで封をしたココット米のリゾットは、疲れた胃を優しく暖めてくれそうだ。

「なんだ、美味そうだな。俺にも一口よこせよ！」

「うっせエ！ オッサンはもう喰っただろうが！」

ガッツが食べた料理にはなかったのか、俺の皿に手をだそうとする餓えたオッサンの手を片手で迎撃する。その様子をなぜか楽しそうに見ながら、スズネは。

「そんなに欲しいなら、もう少し持ってきてきましようか？」

「マジか？ 嬢ちゃん」

スズネの優しい一言に驚いている黒づくめのオッサンこと、ガッツ。

ついでに「俺のために作ってくれた料理じゃないんだ」と、小さく凹んでいる俺。

「ええ、勿論」

「……………なんだ、その手は？」

ガッツに優しげに微笑みながら、スズネがだしているのは手の平。その親指と人差し指が輪を作っている。

「さっきの料理と合わせて1000000でございます」

ちなみにスマイルは02です。と付け足すことも忘れない。

さすがスズネ。すさまじい商魂だ。

「……………何言ってるんだよ。さっきの食事は命の代償」あら？ クエストは受注されたんでしょう」……………むっ」

ガッツの言葉を鮮やかにかわすスズネさん。やっぱり、貴女のほうが怖いです。

クエストの受注。

ガッツとシエリルさんは村からクエストを受け、村を守るための依頼を受けた。

契約がなされた以上、他の場所から契約金をとる行為は二重契約であり、サギに他ならない。

クエスト中に採掘した素材や、モンスターから剥ぎ取った素材はハンターのものになる。

それ以外、契約金以外の報酬を受け取ればギルドナイトに処罰される対象となる。

故に、ハンターは二重契約をすることはない。はずなのだが。

……まさか、食事程度で脅迫する人間がいるとは思わなかった。

「ちょ、ちよつとまで嬢ちゃん。調子に乗ったのは俺が悪かったが、100000つてのはいくらなんでも法外じゃねエか？」

慌てて叫ぶガッツおじさん。

こっちに助けを求めているが。正直、見てて面白いので止める気はまったくない。

まあ、100000といえば太刀や大剣を最高まで強化するのにかかる金額とほぼ同額だ。

いくら上位ハンターといえど、そんな金はないだろう。

いや、あったとしても。たかが料理には払いたくないに違いない。

「あら、怪我人であるケビンの料理まで食べつくした貴方を……

……【私】が許すとも思っただけですの？」

可愛く小首をかしげ、お嬢様言葉で話すスズネさん。

だが……その目は決して笑っていない。

というか、失恋したばかりの俺を引き合いに出すあたり相当怒り狂っているようだ。

そして、怒れば怒るほど丁寧語になるスズネが時々本気で怖くなる。

「オイ！ その鈍感コゾーもなんとか言ってくれ！」

「——喧しい、知ったことか！ 責任とって死んでこい！」

だれが鈍感だ、ボケ！

失恋したばかりの男をなめんなよ。

呆れた様に俺をみるオッサンを無視していると、笑顔のままガツツににじり寄るスズネがいた。

——怖い。なにが怖いって、笑顔なのに目が笑っていないスズネが本当に怖い。

「ま、まで。分かった、今は金がないが………街に行けば払えるから」

「即、金、で。お願いします」

「そ、そんな金——」

持ち歩いているわけねエだろ！
と叫びたいのを我慢する、ガツツ。というより、スズネの迫力に

負けて言えそうにありません。

もはや、スズネの笑顔はゼー、一色。

“金がないなら、腎臓でも肝臓でも売って金作って来いや。ワレ
”！

とでも言い出しかねないほど素敵な笑顔だ。

とはいえ、流石にこのままというのも寝覚めが悪い。
そろそろ止めに入ろうかとした時に。

「————しゃあねエな。コイツでどうだ？」

そう言いながら、ガッツはモノブロスSシリーズの左籠手を投げ
てきた。

「———なによ、コレ？」

スズネは胡散臭そうに、ガッツから投げられた籠手を眺めている。

モノブロスSシリーズ。

とてつもなく高価なその武具は、実力もさることながら1人で飛竜モノブロスを何匹も討伐しなければ素材が手に入らない。だが、所詮は籠手。モノブロスシリーズ一式ならばともかく、籠手だけではスズネのいう金額には届かない。

いや、そもそも。そんな桁がぶっ飛んだ金額を請求するほうが悪いのだが。

「——って、それ」

「え、コレって……」

俺とスズネはそれぞれ別の場所を見て驚いていた。
俺はガッツの腕を。そしてスズネは籠手の中身を。

「なんだ、気がつかなかったのか？」

ニヤニヤと笑いながら俺たちを見るガッツにも今は何も言い返せない。

なぜなら、ガッツの左手は俺と同じように【肘】から先がなく。

スズネが見ている籠手には。

「これ、義手？」

鋼鉄の塊である、義手が詰まっていたのだ。

「…………おっさんも、片手だったのか？」

「まあな、昔ドジったコトがあつてな」

義手をスズネから受け取り、ガッツはまた自分の手につけた。
信じられないが、今なら義手だと信じられる。

本当の腕とは良く見ればまったく違う動き。

戦闘中は、ホンモノだと思っていた腕が、贋物ということは。

「——それを、ケビンにくれるっていうの？」

「ああ、食事代だ。俺用に調整してあるから細かい調整は自分でやるんだな」

そういいながら、スピアの義手を俺に投げた。
まあ、何と言うか。

「――。意地っ張り」

「るせエ！」

スズネがクスクスと笑いながら言うと、照れたような声でガッツが怒鳴った。

というか、そっくりというか何と言うか。
スズネとガッツって同族嫌悪なのかな？
お互い不器用で、分かりにくい優しさを持っている。

「だが、コイツは結構なじゃじゃ馬だぞ」

生暖かく見守っている俺たちの視線に気がついたのか、頬をかき

ながら赤くなるおっさん一名。

女の子なら可愛いのかもれないが、無精髭のオッサンがやっても可愛くない。

「まずは。コイツだ」

箒手を良く見ると、様々な鋼線が不思議な文様を描いている。

「コレって、ひょっとして【電磁石】」

「【電磁石】?」

「ええ、太古の技術でそんなものがあつたのを文献で思い出したの」

——電磁石。

それは通常、磁性材料の芯のまわりに、コイルを巻き、通電することによって一時的に磁力を発生させる磁石である。機械要素として用いられ、電流を止めると磁力は失われる。永久磁石に比較して莫大な磁力を得ることができる物質。

「……………っ、ということは」

「察しがいいな、嬢ちゃん。そういうことさ」

何に気がついたのか、スズネはガッツの大剣と装備を見る。

そして、なるほどと肯いている。

「……………。どういうことだ？」

「つまり、こういうことよ。ケビンがハンターを続けたいのなら、雷属性の武器。防具は雷に弱いモンスターの素材が中心になるわ」

……………は？

一瞬、スズネが何を言っているのか理解できなかった。
人間より遥かに強いモンスター。

ソレに対抗するためには、罠、道具、そして苦手な属性。
全てを使って相手のモンスターに勝たなければならない。

相手の苦手な属性を突く。これはモンスターを狩るハンターの基本だ。

それをしないというのは、殆ど無謀と言ってもいい。

だが、となりにいるガッツは「良く分かってるじゃねえか」と感心している。

「つまり、この義手は握力を得るために電磁力を利用しているの」

「そして、電気を生むのは電気袋などを内蔵する武器だけだ」

スズネとガッツの言葉を聞きながら、俺にもやっとわかってきた。
ハンターが戦うためには、武器を握ることが前提条件だ。

片腕の俺が武器を握るためには、なにかを俺の腕の変わりにしなければならぬ。

ソレを磁石に任せようというのだろう。

だが、通常の磁石では力が足りない。

そこで電磁石である。

通常より遥かに強い磁力をもつ【電磁石】だが、それは常に電気を流さなければならぬという欠点を持っている。片腕にそれほど強力な磁力を持つ機械を取りつける技術など俺たちにはない。

例えあつたとしても、膨大な出費でまだ下位ハンターの俺たちに払える金額ではない。

だが、それが【武器】なら話は別だ。

雷属性の武器。それは素材の力により電気を生み続ける。

防具で電気を生み続けるモノがあればいいのだが、そんなものは現在は確認されていない。

本来、そのような高電圧に人間は触ることはできない。それを触れるコトができるのは【ゴム質の皮】などの絶縁体の力だ。その、

絶縁体【ゴム質の皮】を義手が握る部分だけ取り除いてもらい。
義手と俺の体の接合部をゴム質の皮で保護すれば。

強力な握力を持つ、義手の完成である。

コレなら改造費も安く済むし、ガッツの装備の意味も分かる。

ガッツの装備はフルミナントブレイド。

帯電飛竜フルフルの素材から作られたその大剣は電気を帯びている。その電気から人体を守るのはゴム質の上皮。そのゴム質の上皮を義手が触れる部分だけ削り取り、義手の握力とする。

そして防具はモノブロスSシリーズ。

モノブロス、1人で挑まなければならないという決まりがある飛竜だが。

この飛竜の弱点は………雷属性。

なるほど、単独で狩りにいこうと雷属性しか使えないガッツにとってはむしろ戦いやすい飛竜といえる。

そして、片腕のガッツがハンターをしている以上。
俺も。（制約が多いとはいえ）もう一度ハンターになれるのだ。

「とはいえ、これには弱点がある」

そう、これはハンターである限りついて回るかもしれない弱点と
いつていい。

「一つ目、武器が固定されちまう」

唯一、握力を取り戻すことができるのが雷属性の武器だけとなる
と雷属性に耐性があるモンスターの狩りは難しくなる。そして、握
力があるとはいえそれは自分の握力ではない。

このため、武器の出し入れが激しい武器。片手で細かい調整が必
要な武器は使えない。

ヘヴィーボウガン、ライトボウガンは属性がないため無理。

片手剣、双剣は片腕で繊細な動きが不可能。

ランス、ガンランスは盾を義手で使いこなす自信がない。

狩猟笛の演奏は繊細な動きを要求されるので、とても難しい。

となれば、使える武器は限られてしまう。

「二つ目、防具も固定化されやすくなっちまう」

防具はそれぞれの個性で決まるといつてもいいが、仲間が傷ついたことなども考えるとできるだけ単独でも狩れる相手がいい。そうになると雷属性が苦手なモンスターのほうが狩り易く、素材も集めやすい。

「三つ目、この重さだ」

持たせてもらったが、この義手の重さはとんでもない。コレを自由自在に使いこなすには相当の訓練が必要だ。そして、ガッツが大剣を愛用している理由もソレだろう。

一撃が重い大剣にとって、義手の重さは逆に威力が上がることもなる。

問題は盾としても使えるかということだが、俺よりガタイのいいガッツならできるとのことだ。

「それでも、……………ハンターを続けるのなら。その義手はお前のモンだ」

そう言って、ガッツは俺の手元にある義手を指差した。

今までどおりには動かない腕。

武装は今までより集めるコトが難しく、集めたとしても使えるものは少ない。

更にこの義手は「武器以外のものはつかめない」

電磁力を発生させる程度の電力をもった武器のみしか、握れない。

戦力だつて。今までより、ずっと落ちることになるだろう。

投げられた義手。それを手に取り、不安そうなスズネと目があつた。

俺の身が不安なのか、それとも村のハンターが減ることが不安なのかは分からない。

それでも、俺は新しい【腕】を手に入れたのだ。

「すまねえな、オッサン。恩に着るよ」

「礼をいうのは早すぎだぜ、クソガキ。後は——テメエしだいだ」

腕をつけながらガツツに礼をいうと、相変わらずの憎まれ口が帰ってきた。

なんか、このオッサンとは長い付き合いになりそうだと考えていると。スズネと目が合った。

「……ケビン。あの――」

スズネの大きな瞳は心配そうに揺れ動いている。

俺に何かをいう資格はない。未だ俺が以前のように動けるかは未知数。

その俺に対して。

「ハンター、辞めても……いいんだよ？」

「ハンター、辞めても……いいんだよ？」

心配そうなその瞳。その瞳のまま少女は言うてはならないコトを口にした。
登りきった朝日は部屋を照らし。穴が空いた壁からこぼれ落ちて
いる。

ハンターにとって言うてはならないコト。
それを言ってしまったスズネの肩は震えていた。

「——そうだな、俺も別にハンターに未練はない」

スズネの言葉すらどうでもいいのか、俺は当然の言葉を紡いでいた。

「——」

スズネにとって俺の言葉は堪えたのだろう。
齒を食いしばるように、俺を見ている。

信頼し、共に死線をくぐり抜け。皮肉を言いながら背中を任せた協力者。

振り返れば「楽しかった」と断言できる日々。
それを追いつめなければならぬコトに、スズネは傷ついていた。

片手でハンターを続ける。

ソレが難しいことだという覚悟はあった。だがスズネにとってはハンターであるスズネにとっては、ソレがどれだけ難しいのかも良く分かってしまったのだろう。

片腕のガッツが続けられた、ハンターの道。

だが誰もが、片腕でできるほどハンターは軽い職業ではない。

逆に言えば。誰でもガッツになれるわけではない。

ガッツより体格も装備も貧弱な俺をスズネが心配しているのは分かるつもりだ。

「——そうだよ。ケビンなら他にできることがあるって」

食いしばった歯から、強引に出される明るい言葉。

何を言うべきなのか、どうすればより俺を慰めることができるのか必死に頭で考えている。

ああ、コイツまた勘違いしてるんだな。

「く——」

俺の口元に、微かな笑みが浮かんだ。
何時だって不器用で、ヒトのことばかり考えているコイツを見て
いると笑いがこらえきれない。

「——な、なによ。何笑ってんのよっ」

むっと、スズネは上目遣いで俺を睨み上げる。
そのコロコロ変わる表情に笑みを深めながら。

「ああ、また勘違いしてるなって思ってたさ」

「……………」

迷いがない笑み。俺は今、笑えているのだろうか。

「ハンターには、未練はない。でも、お前には未練がある」

「——っへ!？」

呆然と口を空けているスズネ。その姿を見ながらなんてツラしてやがると更に笑みが広がっていく。

「言っただろ、俺はスズネに………惚れてるって」

1度や2度の失恋なんかで悩んでられるか。
失敗したんなら、もう一回やり直せばいい。

「惚れた女の側から離れるようなことするわけないだろ」

「——っ!——!」

ボンとばかりに、真っ赤になるスズネ。
一回振られたぐらいで、俺が諦めると思ったら大間違いだ。
ハンターにも、戦い方にも興味はない。

俺が興味があるのはスズネだけだ。

「——ツバカ！　ココにはガッツもいるっていうのに」

そういえば、と振り返ればニヤニヤ笑っているガッツの姿。
そう言われても言っちゃったことは取り消せないし、取り消す気もない。

「じゃあねエだろ。忘れてたみたいだから思い出させたんだよ」

「——何がよ」

顔を真っ赤にさせ、涙を堪えるスズネは可愛かった。

その顔を注視しすぎると声が出せそうにないので、視線を僅かにそらす。

「惚れた女を守りたいってのは、あの時だけじゃないんだよ」

思わず漏れた呟きは、ぶっきらぼうなものだった。

我ながらももう少し言い方があるだろうと呆れながら、言いかけた言葉を紡ぐ。

「……………それって」

「何度も言わせんなよ。———お前に死んで欲しくないって言っただろ。俺は今でもそう思ってたんだ」

惚れた女を守るためには側にいなければならぬ。

俺が惚れた女、スズネは自分からハンターを辞めることなんてない。

ならば——俺がハンターを辞められるわけがないのだ。

「……………」

—— 空気が停止する。

真っ赤になったスズネの眼に、爆笑しているガッツのオッサンの姿が映っていた。

「いいねえ、嬢ちゃん。——その小僧はアンタにぞっこんじゃねえか」

ゲラゲラと笑いながら俺の肩を叩くオッサンに、小さく「うっせエ」と呟いた。

「イヤイヤ、煮え切らないガキかと思ったらやるじゃねえか」

「なんだよ、ワリイか。言っとくけどスズネに近づくんじゃねえぞ」

「まさか。悪いわけねえだろ。むしろ見直したところだぜ。なあ、

嬢ちゃん？」

セクハラ親父と化したガッツの言葉にスズネの顔がいい感じに茹で上がっていく。

「——！ な、なななナ言ってるのよアンタ。私とケ빈はまだそんな関係じゃないわよ！ その、そう。ただのハンター仲間なんだからっ……………！」

「えー、そうかあ？」

真っ赤になって否定するスズネを、ニタニタと笑いながらからかうセクハラガッツ。

その顔を見て、スズネの怒りが更に加速していく。

「っ……………！ なんかムカつくわねアンタ。なによその見透かしたような顔は……………！ ほら、ケ빈もなんか言いなさいよ。私達は只のハンター仲間だって！」

「――」

「……………。いや、言えといわれても。

昨夜から俺はスズネが好きだと何度も言ってる筈なのだが。

「ちよつと！？　なんか言いなさいよ。ばかぁ……………。こゝ、これじゃホントに、その、私達が――」

真っ赤になつて俺に近づきながら、スズネはタドタドしく否定し続けている。

男としてソコまで否定されるのは、悔しい限りなのだが。コイツを好きだという気持ちを偽る気はない。

「だからあ、ホントもなにもとくに出来上がってんだよオマエ達。端から見てる俺ですら分かるのに当の本人が誤魔化してるんじゃない。こりゃ大変だぞ。クソガキ」

ニヤニヤ笑いながら俺に声をかけるセクハラオヤジに裏拳を叩き

込みながら。

「まあ、……………そんなスズネに惚れたんだし」

問題ない、と仏頂面で返答する。

「なっ!？」

「へっ、言うじゃねエかクソガキ。まあ、義手で解らねえコトがあつたら聞きにきな。お前らが気に入ったから村が復旧するまでコを守るハンターになってやるよ」

なぜか絶句するスズネの横で、俺の裏拳をかわしたガッツはニヤニヤ笑いながらそんな事を言ってきた。旅を続けていたハンター。しかも上位ハンターが俺たちの村にいるということは、少なくともハンターが増えることを意味し。同時にスズネの頭を悩ませていた問題が幾つか解決することになる。

「……………いいのか？」

「安心しろ、用心棒代だせなんてケチ臭いことはいわねエ。だが

まあ、からかうと面白い嬢ちゃんだからな。たまに楽しませてもらうぜ。ソレぐらいの見返りはあってもいいだろう?」

「わかった、その線でいこう。当分の間よろしく頼む」

差し出された手を握り、握手を交わす。

義手を使う師匠、そして村を守る戦力としては申し分のない上位ハンターを手に入れることができた。

あとは、俺が強くなるだけなんだが。

問題は。

「くっ、この。アツタマきた——っ!! あんた達ソコに並びなさい、今からランスの鎧にしてあげるわ——!!」

顔を真っ赤にさせ。いい感じに激昂してるスズネを、どうやって落착かせればいいのかろう……?」

.....そして結局、激怒したスズネは、村人達が到着した昼過ぎまで俺たちを追い回し続けたのだ。

< 続 >

感想をいただけると作者が狂喜しますm (_) m

“雷”——照れと怒り——（後書き）

雑学の後書きです。

（あんまり興味ない人は無視の方向でお願いします）

電磁石の義手。これは節電義手といわれるものを改良したモノです。ちなみに、この義手。太古の技術と書かれてますが（モンハンでも火縄銃が太古の技術だと書いてあるので（汗））正確にはガッツとスズネは少し誤解しております。

本来は脳から命令が神経を通して伝えられた時に発生する微弱な電気信号をつかった義手です。しかし、モンハンではモーター（腕につけられる小型なもの）などは描かれてません。そのため、そんなものはない。という前提で脳から発生する微弱な電波を計る繊細な装置を取っ払い。電力を発生するものを反射的に掴む物としております。

少々オリジナル設定ですが、ご理解いただけると幸いですm（
—）m

2人の休日（前書き）

少しづつでも頑張っていこう、こんばんは名無しです。

今回でギャグはとりあえずお休み、次回からは作者が個人的に好きな戦闘シーンへと移行していきます。こうしたほうがいい、もしくはこうやったほうがというご意見がありましたらよろしくお願いいたしますm（――）m

2人の休日

——ポケット村。

雪深い山村の小さな村。雪に囲まれたその小さな村では、遅い春を告げる花。……梅が咲いた。東方のある国から伝えられたというその花は、この地方に穏やかな季節の変わり目を教えてくれる。百花に先駆け咲くその花の静謐な香りは。いまだ氷雪の冷気を含む大気に溶け出し、遠からぬ春の生命の萌芽を告げる。その香りを楽しみながら、今の平穏を喜ぶ。

梅の香りに混じる、黄金芋酒の香りを楽しみながら溜息を一つ。

「はあ、生きてるって……素晴らしい」
「今回ばかりは心から同意すんぜ」

体中が煤けているガッツと共に、溜息をつく。
視線の先には、赤くなつたスズネの姿。

「わ、悪かったわよ。……………ちょっと、やりすぎだった!」

ジロリと睨みながら、スズネがお詫びにと差し出した黄金芋酒を小さく煽る。いや、本当。死ぬかと思った。モンスターでも殺せる毒をもったランス。豪槍グラビモスの一撃なんて怪我人の俺では堪えられません。

流石のガッツも途中から真剣になって逃げてたからな。

つか、俺の恋人と間違えられるってのは、そんなにスズネにとってはショックなことなんだろうか？

……………そう考えると少し、落ち込んでしまう。

溜息をつきながらもう一口、黄金芋酒を煽ると。なぜか哀れむようなガッツと視線が合った。

「なんだよ、おっさん!」

「いや、事実を認めない嬢ちゃんが不幸なのか。空気を読めねえオマエが不幸なのか。少し考えててな」

「——ッるせエよ！」

思わず、手元にある黄金芋酒を投げてやろうかと思ったが。せつかくの高い酒。

しかも、スズネからの差し入れだったと考えを改める。

つか、分かってんだよ。空気が読めなかったってことぐらい。

血だらけで、しかも農場なんかで告白したりとか。振られた直後にガッツがいる前で告白したりとか。

スズネに愛想つかされかけてることぐらい分かってんだ。

……けど、諦め切れないんだからしょうがねえだろ！

「——はあ。まあ、いいや。っでマジメな話なんだがオマエ今、どんな装備持ってた？」

「装備？」

「ああ、武器と防具。あるだけ言ってみろ」

なんか諦めたような溜息のあと、ガッツは俺の装備を聞いてきた。

ココという装備とは武器は雷属性。そして防具は何でもいいってことだよな。

ギザミシリーズはこの前の戦闘でほぼ全壊だから。今、装備しているブランゴシリーズが一番使いやすいだろう。防御力はかなりあるが、炎に対する耐性が低いため、金と銀の火竜には使わなかったやつだ。

そして、雷属性の武器は。

「つつても、片手剣と太刀がメインだったからな。サンダーベインと斬破刀ぐらいしかねエぞ？」

義手では片手剣のように盾を使うことは難しい。

たかが盾とはいえ、威力の逃がし方。力の入れ方は非常に繊細なものだ。

義手ではできないだろう。そうすると、太刀である斬破刀ということになるのだが……。

「ちと、威力的に厳しいな。下位とはいえせめて『鬼斬破』ぐらいいっておかねエと」

ガッツは難しそうに言っていた。

鬼斬破。下位の雷属性では最高峰とも言われる太刀。

ふらりと現れた東方風な男が鍛え、製造法を伝えたといわれるその太刀は下位のモンスター、ほぼ全てに通用するといわれている。

……だが。

「でも、最後の素材がみつかんねえんだ」
「……麒麟、か」

斬破刀を鬼斬破に強化する素材の殆どは用意できている。
だが、最後の一つ。『麒麟の雷尾』コレだけが見つからないのだ。

麒麟。それは古竜種的一种といわれる神秘の生物。ハンターでさえ出会えないまま一生を終えることが多い。その力は自然をも動かし、一つの天災だと言い恐れる者もいる。

その生態も、習性も、全てが謎に包まれた存在。

探すことすら難しい、この古竜の素材を果たして見つけることができるのか。

見つけたとして、本当に倒すことができるのか。

電撃を纏う太刀を使いハンターを目指す以上、それは避けては通れない道なのだろう。

「あとは。……弓、くらいか」

「ソニックボウか？」

「いや、一応ソニックボウ？に強化してある」

昔作った弓があることを教える。

本来、片手剣か太刀を極めようと思っていた俺だが。

……あるモンスター、ガノトスを見た瞬間。コイツだけは弓で確実に倒そうと思ったのだ。

初めて奴と出会った時の恐怖は忘れない。

その巨大な体だけでも充分な脅威であると言うのに。

接近戦では殆ど全てが奴の攻撃範囲で、やばくなれば水中に逃げ込まれてしまう。

地上にいては攻撃手段はなく、ただ一方的に攻撃されるだけ。

しかも、威力はとんでもない。

仲間がいるときならともかく、1人でやつと戦い。安全に勝つためには弓が一番だと思ったのだ。

「あー。アイツはメンドクセエからな」

ガノトトスと戦った時のことを思い出したのか、ガッツが笑いながら同意してくれた。

その横では、スズネがウンウンと肯いている。

スズネも何度か水中に逃げられて悔しかった過去を思い出しているのか、苦い表情をしている。

特にスズネのグラビモスシリーズは水に弱い。

水を吐き出して攻撃するガノトトスとは、相性が悪すぎるのだ。

「ってことは、お前はガンナー用の装備も持ってるってコトか？」

「ああ、一応タロスシリーズをそろえている」

「タロスシリーズ？」

タロスシリーズと聞いて、スズネとガッツの顔が一瞬だが訝しげなモノに変わった。

タロスシリーズ。昆虫カンタロスから作られたその鎧は、頑丈さでこそランポス種の亜種。ゲネポスシリーズとほぼ互角であるが竜属性を抜かすほぼ全ての属性に弱く、しかも悪霊の加護と呼ばれるマインス能力を持つ。一定の割合で被ダメージを上げる能力、悪霊の加護。そんな防具を使う人間の正気を疑っているのだろう。

だが。

「ああ、高級耳栓がつくからな」

俺の言葉でなるほどと2人は納得したようだ。

タロスシリーズ。一見マイナスイメージしかないこの防具だが、下位の防具としては異例の『高級耳栓』という能力がつく。

『高級耳栓』ある一定のモンスターが持つバインドボイスを防ぐ力を持つ防具だ。

衝撃をもつという、モンスターの咆哮は盾で防ぎ衝撃を逃がすか。モンスターの防具に含まれるスキル、耳栓を使うしかない。

ない場合、鼓膜が破れるのを防ぐため本能的に耳を塞ぎ動きをとめてしまう。

自分より圧倒的に巨大なモンスターと戦う時に、この隙は致命的であるといったいい。

特に動きこそ遅いが、一撃をくらった場合その場で死にかなないフルフルなどでは。

この装備があるかないかで生死を分けるといっても過言ではない。

只でさえ剣士に比べて防御力の低いガンナー装備。

ならば防御力よりも、隙がでにくい装備にすべきだと考えてのこ

とだ。

「なるほどな、ってことはとりあえず太刀か弓でいくしかねエってことだな」

黄金芋酒をありながらのガッツの言葉にこちらも小さく肯いた。これからの戦い。俺にとって使える属性が一つしかない以上、使える武器は最低でも2つは必要だ。そう考えながら、新しい腕を見ると。僅かにズレが生じていることに気がついた。僅かなズレ、それは俺とガッツの体格差がある以上。仕方がないのかもしれない。

ガッツからもらった義手。それは俺の腕より一回り大きく動きが阻害されやすい。

「…………。なあ、話が終わったなら鍛冶屋にいつて来ていいか？」
「ん？ ああ、そうだな。細かいチェックもあるから俺も一緒に行つてやるよ」

ガッツは、黄金芋酒の入った杯を一気に煽ると。

「ん。……サンキュー、嬢ちゃん。美味かったぜ」

「はいはい。つか、私も行くわよ。……武具の手入れもお願いしたいし」

スズネは俺達に外で待ってるように言うと、キッチンへ杯を洗いに行った。

本来なら俺も手伝いたい所だが、この手ではむしろ邪魔にしかならない。

大人しく外で待っていると、ニヤニヤと笑っているクソみたいなオッサンと目が合った。

「——んだよ？」

「いや、なに。雪の中だつつうのに、熱いなあ。と思ってな」

「何ワケわかんねえこと言ってるんだ？ 飲みすぎなんだよ。オッサン」

「ま、わかんなくやいいさ」

わけのわかんないオッサンの戯言は無視し。俺は久しぶりに見られるかもしれないスズネの私服姿に胸をときめかせていた。

………武具を直す。

グラビモスシリーズかもしれない。あるいはその両方を直すのだろう。

ちなみに俺が使っていたギザミシリーズは殆どボロボロで直すより、買ったほうが安くできるに違いない。

まあ、おかげで腕一本を取られたとはいえ他の部分はそれなりに動くのだから感謝しなければならないが。

しかし、スズネのグラビモスシリーズは細かい損傷しかない。愛着もあるだろうし、直すに違いない。

ということとは、先ほどまで着ていたグラビモスシリーズを脱ぎ。私服、もしくは別の装備を着てくることになる。

「おまたせ」

そんな事を考えていると、後ろからスズネの声が聞こえてきた。少し深呼吸しながら、呼吸を整える俺。………ちなみに、褒め称える準備は万全だ！

昨日、そして今朝。さらに昼までの逃走劇。今までの経過で地にまで墜ちたスズネの好感度。ココで上げずにど

こであげる！！

女性の服を褒めるのは、モデル男の第一条件（月刊狩りに生きる増刊号ヨリ）

そして、スズネを褒め称えるために振り返った瞬間。

「……………ッ、う——刻が、止まったのだ。」

「……………、うっ」

「ああ、まあ。そう落ち込むなよ、あの嬢ちゃんはそういう女なんだって」

落ち込みながら、鍛冶屋へと歩いていく俺達の後ろからスズネが怪

訝な顔でついてくる。

その背中には予想通り、昨夜使った豪槍グラビモスにグラビモスシリーズが入った袋が背負われている。

限界まで使われた装備。それを鍛冶屋に出すのはある意味当然だ。

そして、装備していた武具を外すのだからその下はインナーだけとなる。

もうすぐ暖かくなるとはいえ、未だ雪が降る雪山。

ということは、スズネは私服姿、………もしくは防具姿になるはず。

私服も捨てがたいが、防具姿も侮れない。

たかが防具と侮るなかれ、ザザミシリーズはそのギリギリのミニスカートが可愛らしく。ゲリヨスシリーズは体のラインがぴったりと見えて非常に扇情的だ。スズネはランスを使っていることから使う防具も防御力、もしくはガード性能が高いものに限られる。

だが、グラビモスシリーズ以下の防具となると……。

そう期待していたのに——なんで。

「なんで、マカルパシリーズなんだよ」

「……………なにがいけないのよ？」

俺の憤りを少しも理解してくれない、スズネ。

そして凹んでいる俺の肩を叩く、ガッツのオッサン。……………今だけは少しガッツに友情を感じるかもしれない。

マカルパシリーズ。魚鱗から作られるその防具は、回復薬やクエストに必要な道具の調合確率を上げ、更には古代の秘術。錬金術すら可能にするという。だが、その形はお世辞にも美しいとはいえない。髪型が殆ど隠れたフードに体のラインがまったく分からないダボダボの服。

なにより、その微妙な色合いが個人的に許せない。

少なくとも、その服を称える美辞麗句は俺の辞書にはない。

「……………村中に被害があるかもしれないんだよ？　いつでも対応可能なこの装備が一番イイじゃない!!」

「……………」

スズネがいつてることは、紛れもなく正論である。

防御力こそやや低めだが、調合書がなくても高確率で回復薬や回復薬グレートができるその装備は、2匹の火竜に荒らされたこの村では必要不可欠な装備であるといっても過言ではない。

……過言ではないのだが。

「……………はあっ」

「だから！ 何、溜息なんてついてんのよ！」

洒落っ気より、実用性というスズネの考えは素晴らしいとは思っただが。どうにも溜息が止まらない。チョッピリ怒りは始めているスズネを宥めながら、鍛冶屋につくと。

「おう、ケビンにスズネじゃねえか！」

「こんにちは、親方」

半壊した建物の前に、手ぬぐいを被った威勢のいい親方がいた。
ハンマーを片手に仁王立ちしている親方の横では、親方の弟子であり娘さんのマイさんの姿。

ブランゴヘルムを背中にひっかけているため、ひと目で俺と分かったようだ。

ブランゴシリーズ。雪獅子ドドブランゴから作られるその装備は全身を白い体毛で覆い。

顔の前面を長い牙を生やした御面で隠している。狩りの時ならばいいのだが、村では目立つためできるだけブランゴヘルムはしていない。

「あらあら、2人でデート？」

「だったら良かったんですけどね。いるでしょ“後ろ”に余計なのが」

「その“余計”ってのは俺のことじゃねえよな？」

軽く言い合っている俺とガッツを見ながらマイさんはニコニコと笑っている。

鍛冶場で働くタメか、短く切った髪が風に靡きその仄かな香りが俺の元に届く。

藍色の目。そして紫紺の髪。本当に親方と血が繋がっているのだろうか？ と疑うほどの美人である。

「あらあら。じゃあ貴方がガッツさん？」

「ん？ 俺のこと知ってんのか？」

「ええ、私達の村を救ってくれたハンターさんですよね」

このたびは、ありがとうございました。と頭を下げるマイさん。

その小さな頭がゆれ「気にすんな」そう言おうとしたガッツの言葉が止まった。

そして、俺も止まっている。

——余談ではあるが。

現在、2匹の火竜に焼け焦がされた村は復旧作業に大忙しである。
村人総勢で、瓦礫の撤去。食料の有無。貴重品の管理。

そして、この鍛冶屋でも工房の整理をしていたのか親方もマイさんも汗だくだ。

暑くなれば当然上着を脱ぐわけで。上着を脱げば、マイさんはＴシャツ一枚。

そして流れる汗は頬を伝い顎を辿り。首筋を伝って自然とその豊満なマイさんの胸元に……………。

そして俺達の視線も一直線にマイさんの胸元に。

……………ガチャン！

「なにを見ているのかな、２人とも？」

「「イイエ、何にも見てません！！！！」」

カタカタ震えながら、にこやかなスズネのセリフに答える俺達。…

……いや、怖い。

なにが怖いって、今にも突き刺さりそうな豪槍グラビモスとか小刻みに震えるたびに漏れる毒液とかそんなものより。

笑顔で俺達を見てるスズネが、………何より怖い！

「あらあら。それで今日はどんなご用件で？」

一方、リアルに命の危機である俺達を無視して話を進めるマイさん。少しもフォローしてくれないのは天然なのか、それとも地味に怒っておいでなのか。

ついでにその横でジロリとこちらを見るのは親方さん。その肩でキラリと光るハンマーがとってもプリティー！

………ちよつとでも隙を見せたら、俺達の脳天を撃ち砕きそうです。

前門の親方、後門のスズネに挟まれ。カタカタ震えながら俺はココにきた理由を話し始めた。

「あ、ああ。実はコレなんだが」

「——ッ、ケビンさん。その手」

左手の装備である籠手を外し。中の義手を親方にみせようとする
とマイさんが小さな悲鳴をあげた。親方も、眉を顰め俺のなくなった
左手を見ている。

どうやら、まだ村の皆は昨日の戦いの詳しい経緯を聞いていないよ
うだ。

かといって今更話すことでもない。

「ああ、昨日少し失敗したんだ。っで、ガッツ……そのオッサン
からこの義手をもらったんだけど。コレを俺用に調整できないかな
？」

「ん。貸してみな」

一瞬、痛ましげな顔をしながらも親方は職人の顔になっていく。
ありがたい。無駄な慰めなんかより今は早めに新しい腕が欲しい。

それに、昨日のコトで胸を痛めるスズネの顔なんて見たくない。
まあ、後ろでランスをかまえてるのは怖い。悲しい顔なんかより
ずっとマシだ。

「電磁石、か。必要な磁力とケビンの腕力に合わせて重量を加減する
と……………」

「お父さん、コレならほら——を使えば」

「なるほど、そっぴやケビンは太刀だったな」

2人だけの世界に入っている親方とマイさん。
どうやら上手くいきそうだと安心していると。

「……………難しいな」

「あん？ んなわけねえだろ」

ポツリと呟いた親方に、ガッツが不思議そうな言葉を返した。
ガッツの言葉に俺も不思議そうな顔になる。

親方の腕は知っている。あの細い太刀や片手剣に火炎袋や電気袋を
いれ属性をつける技術。

刃を壊すことなくソレを作るのがいかに難しいか。素人の俺でもわ
かるほどだ。

そして防具も、ハンターそれぞれの体格にあわせ細かく調整してい
る。

一方、義手のほうは電磁石という俺が知らない領域といえど聞いた
だけで殆ど分かる力だ。

この調整は難しいモノのように感じないのだが……。

「ん、いや。昨日の2匹の火竜のせいだな。炉がぶっ壊れちまった
んだ」

「え、本当ですか？」

剃り上がった頭を叩きながら、親方は困ったように言う。

『炉』それは高温をもって武器を鍛えるモノ。工房にとっては心臓
と言ってもいい。

コレがなくては工房の殆どの作業ができなくなると言っても過言で
はない。

「…………ゴメンナサイ」

「あらあら、違つわよスズネちゃん。スズネちゃん達が頑張ってくれたから、この程度の被害で済んだんだから」

マイさんが慌てて親方の横腹を小突きながら、スズネを慰める。
その様子を見ながら、考えてみれば当たり前のことであつたと気がついた。

村はずれの俺達の借屋すらアレだけの被害があつたのだ。
村の中心部に近い、親方の工房が無事である筈がない。

「つで、防具の手入れ程度ならできるんだが。この義手の改造となると炉がねえと難しいな」

「炉はどのくらいで直るんですか？」

「そうさな、とりあえず部品が必要なんだが鉄鉱石に大地の結晶。それに鎧竜の頭殻に甲殻。最後に火炎袋と電気袋かな」

必要量をざつと紙に書き、親方は俺にみせた。
2人はさっきまで工房を整理しながら必要な部品をメモしていたようだ。

高温に熱する為に必要な鉱石にモンスターの素材。鉱石はもちろんのこと、火山などに住み熱に強い耐性をもつモンスターも炉の素材として使われている。

より高熱に強いモンスターや鉱石を集めることができれば、より高度な炉ができ。

より高度な武器ができる。そのため、そういった素材がなくなれば俺達ハンターがその素材を集める。もしくはもっている素材を渡すのだが。

「鉄鉱石、それに大地の結晶は何かなりそうだな」

「鎧竜の頭殻に甲殻もこの間グラビモスシリーズを作ったときの余りをまわせば、足りそうね」

渡された紙をみて俺達はお互いにある素材を出し合う。

借屋に戻れば、それらは問題なく手に入れられるだろう。

問題は…………。

「火炎袋か、私はこの間レッドテイル作っちゃったしな。電気袋はあるけどケビンは？」

「俺もレッドサーベルを作ったからな。もう残ってない」

せっかく作っても今の俺には使えないモノ。

火炎袋を内蔵した片手剣、レッドサーベル。この火炎袋があれば炉を直せたのだが。
使ってしまったので、今は無い。

ガッツは素材と武器を街に預けてしまってるし。ソレを当てにはできない。

「あと、できれば燃石炭も欲しいんだが」

「あ、それもあつたか」

親方に言われて、炉に必要なものをまた一つ思い出した。

燃石炭、高性能な炉を動かすためには必要と言われている材料だ。
そして、火炎袋。燃石炭とくれば、攻略するのは。

「グラビモス……………かな」
「だな」

火炎袋、それは火を吐くモンスター。俗にいうプレスを得意とするモンスターにある器官である。

小さいものでは怪鳥イヤンクック。大きいものでは飛竜リオレウス。
そして……………グラビモス。

別名鎧竜とも呼ばれるこの飛竜は、体内に火炎袋と睡眠袋と呼ばれる器官をもっている。

離ればブレス、近づけば睡眠ガスと隙がない飛竜だ。

火炎袋を手に入れるだけなら、狩りやすいイヤンクックでもいいのだが。

火山でしか手に入らない燃石炭も、手に入れなければならない。

何度も狩場に行き来するのは時間的にも無駄が多い。

下位でしかも火山が狩場。しかも火炎袋が手に入る飛竜というと、スズネが狩りなれているグラビモスが妥当だろう。

だが、問題は。

「……………この手、だな」

俺は無くなった左手をみた。

元々、鍛冶場。親方の工房に來た理由はこの義手の細かい調整を任せるためだ。

この鉄塊の塊である義手に、磁力を通し。更に電力により磁力を生

み出す電磁石を作るためには工房が必要。

だが、そのための工房が壊れているのでは話にならない。

となると。

「……………師匠、なにかいい手はないっすか？」

「随分と都合のいい口だな、オイ！」

苦笑しながら「さっきまでの“オッサン”はどうした？」とかいうガッツの意見は無視して。

早く回答をよこせ、とねだる俺様。

このオッサンには遠慮なんかするはずが無い。

「それ以前にお前らは休んでろよ。秘薬で治ったとはいえまだ本調子じゃねえんだろう？」

「そうしたいのは山々だけどな。工房が直らなきゃ、余計時間がかかる」

この辺は最早、仕方が無い。

体が治っても使える武具が無いのでは意味が無いし、ガッツには俺達がない村を守って欲しい。逆にガッツが出て行っても、昨日の銀火竜並の火竜が来たら俺達では太刀打ちできない。

多少無理してでも、工房や村の施設を直すためには俺達の力が必要なんだ。

「まあ、そこで俺達を頼らないってのは殊勝な心がけだけどよ」

「ああ、この腕にも早く慣れないとマズイからな」

俺の体とズレタ、義手を見ながら言った俺の言葉になにを感じたのか。

「——ッ、しゃあねえ。ちょっと待ってる！」

ガッツは頭をガシガシと引っかいた後、ヤケクソのように走り出した。

しばらくすると、ガッツはシェリルさんを連れて現れた。

……いや、連れて現れたと言うか。

「なにやってんの、オッサン？」

「見てわかんねえのか？」

いや、ワカラナイから聞いているのだが。
ガッツはなにやら荷車を引き、その荷車の上には大量の荷物が置かれ。

そしてその上には。シェリルさんが機嫌よさげに寝転がっている。

つか、本当に何をやってるんでしょうか？ この人たちは。

「ホラホラ、無駄口を叩かない」 アンタは今日は私の馬なんだからね」

「うつせえな。もう着いたんだよ！ー！」

「あら、もう？ ツマンナイ。じゃあ、このまま村をもう一周」
「——ぜってえ、しないからな！ー」……ちえ、ガッツのケチ」

なにやら言い合っている、ガッツとシェリルさん。

まあ、個人的に。「ガッツは馬というよりゴリラだよな」という感想は話さないでおく。

「っで？ 何やってんだよオッサンは」
「ああ、その前に親方さん。火炎袋ってのは他のじゃ代用きかねえのか？」

目の前にうずたかく盛られた荷物に驚きながらも、親方は話し出した。

「無理だな。元々、炉には爆炎袋を使ってるんだが、その代用品として火炎袋が欲しいんだからな。それ以下の火力だと仕事にならねえ」

『爆炎袋』上位のモンスターが持つという、巨大な火力を誇る上位素材だ。

まだ下位ハンターの俺達では手が届かない素材。

親方は本来『爆炎袋』でないと使えない炉を火炎袋を使い、効率的に熱を運用することで乗り切ってきたのだ。

いかに親方の腕がいいとはいえ、それ以下の素材では炉の材料にはならないらしい。

「んじゃ。ちょうどいい、コイツを使ってくれ」
「……………って、コイツは!!」

ガッツが差し出した見慣れない素材をみて、親方は驚いている。
血より紅い、紅蓮の色。その色は俺がよく見る飛竜の体内にある火炎袋と似ている。

だが、まず大きさが違う。

火炎袋より一回り大きいその物体は未だ生きているかのように脈動を続けている。

「それ、ひよつとして？」
「爆炎袋だ、間違いねえ」

スズネの言葉に、親方が答える。
上位素材、爆炎袋。親方が本当に欲しかった素材がソコにあった。

「オ、オッサン。これドコからもってきたんだよ？」
「アホかお前は。昨日倒したモンスターだよ」

昨日倒したモンスター、金と銀の火竜。そう『火』竜である。火竜。その名の通り、火を吐く竜。上位の竜である以上その体内に上位素材である『爆炎袋』があってもおかしくは無い。

「コイツを俺にくれるってのかい？」

「まあ、当分ココで世話になる予定だからな。鍛冶屋が使えねえと俺も困るんだよ」

感謝の言葉を言おうとした親方に、ガッツは照れたように告げた。爆炎袋がそろった以上、後は燃石炭のみ。なんだが。

「それで、なんでオッサンが馬になってんだ？」

「んふふふ。それはね〜、その爆炎袋が元々、私のだからなの」
「はっ？」

シェリルさんの謎の言葉に俺達は固まってしまった。

本来、ハンターの報酬とはギルドで定められた金額。それに倒したモンスターの素材である。

これらはチーム内の力量にもよるが、基本的には平等に分けられる。

そして、昨夜討伐した火竜は2匹。

剥ぎ取り方にもよるが、最低でも爆炎袋は2つ取れたはずだ。

片方が剥ぎ取りに失敗したとしても、その爆炎袋は2人に権利がある。

つまり、爆炎袋は2人のものであり。どちらか一方のモノというわけは無いのだが。

「最初からの取り決めでな。爆炎袋は俺はいらねえって言ってたんだよ」

なんでそんな事をいったんだ？ と聞こうとして。ガッツの腕を思い出した。

ガッツの腕は俺と同じ、義手だ。

電気を帯びた武器しか持つことが出来ない、電磁石の義手。

そして、爆炎袋は防具よりむしろ武器に使われることが多い。

火属性の武器。それは火に弱いモンスターを倒すために必要不可欠の武器。

だが、ガッツにはその武器を握ることができない。

火属性の武器に、電気は流れていないため必要な握力を得られないからだ。

ならば、爆炎袋などの素材は諦め。他の素材を多めにもらったほう

がガッツの為になる。

「つで、契約違反ってことで。ここまで馬になってもらった。ってわけ」

「ああ、つまんねえことにすんなよ。半分以上コイツの嫌がらせなんだから」

何か言わねばと思っていた俺達の機先を制するように、ガッツが軽く言ってきた。

「借りは後で利しつきで返してもらおうとして。これなら火山の素材ツアーで燃石炭を持ってくればOKだろ」

「だな。分かった、じゃあ俺は装備を整えて火山に「……………って、まてコラ」行…………く？」

素材ツアーだけなら、たいした防具は必要ない。

右手にサンダーバインを持ち。盾はいらないだろうと、装備を考えながら借屋へと歩き出そうとしたらガッツに肩を掴まれた。

「おまえは留守番に決まってるだろうが。病み上がりなんだから寝てろ」

「そうよ、義手ができるまでケ빈は寝てなさい。火山には私が行くから」

「何言ってるんだ、スズネだって足にヒビが入ってたんだろ」

「わ、私はいいのよ！ 秘薬飲んで元気一杯だもんね！」

それを言ったら、俺だって秘薬に活力剤を飲んだから大丈夫だ！
そうスズネに言い返そうとした瞬間。

「————えいっ」

間の抜けたかけ声と共に、俺の頭に柔らかな感触が当たり。

「……………な、に——すん、だ………よ」

「ちょっと、ケ빈！？ シェリルさん、何するんですか！！」

抗議の声を上げるまえに、猛烈な眠気に襲われ。
なにか俺の後ろに向かって叫んでいるスズネの声を、薄れゆく意識の狭間で聞きながら俺は意識を手放した。

——気がつけば、ソコは俺の部屋だった。

もう翳り始めている外の明るさからすると、アレから少なくとも5時間以上の時間がたったことがわかる。

「よいしょ——って、あれ？」

ベッドから起き上がろうとして手足の感覚が鈍いことに気がつく。というか、ジャラジャラという擬音がするだけで体が動きません。

「あ、起きた？」

「スズネ？　これはいつたい……………」

視線を上げれば心配そうなスズネと笑っているガッツ。それにシェリルさんの姿。

そして、シェリルさんの手にあるのはクマのヌイグルミのように見えるけど。

「シ、シェリルさん。その手にあるのって？」

「うん、ケビン君の想像通りのものだよ」

……………やはり、か。

クマのヌイグルミにしか見えない、ハンマー。その名も『おやすみベア』

一部では、ギルドの受付嬢が酔っ払ったハンターを鎮圧するために使われることもあるという一品。殴った相手を眠らせるという能力は、モンスターを倒すにもうってつけだが。人間を怪我させずに取り押さえるのにも効果的らしい。

また、外でのキャンプ生活が多いハンターの中には安全に安眠するために荷車に常備している者もいると言う。

「いやー、眠れない夜用に持ってきたんだけど。こんなコトで使うとは思わなかったわ」

寝不足は美容の大敵なのよね、と話し始める年増のシェリル。この人にももう『さん』はいらねえな。と感じる俺。

つか、モンスター用のハンマーなんか人間に使わないで欲しい。

「まったく、人間相手にモンスター用の武器を使うなんて。シェリルさんは何を考えているんですか……!!」

「……………」

自覚が“まったく”無いスズネのセリフに、何と返すべきか考えるガッツと俺。今朝何をやったのか忘れているのだろうか。

「ま、まあ。その辺はおいておくとして。……………なんで俺はベッドに縛られてるんだ？」

つか、早くこの鎖をほどいて欲しい。

毛布に隠れて見えなかったけど。これ、ベッドごと俺を縛ってるよね？

「だめよ」。ソレをほいたら、ケビン君クエスト受注しちゃうで

しょ？ 今は安静にしてくちや〜」

「いやでも。燃石炭が必要だし」

「いいから、アンタは寝てなさい。燃石炭なら私が取ってきたあげるか——ッ痛！」

俺の代わりに火山に行くと言い出したスズネの頭に、ガッツの拳がめり込んだ。

「嬢ちゃんも引ッ込んでろ。俺が行って来てやるから」

「あらあら〜。随分優しくなっちゃって。ガッツ君てば」

「うるせえな。現実問題それが一番早いだろ！」

照れたように叫ぶガッツに、からかうシェリル。この2人の関係は実に分かりやすい。

「で、でも。ガッツにそこまでさせるわけにはいかないし。この村の守りも……」

「安心しろ、どうせ火山に行く予定だったしな。それにお前らじゃ一ヶ月は村に帰って来れないだろ」

これはガッツの言うとおりだろう。

ポケット村から、荷馬車で行こうと船を使おうと大陸の真ん中にあるラティオ火山までには往復で20日以上かかる。

更に、採掘までさせるとなると一ヶ月は欲しいところだ。

「でも、それは皆一緒にでしょ？」

「いや、俺なら一週間で帰ってこれるぜ」

「——はっ？」

ガッツに殴られた頭をさすりながら、疑問を口にするスズネにガッツは信じられない事をいつてきた。

「上位ハンターだからな。……って、聞いてねえのか？」

むしろ、不思議そうに話すガッツにそういえばと。聞いた話を思い出していた。

上位ハンター。下位ハンターから昇格試験を合格したもののみ得られる称号。

だが、上位といわれるだけあり。ソコにいるモンスターの力は下位のモンスターとは比べ物にならない強さだといわれている。

故に、支給品は遅れることが多い。あまりのモンスターの強さにギルドが入ることを躊躇うからだ。

さらに。上位ハンターになると、ベースキャンプからクエストを始められないことが多いという。

地図もなく、突然知らない場所から始まるクエスト。

これが、下位から上位に上がった時にハンターが混乱を起こす一番の理由だとも言われている。

そして、上位ハンターが決まった場所から狩りを始められない理由。

それは——気球からダイブするからだ。と言われている。

そもそも、危険なモンスターはいち早く倒さなければならない。

だが、危険なモンスターがいる場所にハンターを送り込むことが自体が難しい。

早く、モンスターを倒すためにハンターを送りたいのに、そこまでハンターを送る手段が無い。

そこで、目をつけられたのが古竜観測所の気球である。

モンスターの生態を調べ、空から危険なモンスターの動向を調べる

役員達。

常に狩場にいる彼らの気球に乗らせてもらい、パラシュートでハンターは狩場へ降りる。

これなら移動時間は早いし、上位ハンター以上の人間に多くのクエストを受けさせることができる。

だが、上空からパラシュートなどで降りる以上。

ハンターが降りられる場所は、風任せ。故に狩場のドコに降りられるか分からないのだ。

そして、気球に移る為には。同じように空を飛ぶ気球に乗らなければならぬ。

空を飛ぶ気球。風に乗れば、荷馬車より遥かに早いと言う。

聞いたときは眉唾モノだと思っていたが、上位ハンターがいうのならそれが当たり前なのかもしれない。

「まあ、危険なモンスターをいち早く倒すための苦肉の策って奴だな」

「ってことは、上位ハンターになればパラシュートの訓練もしなきゃならないのか？」

笑いながら喋るガッツに、少し冷や汗を流しながら訊く。

「当たり前だろ。じゃなきゃどうやって狩りに行くんだよ」

「……………」

さも当然、とばかりに言うガッツに真実を知らされ少し落ち込んでいる俺たち下位ハンター。

いや、おかしいとは思ってたんだよ。

何で、狩り場でハンター同士バラバラになることが多いとか。どこから始まるか分からないとか。

いきなり、ボスモンスターが目の前にいた。とか。

上位になるとこういうことが多いから困る。とか。

街に行ったとき、変な愚痴をいつてるなー上位ハンターは。とは思ってたんだ。

まさか、そういうカラクリだったとは。

だが、それなら話は早い。

気球の乗り降りなら、一週間で火山を往復できるというガッツに燃石炭をお願いして。

そのあいだ、俺たちは親方の工房を元通りにするために働けばいいのだから。

「でも、村の護衛は……………」

「ソイツはシエリルに任せな。実力もさることながら、チーム戦においてはそいつはかなり役に立つぜ」

目を向ければ、よろしくね〜とばかりに手を振るシエリル。性格はとりあえずおいておくとしても、実力は確かだ。

「でも……………」

根っからマジメなスズネはまだ迷っているようだ。

ガッツにだけ働かせることに抵抗を感じているのもあるし、燃石炭を持つてくる位のことを上位ハンターにさせるといふ事にも遠慮している。

うんうんと唸っているスズネをみて、シェリルは困ったような笑顔を向けた。

「じゃあ、こうしましょ。ガッツが狩りを失敗して死ぬ可能性もあるから、保険としてスズネちゃんも燃石炭を取りに行くって事でどう？」

縁起でもねえこと言うんじゃない！ と叫ぶガッツを無視して妥協案をだすシェリル。

とりあえず、動いていれば気が紛れるという考えには俺も賛成なのだが。

狩場ではなにがあるか分からない。スズネとはいえ、1人では危ないかもしれない。

「あ、はい。それなら………」

「ちょっと、待てよ。それなら俺も行くって」

了承したスズネにかぶせるように俺が叫んだ。———というか、いい加減この鎖をなんとかしてください。

「ダメに決まつ「あらダメよ」」

スズネが行くなら俺も行くという叫びを2人の女性が止めた。
1人は言わずと知れたスズネ。つで、もう1人が。

「ちょ、ちょっと！ シェリルさん！！」
「うふふふ。いい抱き心地」

なぜか、俺の頭を抱え込んでいるシェリルさん。
つか俺の上に乗らないでください。防具の重みでリアルに重いんです。

「なにしてんですか！？ つか、どいてくださいよ」
「だめよ、ケビン君はまだ怪我人だからじつとしてなくちゃ」

—— いや、秘薬で殆ど傷は塞がっていますって！

そう叫びたいのだが、口になにやら柔らかいモノを押し付けられて喋れません。

「それに。鎖つけたままじゃ体を拭くのも、トイレ行くのも大変でしょう。お姉さんが全部やってあげるからね。」

——素直に、鎖を解けばいいじゃん!!

口が塞がってしようと、とりあえず突っ込もうとすると。

「——だ、駄目です!! ほら、シェリルさんはどいてください!!」

「あら? まだいたの。ほらはやくクエストに行つてらっしゃいよ」「怪我人の上に乗つかるような非常識な人を置いて、狩りになんていけません!!」

——ほらほら、早くどいて!!

と叫ぶ、スズネさん。とりあえずリアルな命の危機から逃れられた俺。

息を整え、命の恩人であるスズネにお礼を言おうとすると。

——ギロリ!!

もの凄い目でにられました。……いや、俺は何も悪くないよね？

「なによ。スズネちゃんには関係ないでしょう?」

「か、関係はあります。わ、私達は大切な狩り仲間なんですから!」

絶叫するスズネさん。

そして『やっぱり、狩り仲間以上にはなれないのね。俺』と少し凹んでいるオイラ。

「ふん?」

「な、なんですか?」

なにやら意味ありげに笑う、シェリルさん。
嫌な予感がするのか、少し後ずさるスズネ。

そして後ずさりたくても、身動きできないほど縛り上げられている俺。

——誰か助けて!!

「つまり。スズネちゃんにとって、ケビン君は大事な狩り仲間なんだね？」

「そ、そうです」

「ふん。それじゃあ……………」

……………ニヤリと笑いながら嫌な沈黙を作るシェリルさん。

身動きできないこの体が恨めしい、俺。マジで怖い。

「スズネちゃんが狩りに行ってる間は、私がケビン君のお世話をし
てあげようっ」

——ケビンくん——！！

とばかりにふざけたかけ声で突っ込んでくる、年増のお姉さんシエリル。

防具をつけたまま、高く飛び上がったその脚力は、さすが上位ハンターと褒めるべきか？

それとも、無駄に高いポテンシャルを狩り以外に使うなと突っ込むべきか？

だが、跳んだ距離が高いということは。

（シエリルの体重＋防具の重さ）×高さ＝衝撃力が致死レベルということで。

俺は『こりゃ、死んだか？』と悟りの境地を開いていると。

「だ、ダメ——ッ！！ ケビンの世話は私がするの——！！！」

俺の横でスズネが信じられない叫び声を上げた。
目を真ん丸にして驚く俺。

ニヤニヤ笑っている、セクハラガッツ。

……そして、天井に片手でぶら下がっている年増のおばさん。

シェリルはそのまま、天井の梁に片手で捕まっただまニヤリと笑うと。

何事も無かったかのように、綺麗に床に着地した。

「ん、じゃあスズネちゃん。後よろしく。燃石炭はガッツに願いますね〜」

「おう、じゃあな。邪魔したな2人とも」

ガッツはゲラゲラとシェリルはケラケラと笑いながら、俺の部屋を去っていった。

後に残されたのは真っ白になって燃え尽きた、スズネの姿。

やっぱりな。おかしいとは思ってたんだ。

どこぞのスケコマシじゃあるまいし、出会った瞬間に好きになるなんてコトが現実にあるわけが無い。

あったとしても、俺の身に起きることじゃない。

スズネに無理をさせないために一芝居うつたんだ。

まあついでに、俺のことをからかうためにガッツにでも余計な事を吹き込まれたんだろうな。などと思っていると。

俺の横でスズネがプルプルと震えだした。

真っ白だった筈のスズネが、怒りのタメか段々と顔が赤くなっている。

そこで俺は一つ。重大な事実気がついた。

ヤバイ、ヤバイと頭を鳴らす警鐘に焦りながらも鎖を解こうとする俺。

だが、時は既に遅く。

「——は、謀ったわね。………あんの、クソアマー!!!!!!!!!!」

ガッツとシェリルにからかわれたと分かった、スズネの絶叫。

フルフルに匹敵するとも言われるバインドボイスを、至近距離でくらった俺はそのまま意識をなくしたのだった。

< 続 >

感想は感想提示版にお願いします。

観想が多いと、作者が狂喜して少し執筆速度が上がるのですm)

——) m

登場人物

親方：気のいいオッサン2号。
愛用のハンマーを振りかざし、武器を鍛えてくれる。
スキンヘッドが光るイイ親父。

マイ：

親方の娘。未だ弟子だが東方伝来の技術者に教えてもらったおかげで太刀に関してのみ親方以上の腕。太刀に関してのみ師匠と弟子の関係が逆転するらしい。
隠れ巨乳。

シェリル：狩猟笛使い。寝る時専門でおやすみベア（ハンマー）を使う。

ケビンに恋愛感情はカケラも無いが、からかうと面白いとガッツに教えられ今回遊んだ人。

2人の休日（後書き）

上位以上のハンターがパラシュート使うというのは独自設定です。ドコから始まるか分からない、というゲーム内の矛盾を少しでも解消できたらいいなあと思います。

ちなみに悪天候の時でも、（ゲーム内でも雪が降ったり雨が降ったりします）パラシュートで降りたという実例があります。

第二次世界大戦、ドイツ軍の作戦でこのような作戦があります。その名も『シュテッサー作戦』

12月17日の午前零時直後、112機のJu 52輸送機が約1300名の降下兵を搭載し、多くの雲と強い風雪の中離陸した。その結果多くの機が予定コースを外れ、また降下地点に接近していた強風のため多くの兵士が降下予定地点から遠く離れた地点に着陸した。

まあ、簡単に言うと雪だろうが強風だろうが着陸地点さえ選ばなければ着陸できると言うことです。

ちなみに一般人は雨天や強風でのパラグライダーなどの滑空は禁止されています。ので上位のモンスターを倒せるレベルは並みの軍人レベルには体を鍛えているという前提で話を作っております。

そして、次回から一週間に一回更新は無理かもしれません。

できるだけ頑張りますが、どうかご容赦の程お願いいたしますm（

）m

“ 謎 ”

アレから、3カ月の時が過ぎた。

オイラが村長になった村。ポケット村を襲った金と銀の火竜。奴等に荒らされた村は落ち着きを取り戻し、ガッツやシェリルといった上級ハンターの活躍により、寸断されていた交易路も幾つか取り戻すことができた。

あの時の恐怖は今でも忘れない。

金と銀の火竜。噂に聞いた希少種。

その圧倒的な恐怖にオイラは全てを捨てて、早く逃げ出すようにスズネ君に言った。

だが、スズネ君はコトが終わった後まで考え。できるだけ多くの貴重品や食料を持って逃げ出すように指示したのだ。

本来、村の合議。もしくはオイラの意見を聞くのが村つきのハンタ

ーであるスズネ君の義務だ。

彼女はあくまで雇われたハンターであり、オイラ達に命令する権利はない。

だが、彼女は命令した。失敗すれば全て自分の責任になるであろう状態で。

本来。反対意見が多いはずなのに、それが許されたのは今までの彼女が成し遂げてきた功績と、人徳だろう。

なにより、今この状態がその判断が正しかったことを示している。村の大半は焼け焦げたとはいえ、貴重品と食料を持ち出した我々は苦しいが何とか暮らしていける状態まで落ち着いた。

スズネ君達が守ってくれた我々の財産。

……そして、その大事なハンターを目の前のこの男ともう1人が守ってくれたのだ。

「……………なんだよ？」

オイラの視線が気になったのか、訝しげにこちらを見るガッツになんでもないと手を振った。

目蓋を閉じれば今でも鮮明に思い出される。3カ月前のあの夜。

――月が綺麗な夜だった。

それは骨が軋むほど静謐な夜。雪が舞い散る微かな音が響く白銀の世界。

その音が断絶した世界の中でオイラ達は、幽かな月光を頼りに避難所へと足を向けていた。

後ろからは、火竜の叫び声と吐き出す炎の轟音。

目の前には音が断絶した世界。

月光を照り返えず白銀の静寂が、オイラ達が向かう先の世界だといふのなら。

オイラ達が過ぎ去った地は、血と炎に塗れた轟音の世界と断言していだらう。

その2つの狭間で、オイラ達はただ避難所に向かって歩き続けた。早く、早く。と焦る足は雪に阻まれ。

荷物を背負った大人しい草食獣ポポは、後ろからの轟音に怯え続けていた。

早く避難所に行かなければならない。その焦りから転びそうになるオイラ達。

こんなことをしている場合じゃない、と。再び歩き出した瞬間。

……………黒い影が見えた。

月明かりを背にした黒い巨影。

その背と頭からは深紅の角が生えている。

新手のモンスターか、と身構えると。

「——なんだ、こんな夜中に引越しかよ？」

間の抜けた声が聞こえたのだ。

狩りを終え、一晩の宿を借りるために俺達はこの先にあるポケット村へと急いでいた。

寂れた村だと聞いていたが、随分と灯りが見える。祭りでもやっているんだろうか？

そう考え、これは酒にありつけるかもとシェリルと足を急がせると。

……どう見ても逃げ出してきたような村人達に出会った。

ってことは、あの光も。それに音も。祭りの花火や太鼓の音ではなく。

モンスターに襲われている音ってコトになりやがる。

めんどくせえコトになっちまった。そんなコトを考えると、村長らしき竜人族の男が現れた。

特徴的なワシ鼻、そして大きな耳。紛れもなく竜人族の青年だ。

「あ、貴方はハンターですよね？」

多少だが、震えている声に眉を顰めた。

他に何に見えるのだと言いたいところで、自分の姿を思い出した。モノブロスSシリーズ。漆黒の鎧に特徴的な紅いトゲはモンスターの角に見えなくもない。

……まして今は深夜。

いくら月光が眩く光る雪原の夜だろうと、昼に比べれば光源は圧倒的に少ない。

モンスターと見間違えても仕方がないのかもしれない。

「ああ、で。おめえらはポケット村の住人で間違いないのか？」

「ああ、良かった。——は、早く。早くスズネ君たちを、いや、村のハンター達を助けてあげてください!!!」

焦りながら話し出す村長を宥めながら、俺は詳しい事情を聞こうとした。

ハンターにとって情報は命といっていい。

只でさえ人間より遥かに強いモンスターを相手にするのだ。

道具、罠、爆弾、知識。あるもの全てを使って倒すしかない。

まして、今の俺達は狩りが終わったばかり。

ろくな道具も残っていない。

それだけに、少しでも情報が欲しいのだ。

「金と銀の火竜だと？」

村長が焦れながらも教えてくれた情報。村を襲ってきたのは希少種と呼ばれる2匹の火竜だった。

通常種より遥かに強いといわれている、希少種。

だが、……俺にとってはむしろ戦いやすい相手だ。
むしろ丁度いいと言ってもいい。

雷属性に弱いモンスターの防具しかそろえられない俺としては、モノブロスシリーズより耐久性が高く、しかも雷属性に弱い希少種の装備は喉から手が出るほど欲しい。

回復薬を飲み、体調を整えてから行こうとすると。

「大変だ村長！ 道具屋と居酒屋の2人がいねえ！！」

「モンスターに襲われたのか？」

「違う、道具に猟筒が消えてる！！」

「じゃあ、ひよつとして！？」

村長のところに数人の村人がなだれ込んできた。

どうやら、村で戦っているハンターに加勢にいった馬鹿がいたらしい。

モンスターと戦うハンター。俺達はそれぞれ専門的な知識と鍛え方をしている。

故に、一般人。それも戦ったこともないような人間が加勢に来ても邪魔なだけだ。

そんなコトは分かってるだろうに。

助けにいった馬鹿な村人と、そんな馬鹿な村人を心配して慌てている村人達。

ソレを見ながら、俺はイイ村だな。と、感じていた。

本来、ハンターは村を守るのが仕事だ。

故に高い報酬を貰い、村からは優遇されている。

借屋を貰い、農場を占拠し、高い酒を飲む。

そんなハンター達だから、村や街の危機には戦って当然だと考えるヤツラも多い。

……だが、この村は違う。

ハンターを村の仲間だといい、無謀にも助けに行ったヤツラがいた。それを見ながら、ニヤケそうになる顔を引き締め。

早く助けに行ってくれと叫びだす村人達に、まず大事なコトを言った。

「ああ。その前に、報酬のコトなんだが……………」

相手の顔が凍りつくのが分かる。

そう、俺達ハンターにとってモンスターと戦うのは慈善事業ではない。れっきとした仕事なのだ。

しかも今回は金と銀の火竜。

上位でも希少種と呼ばれるヤツラの契約料、それに報酬はハンパな額じゃない。

特に今回は緊急依頼だ。

準備もなく、突然された依頼。道具が切れかけた状態で戦う俺達の危険度はハンパではない。

相場の2〜3割増しで済めば、むしろ御の字だろう。

だが。聞いたところではポケット村は、作られたばかりで下位ハンターしかいないらしい。

それでは物流は滞り、村の収入も少ないに違いない。

村にいるハンターの力量次第で、村の収入も得られる素材も上下してしまうものだ。

下位では決して重鎧玉が手に入らないように、上位の俺達では決して真鎧玉が手に入らないように。

上位ハンターがいるならば、簡単に払える金額でも。

下位ハンターしかいない村では上位ハンターに報奨金が払えるか。まして、今。避難しているだけの村人に。

だが、そんな中。村長は静かに喋りだした。

「お任せします」

「あん？」

「お金なんて幾らかかってもかまいません。村の全財産、足りなければ働いて必ず払います。ですから………村のハンター、いや。村の仲間を助けてください」

一瞬すら躊躇わずに、吐かれたセリフにしばし頭痛がした。

ぶっちゃけ、そんな口約束に期待するほうがおかしい。

俺達ハンターは慈善事業ではなく、仕事としてハンターをしているのだ。

相場を教え、いや。教える必要もない。

ただ、黙ってボツタクレばいい。

もしくは、道具がないのだ。ぶっちゃけ逃げてもかまわない。……

だと、わかっているのに。

俺は、めんどくさそうに頭をかきながら話し始めた。

「ま、……。今回は狩りが終わってからってコトでいいんだが。あんたさ、そういうことあんまり言わないほうがいいぜ」

「ですが……………」

「緊急つてのは分かってるがな、まず相場を調べ状況次第ではギルドに頼む。とかハツタリもきかせないと、とんでもない金額をぼったくられるぞ」

「あ、はい」

殊勝にも肯く村人達を見て。……………また、カモを逃しちまったかな。そう思っている。

「ねえねえ、ガッツ君。分かってる？ 今、君はカモがネギ背負ってきたのを逃がしたんだよ？」

「うつせえな！！ 分かってるよ！！！」

横でチョンチョンと肘を引っ張るシェリルに怒鳴りながら、俺は値段の書いてない契約書にサインした。これで、この契約書は……………1
z だろうと0z だろうと契約したことになる。

…………… ったく、これだから依頼人に同情するとロクなことにならね

え。

そう思いながら、俺は振り返ることなく走り出した。名前も知らない、姿もみえない、村人を助けるために。タダ同然の仕事を契約して、ただ……走り出したのだ。

オイラの目の前で、顔を顰めながら酒を呑むガッツに苦笑しながら杯をかたむけた。

今でも思いだせる、ガッツ。そしてシェリルとの出会い。

契約金を幾らでも取れる状況で、あえて取らずに走り出した2人。その2人が村に残ってくれると聞いたときの喜び。

そして報酬は。結局2人は受け取らなかった。

2人は現物支給で頼むといい、借屋を作することを強制した。その契約料が家の代金だと。

元々、殆ど焼けてしまった村。

ギルドから運ばれた木材で家を作るオイラ達にすれば。むしろガッツ達の言い分はありがたかった。

十戸も二十戸も、家をつくるのは同じなどと極論を言つつもりはないが。

それでも、当初より出ていった金が少ないのは。

村を再建しなければならぬオイラ達にはありがたかった。

「それで、今日の話なんだけど。その前にケビン君たちは？」

「あいつらなら、今頃。シェリルにしごかれてるぜ」

3ヶ月が過ぎ、ケビン君は小さなクエストをこなしながら順調に義手に慣れていった。

電磁石という、不思議な力を持った義手。

それに慣れてきたケビン君は徐々に元の実力を取り戻してきたみたいだ。

その修行を支えてきたのは目の前のガッツだ。

同じ隻腕のハンターとして活躍してきた彼は、お酒が入って気分がいいのかケラケラと笑っていた。

そんなガッツに苦笑しながら、オイラは頼まれていた仕事の話をした。

呻る鉄塊。

風を切り裂き、圧倒的な質量をもつ鉄塊が俺の頬をかすめ地面に突き刺さった。
間一髪で避けたはずの俺の頬に、鉄塊の衝撃波によって生み出された土砂が突き刺さる。

紙一重の見切り。

太刀、片手剣ではある意味、奥儀とも呼ばれる動きも圧倒的な質量の前では意味をなさない。

たかが土砂と侮るなかれ。
人間を優に超える力で生み出された土砂は、散弾となり最悪の凶器と化す。

その勢いに圧され吹き飛ばされる俺。

だが、人間を超える力を生み出した以上。敵にも僅かな隙ができる。
そして、ソレこそ『俺たち』にとっての好機。

一瞬の死角、動きをとめた瞬間を狙ってスズネのランスが突き刺さる。

ランスの突撃。ランスにとって、最大の攻撃は敵の弱点である『角』を叩き折り。

俺たちに勝利をもたらす筈。

隙を作り出す俺、そしてトドメをさすスズネ。

2人のコンビネーションが生み出す、会心の一撃は。

「——甘いッ!!」

前転をしながらかわす、シェリルには通じず。

その手に握られた、狩猟笛はスズネの顔面へと迫っていった。

ランスの突撃。

当れば凄まじい威力と化すランスの突撃は、しかし当らなければ敵に最悪の隙をみせることになる。

動きが直線であるが故の、弱点。単純な動きゆえ、読まれればそれは致命的だ。

呻る鉄塊と化した狩猟笛。それはスズネの寸前でとまり。

「勝負アリだね♪」

にこやかに笑うシェリルに、俺たちは敗北を知ったのだった。

「ぐわゝ。また負けた！！！」

ポケット村訓練所。そこではもう恒例となった俺の叫び声が響きわたった。

俺の手には限界まで切れ味を落とし。更に布を巻いて練習用の模擬剣と化した斬破刀の姿。

そして俺の隣では、模擬戦用の木製のランスを構えたスズネが悔しそうに立っている。

模擬戦。

本来、捕獲したモンスターと戦い実戦力を高めあう設備である訓練所は未だモンスターの数が集まらず開店休業状態である。

だが、そんな大きな設備を使わないのはもったいないと始めたのが
シェリルとの模擬戦だ。

俺とスズネ対シェリル。

2対1というハンデ戦ではあるが、未だ勝ち星がない。

まあそもそも、対モンスター戦にこんな訓練が必要なのか？ と問
われれば首を傾げるだろう。

だが、アレから何度も俺たちはシェリルとの戦闘訓練をくりかえし
ている。

その理由の一つが。

「まだまだだね。そんなんじゃ、麒麟には勝てないぞ」

麒麟S装備を身につけたシェリルだ。

麒麟S装備。シェリルが街に預け最近になりこの村に運ばれた装
備だ。

その装備は古竜麒麟を何頭も倒さなければ手に入らない。

つまり、シェリルは古竜麒麟を何頭も倒していると言うことだ。

そして、俺が今メインで使っている太刀。斬破刀を鬼斬破に強化す
るために必要な素材。

そう、麒麟の雷尾を手に入れているということでもある。

シェリルから、麒麟の雷尾を譲って欲しいところだが。

レアすぎる素材はハンター同士であろうと取引してはいけないという取り決めがある。

これを破るとギルドナイトから処罰されてしまう。

そもそも、自分で手に入れなければハンターの資格がないとも思う。

それでも、以前麒麟を倒した事があるシェリルなら。麒麟について的情報を得られると思ったのだ。そして、麒麟の情報と共にこの模擬戦をすることを強要された。

「でも、唯一の間である演奏を狙っちゃいけないってのは難しいと思うんですけど」

「ソコを攻撃しちゃ訓練の意味が無いでしょ」

不満げなスズネの言葉にシェリルが笑いながら答える。

そう、2対1のこの訓練。ルールが幾つかある。

1つ、シェリルの演奏中は攻撃してはならない。

2つ、狙うのはシェリルの頭部の『角』のみである。

ということだ。

「考えてみると、凄いハンデ戦なのよね」

「分かってないな」スズネちゃんは。これがキリン攻略の力ギなんだよ」

分かつてはいるが、納得できない。というのがスズネの本音なのだろう。

だが、これはシェリルの説明どおりなら実に実践的な訓練なのだ。

キリン。

古竜の一種であると言われるモンスター。

4本足で歩き、その姿は馬。もしくは昔話のユニコーンに酷似しているという。

だが、実際の能力はそんな可愛いモノではない。

まず移動速度が速い。

自分を強化すれば抜刀した状態で、最速とも言われている狩猟笛。

その速度すら上回るスピードはかなりの脅威だ。

次に、その硬度。

体が圧倒的に堅いキリンは俺やガッツの大剣では弾かれた場合、俺達が気絶することもあるという。人間より遥かに強いモンスターと戦うのに、この気絶するというのは致命的な隙だ。

斬撃系の攻撃は、頭か首。もしくは急所である角を狙わないと殆ど効果はない。

さらに、落雷と突進をするキリンの破壊力は侮れず。一撃で死ぬこ

ともよくあるらしい。

体が小さい故に、古竜の中では耐久力が低いと言われている麒麟だが。

その能力は決して侮れない。

さらに、俺の場合。麒麟に対して効果が薄い斬破刀で戦う事になる。

俺が使う太刀、斬破刀。

電磁石をつかう義手で戦う俺にとって、これ以外の装備は今のところ無い。

雷を纏うその太刀は、同じく電撃を使う麒麟に対して効果は薄く、更に会うことが少ないと言われる麒麟を倒すのは難しい。

故に、俺が勝つためには正確に麒麟の弱点『角』を攻撃しなくてはならない。

だが、麒麟は古竜の中では最小とも言われ。その中でも更に小さい『角』を狙うことは難しい。

……………そこで生きてくるのが、この訓練である。

麒麟Sシリーズ。

女性用の麒麟装備には、頭に麒麟の角がつけられている、

高さなどは個体差があれど、その『角』を狙うという難しさは変わらない。

その小さな弱点を、狩猟笛の『演奏』で自分を強化したシェリルと戦う。

くどいようだが、演奏し自分を強化したシェリルの抜刀時のスピードは恐らくハンターの中でも1、2を争うほどであろう。そのスピード。麒麟には負けるとはいえそのスピードに目を慣らし。

更に小さな標的である『角』を破壊することができれば。麒麟にも対抗できる可能性がある。

しかも、シェリルは麒麟を何頭も狩ってきた猛者だ。

麒麟の生態に詳しい彼女なら、その動きに似せることは可能であろう。

だと、は。思うのだが。

「なあ、その格好。なんとかならないのか？」
「んゝ。なにがあ？」

俺の疑問に不思議そうに返事をするシェリル。
自分の姿に少しも疑問を持っていないようだ。

「いやさ。頭だけ麒麟Sホーンで、後は何時もの装備でいいじゃねえか？」

「なんで。めんどくさいじゃん」

めんどくさい。その一言で俺の意見は却下されました。

だが、知っている人は知ってるだろうが。キリンシリーズ。

特に女性用のキリンシリーズはもう下着姿にしか見えないのだ。

インナーの上に申し訳程度に張られたキリンの上皮と蒼角を編みこんだ布切れ。

一つ一つは厳選された素材であり、防御力も高いのだが。

いかんせん露出がありすぎる。こう見えても俺も健全な男性。目のやり場に困るというのだ。

「あれ。スズネちゃんって人がありながら、ケビン君は他の女の人に目移りしちゃうのかな？」

「するか、ボケ！ そんな装備じゃ間違えて俺の太刀が当たったらどうすんだよって話だろ」

滅多なコトを言わないで欲しい。

例のセリフから「ひよっとしてスズネも俺のことを」なんて期待をしつつ3カ月。

未だに先に進んでいないのだ。

いや、正直。あのセリフ「だ、ダメ——ッ！！ ケビンの世話は私がするの！……！！」

は、俺のコトを少しは思ってくれているのだと信じたい気持ちもある。あるのだがかし。

ぶっちゃけ、あのままシェリルの攻撃を喰らっていたら死にかななかったというのも事実。

俺に少しでも好意をもってくれているのか。それとも身を案じてくれただけなのか。

その辺がどうにも整理がついていないのだ。

「ふん？」

にやにやと笑いながらコツチをみる、シェリル。

ワザとらしく、体を捻って扇情的なポーズをとるのが、またムカツク……！

何で胸を強調してやる！

同時にスズネの軽蔑の眼差しが、グサグサと俺の背後から突き刺さる。

マ、マズイ。なにがマズイのかは分からないがこのままでは非正常にマズイ事態になりかねない。

「は、俺を舐めてもらっちゃ困るな。俺が見たいのはスズネのみ！年増でしかもブヨブヨの体など見たくないのだよ！！！！！」

「失礼ね。私はいつもピチピチだもん！！！」

「はっ！ 年を考えたまえよ。 年を！！！」

冗談交じりに、口喧嘩に持ち込んでみると。思ったとおり容易く乗ってくれるシェリル。

やはり、年齢という話題には敏感なようだ。

よし、このままウヤマヤにしてやろうと思っていると。

なんだか、ビキビキと青筋を額に浮かべ始めた。

「——な、なにを！！！！！！！」

「ちょ、ちよっとまで。そんな本気で笛を振り回すな！！！」

シェリルの逆鱗に触れたのか。シェリルは狩猟笛を覆っていた衝撃防止用の布を剥ぎ取り。

一気に俺の頭に直撃させようとしている！！

その勢いに驚きながら、ダッシュで逃げようとした瞬間。

——フワリ、となにかが揺れた。

キリンSシリーズ。

その腰布であるキリンSフープも機能性を重視しているためか限界まで削られている。

もう、下にはいているインナーのパンツまで殆ど見えているのではないかといいところまでだ。

そして。狩猟笛の攻撃は基本的に下から上に突き上げる攻撃が多い。つまり。下から上に狩猟笛が風を起こすということ。

「——おっとお!!」

その瞬間、シェリルは素早く自身の腰布を押さえた。

散々、模擬戦で戦ってるくせに何を今更。と思いつつも少し残念がるケビン。

一方そんなケビンの心の動きを知ってか、少し不機嫌なスズネ。

この3人が揃うとやっぱりカオスである。

「危ない、危ない。ケビン君に夜のオカズを提供しちゃうところだ
ったわ〜」

「あのお、何度も言わせんなよ。年増のパンツなんかには興味ねえ
つつうの。好きな女ならともかくおばさんのゴムが緩んだ毛糸のパ
ンツなんかには興味ねえよ。それにそういうのが許されんのは若い
おねえ様までだろうが!!!」

内心の動揺をスズネに悟られないように、余裕ぶって話す俺。ちな
みに心臓はバクバクである。

いや、不覚にもトキメキしました。だって無茶苦茶に色っぽかったん
だもん。

だが、ソレがここでスズネに知られるのはかなりのマイナス点。
せつかく、かなりの高得点をたたき出したスズネの好感度。

——下げるわけにはいかないのだよ!!

一方、俺のセリフに少ない自尊心とそれ以上に少ない堪忍袋の尾
が切れたのか。

プルプルと震えだすシェリルさん。無茶苦茶大人気ない。

だがソレも当然だろう。

この3カ月でわかったコトが幾つかある。

一つ、シェリルはヒトをからかうのが好きであるが、からかわれるのは大嫌いである。

二つ、シェリルは結構、年を気にしている。

三つ、これが重要なのだが、実は結構負けず嫌いなのだ。特にまだ若く美人というより可愛らしいというスズネに、微妙に対抗心を燃やしているらしい。

つまり、この三つが合わさった時。

シェリルは。俺の天敵となるのだ。

三つの地雷を踏んでしまった俺に。

シェリルは花のような笑顔を向けながらキリン装備の腰布をつまみ。何の前触れもなく上に上げた。

そう、……………上に上げたのだ!!!

「ほーら、ほら。ケビン君、ヒラヒラ〜ン」

いきなりサービスショットを見せようとするシェリルに、俺の薄っぺらな平常心が叩き割られる。

「ぶっほおおお！？ み、みみつ——。見えねえ！ なんだ、フaintとかよ。直前まで腰布を持って直前で手を離して、手だけ上に上げるなんてつまらねえことをしやがっ……………！！！！！」

そこで、しまったと俺は気がついた。

目の前には、してやったりと笑顔のシェリル。そして後ろからは軽蔑のスズネの眼差し。

「ふん。興味が無い、ねえ」

「ぐ、くそう。ひっかけやがったな。だが、今のは不意打ちに驚いたのであって、べ、別に変な期待とかはしてない……………」

「もう一回、ひらひら」

「ぬおおお！！！！く、タチの悪いフaintだと分かっているのに。なんだって引っかかちまうんだ俺は！！！！！」

目の前で腰布スカートを上げそうで上げないというフaint(?)をくりかえすシェリルにいいように翻弄される、オイラ。ケビン。

男としての本能に負けそうなオイラに突き刺さる、後方からの軽蔑の視線。

——マズイ、このままでは!!

「い、いや。違うんだ、スズネ聞いてくれ!! これは!!」

命と男としての尊厳。2つの危機に対応するため。

更には、スズネの好感度を下げないために力をいれ。説明しようとした俺の顔面は真っ赤で!!

そして、真っ赤ということは。血液が顔面に集まるということであり。

……結果。ドロリという感触共に鼻からナニかが流れてきた。

思わず、顔を押さえ。その何かが鼻水じゃないコトに愕然としてみるオイラ。

一方、俺の好感度が底辺まで下がったのか。スズネは冷たい瞳で俺を見た後。

「――最っ低!!!!!!」

と叫んで、訓練所から走り出した。

その後姿に、追いかけてようとする俺の前にシェリルの言葉が突き刺さった。

「あつ。スズネちゃん、午後の訓練は一時間後だから時間を守ってね」

「了解！間違つてケビンを刺すかもしれないけどその時はよろしくです!!」

「分かった」。致死量寸前で助けてあげるから、毒の使用もOKだよ」

止めるどころか、死刑宣告を促すシェリルに乗るスズネ。

実は今。俺は壮大なイジメかドッキリにあってるんじゃないだろうか？

そんな馬鹿な事を考えているうちに、スズネはドンドン遠ざかっていく。

仕方がないので追いかけたいのだが。その前にシェリルに文句を一言。

「ぐ、チクショウ。シェリル、お前は俺を応援してくれていると信じていたのに！」

「フ、ケビン。恨むなら自分の暴言を恨みたまえ。君はいいハンターだったが、その暴言がいけないのだよ！！！！！」

「くっ！ シェリル、謀ったなシェリル——！！！」

結構余裕がある自分に驚きながら、俺はスズネを追いかけて走り出した。…………… 勿論、鼻から溢れる赤いナニかをおさえながら。

「——なにやってんだ？ アイツラは」

訓練の状況を見ようと、村長と共に訓練所に来て見れば走り去っていくスズネの嬢ちゃん。

後ろから追いかけてようとしていたケビンに、丁度いいからとその首根っこを捕まえた。

「ぐっほオオオ！ てめえ、ガッツ何しやがるー！」
「何しやがるじゃねえよ、話があるからお前も来い」
「ま、まて。俺は今スズネに話が……」
「どうせまた振られるんだろ？」

「はぐなぐせ」と叫ぶケビンを引きずりながら、訓練所に入っていく俺達。

まあ、コイツもこれからの事を知っておいて損はない。

「ガッツ君？ どうしたの」
「どうしたの、じゃねえよ。おまえ、コイツラに何したんだ？」

頬つぺたに指を当てながら、うん。と首をひねるシェリル。
とぼけているが、間違いなくコイツが何かしたのだろう。

「まあ、いいや。村長に調べてもらった話なんだけだよ。どうやら間違いなさそうだぜ」

俺の言葉に、シェリルが目を細める。

「じゃあ、やっぱり」

「ああ、あの金と銀の火竜と戦っていたハンターはかなり上位のハンターだったようだ」

横で村長が肯いた。

この村に襲撃してきた金と銀の火竜。その口にはハンターの『腕』があつたという。

ケビンからその情報を聞いた俺は、シエリルに火竜の細かい『解体』を依頼した。

素材を得るという目的もあつたが、何より。

……火竜に殺されたハンターの情報が欲しかったのだ。

上位ハンター、それも希少種と戦うハンターともなればかなりのレベルである。

それが、あっけなく敗れただけでなく。モンスターが村に襲撃するまで興奮状態になったというのが少し気になったのだ。

そして、火竜が啜えていたハンターの腕。それにつけられた装備は。

——シルバーソルシリーズだった。

シルバーソルシリーズ。
希少種である銀火竜の素材をふんだんに使った、攻撃力、防御力に優れた武装だ。

そして何より。その装備が意味することそれは……銀火竜を何頭も『狩っている』ということになる。

いわば狩りなれた相手。その狩りなれた相手に、不覚をとったのがどうにも納得ができません。

村長に、金と銀の火竜を狩りにいったハンターを調べてもらったのだ。

結果は、ある意味。予想通りのものだった。

「希少種を専門に狩っているハンターで、4人全員がシルバーソルまたは、ゴールドルナ装備をしたらG級に挑戦する予定だったそうだよ」

「おかしいわね」
「だな」

村長の言葉に、俺とシェリルは違和感を感じた。当たり前だ。シルバーソルシリーズにゴールドルナシリーズ。

名前だけは知っていたケビンも不思議そうな顔をしている。

金と銀の火竜を狩ることに特化した、ハンターチーム。

装備を全員で統一することを狙っていた。ということから、何人かは違う装備だったのかもしれないが希少種を狩るということに適した装備をしていた筈だ。

しかもG級寸前までいていたハンター。

……それが、負けた。

何かおかしいと思ってしまう。

確かに、火竜は番になると更に凶悪な敵となる。……だから、負

けたとでもいうのだろうか？

おかしい。それはあまりにも『ありえない』

1匹より2匹のほうが強いという単純な理由もあるかもしれない。

だがハンターの中には番の火竜を倒すことに情熱を傾けているチームは多い。

なぜなら、2匹になったことで自然界における最強に近くなった存在は『火竜の逆鱗』もしくは『火竜の紅玉』などの希少な素材を体内に作りやすくなるからだ。

2匹ゆえに強くなった火竜は通常種より長く生きることができ、更に希少な素材を体内に有しやすい。

1人2人ではなく、4人全員に希少種の装備をさせようとしたチームなら。

むしろ『希少種の番』だからこそ、狙ったと考えたほうが妥当だ。

ならば『希少種の番』も……………狩りなれているはず。

これから、考えられること。
推理できることは、恐らく。

「多分、アイツがいるな」

「ええ、だとすれば狙い通りよ」

「——コイツとスズネは間に合いそうか？」

俺達、だけでは難しい。

そう思って聞いたのだが、シェリルの顔は微妙なところだ。

「うーん、頑張ってはいるけど。正直ギリギリってところかしら」
「ギリギリ……………、か」

その言葉に、少し考える。

だが、時間がない。狙うには少々厳しいが、村の危機となれば少し

は融通がきくはず。

狙うは、金と銀の火竜。そしてソレ専門のハンターすら倒す敵。

その名は――。

< 続 >

感想は感想提示版をお願いします m () m

< そのころの舞台裏 >

これからのコトを話し合っているシェリル殿、ガッツ殿、村長殿。
そしてケビン殿。

穏やかな日差しの中、緊迫感溢れる話し合いをしているんニヤが。

……外からは談笑しているようにしか見えニヤい。

そんな穏やかな昼下がり、訓練所の入り口にはドンヨリとした影が
蠢いているニヤ。

紹介が遅れたニヤ、アチキはスズネ様のオトモアイルー、コテツに
や。

先ほど泣きながら訓練所から出てきたご主人様に声をかけ、訓練所
に戻りケビン殿とよく話し合うように説得した、ご主人思いのナイ
スガイにや。

でも、戻ってみれば。中ではケビン殿とシェリル殿が談笑中。

いや、アチキの人間以上の聴覚を持ってすれば中の話なんて全部聞
こえるのニヤけど。

面白いから、適当に嘘八百並べてご主人様に伝えてみたのニヤ。

「…………ケビンの馬鹿」

実際は緊張感溢れる話しかしていないのだが、ウソを教えたのでご主人様は知らないニヤ。

ちなみにご主人様がその手に持つのは豪槍グラビモス、溢れる毒はモンスターだろうが人間だろうが一撃ニヤ♪

可愛いコト言っても、その憤怒の表情では恐怖感しか生まれニヤい♪

「外部のハンターであるシェリルさんとケビンが仲がいいことは嬉しい筈なのに……………」

「ニヤのニ？」

ゴクリとツバを飲み込むアチキ、スズネ様のオトモアイルーコテツ君。

可愛く言ってるが、ウソをついた事を今更言えずちよっと、かなり、大分、後悔中ニヤ。

つか、見慣れてるはずのご主人様が無茶苦茶コワイニヤ！！

「……………なんでだろう、許せないな♪」

楽しいな声なのに、とっても殺意が溢れるご主人様。今日も嫉妬全開ニヤ。

そして、傍にるのは哀れな生贄のアチキ。

ご主人なんか無視すりゃ良かったと、只今、絶賛後悔中。

「ご、ご主人様？ 漏れてるニヤ、毒がボタボタとオイラの頭に漏れてるニヤー!?」

「——フッフ、どうしようかな……………」

デンジャー！ デンジャー！ まったく聞こえておりません。

つか、さっさと訓練所に入って仲間に入れてもらえばいいんじゃないニヤ？

…………、ってそれだニヤー!!

「ご、ご主人。早く中に入って、ケビン殿を取り返すニヤ。それがいいニヤー!!」

「なんだか気分がいいなー、壊したくて、コワしたくて、コワシタクテ……………」

聞いてニヤイ。あちきの言葉を一ミリグラムたりとも聞いてないニヤー!

長年好きだった（ご主人は決して認めてニヤイけど）ケビンに告白されて数ヶ月。

具体的に何もしていない、ご主人のフラストレーションは何時もの三倍にパワーアップしてるニヤ！

そして、アチキのウソ聞いた瞬間に逃げ出したキッチンアイルーの皆。

後でまとめて大タル爆弾で吹き飛ばしてやるニヤ！　と少し現実逃避ぎみのあちき。

……………というか、逃げるならアチキも連れて行って欲しかったニヤアアア！！

「でも、——ケビン1人じゃ寂しいよね？」

「ニヤ……………」

なんでそこで、あちきを見るんだニヤ？

ニツコリ笑ったご主人の笑顔が無茶苦茶コワくてたまらないニヤ！

「ほら、地獄にもオトモアイルーって必要だし」

「い、いや。オ、オイラはご主人一筋だニヤ。浮気なんてしないニヤ」

「ヤー!!」

全力で逃げる気満タンのオイラ、オトモアイルーコテツ。
もう、ケビン殿を見捨てるコトは確定事項ニヤ!

「そう、ありがとうコテツ。貴方の忠誠心は生涯忘れませんよ」

そして、ヤッパリ聞いてニヤい。というか聞く気すらないご主人様。

「だ、だからニヤ……………あちきは」

「それに……………もう、爆弾で吹っ飛ばされるのは——」

爆弾!? 爆弾ってなんのことニヤ?

確かにあちきは爆弾一筋で、狩りには爆弾しか使わなければならないけれどそれがどうだって言うニヤ。

ご主人は幸せそうに笑っているのに、あちきの冷や汗が止まらニヤい。

いつのまにか、怒りゲージの矛先があちきに向いてますのニヤ。

狙ってたのは、ケビン殿かシェリル殿じゃなかったのかニヤ?

………って、ランスが！　いつのまにか豪槍グラビモスが刺さってるニヤ！？

「フッフ、安心しなさい。後でケビンもそっちに送ってあげるから」

全然安心できないニヤ！　というか、趣旨が違いすぎるのニヤ。なんでケビン殿を攻撃するはずが、あちきが攻撃されることになってるのニヤ？

パニックになってるあちきにランスの毒がドクドク流れ込む。逃げようとしたあちきの頭をがっしり掴む、ご主人様のアイアンクロウ。

ケタケタ笑うご主人様。

スズネちゃん、笑う笑う。

豪槍グラビモスが、刺さりながら揺れる揺れる。

あちき、ビビルビビル。歯がカチカチ鳴って止まらないのニヤ。

タースケーター！

そんな声さえ、もうでないのニヤ。

せめて死ぬ前に、マタタビのフルコース。マタタビのベッドに包ま
つてみたかったのニヤ。

この間、ご主人のマタタビを少し拝借したのがバレタばかり。
こんなことなら、バレテもいいからもっと盗んでおけばよかったの
ニヤ。

……………なんか、意識が朦朧としてきたのニヤ。

グルグル回る走馬灯のように今までのコトが思い出されるのニヤ。

——ああ、刻が見える。

「……………テツ、——コテツ！」

「——、はっ。ご……………ご主人様!？」

「大丈夫? 凄いうなされてたよ?」

ご主人、スズネ様の言葉に首筋に冷たい汗が流れているニヤに気がついたニヤ。

全身が汗でベタベタしてて気持ち悪いニヤ。

なんか、もの凄い悪夢を見たような気がするんニヤけど。

キリキリと痛む頭を振って、夢の内容思い出そうとしても思い出せないニヤい。

真夜中の暗闇の中、ウンウンなるあちき。オトモアイルー、コテツ。

なんか、思い出したいような。思い出さないほうがいいようニヤ。

ニヤんだろっ、この気持ち？

「すまないニヤ。ニヤんか凄い悪夢を見たんニヤけど」

「へえ、どんな夢？」

ソレがまったく覚えてないのニヤ。とご主人に告げて。もう一度寝ようとした時。

「——覚えていないほうが幸せってコトがあるんだよね。」

そんな不思議なご主人の独り言が聞こえ……。

「——って、キャ——！！ 夢じゃなニヤい……！！？」

登場人物

コテツ：オトモアイル！。爆弾一筋。今回の犠牲者。

閑話（前書き）

PV13、294アクセス。そしてユニークアクセスはなんと1、470人突破しました（驚）

コレというのも皆さんのおかげですm（――）m

さてさて、今回は。少々のギャグとバトルのお話。

サブタイトルのとおり、少し閑話的なお話です。

少しでも楽しんでいただけたら幸いなのですm（――）m

閑話

——アイルー、というモンスターがいる。

ネコに似た獣人族で狩場で出会々とそれなりに手強い敵だ。

アイルーは爆弾を投げ。メラルーはよくモノを盗む。

なにより、その愛らしい姿はどうにも攻撃しにくいので狩ることを躊躇うハンターも多い。

そんな厄介な獣人族だが、アイルー族の中には積極的に人間社会に溶け込もうとしている者もいる。

商人として人間に物を売る者。キッチンアイルーとして料理を作る者。農場や鉱山で働くもの。

変わったものにはハンター用の雑誌などで、記事を書いたり取材を受けるものもいる。

最近では、単独で戦うハンターの為に一緒に狩りに出るものまで現れた。

狩りのサポートをしてくれる頼もしい存在、オトモアイルー。

なぜ、急にこんな話をしたかというと。

ギルドから、あるクエストを受注した自分の借屋への帰り道にえらく山積みの荷物を抱えたネコ。

いや、違う。最近までスズネと共に狩りに出ていたオトモアイルー。コテツがいたからであった。

思わず、彼の姿。オトモアイルーであるコテツを凝視してしまったとしても俺に非はないと思う。

オトモアイルー。狩りに特化したアイルーである彼は基本的には家事をしない。

何しろ、人間と共に巨大なモンスターと戦うのだ。

体格や筋力が戦いの全て。などというつもりはないが、それでも重要な一要素には違いない。

その点では立ち上がっても人間の半分ぐらいしかないアイルーの筋力は、非常に弱い。

技術や道具で懸命に威力を上げようと、所詮は獣人族。人間にはかなわないのである。

それでも、その差。人間や他のモンスターとの力の差を埋めるために、オトモアイルーはトレーニングを欠かさないという。

なかでも、コイツ。

スズネのオトモアイルーコテツのトレーニング好きはポケット村の住人なら皆知っていることだ。

こいつ。コテツは攻撃力がないため。……爆弾を使うことを選んだ。

そのため防御力の底上げ訓練と、少しでも早く動くためのランニングを欠かしたことはないという。

そのコテツが荷物。それも食料品を大量に買い込み、ヨタヨタと歩いているのだ。

どう少なく見積もってもコテツの倍以上の食料。キッチンアイルーに転職したのか。

はたまた、トレーニングなのか。
まあ、気にしても仕方がないので、声をかけてみることにした。

……無論。アイルーだからといって差別するような俺じゃない。
できるだけフレンドリーに話しかけるつもりで片手を上げながら。

「———よお、コテツ。元気か？」

軽くはあるが親愛のこもった挨拶をした。

なにしろコイツはスズネのオトモアイルー。マイナスイメージを
与えるわけにはいかない！

つか、むしろ外堀を埋めておきたい。

そう考えての俺の親愛を込めた挨拶を受けたコテツは。

———ギロリ！ とばかりに睨みながら、口を開いた。

「なんだ、誰かと思ったら……ビンビン殿かニヤ」

「ああ———って、まてい！ 字面こそ似てるが、人をいかにも
発情期みたいに言ってるじゃねえよ。ケビンだ、ケビン！」

「失礼、いつもアチキのご主人に色目を使っているので間違えたニ
ヤ」

「色目！？ 色目ってなんだよ。俺は純粹にスズネをだな」

「夜のオカズにしてるニヤ？」

「———しねえよ！———」

人聞きの悪いこと言ってるじゃねえよ！

天下の往来だぞ！

「ふむ、主の下着を数着でいいから盗んで来いとアチキに命令した人の言葉とは思えないニヤ」

「言ってないっ！　つか、どんだけ人の悪評を流してんだお前は！」

「悪評などと人聞きの悪い。ケビン殿のスズネ様への肉欲をありのままにお伝えしているだけニヤ」

「いや、肉欲より他にもあんだろうが。……恋とか、愛とか！」

「はあ！？」

何を言っただ、コイツ？
見下げ果てた、とても言いたげなコテツ。ちなみに背が低いので結果的には見上げているのだが。

見上げているのに、見下げているようにみえるとは。もの凄い高等技術かもしれない。

「男と女に肉欲以外になにがあるのニヤ。恋だの愛だのは所詮……建前ニヤ」

「アイルー族って恋愛感情を肉欲だと思ってるの！？」

そんなオトモアイルーは嫌だぞ、俺。

種族の違いなのか？　それともコテツだけがそんな考えなのか！？
というか以前、訓練所前で倒れてからやけに調子がおかしいんだよな。コテツ。

煤けているというか、不機嫌というか。やけにドス黒いオーラを出している。

「まあ、他にもあるといえばあるニヤ」
「そりゃそうだろ」

むしろ、なくては困る。

肉欲だけの世界なんて寒気しかない。雪山だけに。

「肉欲より、むしろ金のほうが重要ニヤ。金さえあれば、肉欲も食欲も全部まかなえるニヤ！」

「本当にどうしたんだ、コテツ！俺でよかつたら相談にのるぞ！？」

あまりにも刹那的というか、さもしい考えのコテツに思わず身を乗り出してしまう。

つか、スズネがそんな考えだとしたら。もの凄く寂しい。

………… スズネはコテツに悪い影響与えられてないよな？

むしろ、スズネがコテツにそんな事を言ってたらどうしよう？と戦々恐々としていると。コテツはまたしても毒舌を吐き出していた。

「しかし考えて欲しいニヤ。『この世は愛でできている』と言っている“ホスト”より、いつそ『この世の全ては金じゃー！』と言い切っている“お金持ち”のほうがどつちかといえばカッコイイと思わないかニヤ？」

「どつちかと言えばの話なんかすんなよ！」

どつちもいやだよ！

つか、本当。訓練所でなんかあったんじゃないか、おまえ？こんな考えのヤツじゃなかったと思うんだが。

「それで？ ケビン殿はどうしてこんな朝早くにこんな場所にいる

んだニヤ」

「あ、ああ。本当に何事もなかったかのように話を戻すのな、お前」
普通に話してるのに煤けてるお前の目が怖ええよ。

本当、なにがあっただろう。後でスズネに聞いてみよう。

「ギルドからな、上位に上がる試験を受けないか？　って連絡があったんだと」

「上位？　ソレは凄いニヤ。ということはスズネ様と一緒にニヤ？」

上位ハンター。

ある一定量の飛竜、もしくは牙獣種を狩ること得られるライセンスだ。

種類にもよるが、ある一定のモンスターを倒した後。何らかの試験を経て上位ハンターとして名を連ねることができるらしい。

問題は試験なのだが。ギルドはモンスターと人間の共存。

もしくは自然との調和を求めているため、特定のモンスターを狩り過ぎないように気をつけている。

このため上位ハンター試験に使われるクエスト、モンスターは毎年変わるのが通例だ。

だが。

「それにしても、随分早いニヤ。スズネ様はもうすぐでも取れそうニヤけど……」

「意味アリげな視線をコツチに向けるんじゃないやねえよ！！」

分かってんだよ、俺がギリギリだってことぐらい！！

実際。俺が狩った飛竜の数はスズネの数と比べるとかなり目劣りする。

武器の違いということもあるが、単独での狩りが多かったというのも理由の一つだ。

まあ、早くスズネに認めてもらいたかった。という理由もあり。スズネから狩りに誘われても殆ど断っていたからな。今から考えれば勿体ないことをしてしまった。

一応、上位試験を受けられる規定数には達してはいるが本当にギリギリだ。

本来。もつと装備を整えてから受けるべきなのだろうが……。

「今回のコト、ギルドは相当重く受け止めているらしいぜ」
「……………ニヤるほど」

その一言で、コテツは全てを悟った。

もう、3ヶ月以上前のあの事件。金と銀の火竜。

本来、ギルド。更には古竜観測所はこの事件を前もってこの村に伝えなければならなかった。

村や街。もしくはそれぞれの集落をモンスターの脅威から守るのがハンターの仕事ならば、それを効率的に運用するのはギルドや古竜観測所の仕事だ。

身の丈にあわない狩りをするハンター、もしくは村や街の危機になるようなモンスターが現れたら住民を避難させるために最大限の努力をするのが彼らの仕事。

ソレができなかった、ギルドは今回のコトを重要に受け止め。

ポケット村に救援物資と情報を送ってきたのだ。

その状況の中で、ガッツのオッサンが俺達2人の上位ハンター受験をこり押ししたらしい。

曰く、もつと早く上位になっていればここまで村が荒らされることはなかったと。

上位の装備があれば、充分に戦えた。

実際、スズネはすぐにでも上位ハンターになれる能力の持ち主と言われ。

俺もギリギリではあるが、規定数のモンスターを狩っている。

だが、いくら俺達が上位ハンターになりたいと言っても。

すぐに手ごころな相手が街を脅かす。なんて都合のいいコトはなかったのだ。

上位のモンスターは下位に比べ、遥かに強い。

それだけに、中途半端な実力のものを上位ハンターにするわけにはいかない。

だが、いきなり強すぎるモンスターと戦わせて有能なハンターを無くすのはあまりにも惜しい。

上位と下位。その中間のモンスター。

コレを探すのに手間取り、結果。俺達の上位挑戦は段々と先延ばしになっていった。

だが、今回。ギルド側のミスで上位のモンスター。

ソレも希少種が村に攻めてきたことで、いい加減に俺達を上位に上げろという話になったらしい。

まあ、実際は“スズネを早く上位に上げる！”であり、俺はオマケでしかない。

………今回に限り、スズネと俺はかなり緊張している。

相手は狩りなれた相手であるし、難しくもない。

………問題は試験内容なのだ。

「まあ、帰ったら分かんと思うが。スズネが落ち込んでるぞ」

「そうなのかニヤ？ そんなに難しい狩りなのかニヤ？」

「いや、相手はババコンガなんだが……」

「ババコンガ？ 余裕じゃニヤいか。アチキはまたリオレウスとリオレイアの番でも倒して来いとも言われると思ったニヤ」

「……………恐ろしいこと考えてんじゃねえよ」

先日、この村に現れた金と銀の希少種と呼ばれる火竜。

その通常体がリオレウスとリオレイアだ。

空の王者と陸の女王。希少種までとは行かなくとも十分脅威だ。

まあ、下位なら何度か狩った事があるし。スズネと2人でならそう難しくないと思う。

だが、今回の敵はババコンガ。

最も下品な獣と呼ばれるモンスターで、糞や屁を攻撃の手段とし、その攻撃を喰らったハンターはあまりの臭いに食料や回復薬が使用不能になるという。

能力的には正直、リオレウスなどのほうが遥かに上なのだが。この下品な攻撃からハンターからは毛嫌いされているモンスターだ。当然、クソだらけにはされたくないのでスズネも毛嫌いしている。

「まあ、事実上いつでも上位にいけるハンターであるスズネ様の為に簡単な試験を用意したということなのかニヤ」

「話は最後まで聞くんだな」

「ニヤ？」

不思議そうな顔をするコテツに俺の顔が不自然ににやける。

いや、俺も最初に聞いたときは正気を疑ったんだよな。本気で。

「今回の上位昇格試験はババコンガ、『8匹』の狩猟が条件だと」
「ニヤニヤ!? そ、それは何ヶ月以内に8匹ということかニヤ」
いい顔で驚くコテツ。分かるんだよね、その気持ち。

前にも言っただとおり、モンスターと人間では体力差があまりにも大きい。

故に、一匹の巨大モンスターに対して数人で戦うのが基本だ。

……にもかかわらず。

「いや、沼地にババコンガが大発生したから全部狩ってこいとさ」
「……また、露骨な嫌がらせニヤ」

いい感じで、怒り心頭のコテツ。まあ、怒るわな。

基本、モンスターは一回の狩りで一匹が原則だ。

それを一回の狩りで八匹というのが既におかしいのだし。

しかも、相手は殆どの狩人が嫌うババコンガ。臭いし下品だし、た
いした武器が作れる訳じゃない。

「ふふふ、アチキのご主人様にそんな辱めを受けさせようなんて、
ギルドに大タル爆弾を……」

「——絶対、やめとけよ!」

「ニヤんだ、まだいたんですかニヤ。……カビン殿」

「人を花を飾る花器みたいに例えるんじゃないよ! ケビンだ、ケ
ビン……!」

「失礼、花瓶なのは頭の中身ニヤ」

「——酷いこと言いやがった!」

中身がない、とでも言いたいのか。この野郎!!
つか、アイルーのクセにやけに言葉が巧みな奴だな。

それが悪口のみ、というのが非常に残念な奴ではあるが。

「……………それで、ケビン殿。アチキの正当な復讐を止めるのはどうしてニャ？」

「お前のセリフに正当性なんざ最初からカケラもねえが、今回に關しちゃ2匹以上狩ればクエストをクリアにしてくれるんだと」

「ニャニャ、じゃあ……………」

「ただし、2匹ギリギリだと上位への昇格は無しってことだ」
「……………ニャムウ」

……………それって、唸ってるのか？

思わず突っ込みたくなったが、少し我慢してみる。

ババコンガ、2匹。下位でならそのぐらいの数をこなすハンターは少なくない。

夫婦のババコンガの狩猟なら俺も経験したくらいだ。だが、今回は少々事情が異なる。

8匹。金の問題でなら2匹狩れば依頼料は帰ってくる。

クソ塗れになりたくなければ、2匹狩ってとっと戻ってくればいい。

だが、上位ハンターになるためには8匹の狩猟が条件。

しかも、棄権の権利も与えられている。条件としては悪くない。

そして、ギルド側からの課題も分かりやすい。

刈りなれた相手とはいえ、その相手を確実にかつ素早く狩る。狩猟時間約12時間で8匹。

これをクリアするためには相手の生態、クセ、弱点を確実に攻める必要がある。

それを計るのが今回の試験であろう。

まあ、実際。ババコンガ狩るのが嫌ってハンターが多いから、丁度いいから狩らせてしまえってのが正直なところなんだろうが。

「それじゃ、……………シビン殿はこれから準備していくニヤ？」

「人を入院患者専用の便器扱いするんじゃないやねえよ！ 俺の名前はケビンだ！！」

「失礼。ケビン殿『如き』と入院患者にとって必要不可欠な『道具』と一緒にするなんて尿瓶に失礼だったニヤ」

「俺のほうが下なのかよ！！」

むしろ、その事実のほうが俺にとってはガツカリだよ！
お前の中での俺のランキングを聞きなさいわ！！

「じゃ、これから準備をして行くのかニヤ？」

「……………」。今までのやりとりを平然と無視するお前にむしろ恐怖するんだが。まあ、とりあえず荷物を持って沼地までスズネと行ってくるよ」

「ニヤニヤ、了解したニヤ。しかし珍しいニヤ」

「なにがだよ」

「本来、モンスターは縄張りを決めて動くというのが習性ニヤ。一つの地域に1匹。もしくは2匹というのが通例ニヤ。そうじゃニヤいと、縄張り内での食料が無くなってしまうニヤ。にもかかわらず8匹の大型モンスターがいるニヤんて。天変地異の前触れかニヤ？」

——相変わらず、鋭いところを突く。

最近では共に狩りにでていないとはいえ、オトモアイルーだったコテツには事の異常性が見えているようだ。いや、狩りの常識ゆえに

見えているというべきか。

そもそもコテツの言うとおり、一つの狩場に大型モンスターが一匹というのは基本である。

これは、大型モンスターの縄張りということもあるが。なによりその食事量にも原因がある。

大型モンスターは『大型』であるが故に、大量の食料を必要としている。

そして、彼らの縄張りに生きている生物。動物も植物も基本的には決まった数しかない。

つまり、大型モンスターが大量に縄張り内の食物を食い荒らすと当然。その数は減っていく。

そして、食料の数が少なくなれば当然。縄張りのボスであった大型モンスターも死ぬ。

もしくは、縄張りを離れて新たな縄張りを探しに。もしくは勝ち取るために新天地へと旅立つのだ。

少し話がそれだが、要するに一つの縄張り内では基本的に一体の大型モンスターしか生活できない。

生活できたとして、2体。それも同一の種族の夫婦か。もしくはまったく食生活が違ったため争う必要がないかである（一方は肉食、もう一方は草食のように）

にもかかわらず、8匹の大型モンスターが一つの縄張りにいる。その意味。

「さあな、とりあえず俺は行くよ」

「ニヤニヤ。では気をつけてニヤ」

荷物を持ったまま、フラフラと歩み去っていくコテツを見ながら。

先日の火事で壊れた道具を買い足そうと道具屋に入ろうとした瞬間。コテツから、声がかかった。

「――ケビンどの」

「ん？」

「スズネ様を……。よろしく願いしますニヤ」

「……………」

まったく、不意打ちもいいところだ。

名前を噛みもせず、正確な発音で。しかも真摯に言われたセリフは主人を思つてのことだった。

「分かつてるよ、少なくともアイツだけは助けてやる」

「それは良かったのニヤ」

コテツは今日初めて。本当に初めて優しそうに笑つと。ヨタヨタと去つていった。

その後姿を見ながら、俺は改めて先日。

ガッツが“金と銀の火竜”について言つていたコトを思い出した。金と銀の火竜。ヤツラはハンターを倒し、この村を襲撃した。だが、ここでおかしいことに気がつく。

そもそもハンターを倒すことに成功したのなら『ヤツラはココを襲撃する必要がない』

大型モンスターは水を飲み睡眠をとれば体力は殆ど回復する。

故に、もし村を襲い。食料を奪い取りたいのだとすれば。

『回復してから』でも遅くはない。

にもかかわらず、ヤツラは傷ついたまま俺達を襲つた。

そして、ヤツラ。金と銀の火竜を狩猟にいったのは、上位のハンター。！。

しかも、金と銀の火竜を狩りなれているという。

その、上位ハンターが不覚を取った理由。

それは……他から移ってきたモンスターが原因ではないか？

というのが、ガッツ達の意見だ。

だが、ココでひとつ。問題がある。

上位のハンター。更には希少種である金と銀の火竜を倒せるほどのモンスターが存在するか？

ということである。

そして、その可能性としてあげたのが。

——麒麟だ。

幻獣麒麟。古竜の中でもっとも変わっているといってもいい種族。麒麟の攻撃は基本的に突進と電撃のみである。だが、電撃。

これに弱いのは、希少種である金と銀の火竜。

……そして『上位ハンター達』

希少種を狩ろうとしていた、ハンターは『希少種の防具』をそろえていた。

希少種を倒すぐらいなのだから、相当の腕前であると思って間違いない。

だが、彼らの防具は電撃に弱い希少種の防具を使っているので『電撃』に弱い。

希少種と上位ハンターの弱点『電撃』

雷属性武器を使っているであろうハンターにとって。

雷属性が効かず、電撃を降らせるキリンは天敵と言ってもいい。

そして、火竜の武器である火のプレスも。毒も。キリンにはあまり効果がない。

体が堅いキリンにとって属性攻撃はあまり意味がなく、毒の効きも悪いという。

そして上空に舞い上がった、リオレウスをキリンは落雷によって攻撃できる。

自分自身に落雷を落とせるキリンが、リオレウスの真下にいる状態で雷を自分に落とせば。

リオレウスにとって充分、脅威的な攻撃となる。

通常体のリオレウスではなく、雷属性に弱い希少種ならなおさらだ。そして、何より。ハンターは逃げられなかったが、金の火竜と銀の火竜は逃げられた！

という点から、キリンの可能性は高い。

正直、金と銀の火竜を倒し。上位ハンターを倒すモンスターが他にもいる可能性はある。

あるのだが、それらは少なくとも。金と銀の火竜を『追える』はずなのだ。

空の王者と呼ばれるリオレウスならともかく。

陸の女王と呼ばれるリオレイアの飛行能力は決して高くない。

彼らを撃退し、上位ハンターを倒せる能力をもち。更に飛行能力が低いモンスター。

そして、上空のモンスターを撃退できる能力。

これらの可能性でもっとも高いのがキリンだ。

古竜種の中で珍しく、翼をもっていないキリン。

空を飛べない以上、空を飛ぶ飛竜を追うことは不可能に近い。

そして。今回のババコンガにも関係しているのかもしれない。
ババコンガ、食欲旺盛で戦闘中でも肉を食べるという食欲の野獣。
彼らが一つの縄張りに、8匹もいるという現実。
これは……。圧倒的な実力を持つモンスターから逃げてきた。
もしくは縄張り争いで負けたのではないか。という可能性もある。
だとすれば。

「――面倒くせえことになってきたな」

そう、愚痴をこぼしながら。

俺は壊れた道具や機材を買い足しに、道具屋へと入っていった。

――ヌメール沼地。

通称、沼地。

ポケット村からやや南。陸地沿いに竜車で約3日の場所にその狩場
はあった。

薄暗い湿気のためか良質のキノコが豊富に手に入り。

また天然の洞窟もあり、良質の鉱石が手に入る。

中々に恵まれた狩場とっていいのだが、モンスターと戦うには難
しい場所の一つだ。

昼間は何故か殆ど雨が降り、ぬめった地面は足を滑らせやすくする。
また、雨は視界を遮り動きが取りづらい。

そして、夜。もしくは雨がやめば。所々に毒沼が現れる。

毒沼が現れる理由は、雨が降っていたときは中和されていた毒が溢

れるからだといわれている。

そして、その毒は皮膚からハンターの体に入り込み、ジワジワと体力を削っていく。

毒を恐れるのなら、昼間に戦うのが基本なのだが。

今回、俺達は夜に戦えるように時間を調整してきた。

「こんなに必要かなあ？」

「まあ、使わなければラッキーなんだけどな」

沼地の手前で草食モンスター。

ポポが引く竜車から荷物を降ろしながら俺達はのんびりと話していた。

目の前にある荷物の中。これの殆どは大タルと爆薬。それにカクサ
ンデメキンである。

これで大タル爆弾Gが作れるのだ。

本来、既に作ってある大タル爆弾と大タル爆弾Gを竜車に乗せれば、更に多くの爆弾を持ち込む事ができるのだが。狩猟場に着く前に爆発する可能性を考慮し、作るのをやめた。

大タル爆弾G。対大型モンスターに対する道具の中でも、強力な武器の一つだが。

取り扱いが非常に難しいため使うハンターは非常に少数だ。

少しの刺激で爆発する爆弾は、とてもではないが旅には不向きで狩場まで持ち込めない。

狩場でも、不運にも取り扱いを間違え爆発事故に巻き込まれる者が多いという。

俺達も、この難しい爆弾を使うことは滅多にない。

滅多にないのだが……。

今回はババコンガ8匹というトンデモ依頼。しかも俺とスズネの2人つきりだ。

僅かな時間で8匹の狩猟。1匹に時間をあまりかけられない。そう考えた俺達は爆弾を使うことを考えたのだ。だが、爆弾は雨で湿ってしまうと使えない。

故に雨が降らないであろう夜の狩場に來たのである。

そして。こんな試験になったもう一つの隠された理由。ソレを考えると、どうしても気分が暗くなってしまう。

「――ケビン、ひよつとして気にしてる？」

「あん。なにがだよ？」

「なんでもない」とクスクス笑いながらスズネは自分の荷物を確認しにいった。

その後姿を見ながら、もう一度。俺の左手を見た。

……義手。

電気を帯びた武器しかつかめない、贗物の腕。

かつて、俺と同じように義手のままハンターになったガッツは今では上位ハンターとなっている。

だが。ソレはあくまでも『ガッツ』だからできた。と思っている人間は多い。

ギルドや古竜観測所も同意見だろう。

では『俺』が同じようにできるのか。同じように義手のままハンターとしてやっていけるのか。

その答えが今回の『試験』だ。

おそらく、今回の試験。

規定数である8匹のババコンガを倒さなくても2匹以上倒した時点で、スズネの合格は決定だろう。

ランスという、安定性の高い武器。今までの実績。共に申し分ない。

だが、俺は。五体満足の状態ですらスズネには遠く及ばず、今ではソレ以下の義手の状態だ。

ならば。片手でもできるという状態を見せつけなくてはならない。

それが、ババコンガ8匹の狩猟。

その試験を受けるために。俺はここ、沼地に來たのだ。

荷物を狩場専用の荷車にくくりつけ、俺達はベースキャンプから出発した。

とりあえず、持っているのは大タル爆弾Gに予備の大タルに爆薬である。

余分な荷物をベースキャンプに残して、俺は周囲の警戒をスズネに任せて荷車を引っ張り出した。

ベースキャンプ。モンスターは入れないように工夫された場所はハンターにとって憩いの場であると共に、大事な荷物を置いておく場所でもある。

ココがモンスターに襲撃されると、ハンターの仕事自体ができなくなってしまうのでギルドもベースキャンプの安全には常に目を光らせている。

そのベースキャンプを後にして。
俺達はとりあえず、ババコンガが多数目撃されるというエリア8へと向かう。

エリア8。通称エリア指標とも呼ばれるモノだ。

広大な狩場において、自分の場所を知ることがハンターにとって必須の技術である。

だが、広い狩場。更には広大な自然は時に簡単に人の方向感覚を狂わせる。

このため、一つの狩場を幾つかの数字で区分し。

更に文字盤を置くことにより、自分達の場所をハンターが分かるようにギルドが工夫したモノだ。

今回の沼地は単純に分けて9区分に分割されている。

その中でもっとも北側に位置するのがエリア8だ。

「——ととッ！」

「ちよつと、気をつけてよね。私はこんな場所でケビンと爆死とか嫌よ」

「安心しろ、俺も嫌だ」

沼地特有の滑る泥に足を取られそうになる俺を見て、周囲を警戒していたスズネが声をかけた。

大タル爆弾Gを荷車に積んでいる俺がコケて、爆発でもすればスズネも一緒に木っ端微塵だ。

その事実になんかビビリながら荷車を引いていく。

俺の周囲を警戒するスズネ。ガード性能が高いランスは守りに特化した武具といって間違いない。

その点、俺の武器である太刀は防御性能がない。

故に、こういった危険物などを持ち込む場合。荷車を引くのは俺の仕事だ。

力仕事だから俺が引く、というのもあるがガード性能がない俺の武器では、荷車に何かあった場合に守れない可能性があるからだ。

「……。一匹もないね」

「だな」

エリア8に向かう途中。エリア6になっても一匹のコンガも現れなかった。

ババコンガが大量発生している分、下っ端であるコンガの食料が減ったのかもしれない。

少しの疑問を感じながらも、俺達はエリア6からエリア8へと向かった。

その途中、キノコの群生地帯を見つけ。

幾つか貴重なキノコが生えているのが見えるが、あえて無視する。

今回はババコンガ8匹の狩猟。時間との勝負だ。

焦ってはまずいが、余計なモノをもって帰る余裕はない。

「——行くわよ」

「ああ」

——ゴクリ。

お互いの喉になる。狩りの最初の瞬間。

このときだけは、緊張する。エリア6を越えた先。この道の先がエリア8。

ソコに恐らく、ババコンガがいる。

本当なら、一匹でもいいから雑魚であるコンガを狩り。

今日の調子確かめたい所ではあるがそんな余裕はない。

故に、この瞬間。

俺の鼓動が加速する。

——ドクン。

おちつけ、相手はたかがババコンガ。

俺にとってもスズネにとっても狩りなれた相手。

——ドクン。

油断は禁物だが、気負うような相手ではない。

俺とスズネなら確実にやれるはず。

——ドクン。

スズネの防具はグラビモスシリーズに豪槍グラビモス。

俺の防具はブランゴシリーズに斬破刀。

これだけの装備、ババコンガ如きに負ける筈がない！

狭い道を通り抜ければ、そこは一面の草原だった。

黄金色に月光を照り返す、一面の草原。

そのあまりの眩さに、暗さに慣れた目が一瞬惑わされた。

急ぎ、瞬きをくりかえし。目のピントをあわせる。

……いた。

目の前には、コチラに気がついていないババコンガ。

場所はエリア8の中央よりやや、向こう側。

奇襲をかけるには遠く、ペイントボールすら当てられない。

近くにいるのは、コンガ2匹。

奴の側近とでもいうように、周囲を警戒している。

「これ以上、気がつかれずに荷車を近づけるのは不可能ね」

「だな。んじゃ、爆弾はこのまま荷車に置いておくぜ」

「んっ、みつからないようにね」

2人で、簡単にしめし合わせると。

俺は今いるエリア8とエリア6に繋がる狭い通路近辺に荷車を置く。

スズネはその間に、慎重にババコンガへと距離を詰める。

……いい感じだ。

スズネからハンドシグナルが送られてきた『基本どおり、まずは雑魚から』

異論はない。スズネがエリア8の南側から。俺はエリア8の北側から近づいていく。

俺達の気配に気がついたのか、コンガがこちらを見た瞬間。

俺は一直線にコンガに近づいていった！

両手を挙げて威嚇するコンガ、野生において威嚇。というのは非常に重要な要素となる。

だが、今現在。それは俺にとって単なる『隙』以外、何者でもない。

——唐竹！

コンガの頭上から腰まで一気に剣を斬りつける。

人間ならば、確実に殺せる一撃。遅れて流れる電流。

俺の武器「斬破刀」帯電飛竜フルフルから得られた電気袋は、剣先から電流を流しコンガの肉を焼き尽くす。だが、それでは……足りない。

一瞬怯んだコンガに2回目の唐竹、更には突き、切り上げを喰らわせると。

最後に、小さな悲鳴をあげて倒れた。

相変わらず、でたらめな耐久力だ。

人間なら、大型の太刀で頭を割られれば一瞬で死に至るというのに、鎧すらつけず、天然の筋肉のみで太刀の攻撃に3回以上耐えた。

だが、これで。コンガはあと一匹。

コチラに気がついたババコンガとコンガが俺に向かって、突進してくる。

四本足の突進。

単純な攻撃だが、人間と比べて圧倒的な質量であるが故に威力は絶大なものとなる。

だが、所詮は直線的な動き。

落ち着きながら、横を見ればスズネがランスを構えている。

……まずは予想通り。

俺はコンガとババコンガの突進をかわすと、ババコンガに“背”を向け。

もう一匹のコンガに、太刀を突き刺した。

一瞬、呆然とした後。ババコンガはニヤリと笑い。拳を振り上げる。

当然だ、目の前には隙だらけの獲物である俺。狙わないほうがおかしい。

当然俺は隙だらけ、……………故に、まずは作戦通りとなる。

「……………ハアアアア!」

気合一閃。俺の後方から。そして、ババコンガの後方からスズネが突撃を仕掛ける。

——そう。俺とスズネは北と南から挟み撃ちにしたのだ。

北側で俺が目立てば、当然俺に攻撃が集中する。

そして、目の前で隙を見せれば。ババコンガは……………俺に対して攻撃するのだ。

もつとも下品な獣ババコンガ。

奴の攻撃はフンを投げる、屁を攻撃の一種とする。など、奇妙な攻撃も多いが。

なにより厄介なのは、その読めない動きだ。

あるときは腕を振り回し、あるときはジャンプしながら飛び掛り。あるときは、炎や毒のブレスを吐く。

離れても、近づいても何をやるか分からない相手。
故に答えは簡単。

——行動を限定させればいい。

目の前で、隙だらけの獲物を見つければやることは一つ。

そしてその瞬間こそを、スズネが突く。

予想どおり、隙だらけになった俺に腕を振り上げたババコンガはスズネのランスに貫かれていく。

俺はスズネの突撃に巻き込まれないように、コンガに一撃を喰らわせながら斬り下がる。

ババコンガに一撃をいれたスズネが、その勢いのままにコンガを突き刺していった。

連続して貫かれたコンガは、断末魔の叫び声を上げながら倒れていく。

……これで、後は。目の前のババコンガのみ。

いきなり後ろから刺されたことで、怒りが増したのか。

ババコンガは四足になると、大きく息を吸い込んだ。

息を吸い込む。この行動で起こす攻撃といえど！

ババコンガが息を吸い込んでいく、瞬間。俺はババコンガの側面へと回り込んだ。

この位置なら、間違いはないはず。

そして、奴の尻尾を見ると……何もなかった。そう、何もなかった。

ということとは、やることは一つ。

ヤツは一瞬前を見ると。首を横に振りながらブレスを吐き出した！ブレス。それはババコンガが持つ攻撃の中で最長の距離と攻撃範囲を持つ。

首を振ることで広範囲に攻撃を行なうそれは、火竜のブレスなどとは違い多数の種類を持つ。

キノコ類を尻尾に持ち、そのキノコを非常食とするババコンガだが、そのキノコは単なる、食事ではない。

ニトロダケを食したときは火炎ブレス。毒テングダケを食した時は毒のブレス。

マヒダケを食した時は、麻痺させられるなど。

そのキノコの特性に従ったブレスをばくババコンガは、ブレスの種類だけなら最多を誇る。

そして、今現在。尻尾にキノコはなかった。

ならば、ヤツはすでにブレスの“燃料”としてのキノコを食べている筈！

そう考えた俺の勘は正しく。

ヤツは予想通りブレスを吐き出した。

だが、その攻撃も……横に避ければ当たらない。

体の構造上、ババコンガは体の側面にはブレスを当てることができないからだ。

故にこの瞬間。

練気を溜めるべく、俺は太刀を振るう。

「——ハアアアア——！！！」

唐竹、突き、切り上げ。そして更に唐竹。

ブレスを吐き続ける間、俺の攻撃にさらされたババコンガは段々と顔が紅潮していった。

俗に言う“怒り状態”だ。

顔を紅潮させたまま、俺の方向を向くと両手を振り上げ………屁をコキながら威嚇した。

下品な行動だが、ヤツが怒り状態になった証しだ。

己の体に溜めこまれたダメージに対し、危険と感じたヤツは脳のリミッターを解除したのだ。

この状況。怒り状態になったモンスターの殆どは、スピードと攻撃力が上がる。

ババコンガも例外ではなく。攻撃力、スピード、共に通常時とは比較にならないほどだ。

太刀を構えたままでは対応できない。そう感じた俺は、自由に動けるように唯一の武器である太刀をしまった。ガード性能が高いランスを持ったスズネは前方に盾を構え、ジリジリとババコンガとの距離を詰めてゆく。

俺とスズネ。どちらを攻撃しようか迷っているババコンガの前で、俺はそつと眠り生肉をおいた。

“眠り生肉” 俗に言う、罌肉だ。

怒り状態のままだったババコンガは、肉の匂いに釣られたのかヒクヒクと鼻を動かし始める。

ババコンガ。最も下品な獣、そして動きが分かりにくいといわれているモンスターだが。

特に特異な特徴として、戦闘中でも平気で食事をするということが上げられる。

特に今現在、体にダメージを負い。食料であるキノコも食べてしまったのなら！

俺は、ババコンガを見ながらジリジリと下がっていった。

スズネは今も、ランスの盾を構えている。

いきなり食料を下においた俺に、不自然なモノを感じたのか。

ババコンガは俺に背を向け、スズネに向かって四足で突進した。

大型モンスターの突進。それは、人間程度では決して堪えられない破壊力を生む。

防具をつけようと、怒り状態のモンスターの突進は人間に瀕死の怪我を負わせることができるのだ。

だが、それもスズネには効かない。

スズネのランス、豪槍グラビモスの素材から作られた盾はその圧倒的な硬度によりババコンガの突進を受け流す。大地にしっかりと踏み込まれた両足と大地に打ちつけられた盾は、その重さを利用しババコンガの攻撃を簡単に受け流した。

そのまま、突進するババコンガに後ろから攻撃を仕掛けようとするスズネだが。

素早く振り返るババコンガに、攻撃を断念する。

怒り状態のババコンガの突進は隙が『少ない』獲物を跳ね飛ばそうと、避けられようと。

何度でも繰り返すその突進に、大怪我を負わされたハンターは多い。故に、俺達はこの状態のババコンガには『攻撃しない』

スズネに気を取られている隙に、俺はエリア6とエリア8の狭間においた荷車をとりに行く。
走り出し、そして荷車を引こうとすれば。ババコンガが何回目かの突進をしている時だった。

防御だけでなく、段々と動きに慣れてきたスズネはチクチクとババコンガを攻撃し毒状態へとしていく。豪槍グラビモス。攻撃力、防御力ともに下位のランスの中ではかなりの威力を誇るが。

その特殊効果として、ランスに仕込まれた“毒液”がある。
毒に耐性がある大型モンスターであろうと、何度も毒を体に撃ちこまれ。……遂には死に至るのだ。

毒状態、この状態になり段々と体力がなくなってきたのか。

ヤツは、もう一回スズネに突進した後。ヒクヒクと鼻を動かし、眠り生肉に向かって走り出した。

それを確認した後。俺は荷車を引き、急いでババコンガの頭に向かって走り出した。

スズネも武器であるランスをしまい、ババコンガの頭へと走っていく。

“異肉”生肉に上薬をかけて調合するその肉は、鼻のいいモンスターですら生肉と判別がつかない。

つまり、眠り生肉を喰らったババコンガは。

「……………ZZZZZZ!!」

鼻から提灯を出しながら眠ることになった。そこに、俺達は爆弾を仕掛ける。

俗に言う、睡眠爆殺とよばれる戦法だ。

眠った状態のモンスターに与える初撃は、通常状態より3倍もの威力を発揮するといわれている。

だが、俺達の武器は太刀にランスと一撃より手数重視したものだ。一発一発の威力は低い。ならば、その一撃は爆弾で倒す！
というのが、今回の作戦である。

本来、爆弾は危険が多いため使いたくないのだが。相手は8匹。できるだけ、時間を短縮したいのだ。

荷車をババコングの頭の近くに置くと、スズネが大タル爆弾Gをババコングの頭付近においた。

本来ならそんな危険な役目は俺がしたいところだが、俺の左手は“義手”だ。

荷車などの単純なものや、棒状の突起物があれば強引に持ち運ぶことも可能だが。

少しの衝撃でも簡単に壊れる爆弾を運ぶには、不向きだといえる。俺が掴めるのはあくまでも“電気を帯びた武器”コレに限られる。

故に、爆弾をスズネが設置し。俺はその辺で拾った小石を構える。本来なら小タル爆弾などで起爆するのが、大タル爆弾Gなどの正しい使い方だが。

万一、小タル爆弾の爆発で目を覚まされては意味が無い。

ならば、起爆は小石のほうが安上がりだし良かろうと考えてのことである。

『OKだよ！』

スズネはハンドシグナルを俺に送り。同時に2つ目の尻肉を置き、

ランスを構えた。
ソレを視界の端におさめ。俺は、小石を投げた。

——コッソ。

という、小さな音をたてた後。
地を揺るがすような轟音が鳴り響いた。爆炎の向こうにはババコンガの姿。

その大きな頭にそそり立つトサカが壊れていた。
ボスの証であるトサカ。そのトサカが壊れようと、未だババコンガは健在である。

大タル爆弾Gの攻撃、ソレですらまだ倒れないババコンガに少しの違和感を感じながらも。
スズネは、爆弾の一撃をうけて怯んでいるババコンガに向かって突進をかけた。

ランスの突進。

ランス最大の攻撃を喰らった、ババコンガはふらつきながらもスズネを追おうと振り返る。

野生の勘。攻撃をした後のハンターは殆どにおいて隙だらけになる。

それを今までの生存競争で学んでいたのか。
だが、ソレを黙ってみているほど俺は馬鹿じゃない。
スズネに向かって振り返り、俺に背を向けたババコンガに。

——俺は後ろから斬りかかった！

唐竹を二連撃、そして突き。切り上げと繋げると。
先ほどから溜まっていた練気が溜まっていくを感じる。
気刃斬りを使いたいところだが、座り込んだババコンガをみて緊急回避をする。

ババコンガが座り込む。もしくは尻尾を使うのは……………“例”の攻撃の前兆である。
故に俺はダッシュで距離を取り。スズネはしっかりと安全圏に避難していた。

次の瞬間。

——バツフウウウ！！！！！！

予想通りの放屁をしたババコンガ。
そのあまりの臭いに少し顔を顰めた。
スズネも嫌そうな顔をしているが、所詮この程度。
集中すれば、臭いなど気にならなくなる。

マトモに喰らうのは遠慮したいが、この距離で臭ってくる分には充分許容範囲だ。

放屁をしたのち、俺達を見ながら。ババコンガはもう一度鼻をヒク

ヒクとさせてきた。

『もう』だろうか『まだ』だろうか。

その判断がつきかねないでいると、ヤツはもう一度罾肉へと走っていった。狙い通り。

だが、今回は食べている瞬間こそを狙う。

罾肉をガツガツと食べているババコンガに向かって、まずスズネが突進をかけた。

ババコンガは悲鳴をあげるも、食べるのをやめようとしない。

そのまま通り過ぎるスズネを見送った後、俺はババコンガに再度剣閃を叩き込んだ。

基本どおりの型をくりかえしながら、ヤツが状態異常になるのを待つ。

すると、攻撃している最中にヤツは、全身を痺れさせ。痙攣を始めた。

シビレ状態である。

これは大型モンスターと戦うに当って常識ともいえることだが、大型モンスターは状態異常の攻撃に対して抵抗力が高い。絶えず状態異常の攻撃をくりかえさないと、モンスターの体内でその毒素に対する抵抗値が上がってしまうからだ。

つまり同じ状態異常の罾肉は、2度目では抵抗値があがり効果が現れない可能性がある。

そう考えた俺達は、俺が眠り生肉。スズネがシビレ生肉というように異肉をバラバラにすることで抵抗値を奪うことにしたのだ。

そして、シビレ状態は長くは続かない。

この瞬間こそ好機とばかりに、俺は“気刃斬り”を繰り出した。左右への大振り攻撃から更に大上段から振りかぶった一撃へと繋いでいく。

目の端に、ババコンガの爪が弾け飛ぶのが見えた。

それを見ながら、更に攻撃をつなげようとした所で……ババコンガのシビレ状態が解けた。

……マズイ！

だが、動き出した体は止まらない。

何とか体を捻って、相手の動きを牽制しようとした瞬間。

「——UGYAAAAAAAAA!!」

ババコンガが吼えた。バインドボイス。

その咆哮から鼓膜を守るために、俺は両手で耳を押さえつける。

一瞬の硬直、だが対モンスター戦で一瞬の隙は致命的な弱点と化す。咆哮が終わろうと、俺は硬直から抜け出せないでいた。今。攻撃がきたら、耐えられない。

——少しでも衝撃を逃がそうと、歯を食いしばった瞬間。

ババコンガは足を引きずりながら、逃げ出していった。
眠り状態からの大タル爆弾G。そして、シビレ状態の気刃斬り。
更にソレ以前からの、スズネと俺の攻撃により。遂に足を引きずる
までのダメージを与えたのだ。

本来なら後を追ひ、確実にトドメを刺したいのだが未だ体が硬直から抜け出せない。

スズネはトドメを諦め。足を引きずっているババコンガにペイントボールを当てた。

周囲に独特の臭気が漂い、俺達の鼻腔を刺激した。

ペイントボール。

その独特の臭気は、モンスターが今いる地点を大まかにだが教えてくれる。

ハンターにとっては必須の道具であるといっても過言ではない。

ババコンガはダメージを与えないペイントボールなど気にもせず。

大きく体を縮めさせた後。全身のバネを使って飛び上がったいった。

その臭気を追うと、その先にあるのはエリア7。

天然の鉱石が数多く取れるという洞窟の中である。

硬直が解けた俺は、スズネと共にエリア7に向かっていった。
手にはシビレ罠をもっている。

円筒形のこの筒は、ゲネポスの麻痺牙を対象モンスターに撃ち込み。

シビレ状態にするというものだ。

持っていくには簡単で使いやすいことから、ハンターの中では重宝されている。

先ほど通ったエリア6を抜け洞窟であるエリア7に入っていく。少し肌寒いが対した寒さではない。

横ではスズネがホットドリンクを飲んでいるが、俺の装備ブランゴシリーズはコノぐらいの寒さなら影響がでない。雪国で暮らすドドブランゴの体毛は寒さを僅かながら緩和してくれるのだ。

ペイントボールの臭気に誘われ、中に入っていくと。

イーオスと縄張り争いをしているババコンガがいた。

毒を持つ鳥竜種イーオスは小型モンスターの中では手強い敵だが、ババコンガほどではない。

少しでも体力を回復させようとしたババコンガに襲いかかるイーオスだが、所詮は小型モンスター。

ババコンガに簡単に倒されていく。

そして、俺達は今のうちにとシビレ罾を仕掛けていた。

すると、物音に気がついたのか。

傷だらけのババコンガがこちらを向いて、突進してくる。

後ろにはイーオスの姿。

だがシビレ罾を仕掛け終わった俺達は、そのままの状態でした。

本来ならもう少し冷静な判断ができるであろう、ババコンガだが。

俺達との死闘、更にはイーオスとの縄張り争いに疲れたのか。何も考えずに突っ込み。

シビレ罾に足を踏み込み拘束された。

痺れて動けないババコンガに俺は捕獲玉を投げ込む。

捕獲玉。マヒダケとネムリ草、更には素材玉で調合したその道具は、瀕死の状態まで追い込んだモンスターに強制的な眠りを促す。

足を既に引きずっていたババコンガは捕獲玉に耐えられず、眠り込んでいく。

「んじゃ、あと頼むわ」

「了解、チャツチャと倒してきなさいよ」

俺はシビレ罨に捕らわれたまま、眠り続けるババコンガをスズネに任せ。

残ったイーオスを倒しにいった。

捕獲。モンスターを生きたまま捕まえるというのは単純な狩猟に比べて難易が高いといわれている。

そしてギルドは捕獲を推奨している。捕獲したモンスターはギルドや訓練所が高く買い取り。

訓練生のための訓練や、その生態を調べるために使うからだ。

俺達は時間の短縮ということも考え、捕獲という手段をとったが。捕獲したあとには、モンスターを固定するという作業が残っている。その作業をスズネに任せ。

おれはその作業の邪魔になるであろうイーオスを狩るために、洞窟の奥深くへと入っていった。

イーオスを狩り終わると、既にババコンガを荷車に動けないように

くりつけ。

いつでも出発できるように、準備しているスズネがいた。

「ワリイ、遅くなった」

「いいよ。私も今終わったとこだし」

笑いながら俺をみるスズネに「そうか」といいながら、荷車をひく。イーオスをスズネに任せても良かったのだが、俺の手では捕獲したモンスターをベースキャンプまで運ぶように荷車に縛り付けることが難しい。

捕獲したモンスターが目覚ましても動けないように拘束するには、それなりのコツがある。

だが、現在。片手が義手の俺ではちゃんと拘束できるか少々自信がないのだ。

「んじゃ、いくか」

「了解、ネコタクが待ってるわね」

通称ネコタク。捕獲したモンスターをギルドまで運んでくれるアイルー族だ。

ギルドに雇われている彼らは、今回のように複数の狩りでモンスターを捕獲した場合。

ギルドまで運ぶ役を担ってくれる。

おかげで狩りを続けられるわけだが、彼らが来れるのはモンスターが来ないベースキャンプまで。

ソコまでは捕獲したモンスターを運ばなければならない。

だが、どっちにしても足りなくなった爆弾やその他の道具をベースキャンプに取りに行かなければならないので、特に苦労ではないのだ。

「ケビンってさ、ひょっとしてギルドに嫌がらせしてる？」
「……………まあ、半分はな」

スズネは「やっぱりね」といいながら笑っていた。
最も下品な獣、ババコンガ。ハンターの中には彼らを毛嫌いしているものが多い。

曰く、臭い、下品、大した武器ができない。

俺も正直、あまり好きではない。

だから、捕獲をして。少しでもギルドの金をふんだくってやろうと思ったのだ。

……………まあ、実際は俺のところに行くのではなく。ネコタクのアイル
一族に流れる金なのだが。

それにしても、これでやっと一匹。

あと七匹かと思うと気が重い。

後、七匹。なんとか下品な攻撃を喰らわないように頑張ろう。
そう思いながらベースキャンプへと向かうのだった。

< 続 >

感想は感想提示版にお願いします。

感想をいただけると作者が狂喜するのですm(_____)m

閑話（後書き）

18000字オーバーって長いですね m (m
次回はもう少しシンプルにまとめるように頑張ります m (m

ファースト〱初めての〱（前書き）

P V 1 8 / 2 5 9 ユニークアクセス1 / 8 7 1 人突破！

皆さんありがとうございます。マサカマサカの結果に少々驚いているのです。

今回は、戦闘シーンに少しのラッキー！？

少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

後、少々オ리지ナル設定がありますが。どうか暖かい目で見守ってくださいませませm (――) m

ファースト〱初めての〱

……虫が鳴いた。

夜陰の月光を遮る草葉の影から、鈴を転がすような音色が響いていた。

雪山と比べれば遥かに暖かい筈の沼地。だが、その空気は陰々と冷え切っていた。

ソレが沼地特有の毒を孕んだ風がそうさせているのか、はたまた冴えきった月光がそうさせているのかは分からない。ただ、その冷気に肌を震わせていた。

「……ここにも、いないね」

「そうだな」

ポツリと呟くと、ケビンが曖昧な表情のまま肯いた。

アレから私達は6匹のババコンガを捕獲したのだが、順調に思えた狩りはココに来て急に頓挫した。

沼地からババコンガの気配が一切しなくなったのだ。

いや、ババコンガだけではない。最初からの違和感。ババコンガの部下であるコンガも少ない。

だが、ギルドの言葉を信じるのならばあと2匹いる筈なのだ。

……こんなことならば千里眼の薬をもってくれば良かった。

だが、村の財政が大変な今。使わない道具は殆ど売りにだしてしま

つたし、爆弾の材料で荷車は殆ど一杯だったのだ。消臭玉を持って来なければ、千里眼の薬も荷車に載せられたのだが。

ババコンガ相手に消臭玉がないというのは、少々キツイ。

「あの」臭いの攻撃は喰らいたくないが、万が一ということもある。「あの臭い」のまま、街や村に帰りたくはないのだ。

だから、千里眼の薬より消臭玉をもってきたのだが。今となっては少し後悔している。

アレがあつたら、一瞬でババコンガの場所が分かるのに。

千里眼の薬。

それは、一時的にハンターの嗅覚を鋭くし大型モンスターの居場所を探ることができるという。

必需品ではないが、あれば便利な道具だ。

このように相手の場所がわからない時には非常に欲しくなってしまう。

勿論、欲しがったからといって今すぐ“千里眼の薬”が手に入るわけじゃないのだが。

「結局、探すしかないんだけどね」

「何さつきからブツブツ言ってたんだ、スズネ？」

「うん……。中々見つからないなって」

「そうだな」

さっきまでは簡単に見つかったババコンガが、全然見つからない。焦るのは禁物だが、このままでは上位に上がるのは危ういかもかもしれない。

爆弾は材料を入れて残り8個。

戦うには十分な数だとは思うのだが、問題は状態異常の畏肉。シビレ生肉と眠り生肉を使い切ってしまった。

充分な数だと思った罾肉だが、頭のいいババコンガが食べなかったり。フン攻撃が罾肉に命中して食べなかったりしたため、思ったより多くの罾肉を使ってしまったのだ。

ということはこの先。罾肉は使えないし、眠ったところを爆弾で攻撃という手も使えなくなる。

動く相手に爆弾は使いづらいし。

「いつそのこと、2人でバラバラに探そうか？」

「うん……。いや、2人でいよう。何かあったらマズイ」

バラバラで探せば、モンスターを見つける可能性は格段に高まる。だが、同時に1人でモンスターに挑むことになる。

でも、私は勿論。ケビンもババコンガぐらい1人でも倒せると思うんだけど。

「なんか、嫌な予感がするんだよな」

「予感……？」

「ああ」

予感……。か。バカバカしいように聞こえるけど、予感っていうのは結構侮れない。

特に——ケビンの予感は。

狩りの才能だけなら私のほうが、多分あると思う。

でも、感覚。特に直感ということに関してケビンは鋭い。

その鋭い直感で何度も救われてきた。あの“金と銀の火竜”に襲わ

れたときも。

「うん、わかった。じゃあ、とりあえずエリア4にいかない？」

「エリア4？」

「うん、あそこならエサになるキノコ類も多いし可能性は高いと思うんだけど」

ケビンの直感を信じて、2人で行くコトにした私達。

だけど、目当てのババコンガがエリア8にいない以上。

どこかに的をしばって探したほうが効率的だ。

その点、エリア4は理想的だと思う。

まず、キノコ類が多いためババコンガが食事に訪れる可能性が高い。

更に、コンガやイーオスがいた場合。

ババコンガと戦う時の為に掃討しておくのは、かなり有効な手段だと思う。

コンガやイーオスといった雑魚に近いモンスターは、一対一では脅威ではない。

でも、大型モンスターと連携をとられた場合。うつつしい敵となる。

普段なら大した威力のない攻撃でも、態勢を崩されたら大型種の一撃で死にかねないのだ。

しかもエリア4は大きい毒沼が複数あるため、雑魚の攻撃が思わぬ威力となることもある。

「了解、んじゃ爆弾はどうするんだ？」

「持っていきましょう、何かに使えるかもしれないし」

「あいよ」

ケ빈は私に肯くと、荷車を引きながら動き出した。
目指すはエリア4。沼地の中心部分だ。

——白い靄がかかっていた。

冴えた月光の下、冬の気配が残る沼地は冷たく。
肺から漏れた熱気すら凍りつき、藹藹たる空気は戦いの熱を急速に
冷やしていく。

その寒さの下、霞む視線の先には一匹の獣がいた。
言わずと知れた桃毛獣とも呼ばれる、ババコング。
ヤツがこちらに背を向けて立っている。
その圧倒的な巨体に一瞬だが、身がすくむ。

自分より圧倒的に巨大な敵に対する恐怖。ベテランハンターでもこ
ればかりは克服できない。

人が持つ根源的なおそれだからだ。
ハンターの中にはそれを感じなくなったら辞め時だというものもい
る。

恐れをなくしたハンターは死を恐れなくなるからだ、と。

そんなベテランハンターの言葉を思い出しながら。

指先が凍るような寒さの下、息を整え敵を睨む。

……………これで、後は2匹。

この1匹を狩ったらすぐだ。それで上位に付ける。
緩みそうになる気を引き締め、……………って、アレは。

「行くぞ……………スズネ」

「……………」

「スズネ？」

やっと見つけたババコンガ。ソイツを狩ろうとするケビンの声も耳に入らない。

横に並んでいるためか、はたまた角度が悪いのか。
ケビンには目の前にいる『モノ』が見えていない。

「嘘、何でココに」

「……………スズネ？」

私を訝しそうに見ているケビン。

彼に分からせるために。ババコンガの前に指を指し示した。

「ババコンガがどうしたって……………？」

———次の瞬間。

ババコンガの背中から……………白銀の角が生えた。
ケビンの言葉を最後まで待つこともせず。
赤い血を噴出しながら、仰け反るババコンガ。
苦しそうにもがくその口からは、新たな血が流れ出している。

——ヒッヒーン！

その独特な甲高い鳴き声と共に、落雷がババコンガを襲った。
全身を雷に撃たれ、ブスブスと嫌な音を立てながらババコンガは倒れていく。

そして、その背中から生えていた白銀の角がするりと抜け。

その“角”の本当の持ち主が現れた。

ケルビやガウシカと同じような細身の体を支えているのは4本の細い足。

優美とさえいえるその足からは、小さな足音が立てられている。
そしてその特徴的な角からは常に雷光が輝やき。

……………トドメ、とばかりにババコンガに撃ちつけられた。

「アレって……………」

「キリン、だよね？」

幻獣キリン、最近まで次のターゲットにと考えていたモンスターだ。ヤツを倒すために、私達はシェリルに訓練してもらっていたのだから。

だけど、キリン。

古竜種の一種で滅多に見つからないと言われているモンスター。

一流のハンターでも、一生出会えない者もいるという。なのになぜ、ココにいるのか？

「やっぱり、かよ」

「え……………」

疑問に思っている私に、ケビンの声が聞こえた。

……………嫌な予感があった。

ババコンガ、8匹。という異常な数。

コレを縄張り争いで負け、逃げてきたババコンガの群れと考えるか。それとも、ナニかと戦う為に……………一時的に同盟関係を結んだのか。

単純に考えて、この2つの可能性が考えられた。

だが、確信が持てない。もし万が一、何かあれば。そこで異常発生との因果関係を調べるのに、ギルドは下位ハンターをぶつけることを考えたのだろう。

何かあれば、古竜観測所の気球で報せられるし、クエストをリタイアできる。

そう考えたギルドの考えは間違えではない。

たかがババコンガに上位ハンターを当て、他の村が危険になつては意味がない。

第一、俺達の村を襲った金と銀の火竜。

ヤツラを倒したモンスターがいる可能性。コレに対しての防御手段として、ポケット村には上位ハンターがいて欲しい。と考えるのも当然だ。

だが、ここで。ギルドは唯一の失策を犯した。

金と銀の火竜。この夫婦は上位の場合。『旧沼地』に現れやすいということだ。

『旧沼地』に良く現れる希少種の夫婦。

ヤツラを倒したのが、キリンであるというのなら。

キリンは『旧沼地』もしくは地形的に近い『旧密林』にいるはず。

そして、地理上。更には温度上近いのがこの『沼地』だ。

ここまで考えれば勘のいいヤツはすぐに気がつく。

幾らキリンとはいえ、1匹で希少種2匹。更にはハンターまで倒すことは難しい。

ならば、上位の麒麟。それは……2匹の夫婦ではないだろうか？
ということだ。

だが、麒麟。

古竜種の中でも発見が難しいと言われているヤツラを探すのは古竜
観測所でも難しい。

そのため、上位以上のハンターは周辺の村を守り。

上位試験という名目で、俺達下位ハンターに偵察。もしくは斥候を
命じたのだ。

下位ハンターが上位のモンスター、ソレも古竜種と戦えるわけがな
い。

あくまで偵察。それに2匹の夫婦である麒麟なら発見は容易いと思
ったのだろう。

恐らく、ココ。ババコンガ8匹の場所に麒麟の夫婦が現れる確率
は20%以下。

でなければ、俺達2人程度の戦力で上位の麒麟などにあわせるな
んてコトはさせないはず。

だが。ここで、冷静に考えるべきなのだ。

よく考えれば俺でもわかる。そう、麒麟は2匹いた。

しかも、夫婦。

「ねえ、でも。シエリルから聞いていた麒麟と比べて随分小さく
ない？」

「ああ……、多分。あれは生まれたての麒麟かもな」

「——生まれたて！？」

古竜種キリン。

神出鬼没で、雪山の山頂、沼地のと真ん中、古塔の頂上、火山の奥地などでも発見される。

謎に包まれているモンスターだが、時々夫婦で発見されることがあるという。

そう、夫婦。夫婦ならば、子供ができてもおかしくない。

前例がないため見逃していたのだろうか。出産期で気がたっていた、もしくは生後間もない子供がいるキリンの縄張りに希少種とハンターが現れた。といったところだろうか。

そして、生まれたてだろうがキリンは古竜種である。

上位のモンスターならば、下位。つまり生まれたてのキリンなど敵ではないのだろうか。

ココは下位のモンスターしかない、沼地。

ならば我が子の成長に丁度いいと思って、キリンの親がココに放ったのか。

はたまた、キリンの夫婦がハンター。もしくはモンスターに襲われ、一時的に逃がすためにココにキリンを放り出したのか？

それは分からないが、この場合はマズイ。

俺達はババコンガを倒すための道具しか持ってきていない。

古竜種、しかもキリンを倒すための専門的な道具などもってきていない。

どうする、一旦引くか？ それとも、あと一匹ババコンガを倒して、合格してから逃げるか？

これからのことを考えていると。

「――ケビン――！」

スズネの叫び声で、気がついた。

目の前にはキリンの姿。正直、どうするかまだ決めていない。だが、そんな俺達を待ってくれる筈もなく。

キリンは一度、大きく叫ぶと。

絶望の雷と共に俺達に襲い掛かった。たかが、下位のキリンと侮るなかれ。

そのスピードは、シエリルの動きに慣れた俺達にですら絶望の疾風と化して俺達に迫ってくる！

秒速100メートルを超えるのではないかと思うほどの速さ。

武器をしまっているにもかかわらず、俺のスピードでは避けることすら敵いそうもない。

俺の横には、スズネの姿。

ダッシュでは間に合わない。

前転してる暇もない。

走り出しても追いつかれる。

俺達はこのままでは共倒れだと、一瞬にして判断し。

………お互いを『蹴りあつた』

威力より衝撃を重視した蹴りは、お互いの足で威力を調整し。その

場から吹き飛んでいく。

『蹴り』ハンターにとって最後、というより意味の無い攻撃だ。だが、お互いを吹き飛ばし。緊急回避するにはこれは意味のある行動だ。

お互いを蹴り飛ばし。

荷車から離れた——瞬間。キリンが荷車に突っ込んでいった。爆弾と閃光玉、それに罾の類が入った荷車。ソコに、雷を纏って突っ込んでいくキリン。

小さな火花が散り、そして世界が“赤く”染まった。

いつもなら確実に隠す眼球、それが潰れるほどに衝撃を受ける。度を越えた光。それは、圧倒的な質量となって俺の視力を塗りつぶす。

腕をかざそうと、もう遅い。

遅れてきた爆風に、体が攫われ吹き飛ばされた先にある壁に背中がめり込んだ。

手を上げるどころか、指さえも動かない。

逆流する胃液、漂白される視界に一瞬だが気が遠くなる。

“荷車に積んであった爆弾に引火したのか”

その事実に従分たってから気がついた。

雷を纏いながら俺達に突っ込んできた、キリン。

下位であるからなのか、それとも未だ戦闘経験が少ないからなのか。不用意に突っ込んできたキリンに、俺達もついていた爆弾が全て爆発したのだ。

俺達のもつていた爆弾。大タル爆弾Gが2つに大タル爆弾が3つ。

その爆発は凄まじく、視界が晴れた今でも燃え続けている。

「マジかよ？」

これで、倒せたのだろうか？

それならば、ラッキーとしか言いようがない。

視界の先には、俺とは違いしっかりと盾を構え衝撃を逃がしたスズネの姿。

その姿に安心しながら、もう一度。俺たちがいた場所に舞う大量の粉塵を見た。

何も見えない。これは本当に倒せたのだろうか。そう考えていると。

次の瞬間——粉塵に雷が落ちた！

落雷。その意味するコトに気がつき、スズネはそのまま防御し。俺は、間合いをとった。

そして、目の前の粉塵から。ゆっくりと、白銀の姿が現れた。

古竜種キリン。古竜種の中ではかなり体力の低いほうだと言われていた筈なのだが。

それでも、大タル爆弾G 2個。更に大タル爆弾3個程度の威力では足りないというのか。

ゆつくりと立ち上がるその姿には、少しも弱まったところは見えない。

アレだけの爆弾を喰らって無傷、とは考えにくい。

だが、どのくらいのダメージを受けたのか。

ソレが計れないと、これからの狩猟は不可能になる。

………ここは。

「スズネ、一旦引くぞ！」

「え！？ でも………」

「いいから！」

俺は、ペイントボールを投げると。

素早くその場を後にした。後方では、キリンの鳴き声。

ソレを聞きながら、俺達はベースキャンプへと戻っていった。

ベースキャンプ、ソコは豊富な水源を誇る湖の畔。

そこで俺達は、怪我の手当てをしていた。

大タル爆弾Gと大タル爆弾。あわせて5個の爆弾の衝撃波はかなり

の傷を俺達につけていた。

まずは爆弾の威力と一緒に爆発した閃光玉。

その閃光でやられた視力は、あのまま戦っていれば深刻な被害を受けたかもしれない。

更に、爆音で耳をやられてないか。特に聴覚に異常がないか確認したが、特に問題はないようだ。

受身を取れなかった俺は爆風によって多少の傷を負ったが、回復薬を半分傷口にかけ。

そして、もう半分の飲み込めば大体良くなったようだ。

「さてと、これからどうする？」

「そうね……………」

ババコンガ7匹まで（正確にはキリンが一匹を倒したのだが）狩ってしまった俺達。

キリンなどという予定外の敵が現れたのだから、ココでクエストを終わらせる。

というのが、一番簡単だ。

8匹に1匹足りないとはいえ、ギルドの説明ミスなどを突けば。上位ハンターになれる可能性は充分ある。ここで、無理をする必要はないし。キリンと戦う武器も少ない。

爆弾は既に5個使った。残りは3個。

全部を大タル爆弾Gにしたとしても、キリンに通じるかは分からない。

しかもあのスピード。

今、爆弾に自分からぶつかるといふ経験をしたキリン。奴がもう一回爆弾に当たってくれるかはかなり微妙だ。

というか、あのスピードに当てられるかどうか自信がない。

ここで、逃げるべきだろうか？ そう考えていると。

「……………倒しましょう」

「だけど」

できるのか？ そう聞こうとしてスズネに強くにらまれてしまった。

「できないじゃない、やるしかないのよ！」

「しかし、別にクエストが申し込まれているわけでもないし。あのキリンが付近の村に迷惑をかけたわけでもないぞ？」

モンスターを狩る俺達ハンターは、乱獲を防ぐためギルドから厳しく取り締まられている。

基本的に、受注したクエスト以外のモンスターを狩ることはご法度だ。

モンスターは一対一で対峙すれば、震えがくるほど恐ろしい相手だ。それでも、人がモンスターを狩りすぎれば絶滅してしまう。

一つの種が絶滅すれば、その影響は生態系の中で関係を持つほかの生物にも飛び火する。

例えば雪山に多い草食種ポポを食料にするティガレックスという飛竜がいる。

轟竜とも呼ばれる恐ろしい飛竜だが、コイツが絶滅すれば草食種であるポポは襲われなくなり、すばらしいことのように思える。だが、そうではない。襲われないということは、個体数が増えるというのだ。

元々、草食種はあるていど数が減ることを前提に増えている。

つまり襲われなくなれば、増えすぎるのだ。

そして、増えすぎた草食種ポポはタダでさえ少ない雪山の植物を食いつくし、結局は餓えて絶滅する。つまり一つの種の絶滅が、時間をおいて更にもう一つの種の絶滅に繋がるのだ。

このため、ギルドが指定したクエストのモンスター以外は狩ってはならないという決まりがある。

勿論、命を狙われたりした時は反撃してもいいのだが。

今回の相手は古竜キリン。ババコンガ用の装備しかしていない俺たちにとって、相性は最悪だ。

シェリルから聞いた話が事実だというのなら、罾肉は効かず。シビレ罾や落とし穴も効かない。

更に今回用意してきた消臭玉は使う必要がなく、閃光玉も効果が無い。

つまり、ババコンガを倒すために用意した装備の殆どが使えない。ならば、逃げたほうがいいのではないか。

勝てない相手から逃げ出すことは、決して恥じゃないはず。そう思っていると。

スズネが頬を染め、上目遣いに俺を見ながら。

「——だって、ケビンには“麒麟の雷尾”が必要なんですよ？」

と、ボソリと話した。

思わず、スズネのほうを見ると顔を赤くしながらパタパタと手を振っている。

どこか“しまった、余計なコトを言った”見たいな顔に見えるのは気のせいだろうか？

これは、ひょっとして……？

「——か、勘違いしないでよね！　べ、別にケビンのためってワケじゃなくて。仲間の武装を強化すれば私も安全に戦えるってコトなんだからね！」

「あ、ああ。なんだ。そういう意味か。アハ、アハハハ」

「そ、そうよ。他に意味なんてあるわけないでしょ！」

頬を赤くして、そっぽを向いてしまったスズネをみて少し凹んでしまっ俺。

そうだよな。一瞬、俺のためにスズネが残ってくれるのかと思った。確かに今、使ってる太刀『斬破刀』から『鬼斬破』に強化するためには麒麟の雷尾が必要。

そして、俺の武装が強化されるということは同時にスズネの身が安全になるってコトでもある。

ならば、時間一杯を使っても麒麟を倒す意味もあるってコトか。

「……………鈍感！」

「ん、なんか言ったか？ スズネ」

なにか向こうで聞こえた気がして、スズネに確認を取ったのだが。

「なんでもない！」と怒鳴られてしまった。むう、何か悪いことでもしたのだろうか？

相変わらず鈍感なケビンに腹を立てながら、私達は作戦を立てていった。

未だケビンが投げたペイントボールの効果は途切れていない。

残り時間はあとわずか。だが、爆弾の材料は残り3個。この状況で、確実に勝てる手段。

それは……………。

「——ダメだ！」

「けど」

「その方法は、スズネが危険すぎる」

「でも、ケビンじゃ無理でしょ？」

私の言葉にケビンが不服そうな顔をする。

そんな顔をしたって無駄だ。

どう考えても、コレが一番勝率が高い。

「時間もないし、コレでいくよ？」

私の言葉に不満を持ちながらも、ケビンは渋々、予備の荷車をもつ

て歩いていった。

私はエリア4。ペイントボールの臭気が漂う場所。いまだキリンがいるであろう場所へ。

そして、ケ빈は。

「……………つたく、マジかよ！」

俺は半分毒づきながら、エリア1へと向かっていた。

スズネは一足先にペイントボールの臭気が漂う、エリア4へ。

そこで、キリンと戦っている。

そして俺がすることといえば。ここで爆弾の材料を探すことだ。

エリア1。獣人族の隠しアイテムがあるといわれている場所だ。

可能性は低いが、大タル。それに爆薬がある可能性もあるという。

過去、沼地に来るたびに見つけた大タルに爆薬。

コレをスズネに渡し、大タル爆弾にする。

今の手持ちは大タル爆弾Gが3個できる『材料』のみ。爆薬はいくらか余分にあるが大タルはそうはいかない。本当は先に調査したい所だが、それではなにかあった場合。

特にキリンの落雷でも喰らえば、爆発と共に俺達も死ぬ。

ならば、安全性を高めるため。爆弾の調査は材料を全て見つけてか

ら。

その間、少しでもダメージを与えるため。麒麟の動きを見切るためにスズネが戦う。

時間制限がなければ、2人で爆弾を調合してから戦うという選択肢もあったのだが。

そして本来、麒麟と戦うのは俺の役目だ。俺の武器の強化に必要な“麒麟の雷尾”

それを手に入れるのだから、俺が戦うのが当然だろう。

片手では爆弾の調合は難しいし、スズネに危険な目に合っ欲しくない。

だが、……。スズネの武器は“ランス”だ。

ランス。近接武器で最高の防御力を誇る武器は、麒麟の落雷すら“ガード”できる。

麒麟の攻撃は基本的に、落雷と突進のみ。

ソレさえガードできれば、スズネにも勝機はある。

とはいえ。それはあくまでも勝機ではない。

伸びやかなスラリとした体格に似合わず、麒麟の肉質は異常に堅い。

下手をすれば弾かれ、落雷を受ければ一気にピンチに陥ってしまう。

ならば、俺が戦いたいところだが。

俺の武器は斬破刀。雷属性の太刀で麒麟には効果が薄い。しかもガードもできない。

ならば、時間稼ぎにしても。攻撃するにしても。スズネのほうが適任だ。

しかも俺の防具はブランゴシリーズ。

火属性にも弱い、雷属性にも弱い。

しかもガードできない防具では、キリン相手に戦う事は難しい。

……そんなコトは分かっているのに。

「ッ、クソ！」

思わず、毒づいてしまうのだ。

だが、こうなっては仕方ない。

少しでも早く、大タルと爆薬を探さなければ。

エリア4。

沼地特有の湿気を含んだ靄の中。未だキリンはその場を動いていなかった。

4本足の古竜種。その姿はケルビやガウシカと同じくらいホッソリとしていながら、雷光を纏う白銀の体にはどこか神々しい雰囲気漂っている。

まるで、一枚の絵画のようだ。

でも、何時までも見ているわけにはいかない。

タダでさえ発見例が少ない幻のモンスター、キリン。
この気を逃せば、次に何時出会えるか分からない。
上位に行けば、モンスターはもっと強くなる。
そのためには防具と武器を少しでも強化しておいたほうがいい。
特に、ケ빈は雷属性の武器しか使えないのだから。

「ケ빈のためにも頑張らなくっちゃ」

思わず漏れた本音を呟きながら、私はコチラに気がついたであろう
キリンを凝視した。

基本は、シェリルとの戦闘訓練と同じ。

まずは、キリンの動きを良く見て攻撃をガード。

そして、振り向きざまに攻撃。

まずは、相手の動きをみる。……………と思った瞬間。

「……………ッえ!？」

白い流星が駆け抜けていった。

一瞬早く盾を構えることができたのは、奇跡と言ってい。
先程まで中央にいたはずのキリンが気がつけば一瞬で、私の前にい
た。

超高速で地面を駆け抜け、気がつけば目の前にいたキリン。

シェリルに言われていた筈なのに、実際に見てみるとその動きに翻
弄された。

だが、この動きは予想通り。予定外なのはスピードだけ。

そう考え、ガード後。後ろを振り返ると。

ソコには既に左右に目まぐるしく動きながら、標的である私に襲いかかるキリンがいた。

雷光を纏い、左右へ軽快なステップを踏むキリンの動きは美しい流れ星のようですらある。

だが、軽快な動きであろうとその威力は馬鹿にできない。

さつき喰らった攻撃。ガードに成功したとはいえ、未だに手が痺れている。

あの小さな体のドコにそんな力があるのか。

下手をすればリオレウスの突進より、威力があるかもしれない。

「は——、あ——」

思ったより、やりづらい。

高速移動と連続攻撃にジワジワと体力を削られていくのが分かる。

突進とケルビスステップ。これだけでもやりづらいのに、落雷まであるのだ。

だが、

「——ハア！」

ケルビスステップを避けながら、ランスの一撃を顔に当てる。

本当は角を狙いたいのだが、的が小さすぎて当たらない。

だが、頭部も弱点の筈……。なのだが。

「くッ——！」

堅い。突き出したランスが弾かれそうになるのを強引におさえながら、もう一度キリンを睨む。
なんと硬さだ。

比較的柔らかいはずの頭部ですらこの硬さでは、切れ味が鈍ったら刃が通らないかもしれない。

体の硬さが防御力だというのなら。

キリンは防御力、スピード、攻撃力、更には攻撃範囲（落雷）この四つ。全てにおいて、私に勝っているということになる。

故に——ランスが誇るガード性能。コレが失われた瞬間、私は地に伏すに違いない。

そして、私は無限の体力をもっているわけではない。

ババコンガ6匹と戦った今、私の体調は万全とはいえない。

「……………」

だが、それは予測されていたコト。

故に、私の役目は時間稼ぎ。

キリンの動きを見切り、確実にダメージを与えること。

方法はただ一つ。その瞬間を、息を殺して待ち続ける——。

そう思っていると。その隙をチャンスと思ったのか。

キリンが大きく前足を上げた。

シェリルに聞いて知っている。その動きは落雷。

全方位に対してか、はたまたキリンにだけか。

だが、その威力は決して侮れない。その雷撃から身を護る為に私は盾を構える。

交差するのは我が身を守る盾と白銀の雷光。
キリン最大の攻撃にして、圧倒的な射程距離で敵を打ち砕く雷撃。

だが——その攻撃すら弾くのが。我が盾。
豪槍グラビモスの対になっている盾である。

鎧竜とも呼ばれるグラビモスの素材をつかい。更にグラビモスの頭部を模したその盾は下位ではかなりの硬度をもつ。

私のスタミナを大幅に削りながらも、落雷を防ぐその盾。
白銀が目の前で瞬き、視界を塞いでいく。

「ッ——！」

圧倒的なスピード。この世に雷より早いモノなど存在しない。光と同等のスピードを持つ雷。

この雷を攻撃手段に持つというだけでキリンはモンスター中、最速の攻撃手段を持つと言っても過言ではない。

はつきり言つて、雷など人間の視力が追えるスピードではない。
故に私がしているのは、単なる先読み。キリンが次に起こす行動。
それを先読みして盾を構えているに過ぎない。

相手の行動を予測できなければ落雷がこの身を襲う。

だが、ソレさえできれば。

「——ハアアアア！」

豪槍グラビモスが、麒麟の領域を侵していく。

繰り出される突撃は、強烈な斬撃となり毒と共に麒麟を斬り刻む！

麒麟を突き崩しながら、走り去り。麒麟との距離を開ける。

まずは安全圏で戦うのが、ランスの必勝法。

そして、後ろを振り返ると。

「——嘘でしょ？」

私の突撃を喰らいながら平然としている麒麟がいた。

……、私も自分の実力にそれほど自信があるわけじゃない。実際上位のモンスターには手も足も出なかった。だが、麒麟は既に5個の爆弾を喰らい。更には何度も私の突撃を喰らい、毒も流れ込んでいる筈なのだ。

これがまだ生まれたての麒麟だというのなら、上位の麒麟はどれほどの力だというのだろうか？

何事もなかったように私に向かってくる麒麟に盾を向けながら手元のランスを見る。

「くっ——！」

ガードしながら苦悶の声 flowed。

まだ、麒麟の攻撃はガードできる。できるのだが、先程からの突撃でランスの刃がマズイ。

タダでさえババコンガとの戦いで、ボロボロになった刃を研ぎなおしたばかりだというのに、もう刃こぼれができている。

麒麟の肉質が硬いというのは聞いていたが、マサカこれほどだとは！

「——チィー！」

だが、刃を研ぎ直す暇は与えられない。

もとより人間の眼で追えるかどうかという、麒麟の動き。

それがいまや、閃光と化しているほどに早くなっている。

迫り来る、麒麟の雷角が見切れない。一旦離れて、刃を研ぎなおしたいのだが。

麒麟の猛攻がソレを許さない。

「——っ」

それでも、ココまで麒麟と戦ってこれたのは私の戦闘経験。いわゆる場数を踏んでいるからに他ならない。初めて戦うモンスター。

それも古竜種に1人で戦う。

コレがどれほどのストレスになるか。でも。

「負けられない！」

キリンの突撃をかわし、後姿にランスを叩きつける。
豪槍グラビモスからは毒がキリンに流れ込み、その体力を徐々に蝕んでいく。

「負けたくない！」

だが、私の攻撃など軽いものなのか。
何事もなかったかのように、周囲に雷を落とし続ける。
ソレをガードしながら更にランスを……。

「——っつ！！」

叩き込もうとした瞬間、キリンの行動に巻き込まれた。
雷を周囲に落としした瞬間に、更に落雷。その落雷を喰らいそうになった私は、ガードが間に合わないと悟るとバックステップでかわした。

危なかったが、これで次の行動にと思った刻。

「——！！！」

舞い散る火花と共に。私の体が宙に浮いた。
連続の落雷にガードとバックステップでかわした私。
だが、それすらキリンにとっては計算どおりだったのか。

……気がつけば目の前にキリンがいた。

落雷2連撃の後、雷角による突撃を喰らったのだ。宙に浮いた私の体は、何もできず。なんとか受身だけでも取ろうとした瞬間。

——僅かに弛緩していた空気が凍りついた。

一撃を喰らったとはいえ、それは決して致命傷ではない。グラビモスシリーズ。下位ではかなりの防御力を持つこの装備にとつて、キリンの一撃だろうと簡単に死ぬことはない。突き上げだろうと、突撃だろうと、鎧を貫通しこの身を貫かなければ。だが、次の瞬間。キリンが起こした行動に私は恐怖した。前足を上げ、大きくいなくその姿。それはキリンが起こす行動でもっとも危険な攻撃。

——上空で乳白色に染まった空が煌いた。

人間では決して犯すことのできない自然の摂理。ソレさえ覆す、脅威の能力が私の身を襲う。放たれる殺気は今まで
の比ではない。

次の瞬間、ギシリと空間を歪めながら私の身に雷が舞い落ちた。その圧倒的な威力。地上にいれば回避することもできただろう。地上にいれば、その盾をもって防ぐこともできたであろう。

だが、ここは『空中』

翼を持たない人間にとって、ココでできることなどしれている。

——故に必殺。

意図してか、はたまた偶然か。

人間にとって、もっとも恐ろしい攻撃をキリンはしたのである。雷撃が迫る。

一秒にも満たぬその刹那、私は最後の抵抗にと雷撃に盾を構えた。天空より飛来した破滅の雷光を、足が踏ん張れない盾で相殺などできるはずがなく。

「——っ……………！！！！」

全身を雷が切り裂いていく。それに抵抗できる力など残っている筈もなく。

私はそのまま、地に墜ちた。

「が——がふ……………！！」

運が悪いのか、私が墜ちた場所は毒沼。

雷に撃たれ、全身が痺れている私には口に入ってくる毒水すら吐き出せない。

目の前には、私をココまで追いつめたキリンの姿。

このままでも死ぬことは間違いなさそうであるが。
キリンはこのまま静かに死なせてくれそうにない。
コチヲを憤怒の形相で睨んでいるようにすら見えるその姿。
それはトドメを刺そうとしているようにしか見えなかった。

“——ちえ、ココで終りか”

口が痺れて動けない私は、どこか他人事のように感じていた。
全身が痺れていて痛みすら感じないからかもしれない。
全身を襲うのは恐怖よりも、倦怠感が勝っている。
何もする気が起きないし、何ができるとも思わない。

ただ、静かに最後の時を迎えようと思った瞬間。

「——スズネ！」

声が聞こえたのだ。

「——スズネ！」

目の前で倒れているスズネを見て一気に頭が沸騰した。
コチヲを向いたキリンにペイントボールを投げつけると、そのままスズネを毒沼から担ぎ上げる。
軽く毒状態になったが、そんなことは気にしていられない。

なぜなら、スズネの体が………冷たい。
まるで、死人の様に冷たい体に一瞬眉を顰めながら、まだ脈があることに安堵した。

だが、毒沼に浸かっていたスズネの容態は一刻を争う。
まずは解毒をしなくてはと、漢方薬をだす。
毒を無効化し、少しだが体力を回復させる漢方薬。
その漢方薬をまず俺が飲み、そしてもう一つをスズネの口に近づける。

だが、スズネは体が痺れているのかうまく飲み込めない。

だが、時間は段々と過ぎ去っていく。
このままでは、スズネの命は。

それに目の前にはキリンの姿。
グズグズしていたら、2人ともお陀仏だ。

ゴクリ。自分自身の理性と戦いながらも、俺は最善の選択をしなければならぬ。

時間もない。方法の一つ。

「仕方ない、スズネ。我慢しろよ」

スズネに一言断ると。
次の瞬間、俺は迷わず漢方薬を口に含み。…………スズネの口に流し込んだ。

「あ——ん、はふ……ん、…………ズチュ」

喉から舌まで麻痺しているのか。

漢方薬を飲み込めなくしているスズネの舌を絡めとり、液体を流しこむ。

目を閉じて、かすかに震えているスズネは可愛かった。

普段の傲岸不遜を絵にかいたような姿からは想像もできないほど、細い首筋。

俺の一撃で容易く折れそうなほどか細い首に手を回し、顎をあげ俺の体液ごと漢方薬を流し込む。

あのままでは毒が全身に回って死にかななかったのだ。コノぐらいは許して欲しい。

そのまま、漢方薬を全て飲ませると。ゆっくりと唇を離していった。銀の糸が2つの唇を繋ぎとめ、やがて離れていく。

「スズネ、大丈夫か!？」

顔が熱い、体温が上がり狩場だというのに沸騰する体温でのぼせそうだ。

緊急処置とはいえ、スズネにした行為に罪悪感がこみ上げる。

だがコレでいい。漢方薬によって、解毒できたスズネは少しは安全になった筈である。

「——スズネ、スズネ？」

だが、スズネは何故か、一切の反応を見せない。
顔色は良くなっているし、頬も赤い。

だがなぜか、瞳は潤み半ば呆然としている。

漢方薬は飲ませたし、漢方薬には少量の体力回復能力もある。
だから、もう口が利けてもいい筈なのだが。

……まさか、まだ体が麻痺しているのか？

麒麟の雷撃を喰らった時に体が麻痺したのか？
だが、麻痺をとる薬などない。体の自己回復能力で麻痺から立ち直るしかないのだ。

そして、自己回復能力を高めるには。

「仕方ねエ。——スズネ許せよ！」

俺はスズネに一言断ると、万が一に備えて持ってきた秘薬を口に含み。

スズネの唇へと、俺の唇を……。

「——って、ナニやってんのよアンタは!!!!!!!!!!」

——ドッカーン!!

とばかりに、目の前にいたスズネがもう、フルフルも真っ青というほどの音量で吼えた！

「…………ツ……!!」

「あ、あんだ。私の大事な大事な……ファ……ス……を」

あまりにも凄い音量に耳を押さえていると、その後ボソボソとスズネが何か呟いていた。

だが、傍で大音量で叫ばれて耳がキンキンする俺には聞こえない。

「あん？ 何言ってたんだ、声が小さくて聞こえねえよ！」

「う、うっさいわね！ 責任取りなさい、責任！」

ギヤアギヤア叫ぶスズネを宥めながら、俺はキリンを睨む。
とりあえず、遊んでる場合じゃない。

「っで、スズネ。戦えそうか？」

「…………。まあ、この事については後でじっくり問いただすとして」

…………忘れてはくれないんですね、スズネさん。

まあ、この辺は諦めるしかあるまい。この程度は覚悟していた。

「はつきり言つて、ヤバイわ。雷撃喰らって毒沼に落ちたせいで殆ど体力もないし。爆弾を運ぶくらいしかできないわよ」

「…………じゃあ、」

「ただし、今回の狩猟は私が言い出したこと。最後まで絶対やるからね！」

……じゃあ、隙みてベースキャンプに戻れ。
と言うつもりだったのだが、先を越されてしまった。
最悪。クエスト失敗で話を終わらせようと思ったのだが、そうもいかないようだ。

となると。最早、方法は一つだ。

「了解、じゃあタイミングは任せるぜ」

「ええ、アンタこそしくじったら承知しないんだから！」

憎まれ口をお互い叩きながら、別々の方向へと別れていく。
これから戦うのは幻獣キリン。

古竜種であり、雷を操る神秘の獣。

沼地の殆どはキリンの射程距離であり、そのスピードは人間を軽く凌駕する。

対するは隻腕のハンターに、怪我人のハンター。

残り時間は少なく、手持ちの武器も少ないという最悪の状況。

何時もながらギリギリの綱渡り。
だがコレでも最善のスピードだ。

心臓の鼓動が上がる、眠っていた血潮。忘れていた闘争本能が呼び覚まされる。

「——ああ、随分と待たせたな幻獣」

準備は整った。

俺は、握り締めた指の狭間から爪のごとくナイフを構える。

ナイフ。ハンターがモンスターを狩るために使う投擲武器。
1人に対して5本しか持つことが許されず、威力も決して高いとはいえない。

5本しか持てないナイフを指の狭間から3本ほど爪のように生やし、それを前方で俺を待ち構えるキリンに投げつけた。

大地を踏みしめた足から膝へ、そして膝、腰、肩、肘、手首と連動しながら撃ち出すナイフは弾丸と化して空気を切り裂き、キリンに突き刺さっていった。

爆弾すら弾くその体に、ナイフなどなんの痛みにもならない。

だが、次の瞬間。

キリンは小さく嘸くと、ゆっくりと地に伏した。

眠り投げナイフ。

投げナイフとネムリ草から作られたこの道具はモンスターを強制的に眠りにつかせるという。

獣肉が足りなくなったときの予備としてもってきたのだが、間に合ったようだ。

爆薬を見つけたときに、ついで見つけたナイフは残り5本。更に調合分も含めると7本の眠り投げナイフをもっていることになる。

そして、向こうでは俺がもってきていた大タルに爆薬を混ぜ。新しい大タル爆弾Gを作っているスズネがいた。爆弾を作り、素早くキリンの前に置くスズネ。

爆弾を設置したあと、もう一度爆弾を作っている。

今、スズネが調合している爆弾。大タル爆弾G1個と大タル爆弾3個で、爆弾は終りだ。

それで死なないモンスターなど……いるはずがない。

設置し終わった、爆弾を起爆させるために小石を投げる。
鼓膜が破れないように耳を塞ぎ、目を閉じる。

——次の瞬間、轟音が沼地を襲った。

襲ってくる爆風に体を攫われないように足を踏ん張り、もう一度キリンを睨む。

流石に大タル爆弾Gを眠っている時に喰らったダメージは大きいのか。

キリンは吹き飛ばされ、倒れている。

だが、今こそチャンス。

俺は倒れているキリンに残りの眠り投げナイフ、全てを投擲した。

眠り投げナイフ。敵対するモンスターを強制的に眠りへと誘う能力を持つが、この武器には一つ弱点がある。モンスターを眠らせるネムリ草の酵素を使った特殊攻撃。

だが、自然界で猛威を振るっている殆どのモンスターはネムリ草の酵素など特殊攻撃に対して耐性を作るモノが多い。まして相手は古竜種、キリン。

つまり、前回より多めに投げないと眠りにつかせることができないのだ。

そして、予想通り。

7本目のナイフでようやく眠りにつくキリン。

8本目のナイフがない以上、ギリギリの賭けだったのだが成功した

ようだ。

そして、スズネは荷車を引き大タル爆弾と大タル爆弾Gを仕掛けていく。

目の前には良く眠っている、麒麟。

コレで終わる筈。俺は、片手に握りこんだ小石をもう一度爆弾へと投げ入れた。

轟音と共に、吹き飛ぶ麒麟。

コレで終わったのか、と安心していると。

「——ケビン、まだよ！」

スズネは、荷車を引きながら麒麟へと駆け寄っていく。

その荷車に置かれているのは、大タル爆弾。

そして、その先にいるものは。

「——マサカ、嘘、だろ!？」

ゆっくりと起き上がろうとしている麒麟の姿があった。

一瞬パニックを起こしかける俺と違い、スズネは冷静にまだ立ち上がれない麒麟の前に大タル爆弾を仕掛けていく。まだ立ち上がれない以上、コレはチャンス。

俺は小石を振りかぶり。スズネは素早くその場を離れようとした瞬間。

——麒麟が大きく嘶いた。

振りかぶられる白銀の角と、前足。神々しささえ感じられるその動きは一瞬だが俺の目を奪うには充分な姿だ。だが……それは、破壊を意味する姿でもある。

キリンの嘶き。それは、落雷を呼ぶことを意味し。敵を寄せつけない為か、キリンは己自身に雷を落とした。

墜ちる雷光。光速に迫ろうというそのスピードは、人間には回避不可能。

その落雷はキリンの前にあった大タル爆弾を起爆させ、キリンを吹き飛ばしていく。だが、大タル爆弾2発の爆撃に吹き飛ばしたのはキリンだけではなく……その横にいたスズネも吹き飛ばした。

直撃こそ、喰らわなかったものの。耳を塞ぐ間もなく爆風に吹き飛ばされたスズネの体が宙に舞う。

「——スズネ!!」

俺は、吹き飛ばされたスズネを受け止めようとその落下地点へと向かう。

毒沼の前まで飛ばされたスズネを受け止め。一瞬、あまりの重さに眉を顰めた。

「——スズネ、スズネ!!」
「う、う……ん」

よかった、息はある。

爆弾の直撃ではなく、爆風に吹き飛ばされただけか。

それでも危険な状況には違いない。

早く、ベースキャンプへと戻らなければ。スズネを抱き上げ歩き出そうとした瞬間。

——ゾクリ、と背筋が凍った。

まさか、そう思いながら後ろを振り返ればゆつくりと立つキリンの姿。

大タル爆弾11個も喰らいながらまだ戦うというのか？

そのうち大タル爆弾Gは5個もあったのだぞ？

それも、そのうち眠らせてぶつけたのは大タル爆弾G3個に大タル爆弾1個。

それだけでも、普通のモンスターなら充分倒せる破壊力だ。

ゆつくりと立ち上がるその姿を見ながら、俺は静かに考えた。

キリンの走る速度は、人間より遥かに早い。

しかも、今の俺はスズネを背負って走らなければならない。

速度の落ちた俺をキリンが逃がす筈がない。後ろからトドメを刺されるのは必死。

ならば。

「スズネ、ごめん。もうしばらくの辛抱な」

「……………ダメ、ケビン。逃げ——」

何か言おうとするスズネの唇をもっ一回強引に奪い、口に含んでい

た回復薬グレートを飲ませる。

回復には程遠いだろうが、これで少しは楽になれるはずだ。

「後で覚えてろってんだろ、分かってる忘れねエよ」

「——馬鹿、後で地獄を見せてやるから！」

動けないままでも、毒舌を忘れないスズネに苦笑しながら。

俺は戦場へと帰っていく。

「——覚えてきなさいよ、ケビン。後で地獄を見せてあげるんだから……だから、」

……だから、生きて帰ってきなさい。

倒れながら悪態をつくスズネに「あいよ」と軽く答えながら、俺は手を振った。

幻獣キリン。複数の爆弾を喰らつていようと未だその体は健在。

光とほぼ同じ速さで動く雷を操り、生半可な刃物を弾き飛ばす強固な体を持つ幻獣。

ヤツをココまで追いつめ、更に危険を冒し戦ってきたのはスズネだ。

爆弾を設置し、ヤツに毒を喰らわせ戦い抜いた。

俺がやったのはただ、眠り投げナイフを突き刺したのみ。さあ、交代だ。これからは隻腕の狩人である俺の時間だ。

）

）

言うまでもないが俺、ケ빈は凡庸な男だ。

更に俺が装備している武器、武具。共に凡庸と言っている。

俺がもっている太刀、斬破刀。雷属性での付加はキリンにダメージを与えない。

故に使えるのは太刀の攻撃力のみ。

そして、それを扱う俺の力量は平凡そのものだ。

両手が揃っている時でさえ目立った成績をあげることが出来ず。まして今は隻腕。

能力は両手の状態より遥かに劣る。ハンターとして目立った力があるわけでもなく。

特別な力や才能をもっているなんてどんでん返しもない。

装備しているのはブランゴシリーズ。

火属性に弱く、更に雷属性にも弱いという、雷を操るキリンには相性の悪い防具。

腕は平凡、装備は貧弱。實力は未だスズネに劣る。

そのあまりにも情けない姿にシェリルには馬鹿にされ。更にはアイルーにも軽く見られている。

あまりにも、情けない男だ。

———
ただし。

情けない男だからといって、古竜種に負けるといったことはない。

弱いと断ずるならば、あえてソレを受け止めよう。

力がないというのなら、それに異を唱えない。

……だが。

大事なモノを命を賭けて守ろうとする時だけ……俺は最強の狩人となる。

）
）

スズネから離れる。

キリンを引きつけ正面から迎撃する。

その時、万が一にもスズネを巻き込まないように離れないといけな
い。

目の前には、雷を纏いし幻獣キリン。

数多の爆弾を喰らいても生きている古竜種。

その姿を睨みながら、俺は右手に握っていたものの蓋を開けた。

一瞬、その臭いをかいで眉を顰める。その薬の名は“怪力の丸薬”
鬼人薬を遥かに超えるその効用は、常用すれば人を容易く廃人に変
えるという。

だが、その効用は計り知れない。

僅かな時間とはいえ、普段以上の力を得ることができる。

「
」

——舌が乾く。

覚悟したところで、恐怖心は消え去らない。

力が続くのはあくまで数秒。

それを越えた瞬間、堪えられないであろう激痛がこの身を襲う。

捨てればいい。この薬の調合法を手に入れたとき何度も思ったことだ。

鬼人薬を遥かに超えるその効用。それは、人間では堪えられない力。それが分かっているながら、何時までもポーチの片隅に追いやり。未練がましくもっていた理由。

——考えるまでもない。

守りたい“女”がいる。

「ああ………それで、充分だ」

命を賭けるには、充分すぎるほどの理由だ。

開けたままの瓶に口をやり、その中身を一気に飲み干した。

「——ッ、ア!!」

喰いしばった歯から声が漏れる。

暴走する血液、膨張していく血管。通常の人間では耐えられないであろう力を行使するタメに全身にくまなく血液を送る心臓が鼓動の

ギアを上げていく。ファースト、セカンド、サード。暴走していく鼓動に耐え切れず、膨張しすぎた毛細血管が悲鳴をあげる。

——ビキリ！

爪が……割れた。

指先の毛細血管が、流れる血流に耐えられずに決壊する。溢れた血潮は柄を辿り、刃先へと収束する。

……問題ない。

流れる血潮は鼓動の証。

故に我が専心は、敵を砕くことのみに使われる。

——20秒。

それ以上は恐らく心臓が持たない。限界を超え、筋肉に血液を送り続けるポンプが叫びだす。

「——ツツ、ア、ガ」

脳髓を突き刺す電流が、視界をクリアにしていく。溢れる力、人間では決して使ってはならないモノを恐れ。脳内で危険信号が鳴り響く。

……問題ない。激痛は生存の証。

余分な情報は必要ない。必要なのはヤツを撃ち砕く“力”のみ。

20メートル先には、幻獣キリンの姿。

その爆弾すら弾く体に俺の攻撃が効くかどうかなどワカラナイ。

そして、俺の太刀“斬破刀”の属性は雷。

同じ雷属性のキリンには、雷属性はダメージを与えることはできない。

……ならば、属性を超えた攻撃力のみでヤツを撃ち砕く。

凝視する、ヤツの動き全てを余さず追うために己が視力の全てを動員する。

ヤツが雷光を纏う。

一撃で敵を打ち砕き、ババコンガの厚い筋肉すら貫く強靱な角。

数多の爆弾を喰らわした俺達を敵とみなし、ヤツの殺意が俺へと収束する。

キリンは大きく嘶くと。雷撃を纏い俺を討つために白い流星の如く走りだした。

—— 幻獣、キリン。

ヤツが生まれたてだろうと、歴戦の戦士であろうと俺がやることは変わらない。

お互いに恨みはなく、全ては偶然の出会い。

——、1秒。

雷を纏いて駆ける幻獣に通常の斬撃は通用しない。
己が全力を超えた一撃でしか、ヤツには対抗できない。

「——ハ、アアアアア！！！！」

脳裏に浮かぶは基本の太刀筋。

あらゆる敵を倒すために人間が生み出した凡庸な攻撃。

だが、侮るなかれ。凡庸とは凡人が積み上げたモノに他ならず。

永き刻を超え練磨した技術に、不可能などないのだということをして！

——、2秒。

目前に迫るのは、幻獣最強の攻撃手段にして最大の弱点である角。
雷撃を纏い、疾風と化したその突撃を……一足一刀にて迎え撃つ。

——ギィィィンンン！

脳天から股まで連撃で2撃、怯んだところを喉に全力をもって突き。睨丸から肋骨、肩を通り脳天の角を目指す斬り上げ。狙うべきは、この4連撃。

怪力の丸薬で力を増そうと、人間はそれ以上には動けない。狙いを定め、爆弾で弱っているであろうキリンの首を狙う。

——その瞬間、キリンが前足を上げた。

全てを打ち砕くキリンの雷撃。

それを喰らえば俺に後はない。

だが、俺の後ろにはスズネがいて。怪力の丸薬の効果時間はあまりにも短い。

嘶こうとするキリン。振り下ろされるであろう落雷。

音速を遥かに超えるであろう、雷撃を………神速をもって凌駕する

！

「——オオリヤアアアア！——」

叫ぶ獣。言葉を話すこともできず気合の言葉を発することもできない。

たまった練気を太刀に乗せ、キリンの嘶きを叫ばせないように。

——上段から太刀を斬り下ろした。

溜まりきった練気、これを爆発させるために大地に踏ん張った足を中心に力を溜めていく。

足、膝、腰、肩、肘、手首を伝わっていく力を乗せ。全てをキリンに叩きつける。

気刃斬りだ。そこから、突き撃ちこみ。更に気刃斬りへと繋いでいく。

右に左に、眼前で小さく払いを挟み、最後に大胸筋が軋む音を見捨てず大上段からの気刃斬りを叩き込む。

……だが倒れない。

アレだけの爆弾、更には属性自体が効かないとはいえ。太刀自身に限界まで威力を込めた気刃斬りを受けてもキリンは未だ健在であった。

「ッ——は、あ——……！！！」

踏み込む。限界は近い。

嘶きを止められた麒麟の動きは鈍い。

体を切り刻まれ、爆弾を喰らい続けた麒麟より俺のほうが速い。

太刀を胸元まで上げ、ランスの様に叩き込む。

……だが、弾かれた。

限界まで酷使した太刀は切れ味を僅かに失っていたのか。

気刃斬りを終えた刃は麒麟の硬い皮膚に阻まれる。

そして。目の前には角を構えた麒麟の姿。

人間の速度は所詮、人間。

音速にすら近づけない人間が、雷速と同じ速さの攻撃をかわせるはずがない。

あと一撃。それで倒せるはずの麒麟に俺の攻撃が届かない。

弾かれたすぐ後の俺と、今、まさに俺を突こうとする麒麟ではスピードが違う。

嘶きをやめたヤツは俺の目の前で角を俺の胸に刺そうとしている。

麒麟の一撃。通常時なら耐えられるとしても今の俺には耐えられない。

怪力の丸薬で底上げた俺の体力は、今この瞬間にも尽きようとしている。

「——ッ!!」

ならばどうする？

全能力を回避に費やすか？ だが、あまりにもギリギリのタイミン

グ。

2 撃目をいち早く気がついた俺ならかわせる。
麒麟の雷角は俺の鎧をかすめていくだけだ。

——だが、それで即死。

雷を纏った麒麟の雷角は、見切りなどという甘い回避を許さない。
角をかわしたとしても纏った雷は俺の血流を阻害する。

通常時ならともかく。今の俺はドーピング状態。

普段より速い心臓の鼓動は、外からの衝撃で容易く暴走する。
まして雷撃。暴走した心臓を破裂させるにはうってつけの攻撃だ。

ならば、答えは簡単。

己の鼓動を囷にして、ヤツの鼓動を撃ち砕く。

弾かれた太刀。それをそのまま大上段に構え麒麟の雷角を打ち砕く。

——パキイイン！！！！

叫ぶ俺の太刀は麒麟の雷角が俺の胸を貫くより一瞬だけ早く、
……その雷角を押し折った。

遅れて俺の斬破刀から、電撃が奔り。折れた雷角を彩っていく。

俺の殺意に恐れをなしたのか。それとも初めての死力をつくした戦いに疲れたのか。

キリンは一瞬、動きをとめた。それが運命の分かれ道だった。

そしてキリンは、それで力尽きたのか。ゆっくりと地に伏していく。その姿を見ながら、俺はベースキャンプからクエスト終了の花火が上がるのを見た。

“コテツ、約束は守ったぞ”

ポケット村で、己の主を心配していたオトモアイルー。

ヤツとの約束を声にならない声で呟きながら、俺は膝をついた。

時間切れた。怪力の丸薬の効果は20秒。

ババコンガ6匹の戦闘。更にはキリンとの戦闘で力を使い果たしたのか。

俺はキリンの傍に倒れこみ、ゆっくりと目を閉じていく。

「——ケビン、ケビン!!」

足を引きずりながら、俺の名を叫ぶスズネの声を聞きながら。

俺は疲れきった体を休めようと、目蓋を閉じた。今はただ目蓋が重い。

眩しかった視界に影が差し込み。

「ケビン。

……お疲れ様」

スズネの小さな声と、柔らかな感触が唇に触れるのを感じながら。

……俺はゆっくりと意識を失っていった。

< 続 >

感想は感想提示版にお願いします。

感想をいただけると作者が狂喜するのです m (_ _) m

ファースト〱初めての〱（後書き）

はい、というわけでオリジナル設定。

怪力の丸薬は体に悪いでした。

あと、ナイフは村で買えるという設定にしております。

投げナイフは買わして欲しいという、一個人としての願望です。

キリンがでてくるというのは最早、お約束でしたね。G級では沼地にキリンがでてくるのでまあいいかな、と。

そして、文字数について2万字突破……OTL……。

本当、ごめんなさい。もう少し短くするよう努力するのです。

剣鍛（前書き）

P V 24 , 407 アクセス ユニークアクセス2 , 425 人
皆さんありがとうございます。これからも頑張るのです。

そして、ゴメンナサイ。コメディー分が少なめになってしまいました
た（汗）

剣鍛

……夢を、みていた。

夜風に吹かれ、一段と冷え込んできた沼地。

キリンの雷撃を喰らい、身動きが取れなくなった私はケビンの背中を見ていた。

彼が戦うのは雷を操る幻獣キリン。

並みのモンスターを遥かに超える移動速度とあらゆる属性攻撃がほぼ効かないという、神秘の獣。

対するケビンは凡庸なハンターだった。

両手が揃っていた時でさえ、私を超える能力はなく。力も凡庸。まして今の装備は、ブランゴシリーズ。

炎と雷に耐性が低いその装備は、キリンと戦うには不利すぎる。

更に、彼がもつ太刀は“斬破刀”雷属性を持つその太刀は、雷属性に耐性があるキリンに対して効果が薄い。

にもかかわらず。

月光と雷光に彩られているケビンを見て。私は、とても……とても美しいと思ったのだ。

モンスターハンター“隻腕の狩人” 第8話

ヌメール村。

キリンと戦った狩場。ヌメール沼地の近くにあるその村に私達はいた。

キリンとの死闘、更にはキリンの雷撃に毒沼の毒を喰らった私の治療と“怪力の丸薬”なんて馬鹿なモノを飲んだケビンの治療のためだ。

本来は、回復薬グレート。もしくは秘薬でもあれば。私達の傷はある程度まで治ったのだが。

残念ながら、ババコング。更にはキリンとの死闘で使い果たしてしまったのだ。

ヌメール村には知り合いのハンターもいないため、秘薬など貴重な薬も分けてもらえず。

そのため、ヌメール村についた瞬間に私達は気を失ってすぐ病院に入院することになった。

ケビンは3日間、私に至っては1週間ベッドから起き上がることができなかったのだ。

そして、私の入院1カ月後。そしてケビンの退院の日に私達は最強の敵に出会うことになった。

「——くっ……」

ケビンが唸る。最強の敵を前にして膝が崩れ落ちようとしている。幻獣にすら屈しなかったその意思が、今崩れようとしている。

ケビンの、いや私達の考えられる限りの手は既に尽くされた。その全てが弾かれ、毀たれ、叩き伏せられた。

もはやこの敵に勝てる術は無いのだろうか？

いや、そんなはずは無い。絶対突破口はあるはずだ。

諦めない限り、たとえ敵が古龍だろうと、伝説のモンスターであろうと打ち倒すことが出来る。

挫けない限り負けることは無い。

「ケビン……もうダメかも」

「馬鹿、諦めるな。諦めたらそこで試合終了だぞ」

「でも……」

「だが、コイツはもう無理だろ」

ガッツまで弱音を口にする。

上位ハンターで歴戦の戦士、そして私より遥かに強い、男。

大剣使いのガッツすら勝てない敵。それは。

「——何とか、なりませんか？」

涙目で私達を睨んでいる親方の娘でもあり、鍛冶師である“マイ”だった。

「マイ。村に帰ってからじゃダメなの？」

「でも、今回の意見交換会はずいぶん鬼斬破を作って見たいんです！」

うう、まずいわね。唇を噛み締め、涙目で睨まれると結構迫力あるわ。

女の私でもクラツとくるんだから……って、ケビン、アンタドサクサに紛れてなにマイの肩に手を置いてるのよ！！

沼地でのことといい、後で少し調教が必要かしら。

それにしても、めんどくさいことになったものね。

前回のクエストで、私達が麒麟を倒したという報せを聞いたガッツは、ヌメール村で鍛冶師の意見交換会があるというマイさんを連れて、ヌメール村に来たのだ。

麒麟の雷尾を手に入れたケビンの太刀“斬破刀”を“鬼斬破”に強化するためとその様子をヌメール村の鍛冶師にみせてお互いに勉強をするためだという。

ソレによつて、お互いに知らない技術を教えあい。更に凄い武器を生み出すために共に切磋琢磨するのだ。

ソレを聞いたガッツはシエリルにポケット村の警備を任せ、ケビンの部屋から勝手にその他の必要素材を奪い（一つ間違えたら泥棒じゃないの？）意識を取り戻したケビンと私にその旨を伝えたのがさっきの話。だが……問題は。

「金がねえ、とはなあ」

「今回は何が起こるかわからなかったからな。道具を大量に買い込んでしまったんだよ」

ババコンガ8匹。それで終わらない可能性、ソコまで考えて大量の爆薬。防具を限界まで強化。さらにはナイフまで買ってしまったケビンのサイフはかなり軽くなっていた。

それでも“鬼斬破”強化に必要な額くらいはあったので気にはしてなかったのだが。

それも今回の入院費用でかなりの額がなくなってしまったのだ。

おかげで、ケビンは鬼斬破に強化するために必要な金がない。本来なら、余った素材を売り。その金で鬼斬破に強化すればよかったのに。

ココは私達の村ではないため余った素材はない。だから。

「やっぱ、諦めてさ。村に帰ってから鬼斬破に強化すれば「ダメ、なんですか?」……」

———
マイの拒否権発動。

よっぽど今回の鍛冶師同士の意見交換会と麒麟の雷尾を使えるのを楽しみにしてたのね。

涙目で唇を噛み締めながらケビンを睨んでいる。怖いわねアレ。

でも、ケビンを見上げるその瞳が潤んでいるのは……気のせいだろうか？

っつか、ケビン！

あんた、なに頬を染めてるのよ！

「じゃあ、俺の防具を売るか「だめ！」……………」

「けどな、スズネ。他に方法が」

「帰りだつて狩場を通るんだから、危険でしょ。防具を売るなんて絶対にダメ！」

「じゃあ、キリンの素材を『ソレもダメ！』……………」

なに考えてんのよ！

キリンなんて滅多に手に入らない古龍の素材なのよ。

防具としても優秀だし、武器にだって使えるんだから！

アンタみたいに死にたがりの馬鹿は、できるだけいい防具そろえたほうが良いに決まってるでしょうが！

さつきからこの繰り返しである。

どうしてもココ。ヌメール村で鬼斬破をつくり、新たな技術を手に入りたいマイの気持ちもわかる。

でも譲れない一線というものがあるのだ。

とはいえ。困った。

私のお金は村の修繕費として村に殆ど貸してしまったし、ガッツは旅に必要な最低限の額しか持ち歩いていない。金を借りるという選択肢も無い以上、どうしようもないのだ。

意見交換会まであと3日。

ギルドの規定により。鬼斬破の持ち主であるケビンが強化費用を出さなければならぬ。

だが、あと3日では金を稼ぐために狩りにいくこともできないのだ。となると。

「おっさん。なんかねえのかよ？」

「お前、最近本当に遠慮がなくなってきたな！」

いや、ケビンが怒るのも当然よ。

あんだ、かつてに部屋に入って素材をあさってきたんでしよう？
しかも、狩場にお金をもつてこないハンターが多いって知ってるのに、お金だけでもつてこないなんて。ケビンじゃなくても怒るわよ。
せめてハト便とか古龍観測所に連絡をお願いするとか方法はあったでしょうに。

「まあ、普通に考えてクエストを受注するっきゃねえわな」

「んなこと言っても、高額な依頼を引き受けるほど俺もスズネも回復してねえぞ」

「まあ、キリンと戦ったんだからな。もう2〜3週間は休んどいたほうがいいだろう」

「だから、あと3日で金が必要なんだって！」

横で「やっぱりダメなんですか？」とばかりに涙目になるマイ。

溢れんばかりの胸が、モジモジと動く指の前でタフンタフンと揺れている。

……………くそ、見せびらかしやがって。

マイにはそんな気持ちはないのかもしれないが、その揺れるモノを見てから男共の意見がよりヒートアップしている。

「だからよ。前払いの依頼を受ければいいんじゃないか？」

「前払い？ そんなのあったけ……あっ！」

「そういうことだ」

マイの隠れた巨乳の力なのか。それとも元々その気だったのか。

ガッツの提案に、ケビンがなるほど肯いている。ついでに、マイも嬉しそうだ。

……なんか、むかつくわね。

マイも私達も幸福になるって方法なのに、何でこんなにムカツクのかしら？

通常、狩りを行う時は契約金をギルド。もしくは村長に渡し、狩りが成功したら報酬を貰う。

いわゆる後払い方式だ。

だが、コレとは別に前払い方式の依頼もある。

それが“護衛”だ。村から村、街から街へと定住の地を求めて流離う人々。もしくは村がモンスターに襲われて住む場所を探している人々。また、村々に品物を届ける行商人のキャラバン。

彼等を目的地まで運ぶというのも、立派なハンターの仕事だ。

少ない人数で大勢の人々を守るというのは中々に大変であるが、それだけに報酬はかなりいい。

また、狩りと違い長時間拘束されるため道具を多くもっていかなければならず。

その道具代として前払いで報酬の何割かをもらえる仕事もある。

「でも、そんな都合のいい仕事あるのか？」

「ちょうど、技術交換会の後ポケット村に行きたいって行商人もいるらしくてな。お前なら地元だし丁度いいんじゃないか？」

「出発は？」

「技術交換会が終わった後、道具を売ったり新しい土地の情報を集めたりで3週間くらいかかるらしいからな。お前らの治療が終わるのとはほぼ同時期だ」

「——スズネ、どう思う？」

「ん、私は良いと思うわよ」

「了解、じゃあ俺がその辺の交渉はしてきてやるよ」

「……いいのか？」

「こついうのは上位ハンターが行ったほうが話が早いしな。最低でも鬼斬破の残りの金額くらいは手に入れてきてやるよ」

そう言いながら、この村のギルドへとガッツは歩いていった。

まあガッツなら大丈夫でしょう。巨乳星人一号（今、命名）とはいえ、一応上位ハンター。

こついう交渉事は任せて問題ないとおもうし。

それに少々予定外だが“鬼斬破”が早く手に入るならそれに越したことはない。

強力な武装はそれだけで狩りの成功率を高めるし、上位のクエストも楽になるだろう。

私はともかく、ケ빈はできるだけ強い武装をしておいたほうがいい。

そう思っていると。

「すみません、ケ빈君。それにスズネちゃんも」

「いいわよ、マイの腕が上がれば私達も助かるしね。今度コーヒーでも奢ってくれたらチャラよ」

「でも、そういうわけには……………」

「私がイイって言うてんだから、いいのよ。ね、ケビン…………ケビン？」

今日で退院のケビンが難しそうな顔で、なにか考え事をしている。また何か馬鹿なこと考えているんじゃないでしょうね？

「うん。そうだな、じゃあ俺は前に言ってた“アレ”お願いしてもいいですか？」

「ああ“アレ”ね。そうと決まれば、今からなんてどう？」
「ええ、OKです」

なにやら私を無視して仲良く話を進める2人。
なんだか、もの凄く。面白くない。

「なによ、何の話」

「ん……。ナイシヨ、だ」

「ナイシヨ、よ」

ぴつたりと息のあつた2人をみて、私のコメカミが“ビキッ”と音をたてる。

ふうん。私に隠し事をしようだなんて、いい度胸じゃない！

私はそのままベッドから降りると、ランスの代わりとばかりに寝ていた“ベッド”を持ち上げた。

無論、狙う先はタダ一つ。ケビンの頭だ。

「ま、待て待て。落ち着けスズネ！ お前まだ病人なんだから、無茶して動くな！！」

「そ、そうよ。ただケビン君が剥ぎ取り用のナイフを自分で鍛えた
いって言ったただけなんだから」

剥ぎ取りナイフ？

その言葉で私は、持ち上げていたベッドを床に下ろした。

止めるのがもう少し遅かったら誰の頭にソレが落ちたのかは、言わ
ずもがなだ。

まあ、不幸な事故がおきなかったのは素直に喜ぶべきところね。

「い、いや。ソレは間違いなく人災、だよ、な……スイマセン、事
故です」

もう一度ベッドを持ち上げると、ケビンも私の決定の正しさが分か
ったようだ。

素晴らしい速度で土下座をしている。

一方、横ではマイが苦笑いをしている気がするがきつと気のせいだ
ろう。

「つで、何で今更剥ぎ取りナイフなんて欲しいのよ？」

「ん、いや最近剥ぎ取りに失敗することが多くてさ。そろそろ寿命
かな。と」

“剥ぎ取り”

それは、ハンターにとって必須の技術であるといっていると思う。
モンスターを狩り。ソレらの素材で生計を立てているのだから、モ
ンスターから素材が剥ぎ取れないのでは意味がない。

それだけに解体の手順は違えど、ハンターはそれぞれ自分なりの剥
ぎ取り技術をもっている。

だが、どんなに卓越した技術を持っていようと所詮は人。

剥ぎ取りにくいモンスターなどでは、剥ぎ取りに失敗することはベテランでもあるというけど。

「そんなに失敗してたっけ？」

「まあ、な。できることは少しでもやっときたいんだ」

ふん。と肯きながらも、私はそれほど心配はしていなかった。

鬼斬破を鍛えるというのなら、死ぬ気で止めるが剥ぎ取りナイフぐらいなら素人でもいいだろう。

実際、自分の道具に関することなのだ。

色々とこだわりもあるのだろう。

「分かったわ、大丈夫だと思うけど無理するんじゃないわよ」

「大丈夫よ、私も見張ってるし」

なら安心ね、と笑う私に「俺はそんなに信用がないのか？」とケビンが少し凹んでいた。

あれだけ無茶をするんだから、気になるのは当然だ。

まあ、剥ぎ取りナイフを作るくらいで間違いなんて犯さないと思うけど。

スズネを病院に残し、俺とマイさんはヌメル村にある鍛冶場へと歩いていった。

本来、モンスターを狩るための武器を鍛える工房は鍛冶師にとって聖地であると言ってもいい。

そして、実用品である以上。工房同士の技術交換は必須だ。

タダでさえ人間より遥かに強いモンスター。
そのモンスターと戦うためには生半可な武器では戦えない。

故に、定期的に技術交換会があるので鍛冶師同士、比較的工房の出入りは自由だ。

それでも、鍛冶師でもない俺が鍛冶場に入るのは例外中の例外である。

「なんか、無理言っつてスイマセン」

「いいのよ、ケビン君の気持ちもわかるし」

マイさんは、ニコニコ笑いながら俺のわがままに付き合ってくれている。

そのあまりにも優しい微笑を見ると、不覚にも顔が赤くなってしまう。

いい人だな、マイさんって。優しいし、よく気がつくし。

ポケット村でお嫁さんにしたい人、ナンバー1という噂は本当かもしれない。

「——ケビン君、……その格好ではいるの？」

「え、なにかマズイですか？」

鍛冶場に到着すると、マイさんが不思議そうな顔で俺を見ている。俺の装備はブランゴシリーズ。代わりの装備ももってきていないし、私服もないんだが。

やっぱり防具姿で鍛冶場に入るというのは、マズイのだろうか？

「ううん、別に服装規定はないんだけど。中は“暑い”よ？」

「あっ、そうか。ソレがあつたか」

雪山に生息するモンスター、ドドブランゴは寒さに強いが暑さには弱い。

そのドドブランゴの素材を使ったブランゴシリーズも、その弱点を引き継いでしまっている。

雪山などでは使いやすい防具だが、暑い場所。特に火山や砂漠には向かない装備だ。

そして、これから入るのは鍛冶場。あらゆる鉱石や素材を溶かす工房の熱気はハンパではない。

いつもは、専用の服で入るから気がつかなかった。

あれ、防具並みに頑丈だからな。

「じゃあ、脱ぎますけど……火傷しませんかね？」

「安心なさい、コチラでの鍛冶場専用の装備を渡してあげるわ」

マイさんは何故か嬉しそうにしながら、鍛冶場へと入っていった。

熱気の籠もる室内に鋼を鋼が叩く音が響いている。

鍛冶場では数人の職人が火に鉱石の塊を入れては叩き、形にしている。

見るからに体格のいい人間達。そのなかでも一際おおきい人影がコチラを向いた。

「おう、マイじゃねえか」

「こんにちは。今日はよろしくお願いしますね、親方」

「おう、つてことは隣のソイツが例のコゾーか？」

「ええ、可愛いでしょう？」

童顔を気にしている俺はマイさんに可愛いといわれて少し、憮然と
していた。

とはいえ、鍛冶師でもない俺を鍛冶場に入れてくれるこのヌメール
村の親方に文句を言うわけにもいかない。少し不機嫌になりながら
も、頭を下げた。

「へえ、オメエが麒麟を倒したのか」

「別に俺一人で倒したわけじゃないですよ、スズネが助けてくれた
からです」

ヌメール村では古龍種を倒した男として少し俺の名前が有名になっ
たようなのだが、少し心苦しい。

実際はスズネが爆弾を仕掛け、時間を稼ぎ、攻撃をしてくれたのだ
から何とか倒せたのであって。

俺がしたのは、投げナイフを投げて最後に攻撃をしただけだ。

「へえ、随分と殊勝じゃねえか？」

「事実ですから」

無遠慮な視線を向ける親方に、苦笑で返した。

実際、幸運ということもあったのだろう。伝説の古龍種とはいえ、
倒せたのは奇跡に等しい。

「まあ、でもそういうな。俺達も久しぶりに上位素材を使えて嬉し
いんだよ」

「——っへ！？ 上位素材？」

「親方、しー、しー！」

「あ、いけね。秘密だったんだっけか？」

慌てて、親方の口をマイさんが塞ごうとしたのだがもう遅い。

下位だとばかり思っていた麒麟が……上位？

爆弾をアレだけ喰らっても倒れなかった理由はソレか。だが、思い当たることはある。

上位ハンターのセリフだが、上位のクエストでも下位の素材が取れることは多いらしい。

上位の大型モンスターを倒しても、下位の素材が多かったり。

また噂では、G級のクエストにもかかわらず上位の素材が多く取れることもあるという。

モンスターには個体差があり、下位に近い強さしかもっていない上位。上位に近い強さしかもっていないG級もいる。

それが、大型モンスターの上位クエストでも下位の素材が取れる理由だ。

そして、アレだけ小さな個体が上位の素材をもっていたという理由。

「親が、G級の麒麟だつてことが」

「察しがいいじゃねえか」

ニヤニヤと笑っている親方の横で、マイさんが頭を押さえている。実際、困っているのだろう。

口止めをしたのはスズネかガッツかは知らないが、なるほどと思う。

麒麟の素材を売ることにスズネが抵抗した筈だ。

上位素材なんて滅多にお目にかかれないからな。

数が少ないとはいえ、貴重なんだろう。ガッツが黙ってたのは……

…完全にからかうためだな。

アイツはそういう奴だ。

それに麒麟を倒した後、俺は意識を失ったため剥ぎ取りはしていない。

だから気がつかなかったのだが、剥ぎ取りをしたのはスズネだから

気がついたのだろう。

更にキリンの素材を得るために村に運んだのはギルドに雇われてるアイルー達だ。その中で、下位素材に混じって上位素材があった。そして、生まれたばかりなのに上位の素材をもっているというのなら。

“親の血統”という可能性が一番高い。

ギルドナイトは陸上輸送手段として馬“サラブレッド”を使うという。

そのサラブレッドは両親の足が速いと、子の足も速くなる可能性が高い。

モンスターも同じなのか、親が強靱な肉体だと子も強靱な肉体になるのかもしれない。

だとすれば。親は……。強力な上位のキリンかもしれない“G級”。

「だが、安心しな。親のキリンはG級のハンターが倒したとよ」

「へっ!？」

「ガッツさんが悔しがってたわよ、『俺の獲物が盗られた』って」

まだ上位ハンターのクセに、G級のキリンを倒そうとしてたのかアイツは？

無茶にも程があるぞ。

「ま、まあ。その辺は後で話すとして。まずはケビン君のナイフを作らしましょう。ナイフを」

慌てたようにいう、マイさんをジト目でみながら。俺達は更に奥へと入っていった。

“剥ぎ取りナイフ” モンスターの素材を剥ぎ取るそのナイフは、切れ味を極限まで追求した姿と言っている。

多少、剥ぎ取りにミスするときがあるとはいえ。

戦闘中、弾かれるような硬いモンスターが相手の時でさえ。殆ど弾かれることがない。

だが、その鋭い切れ味のため。威力は犠牲になってしまった。

殺し合いのとき、斧と医療用のメス。有利なのはどちらか？

と訊かれれば。10人中、9人は斧と答えるだろう。

切れ味だけなら医療用のメスのほうが遥かに勝るにもかかわらずだ。

ソレと同じで、剥ぎ取りナイフには戦闘能力より。あくまで効率的に剥ぎ取れる能力のみを求められる。そして、切れ味が良いもの。

ここから、導き出されたモノは。

「本当に小太刀でいいの？」

「はい、お願いします」

小太刀。廃れてしまった流派の一つに小太刀術というものがあったという。

人間相手に戦う術として鍛えられた技。だが、片手剣より軽量で短く。更に盾がないその武器はモンスター相手には通用しなかったという。

そのため、その技術は“太刀”を鍛える鍛冶職人が最初に練習する程度の技術しか残っていない。

だが、切れ味。コレに関してのみならば、小太刀は太刀に勝るという。

だからこそ、小太刀を剥ぎ取りナイフにする価値がある。そして、太刀に関してならばマイさんは親方以上の腕を持つ。

「わかったわ。じゃあ、始めるわよ」

マイさんにコクリと肯くと、俺は鉾石を鍛えるためのハンマーを握り締めた。

あれから数ヶ月。片手で戦うためにとガッツに連れて行かれた場所が鍛冶場であった。

マイさんや親方に教えられ、鍛え続けた技術。その集大成がココにある。

まずは、俺が今まで使っていた剥ぎ取りナイフを出す。

改良に改良を重ねて作り出したそのナイフ。マカライト鉾石と大地の結晶が混じったその底冷えする光をそのままに、限界まで熱した“炉”に入れた。

燃石炭、更には爆炎袋の熱で限界まで熱せられた炉に俺のナイフが溶けていく。

さてこれから俺の出番だ。

溶けた鉾石。これを叩いて伸ばす圧延作業、次に伸ばした板を細かく砕いてテコ台に乗せる。

本来なら型に入れ、叩いて鍛えるのが本流なのだが。

小太刀、日本刀と呼ばれるモノは少し違う。

まずは和紙で包み、灰をかけ、灰汁をかけてから火床に入れる。

この一手間が太刀の明暗を分けるといつてもいい。
そして炉に入れ、充分に加熱してから。

真っ赤になった鉄をハンマーで打ち続ける。

このハンマーでの打ち。コレこそがガッツがココで俺に教えたかったことである。

ハンマーの重みに負けない力と体力。そしてそれをミリ単位で正確に打ち下ろす技術。

ソレこそを学ぶために、俺はココへと来たのだ。

片腕の俺が両手を使える人間に負けないハンターになる。

その為に電気袋をいれた、俺専用のハンマーを作ったのだ。

（こんなものまでもってくる暇があるのなら、金をもってこいといいたい気持ちもあるが）

そして。本格的に武器を鍛えることは無理だが、その前段階。

鉱石や鉄を鍛えることぐらいはできるようになった、俺。

今の俺なら、コレぐらいのことはできるはず。

マイさんがハンマーで指し示す箇所に正確にハンマーを当てる。

火花と共に不純物が、飛んでいく。

不純物を正確に読み取り、その場所を探し当てるのがマイさんの仕事なら。

それを正確に叩くのが俺の仕事だ。

鉱石を叩き続け、それでも残っている不純物を端に追いやりながら小太刀を叩き伸ばしていく。

そして、ある程度の強度を保てた所で水に入れ、急冷、残った部分を細かく割っていく。

引き続きテコ台を作り、テコ棒を付け、テコ台の上に先に割った鋼

を積み重ねる。

一通り積み終えたところで、和紙で巻き、藁を焼いた灰をまぶして更には泥汁を掛けた。　いよいよ鍛錬だ。

「本当に、いいの？」

「ええ、お願いします」

不安そうなマイさんに、もう一度お願いした。

その手にあるのは、余った“麒麟の雷尾”に“麒麟の皮”。

コレを鍛錬と共に、小太刀にこめる。

俺がもっていても、使い道がない。道具箱の中に腐らせておくのも惜しい。

ならば、せめてもの記念として。

「——スズネちゃんも幸せね」

「完成すれば………ですけどね」

そして、さいごの鎚を振るった。

スズネへの、ありったけの思いをこめて。

麒麟の雷尾に鉄を包み、叩き伸ばしながら形を整えていく。

幻獣麒麟。その素材は並の鉱石より遥かに硬く、その使いどころは難しい。

まして俺が創るのは剥ぎ取りナイフ。それでも、俺はこのナイフに麒麟の素材を使うことを躊躇しなかった。

2人で倒した麒麟。

その姿を心に秘め、その猛々しい姿が少しでもスズネを守ってくれることを信じて。

ただ、鎚を振るい続ける。

スズネが掴みやすい形、スズネが振りやすい大きさ、剥ぎ取りやすい刃先、持ちやすい重さ。

その形を脳裏に描き、ただその形を追い求めて鎚を振るい続ける。

目の前には紅き鉱石の塊。

熱せられた塊は麒麟の素材と共に、新たな小太刀へと鍛え上げられていく。

だが、俺の心には。スズネの姿しか見えなかった。いつも村の為に戦い、迷い、傷ついていたその姿。それでも。前を向き、俺を励まし戦い抜いた。

時に厳しく、時に優しく。そして、俺をからかいながら楽しそうに笑う姿。

意地っ張りで、そのくせ正直で。うっかりミスをするときもあれば、我侭をいうときもある。

その姿を思い描きながら。タダ工程を繰り返した。素延べが終わり、切っ先も造り、刀の形を整えて、焼き入れをし、そして焼き鈍しも終え。

「あとは、コレだよ」

マイさんが何時の間にかくれた、砥石を手に取り。

鍛冶研ぎを始めた。小太刀を贈る相手、タダその姿を思い浮かべながら。

研ぎ続けたのだ。

「——綺麗な剣、ね」

「いや、コレは剥ぎ取りナイフでして……………」

「綺麗な剣よ」

マイさんはなぜか愛おしそうにその出来上がったナイフを見ていた。剥ぎ取りナイフなのだが、何故か“剣”だと言い張っている。だが、おおむね高評価なようで少し安心した。

出来上がった剥ぎ取りナイフは、ナイフとしては少々大きく、長さが約50センチ近くある。

キリンの素材を使ったことで底冷えする蒼い刀身は、絶大な切れ味を保障する。

厚みのある刃、そして鞘に使ったキリンの皮は無防備な背中を僅かでも守ってくれるだろう。

今の俺ではコレで精一杯。あとは、コレをスズネが受け取ってくれるかだ。

「じゃあ、ちよつといつてきますね」

「あ、ケビン君……………」

「へっ!？」

早速、スズネの所に行こうとすると。

マイさんが俺を呼び止めた。なんだか、モジモジと手を動かした後。

「……………うっん、なんでもない。スズネちゃんが喜ぶといいね」

「はい、ありがとうございます」

マイさんは結局何もいわず、俺はそのまま走り出していった。

「本当に幸せ

モノだわ……………スズネちゃんは」

後ろで小さく何か聞こえた気がした。

———外に出れば、何時の間にか日が昇っていた。

片手剣より短く更に盾がないとはいえ、やはり武器。

キリンの素材を使った剣、もとい剥ぎ取りナイフを作るのはやはりかなりの時間が必要だった様だ。

何時の間にか、夜は明け。太陽も随分と高くなっている。

そんな中、病院の面会の手続きももどかしく。

俺はスズネの病室へと入っていった。

「———ケビン！？　なによ今日は随分と遅いじゃない」

瞬間、ドキリとした。

中空にまで上がった昼の太陽は、病院の窓ガラスを透かし部屋を明るく彩っている。

その輝きがスズネの髪を彩り、明るく煌いている。

「スズネ、その髪」

「ん、ああ。入院中は邪魔だからね、髪を結ぶのやめたの」

ただ、髪をおろし。その髪をスズネは梳いていた。

櫛を使ってただ髪を梳いているその姿、その姿をとて美しく感じ。

——信じられねえ、俺は同じ女に……2度目の“恋”をしたのだ。

「んっ、どうしたのよ。顔が真っ赤よ？」

「い、いや気にすんな。なんでもねえ」

やばい、スズネの顔が見れない。

つか、俺の今の姿って最悪じゃないか？

鍛冶場から出てきたばかりだから汗だくだし、風呂にも入ってない。髪はボサボサだし、顔も洗ってない。

「んっ、どうしたってのよ？」

「う、わわわわ。急に近づくんじゃねえよ！」

「なによ失礼ね、人を化け物みたいに」

そういいながら、スズネはクスクスと笑っている。
まったく、なんでこんな女に惚れちまったんだか。

「——っん、コイツなんだけどよ」

「なによ、それって……片手剣、にしては小さいけど」

「剥ぎ取りナイフなんだ、一応」

そんなに不恰好だったか？

不思議そうに、ナイフを眺めるスズネに言葉を続ける。

「狩場で借りがあっただろ、その埋め合わせっていうか」

モゴモゴと続ける俺の言葉を不思議そうに聞きながら、「狩場？」と首を傾げた後。

——ボン！

とばかりに、スズネの顔が真っ赤になった。

「あ、ああアンタ。まさか、コレでチャラにしろなんて言つつもりじゃ」

「ち、違う、違う！　っていかさ」

「——何が違うって言うのよ！」

怒鳴り声を上げるスズネに、思わず俺も怒鳴り声を上げてしまう。

「気がついたら、お前のために剣を鍛えてたんだよ！」

「な、なによそれ」

思わず怒鳴り声を上げてしまった俺に、スズネは少し驚いたような顔を向けている。

大声を出して少し落ち着いた俺は、トーンを落として話し始めた。

「片手でも戦える体を作るために訓練の一部として、鍛冶場に行っ

てたのは知ってんだろ？」

「う、うん。ガッツも昔そうやって鍛えたって」

工房の熱気、そしてその中で重いハンマーや鎚を振るう職人の多くは筋骨隆々としている。

過酷な環境で、鍛えられた肉体は並みのハンターより力強い。

勿論、力が狩りの全てではない。

だが、タダでさえ力で劣るであろう隻腕。

パワーをつけるのに越したことはないと連れて行かれた先が鍛冶場である。

「でもよ、せっかく鍛冶場にたったんだから何か一振り武器を鍛えてみたかったんだよ」

「ソレはわかるけど……………」

「でさ、マイさんの親父さん、いや、親方に言われたんだ」

「なにを言われたの？」

「“武器を鍛えるのならば、その武器を振るう人にふさわしい武器を鍛えろって”」

「……………」

「最初は、自分にあつた武器を作るべきだと思っただけだ。でも俺ってさ、自分の戦う姿なんか見たことないし、自分の為に武器を鍛えるってなんか違うって思っただ」

そう、俺自身が戦う姿などどうでもよかった。

守りたいものはココにいる。そのために必要な形も決まっている。

「だから、俺が戦い方を知っているのは……………ちがうな。俺が始めて作った武器はスズネに贈ろうって決めてたんだ」

目の前では、輝く汗をそのままに私に話しかけている。

分かっているんだろうか、コイツは。ココが病院だということに。

言っていることは殆どプロポーズに近い。その言葉を聞いてコイツの後ろには野次馬が列を成して群がっている。

顔を赤くして「私もそんな事を言われてみたい！」と声なき声を叫んでいる看護婦さん。

そして、その看護婦さんに「なら、俺が！」と、どさくさに紛れてプロポーズしている入院患者。

「ええのう、若いもんは」などと黄昏ているお医者さん。

明日には、病院中の噂ね。そう考えて思わず溜息が漏れる。

まったく何考えてるんだろうコイツは。

男と女の機微って物がわかってない。

惚れたはれたの微妙な関係で、自分の本心を全部さらけ出して相手に決断を委ねる。

なんて恫喝外交みたいな手段でオチル女がいるとも思ってるのかしら？

しかもナニ？

初めてのプレゼントが剣？

ここは貴金属とか、狩りに使うならピアスとかが普通でしょうに。なのに、市販のモノがある剥ぎ取りナイフだなんて。

10人中9人は、引くわね。間違いなく。

でも……、10人中の9人をひいた残りの1人が“私”だと分か

つてるのなら凄いプレイボーイなんだろうけど。

「……………見てもいい？」

「お、おう。勿論」

さりげなく、ケビンに近づき開けっ放しのドアを閉める。

外から「うおー」とか「そんな、殺生な」とか「馬鹿。これから恋人の時間よ」とか聞こえるような気がするが、きつと気のせいだろう。

ケビンが鍛えたという剥ぎ取りナイフ。

その姿を、手にとり陽光にかざした。

蒼く光る刀身は、片手剣より短く剥ぎ取りナイフより長い。

厚みがあるその形状は、ナイフというよりケビンが使うという太刀に近いかもしれない。

大きさこそ違うがこの底冷えする光と、それでいて不思議と温かみのある力は。

「綺麗な剣、ね」

「ん、一応剥ぎ取りナイフとして作ったんだけどな。良かったら貰ってくれ」

「でも、これじゃつりあいがとれないわね」

「ぐつ、やっぱりそうか」

なんだか、勘違いしてるわねコイツ。

確かにつり合いが取れない。だって、キスでこの剣じゃ。

———この剣のほうが高価すぎる。

「うん、コレじゃお釣りを渡さなくちゃいけないわね」

「え、ああ。そういう意味か。いいぞ別に。スズネが満足してくれるのなら俺は満足だし」

「馬鹿ね、金銭や契約ってのは正確じゃなくちゃダメなの。流石にキス2回でこの剣じゃ悪いわ」

「……………そういうものか？」

「そういうものの……………だから、ケビン。私にもう一回キスをしてなさい」

「そういうものの……………だから、ケビン。私にもう一回キスをしてなさい」

スズネのセリフに、思わず仰天する。

「えっ、つか。いいのか」

「いいのよ、流石にキスだけであの剣を貰うのは気が引けるわ」

頬を染めて、横目で、しおらしい小声で話すスズネ。

その可愛い顔を見て。ゴクリ、と喉が鳴る。

キ、キスっていったよな。狩場ではどさくさに紛れてだったし、薬の味しかなかったし。

今度こそ、真正正銘のキス。それが、今こそ……………って。

「……………で、できるかあああ！！！！」

叫んだ。ゼロコンマ1秒、脊髓反射で返答したよ。

だって、スズネだぞ！　ずっと憧れてて、やっとこの間告白して。

ついさっきだって、髪の毛を下ろしてただけで惚れ直したスズネに
なんだってそんな事言われてるんだ俺は。狩場では緊急事態って事
もあったし、命の危機ってことで何も考えずにできたけど。

「なによ、たかがキスでしょ。古龍と戦うよりずっと簡単だと思う
けど」

「ば、ばか——！」

古龍と戦うほうがずっと楽に決まってるだろ——がつ——！

「ちょっと、ちょっと待て。それは変だ。おかしいぞ、いくらなん
でも話が飛びすぎている。騙されないぞ、この後“ドッキリ成功”
かなんかの札もったお兄さんがあらわれるんだろっ！」

スズネはじっとこちらを見ている。

その瞳に嘘はなく、どんな言葉で説明されるより真実味のある仕草
だった。

「あ、いやコレは——」

落ち込んだように、俯くスズネ。

その姿に、俺の頭はいいように茹びていく。

「まてまてまて、落ち着こうスズネ。こういうことはだな、お互い
好きなものどうしというか……」

実際、俺の剥ぎ取りナイフは大したづくりではない。

市販の剥ぎ取りナイフと切れ味はそんなに変わらないし、麒麟の

素材を使っただけで剥ぎ取りの成功率は大したものじゃない。

しかも初めて鍛えた、初心者作品。

そんなモノに大事なスズネの唇をなんて……。

「——ケビンは私じゃイヤなの？」

だっていうのに、なんでそんなありえないことを心配そうに訊くんだお前は！

「そんなわけないだろ。イヤだなんてことはない」

「うっん、ゴメン。ケビンがそんなに嫌がるなんて思わなかったから」

気まずそうに、視線を下げるスズネ。その顔をみて。

「——違う、嫌がっていたんじゃない。前も言ったとおり、俺はスズネのことが好きだ」

「——っ！」

真っ赤になるスズネの顔を見ながら、一気に言う。

「けど、だからこそ。コレがそういう打算的なものなのがイヤだっただけなんだ」

スズネに負けないくらい赤くなったであろう顔のまま、言葉を伝える。

熱い。顔に流れる血潮が普段の倍以上。下手したら怪力の丸薬を使ったときより顔に血液が集まっていく。

「…………えっと、それって」

「うん、おれはそういうのを抜きでスズネと……その、キスをしたかったんだ。だから反則だって」

言った、理性の限界を超えようとする本能を押さえつけて。

ただ真実の言葉だけを告げると。

スズネは小さく俺の傍に駆け寄り。

「——うん、じゃあそういうのを抜きで“しよう”」

小さく舌を出しながら微笑んだ。

その笑顔にときめく鼓動を押さえつけ、俺はその小さな肩に手をかける。

そのまま、小さく唇を重ね合わせた。

——この日。

俺達は彼氏彼女の関係になったのだ。

ちなみに、この後剥ぎ取りナイフにキリンの素材を使ったことでスズネにこってりと怒られたのはまた別の話。

< 続 >

感想は感想提示版にお願いしますm (_____) m
感想をいただけると作者が狂喜するのです。

剣鍛（後書き）

く、不覚。短くしたつもりが1万字をかるくオーバーしました。
ヤバイ。長く書くことがクセになりつつあるのです。
じ、次回こそ。コメディーを…………。

ケダモノ（前書き）

～前回までのあらすじ～

金と銀の火竜に襲われ片腕を失った主人公、ケビン。

彼を助けたハンター、ガッツの協力によって義手を手にいれハンターへと復帰する。

そして、数カ月後。調子を取り戻したケビンは相棒のスズネと共にクエスト中偶然にも幻獣キリンに遭遇し。何とか2人で幻獣キリンを倒した。

そして、これから語られるのは。彼らが留守にしていたポケット村で起きたある事件。

村の住民が危険にさらされるという事件であった。

ケダモノ

——極寒の地ポケット村、その村には小さいながらも農場がある。

雪深い山村にとって、大切な食料自給の場所であり様々な特産品を生み出す場所。

そして、村人達の憩いの場。時に釣りをし。時に子供のように虫を取る場所である。

また、ハンターにとっては狩りに必要なものを育ててくれるという大切な場所でもある。

薬草や怪力の種、また農場の鉱山からは僅かながらも鉱石がとれる。

その村人にとっても、ハンターにとっても大切な場所に……… 3 匹のケダモノがいた。

モンスターハンター“隻腕の狩人” 9 話 “ケダモノ”

草木も眠る丑三つ時。

雲の隙間から僅かにのぞく月は、その幽かな蒼い光を農場へと降りそそいでいる。

モンスターと人間が争うこの時代。

たとえ村の施設といえども、夜中には出歩かないコトが通例である。人間にとって危険な闇。その中をハンターでもない人間が出歩くと自殺行為としか思えない。

だが、そんな闇の中だからこそ。――村を狙う、3匹のケダモノがいた。

「ニヤニヤ、つけられてないかニヤ？」

「任せろ、こう見えても元ハンターだぜ！」

「ふ、村人に紛れるなど造作もないことよ」

小さな声で話す3人。夜、しかも狩り場に近い農場に人の気配はない。

だからこそ、この者達に気がつくモノはいない。

「では例ニヤ物を」

「ああ、極上モノだぜ」

黒い人影が包みを渡す。ガサガサと音をたてるモノを受け取るのはソレより一回り小さな影。

口調から恐らくアイル―族だと思われる。

アイル―族、人間と親交を持つ一族でありながら狩り場で出会えば手強い敵となる。

人間より遥かに小さいその姿は、モンスターの中では最弱と思われるが実は違う。

小さいにもかかわらず、巨大なモンスターの群れの中で生き残ってきた彼らの能力は侮れない。

その能力とは………知能。人語を解するのは勿論、その爆弾技術は

凄まじい。

人間が使う爆弾は雨天では使えないという弱点を持つが、特殊な耐水コーティング技術をもっているらしく、彼らアイルー族の爆弾は使える。

その能力だけなら人間以上だ。

そして……人語を解するといっても、彼らは所詮“獣”なのである。

生存競争の激しい自然界において、裏切りや騙しあいなど日常茶飯事。

人語を解する、アイルーもまた同様だ。

彼らにとって、それは裏切りではなく生き残るための正当な行為。己が生き残るためならば、主人である人間ですら裏切る。ソレが自然の掟。

——故に。

「では、コチラがアチキのご主人。スズネ様の“パンツ”と“ブラジャー”なのニャ！」

マタタビ欲しさに主人を裏切る、コテツの姿がソコにあったのだ。

「おおおお、コレがスズネの！」

「ぬうううう、よくぞこんな状態で」

そして、女の下着にむしゃぶりつくように夢中になってるのは元ハンターのガトーに、ピース。

数ヶ月前の金と銀の火竜にやられた傷も何のその、今日も元気に妄想中。

ちなみにこの2人、片肺がなくなったためハンターは引退です。にもかかわらず、ココにいる理由。それは、

「コレがあるから、今日も一日農場で頑張れたんだぜ！」

「まったくまったく」

そう、この2人。今は農場でケビンやスズネの為に働いているのだ。ハンターとしての腕は悪くないが、なにせガンナー。

ガトーは弓使いで、ピースはヘヴィーボウガン使いなのである。

剣士より運動量が少ないガンナーとはいえ、片肺がないのでは瞬発力に不安があるし持久力もない。

更にガンナー装備は剣士の装備に比べると耐久力が異常に低い。

モノによつては半分以下のもものもあるくらいだ。このため危険なハンターの道を諦め。

故に、暇な時は村のハンター。スズネとケビンたちのために農場で働き、彼らが使わない“カラの実”などから、弾丸をつくったり。

余った二トロダケを絞って矢に漬け込んだりして、村の有事に備えているのだ。普段は農業、村の危機には守人となる人生を選んだ2人だが。

「うおおおお」

「ふおおおお」

そんないい話は、最早この2人からはカケラも想像できません。
というか、若い女性の下着をかぶっているあたり。最早、立派な、
ヘンタイ、です♪

「そんなに喜んでもらえるとは、アチキも嬉しいニヤ♪」

そしてあっさり主人を裏切ってるオトモアイルーコテツ君。
以前、殺されかけたことを実は、もの凄く、恨んだりしているので
す。

「いやいや、いい仕事するぜコテツ！」

「まったく、あのスズネから盗んでくるなど相当難しかったであろ
う」

そして、そんなコテツを褒めちぎるダメ人間2人。
実は怪我したのは天罰だったんじゃない？　なんて、おもわなくてもな
い。

「ニヤニヤ、ニヤんのこれしきマタタビのためなら例え火の中、水
の中ニヤ」

「おお、楽しんでくれ。雪山じゃ滅多に手に入らない極上品だぜ！」
「うむ、沼地や森丘でとれる一級品ばかりだ。どこに出しても恥ず
かしくないぞ」

いや、まずオマエラが恥ずかしいよ。

などと無粋な突っ込みをするものも居ないため、彼らのテンション

はうなぎ上りに上昇中。

「まあ、待つニヤ。本題はこれからニヤ」

興奮冷めやらぬ2人に、コテツは目の前の黒板に字を書き出す。

納品や収穫をメモするために農地においてある、村の共有財産なのだが。2人のヘンタイにとっては最早どうでもいいらしく、コテツをとめようとしてもしない。

「スズネ様の下着を取るのはオトモアイルーであるアチキには簡単な事ニヤけど……………」

「ニヤけど……………？」

ゴクリと喉を鳴らす、ヘンタイ2人。

口調が“ニヤ”になってることに気がつきません♪

「これから出品するモノは……………コレだニヤ！」

手元からチョークをだし、キキキーと独特な音をだしながらコテツが書いたこと。それは。

「———“静寂の歌姫”シェリルと“隠れ巨乳”マイの下着だニヤ———！」

クワァー！！ とばかりに両目を見開くおバカアイルーコテツ君。

マタタビの為にもの凄く大きな間違いを犯してます♪

そして、ソレを聴いた瞬間にもものすごい勢いで詰め寄るバカ2名。

「———マ、マジか。コテツ———！」

「いい加減なことというと承知せんで、貴様———！」

いい加減なものも、承知されないのもオマエ達だ。
と突っ込んでくれる人達はココにはいない。―― おかげで暴走
は止まりません♪

「マジだにや。アチキが何のために……… 公衆浴場に足繁く通った
とおもってるニヤ！」

―― ドツバアーン！

と背景に海が見えそうなテンションで語り始めるコテツ。
そう、村にとって各家庭に一つの風呂を作るなどという贅沢は許さ
れていない。

水道工事すらままならないこの時代、お風呂といえば村専用の公衆
浴場で洗うのが通例であつた。

そして、女湯といえば男いや漢の夢！

過去、何人もの猛者がその壁を乗り越えようとしたが。

今まではスズネが。そして今はシェリルやマイの父親である親方が、
高き城壁となつて守ってきた。

だが、しかし。村の内部からの裏切り者。

オバカ（もうオトモとも呼べない）アイルーコテツの裏切りによつ
て、彼女達の秘密のベールが暴かれる！

「フッフ、風呂嫌いのアチキがある時は背中を流し、ある時は浴場
を洗いながらかき集めたこの品々さあ、幾らからニヤー！」

まず、オマエ達は欲情を洗い流せといたいだが、そんなことを言う
人はここにはおりません。

ちなみにコテツ、アイルーだけに肉球が気持ちいいと女の子たちに

は大人気です。

「マ、マジか。あのキリンシリーズやTシャツに隠されていた下着が今、目の前に」

「うむ、ならばワシ達も——とっておきを出さねばなるまい！」

「とっておき？ シェリル殿やマイ殿の下着ニヤ。そんじょそこらの品じゃ……………」

余裕たつぷりのコテツに、自信ありげにニヤリと笑う……………馬鹿2名。

「ああ、ならば見るがいい。これぞ——至高の一品！」

「ば、馬鹿ニヤ、それは……………」

なにやら戦慄している、コテツの前に置かれたのは小型爆弾。

爆弾好きのアイルーにとっては珍しくもない一品。だが、コテツの目は動かない。

「そう、耐水加工すらできるアイルーが未だに修得できない幻の爆弾その名も“マタタビ爆弾”だ」

「ニヤニヤー！！」

マタタビ爆弾、最近できたという秘蔵の爆弾である。

その威力は野生のアイルーが一気に酩酊状態になるという、至高の一品。

複数のアイルーに喜ばれる一品だが、特に爆弾一筋のコテツにとっては喉から手が出るほど欲しい。

「ふふふ、どうだコテツ。これなら取引にふさわしい一品だと思わ

ないか？」

「ニヤニヤ、確かにスズネ殿よりレア度の高いシェリル殿と、マイ殿の下着。その一品なら……」

2人と1匹のテンションが最高潮に達しようとした瞬間。

——ゾクリ！

と背筋が凍った。

大型モンスターに狙われた瞬間に起こる本能的な恐れ。

狩場に何度も足繁く通った2人と1匹だからこそ感じる、恐怖。闇夜に蠢く殺気を感じ、振り返った先には。

「へー、私の下着ってスズネちゃんより価値があるんだ〜♪」

もの凄い笑顔で笑う、シェリルの姿があった。

言うまでもないが、シェリルは村を守るハンターとしてココにいる。ガッツがない今。上位ハンターは彼女1人。

故に、少しでも危険がないように夜間の見回りをしていたのだが。

「あ、ああああ、当たり前だニヤ、すすすす、す、隙がないのは勿論、スススス、ス、スタイルなど全ての上でシェリル殿のほうが上だニヤ！」

そんな真剣なシェリルが目にしたものは、変態2人にオバカアイル
ー1匹。

極上の笑顔も若干引きつり気味のシェリルさん。もう一押しで爆発
します」

「あらあら、嬉しいこと言ってくれるじゃない、コ、テ、ツ、君
」

「いやいや、アチキは客観的事実を述べているだけ「コテツくん」
……ハイ、ニヤ！」

いきなりガタガタと震えだしているオバカアイルーコテツ君。
口が回ってないことは勿論のこと、冷や汗がダラダラと出ています。
そして、ついでにガタガタ震えている2人も冷や汗が止まりません」

「ふん、そつか。最近、下着が数点消えてると思ったらコテツ
君だったのか。コレは盲点だったな」

デンジャー、デンジャー、2人と1匹の脳内で鳴り響くエマージェ
ンシーコール！

目の前には、ミズハ覇シリーズで固めたシェリルさん。
その肩に輝く狩猟笛“ヘビィバグパイプ”がとってもセクシー。

顔に浮き出ている血管も気になりません」

「き、聞いて欲しいニヤ。アチキは2人に強引に脅されて……！」
「驚いたわー、まさかコテツ君がそんな事するなんて……。でも、
なんだろう。スズネちゃんより魅力的だって言われて普段なら嬉
しいはずなのに。今はちょっと悲しいわ」

どさくさに紛れて2人をシールド代わりにしようとしたコテツの言い分を、一ミリグラムとして聞いてないシェリルさん。ぶっちゃけ無茶苦茶怒ってます。

カタカタ震える2人と1匹の前で、自分の下着を手にして幸せそうに微笑んでるシェリルさん。

後ろから黒い瘴気が出ているのは気のせいだと思いたい。

そして、ライブで大ピンチな2人と1匹。

さつきから隙を見て逃げようとしてるが、とてもじゃないが逃げられません。

「ふふふ、どうしようかしら。そうね。細切れになって毒沼に沈むのと、潰されて溶岩に埋まるのどっちがいいかしら？ 嫌いなほうを選ばせてあげるわ」

「嫌いなほうを選ばせるのかニャー！！！」

「つか、どっちにしても死ぬのかよ！」

——バキィ！！！！

と、壊されるのは手元の柵。壊したのは言わずと知れた狩猟笛。

一瞬で口を嚙む2人と1匹、次に言葉を発したほうが殺されます」

「フフフフ、別にこの世に未練なんてないんでしょう？」

「……………」

言葉を発することもできずにブンブンと顔を横に振る2人と1匹。殴られるまでもなく、心臓発作で死んでしまいそう。

「あらゝ。生きていたいの？」

救いを見つけたとばかりに、コクコクと肯く2人と1匹。そのシンク口率はオリンピックを狙えそう。

「いいわ、じゃあ。私のお願いを聞いてくれる？」

無言で肯く2人と1匹に、シェリルは。

「鉱石が足りなくなっただから、少し取ってきてもらえるかしら？」

と、華が咲くような笑顔で言ったのだった。

「あ、あのゝ。コレはどういうことですニヤ？」

「お、俺達は鉱石を掘るって聞いたんだけど」

「だ、だよな。ワシの聞き間違いじゃないよな？」

不安そうに嘆く2人と1匹。彼らの前には鉱石を掘り出すために使うピックルではなく。

モンスターにトドメの一撃を与える爆弾。“大タル爆弾G”の姿があった。

「あら、言わなくちゃわからない？」

妖艶な微笑をむけるシェリルさん。彼女の目の前には鉱山に掘られた大きな穴。

「ま、まさか!？」

「うん、突っ込んでらっしゃい♪」

驚愕の表情を向ける2人と1匹に、無情にも下される最終判決。爆発で、鉱石をまとめてもってこいとお言葉です♪

「待つニヤ、待つニヤ、アチキはどんぐりメールもつけてないし大タル爆弾Gなんて使ったことないニヤ!!!!!!」

「つか、死ぬ。マジで死んじゃうから!!」

「……………っ!!!!」

必死で命乞いする、2人と1匹。ぶっちゃけ自業自得です。

「安心しなさい。目当ての鉱石が出たらやめてあげるから♪」

「何回やらせるつもりニヤ!!」

シェリルのセリフに愕然とする2人と1匹。

というか、2人は泡噴いて言葉も出てきません。

「いいから行った行った♪ メランジェ鉱石がでるまで戻ってきちゃダメよ♪」

「絶対無理ニヤー!!!!!!」

……その日、農場からは爆発音と悲鳴が途切れることはなかったという。

ちなみに、メランジエ鉱石とはレア度が高い鉱石であり。G級でも中々とれない。
上位である2人は勿論、今だ下位ハンターしかいないポケット村でとれるはずがない鉱石だというのはココだけの話である。

< 続 >

感想は感想提示版にお願いします。

感想をいただけると作者が狂喜するのですm (_ _) m

後書き：人物紹介

ガトー：弓使い。

片肺がなくなり、日常生活並びに軽い運動ならできるが。狩猟は無理。

利き腕の握力が後遺症で少々動きづらくなるが、今日も元気にヘンタイ街道まっしぐら。

ピース：ヘヴィーボウガン使い。

村のハンターの中、唯一の妻帯者でありながら隠れた趣味が今回露

呈。

離婚の危機にも負けず、エロリストとなっていく。

コテツ：ギャグキャラ。

ケダモノ（後書き）

はい、本当はオマケで出す予定だったギャグパートでした。思ったより長くなったので、新しい話にしたのです。

まあ、6000字程度だし、いいですよ（汗）
ギャグに………なっていればいいなあ。

嘘（前書き）

ううう、すいません。インフルで苦しんでいた名無しです。
とりあえず、最新話を投稿させていただきます。
今回は次回の戦闘への前フリです。

嘘

冷たく澄んだ空気の下、俺達は隊商の護衛としてポケット村へと歩いていた。

肌を震わせる北国特有の冷氣。それが肌を震わせる感覚も懐かしい。僅か数ヶ月とはいえ、離れるとやはり寂しいものだ。

隣には荷車を引く草食獣ポポの姿。毛むくじやらのその獣は繁殖力が強く、しかも大人しい。

そのため、このように荷車を運ぶ貴重な動力源として使われている。そのポポの手綱を握る商人に、スズネが声をかけた。

「あと、もう少しでポケット村ですよ」

「げ、元気だね。この寒いのに」

「私達は慣れてますから」

業者は寒さにガタガタ震えている。

ポケット村でしかとれない特産物を求めてやってきた一行は、雪の寒さに慣れていないのか。

防寒服の前で手をすり合わせている。

その、行商人に笑いかけるスズネは本当に嬉しそうである。

草食獣ポポが引く荷車の業者は、元気なスズネを見ながら小さく笑っている。

「ケビン、周りは大丈夫？」

「ああ、心配ない」

辺りを見回しながら、俺は小さく息を吐いた。
少し浮かれているのは俺も同じだ。

旅の人間にとっては極寒の地であるうと、やはりココは生まれ育った場所。

郷愁にも似た感情が俺の中に生まれる。

未だ狩場にいる以上油断は禁物なのだが、今回はガッツもいる。

上位ハンターがいるというだけで、随分と心にゆとりが持てるものだ。

「ガッツから連絡は？」

「ないわ、上手に対応してるみたいね」

先行しているガッツから、信号弾がないところを見ると大型モンスターもいないようだ。

本来、キャラバンなど大勢の人数を守る場合、周囲をハンターが囲み絶対の防御陣を築くのが基本とされている。

だが、今回。かなりの大人数をヌメル村から、ポケット村に運ぶコトになった俺達は、まったく別の方法をとることにした。いわゆる斥候による威力偵察だ。

少人数、もしくは1人が本隊に先行して、エリアに入り、雑魚が多い場合はコレを排除。数が多すぎる、もしくは大型モンスターがいる場合は色つきの打ち上げタル爆弾で知らせることになる。赤が「まだ敵がいる、現状待機」黄色が「大型モンスター発見」などだ。逆に飛竜などがガッツに出会わず、俺達を襲ってくる場合もあるが、その場合同じように打ち上げタル爆弾をあげ、ガッツに報せる手筈になっている。

キャラバンを最低限守りながら、同時にモンスターが襲い掛かる前

に倒すという作戦だったのだが。

「……………おかしい、よな」

「ええ」

俺が呟いた声が聞こえたのか、スズネも肯いた。

ガッツが先に小型モンスターを倒している、コレは計画通りだしキヤラバンの隊長にも連絡済みだ。

だからキヤラバンの人達は俺達がうまくやっていると思っているのだろう。

しかし、現実には俺達はまだ一匹のモンスターとも【出会っていない】のだ。

ガッツが小型モンスターと遭遇したなら、その連絡があるはずだ。

だが、ガッツからの連絡は【異常なし】の連絡のみ。

つまり、ガッツは一匹もモンスターを【狩っていない】のだ。

山間の狭間にできたポケット村に行くには、モンスターがいる狩場を通ることになる。

それなのに、この遭遇確率の少なさは異常だ。

例え、俺達がキヤラバンを率いて帰ると聞いたシェリルがモンスターを狩ったとしても、ココまで数が減ることはない。

「考えても仕方ないわ、今のうちにホットドリンクを飲んでおいて」

「ああ、分かってる」

スズネと打ち合わせをしながら、ホットドリンクを飲む。

寒い場所、特に雪山では必需品のホットドリンクを飲むと、体が芯から温まっていくのを感じる。

原材料にトウガラシを使っているのだが、それほど辛くなく。味は意外といけるのが不思議だ。

なんというか、懐かしい味がするのだ。

「また、ガッツから連絡があったわ。洞窟までは敵はいないみたいよ」

「そっか、ならココからポケット村までは……10時間ってみとけばいいか？」

「うーん、荷車が4台もあるからね。洞窟内は段差も多いし12時間ってとこね」

ホットドリンクのほのぼのした味わいを楽しみながら地図をみてみると、スズネが横から声をかけてきた。

「でもさ、コッチを通れば大丈夫じゃないか？」

「そうね、でもこの季節だと氷で道が閉ざされることもあるから。最悪、私達の武器で壊さなきゃいけないかも」

溜息をつきながら洞窟の道筋を指差すスズネ。そこに俺も手を置きながら考える。

確かに、道が氷などで塞がっていた場合。武器を使って壊すしかないだろう。

爆弾という手もあるが、下手をすれば洞窟自体が崩れかねない。

「となると、ココからは3人で行動したほうがいいかな」

「そうね、洞窟前で一旦合流して中の安全を確認。その後、ゆっくりと進むのがいいんじゃない？」

洞窟内は狭く、もしソコにモンスターがいた場合。民間人を守れるかは自信がない。

下手をすれば同士討ちにもなりかねないのだ。
ならば……。

キャラバンをつれ洞窟の前まで歩いていくと。

洞窟前で辺りを油断なく見張っているガッツが見えた。

流石に上位ハンターだけのことはある。その所作に隙がない。

「——ガッツ！」

「おう、とりあえずこの周辺は大丈夫だぞ」

声をかけると、ガッツは小さく肯いた。この辺も流石だ。

あくまで「周辺が大丈夫」なのであってモンスターを倒したとも、一匹もいなかった。

とも言っていない。ガッツはあくまで真実を都合のいい言い方をしているだけなのだ。

ここまでモンスターがいらないというパターンは珍しいが、モンスターに殆ど会わずに護衛の仕事が終わるということもある。その場合、商魂たくましい商人などは必ず【値引き】交渉をするのだ。曰く「金を払った分の仕事をしていない」と。

モンスターに一回も襲われなかった場合、高い金を払って護衛を依頼した事を【損】だと考えてしまうのだ。

商人の気持ちもわかるがコチラも仕事、このため万一モンスターが少ない。もしくはいない場合、1人を別行動させ、先にソイツがモンスターを倒しキャラバンの安全を守った。ということにするのだそうだ。

「悪知恵ばっか働くよな」

「そう言わないでよ、確かに騙してるみたいで気分は良くないけど。無用なトラブルを避けるためには必要よ」

スズネはガッツの意見に同意した。
俺も個人的には同意なのだが。

「なんか、ひっかかるんだよな」

「なにがよ？」

いや、あの「2人の邪魔はしねえよ」とか笑いながら先に行ったあいつの顔が非常にム力つくのだ。
つたく、アイツといいシェリルといい。なんであんなにおせっかいなんだか。

「なにブツブツ言ってるんだ、お前は？」

「……………気にすんな。それで、ガッツは洞窟の中はまだ調べてねえんだよな？」

「当たり前だろ、まずはこの場の安全が優先だ」

万が一、飛竜があらわれたりしないためにココに残ったってことかならば。

「ん、じゃあ俺が洞窟に入るからスズネとココを見張ってくれるか？」

「何でよ？ 3人で行けばいいじゃない」

「いや、洞窟内は狭いし大型モンスターは入ってこれないだろ。だったら、俺が小型モンスターを排除して、その間は2人がキャラバンを守ったほうがいいと思うんだけど……………」

視線を向けると、ガッツも小さく肯いた。

雪山の洞窟、いわゆるエリア5と呼ばれる場所には大型モンスターが入ってこれるスペースはない。

この先にある、牙獣種や飛竜種が巣にする事が多い小さな洞穴からモコチラにはこれない。

ならば、飛竜種。もしくは牙獣種の目撃例が多い洞窟の前、ここエリア6はガッツとスズネに任せ。

俺は中の安全を確かめるべきだと思うのだ。

ガード性能が高い盾をもっているランスのスズネは勿論、ガード性能はそれほどでもないが上位ハンターで大剣使いのガッツがいれば、キャラバンを守ること簡単だろう。

「ま、その辺が妥当だな。キャラバンは洞窟前にまとめて何時でも洞窟に逃げ込めるようにしておくぜ」

「了解、でも気をつけて。まだ“鬼斬破”に慣れてないんでしょう？」

「まあ、試し斬りって意味でもあるからな」

マイさんが鍛えてくれた、俺の太刀“鬼斬破”。

キリンの雷尾を使ったこの太刀を使うのは、今回が初めてだ。

幾つモノ訓練を繰り返したところで、実戦で使ったことはない。

それだけに、小型モンスターで少しでも勘を取り戻しておきたい。

「大丈夫だと思うけど。気をつけてね」

「あいよ。あとは……ガッツ、分かっているとは思うが」

「了解、お嬢ちゃんには手はださねえよ」

おどけて、手を上げるガッツに中指を立てながら。俺は洞窟へと入

っていった。

明るい外から、暗い洞窟に入ると閉じていた片目をあけた。隙を作らないためである。

ハンターの命とも言われる目の器官。瞳孔は昼間の強い光から目を護る為に、収縮をくりかえす。

このため明るい場所から暗い場所に移動すると、一瞬だが視界が狭まることがある。

その一瞬の隙を恐れるハンターの編み出した技法がコレだ。

最初から片目を“暗い状態に追い込む”事により、その一瞬の隙をなくすのだ。

そして、その闇に慣れた目で見えた景色は………何もなかった。

狩場“雪山”温度が低く、寒冷期になるとハンターでさえ入山を禁止されるこの地は、環境としても厳しく。結果、強靱な大型モンスターが増えることが多い。

それだけに、このようにまったくモンスターがいないというのは異常事態だった。

特にココ、エリア5と呼ばれる洞窟は大型モンスターが入りづらい地形のためか、小型モンスターの目撃例が多いのだ。ガウシカなどの草食種から、ブランゴなどの牙獣種。

変わったところではアイルーなどが巢代わりに使っていることもあるという。

だが、ここにもモンスターはいない。

一通り回ってみたが、特に異常はないようだ。

「しょうがねえ、スズネのところに戻るか」

エリア5の横道。通称飛竜の巣穴にも行ってみたが、何もいない。不思議に思いながらも俺は洞窟の前、俗に言うエリア6に向かって歩いていった。

時は少し遡る。

洞窟内、エリア5をケビンが探索している間。

俺とスズネは洞窟入り口にキャラバンを待機させ、その周囲を警戒していた。

スズネはランスを構え、何時でも盾で皆を守れるように。

そして、俺は大剣をしまったまま片手には閃光玉をもっていた。

「……………随分、慎重ね」

「ああ、なんかな。嫌な予感がするんだよ」

俺は片手に閃光玉を構えたまま、スズネの言葉に答えた。

さつきから、首筋がチリチリする。

こういうときは碌なことがおきない。

「攻撃より先に閃光玉つてのが、ガッツらしくないけど」

「まあな。俺だって護衛任務じゃなけりゃ、こんなモン滅多に使わねえよ」

モンスターの視力を一時的に塞ぐ閃光玉は、数が少ないこともあり

俺は滅多に使わない。
だが、護衛任務には最適だ。

スズネにはガードを、俺が目くらましをすれば大体のモンスターの初撃をやり過ごせる筈。

ここまで、モンスターに出会っていない。

これは単に俺達、人間の集団を恐れて隠れているのか。

……それとも、他の理由があるのか？

「考えても仕方ないわよ、必要以上に身構えても気後れするだけだし……それに、可愛い差し入れが来るみたいよ？」

「あん、なに言ってるんだ？」

と、後ろを向いてみれば。

まだ、10才に満たない女の子がこちらに向かってきていた。

その手には、俺達に対する差し入れなのだろう。

ギンシャリ草のお握りが幾つか乗っている。その向こうには、優しいような両親の姿。

こちらに手を振っている。

ヨタヨタと雪に足をとられそうなその動きは、俺から見てもぎこちない。

「——キャ！」

「おいおい、大丈夫か？」

俺達の手前で転びそうなその女の子を助けようと、閃光玉をポーチ

にしまい手を出した。

「うん、ありがとう。おじちゃん！」

「お、……じ……！！！」

おじちゃん扱いされたことに軽くショックを受けていると、横でクスクスとスズネが笑っていた。

「ありがとう、お弁当をもってきてくれたのかな？」

「うん。お父さんとお母さんも、お姉ちゃんとおじちゃんに持ってあげなさいって」

スズネとの呼称の違いに軽くショックを受けながら、俺は弁当を受け取った。

「ありがとうよ、親父さんとお袋さんにもよろしく伝えてくれ」

「うん、おじちゃん」

ニコニコと笑いながらも、その呼称をやめようとしないうちに少し苦笑しながらも後ろを振り返り、少女の両親に手を振った。2人はコチラに頭を下げながら手を振っている。

「いいもんだな、こういうのも」

「ん？ なんか言った」

「………なんでもねえよ」

優しい日常を守る。ソレも大事なハンターの仕事だ。

こういった日常をみて己の存在理由を知ると、嬉しいものだ。そう考えていると、雪の混じった突風が頬を掠めた。

「——っ痛！」

その風に微量の氷結晶が混じっていたのか、俺の頬に一筋の血が流れた。

視界を確保するために、ヘルムを外していたのがまずかったのか。血の流れた頬をそのままに、モノブロスヘルムをかぶろうとする。

——ゾクリ、と戦慄が奔った。

下を見れば、弁当を持ってきた少女がカタカタと震えている。先程まで、明るく晴れていた空。それが曇り、氷結晶の混じった風が吹雪く。

晴れていた空、ソレがいきなり悪天候になる。山の天気が変わりやすいとはいえ、ココまでいきなり天候が変わることはまずない。

だが、伝説にある竜は天候を自在に操るという。御伽噺にさえあらわれる、伝説の龍。

俺はその存在を知っている。

——そう、俺は知っているのだ。吹雪を呼ぶという伝説の龍がいることを。

出会った事はない、今まで数多くの飛竜を倒しながら結局会えなかったモノ。

その名も。

「風翔龍——クシャルダオラ！」

鋼龍、クシャルダオラ。

伝説の古龍種の中でも、もっとも厄介な敵でもっとも名が知られているモンスターだ。

鋼色の体を持ち、帯電飛竜フルフルの倍近くの体格をもつ。そして、そのもっとも顕著な個性は………4本足で歩くということだ。

通常、飛竜種は2本足で歩く。

前足が発達し翼になったといわれているからだ。

だが、このクシャルダオラは違う。

同じ古龍でも、キリンのように翼がないわけではなく。

巨大な翼を持ちながら、【4本足】で歩いているのだ。

コレだけで、通常の飛竜種とは別系統の進化を遂げた種だということが分かる。

その、あまりにも圧倒的な存在感にゴクリと喉が鳴った。

何度となく街を襲い、雪山、密林、砂漠での目撃者が多いクシャルダオラ。

にもかかわらず、………奴の弱点を知っているものは少ない。

幾つモノ街を滅ぼした鋼龍。

その圧倒的な戦闘能力によって何人ものハンターが命を落としてい

るため。情報が少ないのだ。

分かっているのは、錆びたような色の亜種がいるということ。
そして、古龍だけに龍属性が効くということだ。

だが、今。龍属性を使っているハンターはいない。

――閃光玉を投げつけ、時間を稼がなくては。

そう思い、ポーチに手を入れた瞬間。

「なっ!!」

首を鞭のようにしならせ、後ろに引いた。

激しく降りだした雪が風を纏い、クシャルダオラの体に巻きついていく。

突き出した口が大きく開き、ナニかが吐き出された。

この動きを俺は……知っている。

飛竜、リオレウスやリオレイアが何度もした行為。ブレス。
だが、問題は。

――何も見えない。

飛竜リオレウスならば火球が。帯電飛竜フルフルならば、電撃が。
なのに、このブレスには何も見えない。

横では避けられないと覚悟したスズネが、ガードの態勢をとって

る。

俺は、今からではガードが間に合わない。
確実に逃げなければならぬ、この瞬間に。……………近いにいた少女に『気がついた』

「——チィ！——！！」

横っ飛びに避けながら、少女を拾い上げる。

「——ッ！——」

叫ばないだけありがたいと思いながら、名前も知らない少女を庇いながら、転がっていく。

……………次の瞬間、俺と少女がいた場所に風がふいた。

吹き荒れる風は突風と化し、俺の横を掠めて通り過ぎていく。
雪を巻き上げ、吹き荒れる突風。

そう“突風”だ。姿も形も見えない攻撃。

見えたのは巻き上げた雪のみ。

火でもない、電撃でもないその攻撃の正体は恐らく風。

——風翔龍、とはよく言ったものだ。

姿がないその攻撃は、飛竜などの攻撃より遥かに見えづらい。だが
ソレより問題なのは。

コイツ……………この少女を狙いやがった！

もっとも弱い者、助けられるべき弱者から倒しに来たということは
コイツは人間と——“戦い慣れている”

建前であれ、本音であれ。

戦闘では弱者。老人や女子供から先に逃がすのが常識だ。

それだけに、彼ら弱者が危険にさらされたとき。

人間、特にハンターは反射的に庇おうとする。——これを狙っていたとすれば。

そういった人間との戦闘に慣れているという事だ。

更にまずいことがもう一つ。

風だと思っていたその攻撃は、俺の義手を“凍りつかせた”

雪山のためか、はたまたヤツの固有能力なのか。

僅かに掠めた風は俺の義手を凍らせている。

凍りついた左腕を見ながら、少女の無事を確かめる。

走って逃げると言いたいところだが、この場所からでは俺が抱えて
走ったほうが速い。

いや、それ以前に。

「マジかよ!」

少女の体が、俺の左腕に『吸いついている』

直撃を避けたとはいえ、あのブレスには対象を凍りつかせるという
特殊能力があるのか。

だとすれば、ドドブランゴのブレスの能力と一緒にということになる。
しかも、射程距離が数メートルのドドブランゴと比べて随分と射程
距離が長い。

クシャルダオラの戦力を測ろうとしていると、洞窟からケビンがコ

チラに向かつて走ってくるのが見えた。いいタイミングだ。凍りついている以上俺は閃光玉が投げられない。

「——おっさん!!」

「ケビンか、いい所に。アイツに閃光玉を投げろ!」

ケビンは返事をする間すら惜しいのか。

スズネに今にも襲い掛かろうとした、クシャルダオラの鼻先に閃光玉を投げた。

放物線を描いて、クシャルダオラの鼻先をかすめ閃光玉は爆発する。一瞬後に視界は白い閃光一色に染め上げられる。

——コレが効くかは分からない。

目があるにもかかわらず閃光玉が効かないモンスターは実は多い。

この前ケビンたちが倒したキリン。

それに初心者用のモンスター。ドスファンゴにも閃光玉は効かない。クシャルダオラに効くかどうかは、正直。運次第だといえる。

だが、次の瞬間。

「GYAAAAA!!!」

ヤツの叫び声が聞こえた。

白一色に染まっていた俺の視界も戻っていく。

目の前には身動きが取れないクシャルダオラの姿。

どうやら、もがいているようだ。

「閃光玉は効くってことだな」

片腕が凍りついた代償としては、随分安いな。
そう思いながら、俺達はキャラバンと共に洞窟内へと入っていった。

「——セツナ！」

闇に閉ざされた洞窟の中にキャラバンと共に転がり込んだ俺達の元に、夫婦らしき若い2人が駆け込んできた。その目はガッツが抱えている少女に注がれている。

「触るな、先に医者だ」

ガッツは凍った左腕に抱えた少女を庇いながら、両親を押しとどめた。

「わ、私達は医者です、ですから娘を」

「……わかった、だけどゆっくりと頼む」

両親にセツナという少女を見せながら、ガッツは詳しい経緯を話している。

どうやらヤツ、鋼龍クシャルダオラのプレスは体が凍りつくということ。

ギリギリでかわしたつもりだが、僅かに攻撃を受けてしまったこと。そして、何より。

「義手に体が引つついちゃったのか」

「ああ、マズイな」

人間の体同士ならこんなことはない。

だが、ガッツの左腕は義手だ。氷点下を超える場所で金属を素手で持つとどうなるか？

答えがココにある。

緊急回避のためとはいえ、左腕がわに少女の顔があつたため。

左腕の義手の部分に少女の顔が『張り付いてしまった』

人間の体ならば体温で少しづつ氷が溶けるだろうが、ガッツの義手と防具の金属部分に張りついてしまった少女の顔は動かない。

「解氷剤を使うってワケには……… いかないよな」

「ええ、できれば使いたくないわね」

俺の発言にスズネが渋面をつくった。解氷剤。

火薬草とはじけイワシから作られるその薬剤は、表面に覆われた氷を吹き飛ばす能力を持つ。

だが、死ぬと同時に爆発するというのはじけイワシを使った薬剤は、かなりの衝撃を伴う。

俺達ハンターなら体も鍛えているし、防具もある。

だが。少女は生身の体だし、ハンターのように体を鍛えてもいない。

ドドブランゴなどのブレスを喰らい、凍りついた場合。

解氷剤、もしくは時間をかけて徐々に衝撃を与え氷を壊す。

だが、顔が張り付いた状態でそんな事をすれば。少女の顔にどんな傷がつくかわからない。

「できればポケット村で治療したいんですが」

「ココで治療して下手に後遺症が出るよりそのほうがいいのか？」
「はい、ココでできるだけの応急治療はしますが。やはり向こうについてからでない」と

「そうね、ココじゃ落ち着いて治療なんてできそうもないし」

スズネのぼやきにも似た発言に、キャラバンの一行も肯いている。
視線の向こうには洞窟の入り口。

そこでは、鋼龍が何度も洞窟にぶつかっているようで。
叫び声とぶつかった時にでる轟音が洞窟内で鳴り響く。
なにをそんなに猛り狂っているのか？

「なんだってんだ、アイツは」

「なんか、傷があったようでしたけど？」

商隊の一行の1人がそんな事を言った。

傷がある、飛竜。リオレウスなど代表的な飛竜のなかにはそういった数々の戦いをくぐり抜けた故に強力な個体になるコトもあるという。

では、ヤツは歴戦の戦士か……。それとも。

「どこかで討伐されかかって逃げ出したか、ってところか」

「どっちにしても、このままじゃマズいわ、早くポケット村に帰りましょう」

「で、ですな。で、では護衛はこのままでよろしいので？」

「ああ、早く行こう。頭がいいモンスターなら出口で待ち構えている可能性もある」

「ガッツはその子を離すんじゃないわよ」

「あいよ、了解」

幸いにして、道を塞ぐような氷塊などはない。

外でヤツが暴れている間にとっと逃げ出すべきだろう。

商隊のリーダーである商人と話をつけ、ポケット村に急いで戻るところにする。

道具も少ないし、ガッツの半身が氷に覆われている以上。戦力も少ない。

村に帰ればシェリルもいるし、少女の治療もできるだろう。

話がついたのだから、荷車の荷物を点検したあと村へと進むべきだ。この大洞窟を振るわせるほどの“力”をもったモンスターとこの状態で戦うなど自殺行為だ。

未だに震え続ける大洞窟を横目に、声を張り上げる。

「さあ、行きましょう。滑るから気をつけて」

洞窟内は凍りつき足を滑らしやすい。注意しながら進もうとした瞬間。

一際大きい振動が、洞窟内を襲った。

「うわっ！」

「え！」

商隊の人々だけでなく俺達ハンターですら、一瞬だが狼狽えた。

次の瞬間、ビシビシと嫌な音が洞窟内に広がっていく。

音源を探ろうと視線をさまよわせると、天井付近がひび割れていく。

古龍クシャルダオラの衝撃はそれほど強烈なのか、それとも元々なのか。

天井には巨大な割れ目ができていき。

そこに、トドメとばかりに巨大な振動が鳴り響いた。

「――ヤベエ、逃げる!!」

ガッツの一際大きい声が鳴り響き、巨大な岩塊が落ちてきた。だが幸か不幸か。俺達の方角には、墜ちて来なかったのだが。

「……………嘘、だろ?」

クシャルダオラが暴れている、洞窟入り口を残して。洞窟内の出口全てを塞いでしまったのだ。

「そっちの岩塊は壊せそう?」

「無理だな、今すぐに壊そうとすれば、洞窟内が崩落しかねない」

クシャルダオラの突進によって道をふさいだ岩塊。

コレを壊すのは少々危険だ。只でさえヒビが入った洞窟。どんなことがおこるかわからない。

この洞窟。エリア5は崖をはさんで、東と西に向かって道が伸びている。

洞窟内にある出口は入っていた北側。そして南に分かれ道が2つ。途中に飛龍の巣穴にも使われているエリア3に一つ。東側にエリア4へと繋がる道がある。

今、俺達がいるのは北側出口のすぐ近く。

そして、ベースキャンプへと戻りポケット村に帰路に着くにはいずれかの道を通らねばならない。

だが、東に伸びる道にも西に伸びる道にも氷塊と岩塊が落ちて道を塞いでいる。

そうになると、必然的に北側から出なくてはならないのだが。

「そこにはヤツ、鋼龍がいるってことか」

「…………。ど、どうすればいいんでしょうか？」

隊商のリーダーである、太った壮年のおじさんはおろおろと慌てている。

いざという時、俺達が彼らを見捨てないか心配なのだろう。

実際、俺達が生き残る方法は幾らでもある。

鋼龍に出会ったとしても、そのまま逃げ出せばいい。

ハンターの防具は堅固だ。1撃や2撃を受けたくらいでは壊れない。その後、反対側の崖からツタを使って降りれば、安全に逃げることはできるだろう。

だが、それに商人や子供達がついてこれるかといえば。

答えはNOだ。

俺達のように鍛えているわけでもなく、古龍などという規格外のモンスターとの戦闘経験のない彼等では、パニックをおこさず逃げることは難しい。

第一、防具をつけていないのだ。モンスターの1撃で死ぬ可能性もある。

では、戦闘では？

コレも勝つ算段はある。上位ハンターガッツ。

コイツが今すぐ女の子の顔の皮膚を義手から引き剥がし、戦闘に参加すればいい。

たかが皮膚。傷が残るとはいえ、命には変えられない。

命の危険を考えれば、顔の皮膚くらい大したことではないだろう。

戦闘とは、狩りとは命がけのモノ。

特に今回は、契約をしていない。

前回で出合ったキリンも、契約していない以上契約金は貰っていないし。

正直、旅費にも事欠く有様だ。

更に今回は鋼龍。

金ももらえないのに、戦う理由はない。

安全に逃げる、もしくは戦い。ある程度戦ったら逃げるのなら、ガッツの参戦は不可欠。

……そんな事はわかってるのに。

「——ケビン。私達で戦うわよ」

スズネは、悔いるように歯を噛み鳴らしながら、俺に声をかけた。

「な、ん——！？」

それに俺が答える前に、マイさんが小さく叫ぶ。

だが、その叫ぶ声に答えず。俺は静かにスズネに答えた。

「だな。それしか手はない」

マイさんが何か言いたそうであったが、スズネがそう考えるのは当然だとおもえた。

この場で、商人達を待たせ。俺達が村に戻り、シェリルを連れて戦えば確実性は増す。

もしくはガッツの義手から少女を切り離し、3人で戦う。もしくは共にシェリルを迎えに行けばいい。

そんな簡単な答えを、スズネが気がつかないはずがない。

「うん、ごめんね。ケビン」

「気にすんな、むしろそれ以外の方策をとってたらゆるさねえよ」

俺は思案する間も惜しく、スズネに肯いた。

確実な方法。俺達だけで村に戻り、装備と人員をそろえることを良しとしない理由。

それが。

「悪いな」

「気にすんな、むしろその女の子を見捨ててたらお前のことぶん殴ってたよ」

ガッツの義手に張り付いてしまった女の子だ。

この子がいる限り、ガッツは戦えない。

少女の皮膚を切り取れば戦う事もできるだろうが。

それでは少女の顔にどんな傷がつくか分からない。

そして、ガッツと少女が共に村まで逃げるというのも論外だ。

モンスター、それも鋼龍がいる狩場で片手のガッツに村まで少女を連れて行けというのも酷だ。

というか、無茶だ。氷点下の雪山で凍傷で苦しむ少女にそんな強行軍が耐えられるわけがない。

ならば。

「ガッツはココで皆を警備、特にその子。セツナを大事にするのよ」

「了解、分かってるよ」

ガッツはそう言いながら、左腕を外した。

左腕の接合部だけをお湯で溶かし、義手に張り付いた彼女をそっと寝かせる。

彼女の体力は残り少ない。応急手当をしても長くはもたないだろう。村に行つて援軍を連れて来るのでは多分、間に合わない。

「今は気絶してるが、起きて騒いだらヤバイかもな」

「安心してください。ネムリ草がありますので、それで麻酔薬を作つて嗅がせます。勿論、副作用がない範囲で」

申し訳なさそうな表情をしながらも、両親は医者らしく頼もしく答えた。

モンスターすら眠らせる睡眠弾。その原料であるネムリ草は少量ならば、人間用の麻酔薬となる。

それを扱う医者である少女の両親は、それでも申し訳なさそうにしている。

自分達の娘のため、俺達の狩りが制限されているということに心を痛めているのかもしれない。

それは、口には出さないが。他の商人達も同じだろう。

顔に金属を貼り付けてしまった少女。

だが、その傷は決して致命傷ではない。

このモンスターと戦わなければいけない時代。傷がある人間など山ほどいる。

命さえあればいい。そう考える人間は決して少なくない。

だからこそ、ハンターであるガッツに義手を返し。

安全にモンスターを狩って貰い、それから逃げ出せばいい。キヤラバン全体の命と、少女の顔の皮膚。どちらが大事か。

そんな、誰でもわかることにスズネはあえて何も言わず。

「じゃあ、行つて来る。ガッツ、ソレ壊すんじゃないわよ」
「あいよ。任せな」

俺が以前作った、キリンの素材を埋め込んだ剥ぎ取りナイフ。それを片手で構えながら、ガッツは肯いた。

普通の剥ぎ取りナイフより頑強なそれは、片手剣ほどではないが多少の武器になる。

大剣は両手でやつと振り回せる。故に片手になったガッツには大剣を振り回せない。

そのため、万が一の事を考えてスズネが与えた武器だ。

今回、恐らく剥ぎ取る暇はない。そんな余裕はない。

「…………ゴメンね」と小さく謝りながら俺の手を握るスズネに笑いながら、小さく首を振った。

武器がない以上、ある武器を使うのは当然だ。

ガッツの剥ぎ取りナイフは武器にはなりえない。

俺が作った武器をガッツに渡したことをスズネは少し気にしてるようだ、そんな事は大したことじゃない。

「だ、大丈夫でしょうな。な、なんでしたら。あの娘には気の毒ですが……………」

「大丈夫です、こう見えても私達。上位ハンターなんですから」

「し、しかしですな」

実際にはまだ上位ハンターになってない俺達が、上位ハンターと名乗っても隊商のリーダーの顔は優れない。実際、怖いのだろう。暗にガッツの腕に張り付いた少女は見捨てるべきだと言っている。

確かに、それが確実な手段。それでも…………スズネはそんな手段は選ばない。

「——大丈夫です、チャツチャツという訳には行かないですけど。確実に倒しますから」

「し、しかし。鋼龍といえば伝説の古龍でしょう？ やっぱ無理せずに……」

「——それに！」

隊商のリーダーが発しようとした言葉を止め。

スズネはニコリと笑いかけた。

殺意の笑顔、少女を見捨てるなどという選択は許さないというスズネの無言の恫喝に隊商のリーダーは震えている。

相手は伝説の古龍。クシャルダオラ。

幾つモノ街を滅ぼし、何人ものハンターの命を奪いし鋼の龍。

その息吹はあらゆるものを凍りつかせ、その鋼の体はあらゆる武器を受けつけない。

ヤツを前にして、スズネは嘲笑う。

——ソレがどうしたと。

そんな事は、俺達が負ける理由にはならない。

相手が伝説だろうと、強かろうと。

負ける筈がない。なぜなら。

「それに——知らないんですか？」

「な、何をですか？」

スズネの笑顔に潜んだ殺気、それに怯えながら隊商のリーダーは尋ねる。

その怯えた男の顔に、スズネは。

「——誰かを護る為に戦うハンターは、とっても強くなるんです」

平然と“嘘”をついたのだった。

< 続 >

感想は感想提示版にお願いします。 m (—) m

嘘（後書き）

短いすかね。すいません、まだ本調子ではないので。

次回からバトルです。古龍とばかり戦っていますが、普通の狩りも書こうと思っておるのです。次回は年明け。もう少々お待ちくださいませm（――）m

豪雪戦線（上）（前書き）

遅くなつてごめんなさいm（——）m
最近忙しくて、中々難しいのです。
では、古龍戦の始まりです。

豪雪戦線（上）

——横殴りに、雪が吹雪いていた。

降り続ける粉雪は、風と共に舞い上がり俺達の視界を阻害し続けている。

先程まで快晴だった、雪山。

その、穏やかな天気を吹雪に変えた存在が目の前にいた。

……鋼龍、クシャルダオラ。

出会うだけで一つの天災と呼ばれる彼ら、古龍。

その生態は謎に包まれていて、未だ解明されていない。

嵐を呼ぶといわれる鋼龍クシャルダオラ。

そのメカニズムも未だ謎のままだ。

密林と雪山に現れると嵐を呼び。

街に攻め込んでくるときや、砂漠で出会うと嵐になることはないという。

場所によって、嵐を呼ぶこともあり。呼ばないこともある。クシャルダオラが嵐を呼ぶには湿度が必要なのだろうか？とも言われているが、詳しいメカニズムは未だ謎のままだ。

だが実際、砂漠や街では嵐を呼ぶことはない。

それだけに、爆弾を多用するハンターは口をそろえてこういう。

曰く、

“——街と砂漠以外でクシャルダオラと戦うな”と。

雪や雨に降られては、爆弾は湿気ってしまっただけ使えない。対大型モンスター戦においては、切り札にもなる大タル爆弾。コレが使えないのは、あまりにも不利だというのだ。

そして、現在。俺達は爆弾など持たず、鋼龍と相対している。吹雪いている以上、爆弾など使えないし。

そもそも護衛任務のため誤爆を恐れて爆弾などもってきていない。そして、これから戦うのは。古龍クシャルダオラ。實力は未知数、道具は少ない。この状況でなんとかコイツを倒さなければならぬ。

「ゴメンね——ケビン」

鋼龍を前にして、小さくスズネが謝ってきた。

歴戦の戦士であるスズネ、その背中がとても小さく見える。

「ゴメンってなにが？」

スズネがナニを謝っているのか、分からなかった。

やることは決まってるし、やるべきことは一つしかない。

「今回のコト……。一番簡単なのはあの人達をココに置いて助けを呼びに行く。それが、ガッツと戦うことなんだよね。それが簡単で確実な方法」

鋼龍を見ながら、スズネの独白は続く。

確かにそれはもっとも簡単で、確実な方法だ。

俺達は護衛任務を受けた。

つまり、ポケット村に向かう商隊を守るのが仕事だ。

護衛でモンスターに襲われた場合、全て守るのは不可能なことは必ずある。

人間は全て助かったといえど、荷物が紛失すれば商人としては商売にならない。

だから荷物が何%なくなったら、人間が何人亡くなったら、報酬は何%カットというのが俺達の相場である。全てを救うのが不可能なら次善の策にいく。

コレは至極当然のことだし、被害を最小にとどめようとするのは正しい考えだ。

「——でもね、私にはソレができないの」

そう、スズネにはできない。

あの女の子の顔に傷ができる、ソレぐらいは護衛任務でいえば充分許容範囲だ。

女の子の顔に傷ができるぐらい、商隊全員の命とは秤に比べられる筈がない。

第一、依頼者である商隊の隊長。

俺達に報酬を支払う隊長が少女の顔の傷は見捨ててもいいと言いか

けたのだ。

俺達は支払われる報酬で生活をしている。

ならば、誰の命令に従うべきなのか？
ならば、誰を犠牲にすればいいのか？

それはとても簡単なコトなのに。
スズネには、その簡単なことができない。

「あの金と銀の火竜の事件から、そんなに経ってないのにまた同じミスをしちゃうんだ」

あの時、金と銀の火竜の事件。
食料を犠牲にすれば。村はもっと簡単に助かった。

村人もハンターも。
誰も傷つかずに済んだかもしれない事件。

少しの犠牲で皆が助かるのなら。1人でも多くの人を救いたいのなら。

避けられない犠牲を躊躇うことなく切り捨てなければならない。

あの事件での経験。ソレが生かされていない。

その事件を経験しよう。——スズネは何かを犠牲にすることができない。

「上位になろうとG級になろうと、この考えはきつと変わらない。
……私はきつと見捨てられない」

小さな者を犠牲にすれば、皆が助かる。
大の為に小を切り捨てる。誰でもわかる簡単な真実。
それが、スズネにはできない。

「——また、同じ事が起こったら、私はきっと同じ事をしちゃう」

誰も救えない可能性よりも。
自分の命や報酬よりも。
大事な者の命よりも。

——小さな者を守ろうとしてしまう。

「だからね、私はきつと最低なハンターになると思う。小さな者を守ろうとして大事な者を守れない。そんな、最低なハンターに。だからケビン。コレが終わったら……」

スズネが言い終わるより先に、俺は自分の唇でスズネの唇を塞いだ。
だが、スズネの唇はカサカサで熱をもっていない。
言葉を封じながら、俺は足りない言葉を伝えた。

「スズネは、最低なハンターなんかじゃねえよ」

「…………でも」

まだ、続けようとするスズネに。
おれは囁くように言葉を紡いだ。

「最低なハンターってのは、仲間を守れず自分も守れず、助けるべき村人も守れないハンターのことなんじゃねえかな？ だからさ……スズネは」

——だから、俺達は。

「最低より、少しだけマシなハンターになろう」

自分の身だけは、大切な誰かの身だけは守れるハンターになろう。
今はまだ、頼りない俺達だけど。
何時かきつと、もっと強くなれるように。

その俺の言葉に、スズネは…………腕の中でコクリと肯いた。

最後に、小さくスズネを抱きしめると。俺はクシャルダオラと相对した。

分厚い吹雪に遮られ、その全容ははっきりとは見えない。圧倒的な巨体、だが巨体であるが故に。俺達小さな人間には気がつかない。

だが、それもあと数メートル。

これ以上近づけば、野性の勘で気がつくだろう。

俺はスズネに小さく肯くと、鋼龍に向けて走りだした。

足音か、それとも気配か。

俺の気配に気がついた鋼龍が振り向こうとしている。

その鼻面に、俺は走りこみながら渾身の一撃を叩き込む。

「うらアア!!」

弧を描き、コチラをむこうとした鋼龍の鼻面。

俗に言う「角」に俺の太刀“鬼斬破”を叩きこんだ。

ソレと同時に刃に紫電が奔っていく。

太刀“鬼斬破”雷獣キリンの雷尾を使ったその太刀は、電撃を纏い鋼龍の体を斬りつけ続ける。

頭から翼を。更に胸から足を。

プレスを喰らわれないように体を移動させながら斬りつける斬撃。

それは少しづつではあるが、鋼龍の体力を削っている筈である。

だが。

「——硬え!」

体の硬さがハンパではない。

強化したばかりの鬼斬破すら、表面に傷をつけるだけで致命的な一撃を与えるには至らない。

このままでは、弾かれるか？

一回、引こう。そう考えた次の瞬間。……風がふいた。

そよ風にも似た空気が、頬をなでていく。

上下が一瞬にして反転するような感覚。気がつけば俺は空を見上げていた。

……倒れたのか、俺は？

気がつけば、背中に雪の感触がある。

打撃を喰らったわけでもない、体にも鎧にも傷はない。ではなぜ、俺は雪の上で倒れている？

——吹き飛ばされたのか？

ソレにしては、攻撃の感触がなかった。

体もダメージを受けていない。

一体なにが？

恐らく、考えていた時間は一秒に満たないだろう。

だが、狩場での一秒の油断は時に生死を分ける。

その一瞬の隙を逃がすはずもなく、鋼龍は吼えた。

耳を塞ぐほどのバインドボイス。俺は鼓膜を破られまいと耳を塞ぐ。人間ならば誰もが陥る絶対の隙。その隙を逃がすはずもなく鋼龍は息を吸い込んでいく。

——ブレス。

見えないブレス、先程ガッツを凍らせたブレスを吐こうというのか。だが、身動きが取れない今の状況では俺には回避は不可能。

では、如何する？

………なにかで防ぐ？

却下、太刀にはモンスターの攻撃を防ぐような盾はない。

………全速力で走る？

却下、未だ耳を押さえている俺にそんな余裕はない。

………閃光玉で、鋼龍のブレスを防ぐ？

論外。走り出すこともできない俺にポーチから閃光玉を取り出し、更に目標を定め投げる。

なんてことができるはずがない。

今、俺が助かる手段はない。どんな熟練のハンターであろうと一瞬

の判断ミスで命を落とす。
それが、狩り。……………故に俺はココで死ぬ。

「——ケビン！」

……………そう、ここに。彼女がいなければ。

「——ケビン！」

叫び声と共に、丸い物体が俺と鋼龍の間を弧を描き飛んでいく。
見慣れたその物体を眼で追わず、俺は耳を手で押さえたまま。ただ
目を閉じた。

俺が目を閉じるとほぼ同じ刻、光が目蓋を通して弾けていく。
白一色に染まる目蓋。それは、スズネが投げた閃光玉に間違いない。

「……………大丈夫、ケビン？」

「なんとかな、それよりなんか分かったのか？」

目を開ければ、もかくクシャルダオラと横にはスズネがいた。
スズネには戦線から離れて情報を探ってもらった。
初めて出会う敵、クシャルダオラ。

その能力は未知数であるが故に、どう攻めていいのかすらわからない

い。

ならば、どちらか一方に隙。

もしくは弱点を見極めるためにスズネには戦線を離脱してもらっていたのだ。

「ええ、多分ね……。アイツは体に風を纏うコトで鎧としてのの」

「それがさっき俺が吹き飛ばされたモノの正体か？」

「アイツ、さっきは風をプレスにしていたでしょう。つまり風翔龍って異名は風を使うってコトじゃないかしら」

「——なるほど、な！」

スズネの言葉を最後まで聞いて。鋼龍クシャルダオラに向かって斬撃を放った。

未だ閃光玉によって視力を潰されているヤツは無茶苦茶に暴れまわるが、その間隙を縫って斬りかかる。……………それにしても。

「……………たいしたもんだ」

僅か数秒、それで鋼龍の基本性能。

更には閃光玉を投げるタイミングまで計ることができたのだ。

スズネの腕は相当なレベルであるといってい。

盾をもっているが故に、行動範囲が狭く。

モンスターの攻撃を防ぐことが多いランス使いだが。

その利点は敵の攻撃を見切ることができるということにある。

ほぼ全ての攻撃を防げるが故に、敵の戦力。更には能力までも冷静に判断できる。

戦いながらもできるのだから、戦闘から離れば更にモンスターの情報を分析できるのでは？

と考えていたのだが、どうやら上手くいきそうだ。

「——来る！」

スズネの叫び声が聞こえた瞬間、俺は全力で横に飛んだ。

その横では、盾を構えたスズネの姿。

いつのまに視力を回復していたのか？

鋼龍は目標を俺とスズネに見定めると、全身に纏っていた風を体内へと吸い込んでいった。

そして、鋼龍の何かが体内からせり出し口蓋へといたり吐き出された。

……風のプロス。

既に来る瞬間を見切っていたスズネは俺に注意を促した後、風のプロスを盾で防いでいる。

——ランスのガード。

飛竜などの風圧すらガードできるその盾は、剣士用の武器の中でもっとも強固だといってもいい。

飛竜の風圧、つまり“風”を防御できるのだから、同じ“風”の攻撃であるクシャルダオラのプロスを防げない筈はない。

考えてみれば当たり前なのだが、その当たり前をこの一瞬で判断できることが凄い。

だが、ソレよりも。

「——チャンスだ！」

鋼龍、クシャルダオラがブレスをスズネに連発している。全身を巻いていた雪と風が薄くなっているのだ。ということはつまり、………風の鎧がなくなっている。

風の鎧があるときは、近づくことすら不可能な俺だが。

——今なら。

攻撃がスズネに集中している“今なら”攻撃することができるはず。

「……………オオオオオオ!!」

叫び声をあげながら、鋼龍の角に太刀を叩き込む。一撃では足りず、弐撃。参撃と斬りつけると。

「ギャオオオオオ!!」

——効いたのか？

僅かといえど、のけぞり。動きをとめたクシャルダオラに自信を強める。

体にある無数の傷といい、コイツが弱っているのは間違いない。このまま気刃斬りへとつなげて、少しでもダメージを与えるべきか？そう考えて踏み込んだ瞬間。

— U G Y A A A A A !

吼えた。その一際大きく空気を揺るがし俺の脳髓を揺るがすバインドボイス。

「——チイ！」

俺は反射的に耳を塞いで、次にナニがくるかを見定めようとした。ブレスか、それとも俺が知らない攻撃か？

だが、クシャルダオラがおこなったのはどれでもなく。大きくはたとく空に………浮かび上がった。

「マジ、かよ」

翼があることで、飛ぶであろうコトは予想していたが。このような飛びかたは予想外であった。

空を飛ぶ飛竜種の殆どは、高く天に舞い上がりある程度の高度を維持してから攻撃。

もしくは、そのまま狩場を移動するモノが殆どだ。

だが、コイツは違う。

太刀が届くかどうかギリギリの低空を飛びながら、じつくりと俺達を攻撃しようとしている。

本来なら攻撃のチャンスなのだろう。
空の王者、リオレウスのように上空高く。
太刀が届かない場所にまで逃げられたわけではないのだから。

だが、コイツ。

鋼龍クシャルダオラが低空を飛ぶ理由は違う。

コイツは自分自身の纏っている“風”
風の鎧を絶対のモノとして信じているのだ。

下手な攻撃なら風の鎧と翼が放つ風圧で弾き返せると。
実際、風を纏った奴に。俺の攻撃は通じなかった。

——ならば。

「——コツチだ！」

ペイントボールを当てながら、ヤツ。クシャルダオラの注意を俺に
向ける。

ヤツはその巨大な瞳を俺に向けた。

慌てながら逃げ出す俺を追撃するように。ヤツは深く息を吸い込んでいく。

——プレス。

見えない攻撃であろうと、視線と顔の向きで大体の方向ぐらいは読める。

やつが狙っているのは、俺の進行方向。

モノブロスSシリーズですら凍りつかせた、プレス。

その一撃は俺の防具では耐えられるかすら………わからない。

懸命になって、横っ飛びにその攻撃を避けた瞬間。

「――ハア！」

狙い通り、スズネの気合と共に刺突が繰り出された。

「――ハア！」

……狙い通り。

鋼龍、クシャルダオラの真下にはスズネの姿がある。

低空、それも太刀で届く高さで飛んでいるヤツに近接武器最長とも言われるランス。

豪槍グラビモスが突き刺さる。

……一撃、弑撃、参撃。

繰り返し突きつづけるランス。

鎧竜グラビモスから削りだされたそのランスは、内臓された毒液をクシャルダオラに流し込む。

そう、太刀使いである俺には、クシャルダオラが纏う風の壁。更には、翼で巻き起こす風圧に耐えることはできない。

近づけば、攻撃は弾かれ。

巻き起こす風に足を取られ無様に転ぶことしかできないだろう。

——だが、スズネは違う。

攻撃力は僅かに劣るとはいえ、スズネが持つのは巨大な盾を誇るランスだ。

近接戦闘武器。俗に言う剣士用の武器の中で最高の硬度を誇るランスの盾。

これは飛竜がおこす風圧をガードできる。

そしてスズネが装備しているのはグラビモスシリーズ。

下位とはいえ、鎧竜グラビモスから得られた鎧。

その鎧は重みによりガードしても態勢が崩れにくい。

故に現在。鋼龍が巻き起こす風圧の下でもガードをしつつ攻撃ができるのである。

片手で盾を構えながらのため、両手を使って斬撃を叩きこむ大剣や太刀に比べれば威力は低い。

その刺突は、徐々にはあるが奴の体力を削っていく。

「後は、アイツに——毒が効くかどうかってコトだよな」

クシャルダオラに攻撃し続けるスズネを見ながら、俺はゆっくりと起き上がった。

ブレスを放ち続けている間は視界が保てないのか？

クシャルダオラは俺がいなくなった同じ場所に、2回、3回とブレスを叩きつけている。

浮かび上がったままのブレス——試してみる価値はある。

「——スズネ、目を塞げ！」

言うと同時にクシャルダオラの眼前に閃光玉を投げた。

閃光玉、絶命時に光を発するという光蟲を材料にしたその道具は強力な閃光を生み出す。

だが、あまりにも強烈な閃光のため。ハンターの視界すら妨げる可能性がある。

このため、通用しない相手。ゲリヨスなど一部のモンスターに使うと逆にコチラが危険になる。

だが、クシャルダオラに通用するのは既にガッツが確認している。

……ならば。

光が収まると同時に、大質量のモノが雪に落ちる音が聞こえた。目を開けてみれば目が眩んだのか。平衡感覚をなくして倒れているクシャルダオラの姿。

……やはり、落ちたか。

代表的な飛竜、リオレイアやリオレウス。

ヤツラは飛行中に閃光玉を眼前に当てられると平衡感覚を失い、地に落ちる。

閃光玉が効く以上、クシャルダオラにも同様な効果が期待できると思っていたのだが。

コレは期待以上だ。

そして。倒れてもがいているクシャルダオラの尻尾に、スズネは刺突をくりかえしている。

「——なら、俺は」

スズネの邪魔にならないように、そして少しでもダメージを稼ぐために。

正面にまわりこみ、その頭部に斬りつけた。

「——チィ！」

だが、やはり……硬い。

鋼龍とまで呼ばれているクシャルダオラ。

奴の角は強化したばかりの太刀。

鬼斬破ですら、弾いてしまう。

だが、先程からの斬撃で少しづつ練気は溜まっている。

ならば……。気刃斬りで奴の頭部を破壊するまで。

「——UGYAAAAAAAAA！」

だが、次の瞬間。

鋼龍クシャルダオラは既に視力を取り戻していた。

威嚇するように叫ぶ、鋼龍。そのバインドボイスから耳を守りながらマズイ事に気がついた。

視界を取り戻したということは、イコール。正常な判断力も戻ったということ。

先程まで纏っていなかった、風。

風の鎧が復活することを意味している。

先程は軽々と吹き飛ばされた。恐らく、人間ではあの風を防ぐことは不可能なのだろう。

だが俺は、無駄だとわかっていても足を踏ん張り。風に耐えようとしたのだが。

「——えっ!？」

……風は来なかった。

見れば、クシャルダオラは俺の存在に気がつき。

弾き飛ばそうと体を震わせていた。まるで力んでいるようにも見え

る。

だが、風は生まれない。

なにがあつて、鋼龍クシャルダオラが風が纏えなくなったのかは分からない。

だが、今こそチャンスだ。

「——オリヤアアア！！」

溜まりきった練気、それを太刀に乗せ一気に切り裂いていく。

大地を踏み、力をのせて両足から腰。更には背筋、肩、肘。そして刃先へと力を込めていく。

一撃一撃に、かつてない重み。クシャルダオラの硬い甲殻が刃を弾き返そうと牙をむく。

だが、弾かれそうになる刃を強引にねじ込みながら気刃斬りをくりかえす。

「——ハッ！」

やはり、硬い。

気刃斬りが終り、鬼斬破の刃を見てみればもう所々に刃毀れがある。このまま、斬り込むか。それともいったん引いて、刃を研ぐか。ソレを考えながら、踏み込み斬りつけようとした瞬間。

—— U G Y A A A A A A !

もう何度目か分からない、バインドボイスが聞こえた。
正面で耳を塞ぐ俺と、今回は防衛が間に合わなかったのか。
尻尾のほうではスズネも耳を押さえている。

奴は、鋼龍クシャルダオラはもう一回吼えると。
ゆっくりと翼を使い、飛び上がった。いった。

「——逃げたのか？」

奴に当たったペイントボールはその臭いで、奴の居場所を教えてください。
る。

動き出した先は、山頂。エリア8。

クシャルダオラの遺骸があるといわれている場所だ。
飛竜と同じように不利だと思ったら、一旦場所を変えるのだろうか？

「ケビン、大丈夫？」

「ああ、スズネも怪我はないか？」

お互いに無事を確認しながら、これからのことを話した。

「どうする？ とりあえずこの場からアイツを引き離せたことだし、
このまま商隊を引き連れて逃げ出すって手もあるぜ？」

「そうね……………」

俺達の任務はあくまでも護衛だ。

鋼龍クシャルダオラを強引に討伐、もしくは撤退させる必要はない。洞窟から唯一の出口であるココ、エリア6からクシャルダオラを移動させた以上。

このまま商隊を伴って、一気に逃げ出すという手もあるのだ。

「でも、女の子を狙ったのよね？」

「……………“それ”だよな」

思わず溜息がもれてしまう。

そうなのだ、奴。クシャルダオラはガッツと一緒にいた女の子を狙ってブレスを吐いた。

つまり弱い者から順番に殺し、コチラを動揺させるという戦いを得意としている可能性がある。

しかも、傷ついている。

どうやら他の場所でハンターと戦い。逃げ出した様だ。

だとすれば、大勢で移動している瞬間を狙われたらどうしようもない。

特に、商隊には食料もあるのだ。

傷ついた体を癒すために、商隊の荷物のみを狙う可能性すらある。

代表的な飛竜種は、寝る。もしくは何かを食べることで戦いの傷を癒すという。

クシャルダオラに似たような能力があるというのなら、商隊の荷物を狙わせるわけにはいかない。

俺達のように戦う事に慣れているハンターと、戦ったことがない民

間人に豊富な食料。

どちらを狙うかなど、自明の理だ。……………となると。

「しょうがないわね、何とか撤退させるぐらいまで戦いましょう」

「だな。ここは、頑張るしかねえな。ところでさ……………」

「風の鎧のこと？」

先程のことをどうやって説明しようかと考えていると、スズネは先に話し出した。

「ああ、それぞれ。なんだって急にアイツは風を纏えなくなったんだ？」

「う、ん。多分だけど……………毒が効いてるんだと思う」

「毒？」

「うん、村長から聞いたことがあるの。鋼龍は毒と竜属性に弱いって。ただはつきりした情報じゃないから、言い出しにくかったんだけど」

なるほど、毒か。

生物である以上、毒は殆どの生物に効く筈である。

当たり前すぎて、スズネも話す気になれなかったのだろう。

だが、毒が効くという言い伝えに別の意味。

クシャルダオラの“風の鎧がなくなる”という意味があったというなら。

スズネの武器はクシャルダオラに対抗できる武器ってコトになる。竜属性がないことで少し不安だったが、これで勝てる見込みができた。

閃光玉で倒れた時も、風の鎧は纏えなかったし。毒と閃光玉。この2つで攻めていくべきだろう。

これからの戦闘のことを考えながら、俺はこれから戦う場所。エリア8の地形を思い出していた。

雪山の山頂部、エリア8。

ココ。エリア6より細く狭く、大型モンスターと戦うには不利な場所だ。

そして、閃光玉の数も少ない。

それでも、勝てるかもしれないという希望をもって。

俺は刃毀れた太刀、“鬼斬破”を研いだ。

薄暗い洞窟の中、俺は外でペイントボールの臭いが流れてくるのを感じていた。

独特の臭気をだし、標的の居場所を特定してくれる道具。

その臭いは、山頂部。俗にいうエリア8へと向かっていった。

一緒に戦いたい。

そう考えながらも、俺はスズネに渡された小太刀を片手に周囲を見張る。

……今になってみれば分かる。

ココまで小さなモンスターすらいなかったのは、古龍クシャルダオラを恐れて逃げ出したのだと。

「——ツチ、俺もヤキがまわったもんだ」

予兆はあった。

本能的に危険を察知してもいた。

だが、それでも……守れないのでは仕方がない。

横目で俺の義手に張り付いた少女を見ながら、俺はもう一つの可能性を噛み殺した。

未だ剥がれない、義手。

ソレを剥ぎ取れば、少女の顔には見るも無残な傷痕が残るだろう。

凍傷、その傷を馬鹿にしたために指や鼻が“もげた”ハンターは幾らでも見てきた。

しかも、少女はまだ幼い。

抵抗力が弱い少女にどんな傷が残るかわからない。

「……だ、大丈夫なんだろうな？」

「あん？」

もの思いに耽っていると、近くまできた隊商のリーダーが俺に話しかけてきた。

恰幅のいい体に、温和そうな表情。

平時ならば、行商人としても有能な男なのだろう。

だが、今。その表情は暗く、震えている。

震えているのは寒さだけのせいではないだろう。

「あ、あの2人です。どう見ても貴方。ガッツさんより強いハンターには見えませんでしたぞ」

「大丈夫だろ、とりあえず洞窟入り口からは奴をどけたみたいだし」

「——え!？」

俺の言葉に、意気消沈していた商隊が活気を取り戻した。

「今なら逃げられるんじゃないか？」そんな声すら聞こえる。

溜息をつきながらも、俺は説明を始めた。

「ああ、だけど勘違いすんな。今から外にでも追いつかれて殺されるだけだ」

「そ、そんなことやってみないとわからないだろう?」

「分かるだろうが、荷物をもった地を這う大所帯と翼をもって空を飛べる古龍だぞ?」

顔を青くしながら俺に詰め寄る青年を宥めながら話した。

恐らくどこかでハンターと戦い逃げてきた古龍だ。

そして古龍といえど、生物には違いない。

疲れ、傷ついた生物が欲するモノと言えば。

休息かもしれない………食事だ。

手強いハンター2人と、戦う力のない群れ。

どちらを狙うかなど分かりきっている。

大勢の人間を襲うなど、本来なら考えにくいのだが。

実際、アイツ。鋼龍クシャルダオラは俺ではなく少女を狙った。

戦闘能力が最も高い俺ではなく、力のない狙いやすい“餌”を狙ったのだ。

よほど頭がいい、もしくはよほど餓えていると考えていいだろう。

「あ、あの2人が他の場所で……。足止めしてくれるかもしれないじゃないか？」

気弱そうな青年の声に「そうだ、そうだ」と相槌の音が広がる。俺は頭をかきながら、声を少し荒げた。

「んな余裕があつたら、そもそも“逃がさねえ”だろうが！」
「……………」

そう、鋼龍クシャルダオラは山頂。エリア8に移動した。

これはあいつら。ケビンとスズネが敵、鋼龍クシャルダオラを退けたとも言えるが。

同時に“逃がした”ともいえるのである。

逃げるクシャルダオラをその場に止めることができない以上。

俺達の気配にクシャルダオラが気がついたら、襲ってくることを止めるコトができないのだ。

まして、俺達は大人数。

野生の勘を持つ、クシャルダオラから逃げ出せる可能性は低い。

しかも大回りしてココ。エリア5から6そして7へ回るルートは危険が多い。

山頂エリア7から2に降りるには、崖を降りなければならない。

ツタは人間1人が下りるので精一杯だし、荷車は上から人力でゆっくり下ろさなければならぬ。

そんな長い期間、クシャルダオラが俺達を見逃してくれるとは思えない。にくい。

俺の言葉に納得したのか、はたまた自暴自棄になったのか。

商隊の男達はそれぞれ座り込んでいく。

「マジかよ、何でこんなことに」

男達は俯きながら、愚痴りだした。

近くには、ネムリ草で眠っている少女の姿。

その姿を視界の隅にとどめながら、俺は小さな声で話し出した。

「——大丈夫だろ、オメエらは助かるよ」

「な、そんな事、分からないだろう。第一あんな若い2人だけで倒せるのか？」

「相手は古龍だぞ！？ 幾つモノ街を壊したという古龍に若い2人だけなんて……」

不安気な声が暗い洞窟に響き始める。

……マズイ。

このままだと恐怖とストレスで、なにをしでかすかわからない。

最悪、無理を承知で狩り場に出て逃げ出そうとする可能性すらある。その状況でコイツラを守りきるのは不可能。

更に目の前で死んでいく人間に、あいつらが耐えられるとは思えない。

モンスターを倒せるようになったとはいえ、まだ若いあの2人。

民間人の死亡には慣れていないはずだ。

そんな精神状態では最悪、全滅という可能性すらある。

……ならば。

「安心しろ。何しろあいつらは同じ古龍。麒麟を倒したんだぜ」

「麒麟？」

「それってあの幻獣とよばれる？」

パニックを起こした民衆。

悪いほうに向かう考えを変えるには、分かりやすい希望があればいい。

理路整然とした言葉や理屈より、簡単な希望。

ソレを見せてやれば、彼らはきっと落ち着いてくれる。

厳しい旅路を幾つものくぐり抜けてきた行商人達だ。

古龍という規格外の存在に一時的にパニックを起こしているだけ。

ならば、分かりやすい希望を与えればいい。

「ああ、しかも上位の麒麟をだ！！」

—— おおおお！

洞窟内にどよめきが漏れる。

少女を起こさないか少し心配だったが、それは杞憂に終わったようだ。

ネムリ草を使った麻酔薬はよく効いている。

そして俺はそのまま、畳み掛けるように言葉を重ねる。

「それに実際、今はクシャルダオラを山頂に追い込んでるじゃねえか」

「じゃ、じゃあ。一気に討伐という可能性もあるのか？」

「そこまでは、なんとも言えねえ。そもそも人間はモンスターに比べて貧弱だからな。少しずつ体力を削っていくしかねえんだ」

大型モンスターを一撃で倒す。

そんな英雄譚に憧れるのは分かるが、実際そんなハンターは見たことがない。

皆、情報を集め。クセを知り。徐々に追いつめながら倒すのだ。

「じゃ、じゃあ？」

「だが、安心しろ。ダメージを少しずつ与えて倒すのが俺達ハンターだ。だからきつと……」

……ゴクリ。

と誰かの喉が鳴った。

根拠もないのに、断言するなど本来考えられない。

それでも、ここでパニックを起こすよりはずっといい。

「ヤツらはきつと倒してくれる」

——おおおおお！

更にどよめく商隊の人々に、クシャルダオラに見つからないために静かにするように言うつと。

落ち着いたのか、空腹と寒気を訴える者もでてきた。

それぞれ、暖をとるためと空腹を紛らわせるために。

携帯肉焼きセットで肉を焼かせ落ち着かせる。

「——まるで、ピクニックだな」

「名演説でしたな」

その様子に周りを警戒するかと席を立つと。

いつのまにか隣にいた、商隊のリーダーが話しかけてきた。

「アンタもな」

「ほっほっほっ。何のことやら？」

機嫌よさげに話すコイツ。商隊のリーダーにタバコを渡す。

利益にならないことはしない。それが、商人の鉄則だ。

それだけに、少女を見捨てるという選択肢もあったのだろう。

だが、同時に商隊全員の不安を代弁し。俺に責任をひっかぶせやがった。

それに少女を助ける必要がないといったのに、ヤツラは戦いに行つた。

つまり契約違反である。

これで追加報酬の話はなさそうだ。

「後はあの方達が無事に帰ってくるだけですな」

「ったく、信じてるのかよ。あんだけ騙しといて」

「ほっほっほっ。演技でタダになるなら幾らでもしますぞ」

本当にぶん殴ってやろうかとも思ったが、その気持ちは押し殺した。実際、コイツが少女を見捨てるといったからアイツラはやる気になったのだ。

商人にとって大事な条件の一つに人を見る力というものがある。

そいつが最も力を出せる状態にする。

それを見極めるのが、商人のリーダーとしての実力だ。

「——タヌキが！」

「ほっほっほっ。褒め言葉として受け取っておきましょう」

でかい腹を揺すって笑うコイツに呆れながら。
俺はペイントボールの臭気の行方を追った。

（下編に続く）

豪雪戦線（下）

……あれから、数時間が過ぎた。

風に卷かれながら雪山に降り続ける粉雪は、降り止む気配さえ見えない。

暗く灰色で彩られた周囲の景色は、俺の視界を阻害する。
そして、その景色に溶け込むように一匹の獣が俺達を見ていた。

……鋼龍クシャルダオラ。

鋼色の体色は、雪山では保護色となり一つ間違えると姿を見失いそうになる。

だが、その姿には先程までの威容は消えていた。

翼は欠け、少なからず傷を受けているその姿。

スズネの毒が効いているのか、はたまた以前に戦ったハンターに
ほど重症を負わされたのか？

どちらにしても、弱ってきていることは確かだ。

だが、同時に。それは俺達にも言えることだ。

目くらまし代わりの閃光玉で視界を塞げば、クシャルダオラは暴れ
まわる。

奴の頭部を攻撃しようとして、前足にひっかけられたのは一度や二度ではない。

それに、前足を避けても次に後ろ足と尻尾が来る。

油断していた時にくる尻尾の攻撃は中々に厄介だ。

特に後方から尻尾を中心に攻撃していたスズネは、何度もその攻撃を受けた。

その度に回復薬を飲んでいた俺とスズネだが。

もはや、その回復薬も残り少ない。

「そろそろ決着をつけるときか？」

「——まだよ、毒も効果が切れているわ。みて、またクシャルダオラの周りに風が巻いている」

「ってことは。……俺がまた正面に立って罠役だな」

「ええ、じゃあ——よろしく！」

叫ぶと同時に俺はクシャルダオラの正面へ。

スズネは横へと広がっていく。

戦闘の基本、コレばかりは武器が変わろうと基本は変わらない。

飛び道具だろうと近接戦であろうと、最も怖いのは味方の“誤射”

もしくは“誤爆”だ。

このため、お互いがお互いの攻撃で倒れないために十字ラインを描くのが理想とされている。

そして、本来。

モンスターと戦う場合、罠役は盾を持つランス使い。もしくは片手剣使いの役目といわれている。

だが、今回。言うまでもないが、そんな方法は論外だ。

風圧、それもクシャルダオラが起こす風圧に勝てない俺には攻撃する手段がない。
せつかくスズネが囷になっても俺が攻撃できないのでは、本末転倒だ。
故に。

「——ホラ、こつちだよ！」

ペイントボールを当てながら、クシャルダオラを挑発するのは俺の役目だ。
盾がない太刀とはいえ、攻撃を避けるだけならば容易い。
もしくはプレスを吐く瞬間ならば、攻撃チャンスもあるかもしれないのだ。

この数時間で分かったこと。

それは、コイツ。クシャルダオラの体は異常に硬いということ。
そして、毒を一定量喰らうと風を纏えないということ。
閃光玉にやられると、風を纏えないということだ。

ペイントボールがクシャルダオラに当り、独特の臭気があたりに立ち込める。

ペイントボールが当たったことに怒ったのか、それとも先程から攻撃を仕掛けるわずらわしい敵に腹が立ったのか。

奴はコチラをジロリと睨むと、咆哮をあげた。

——ゾクリ！

ナニが来る？

プレスか？ それとも？
その一瞬の気配に俺の何かが警鐘を鳴らしたのか。……………体が、震えだした。

——怖い。

今まで戦った中で最強の存在、古龍。
忘れていた恐怖心が蘇ったのか、不意に足が震えだす。

こんな、恐怖を感じたのはあの……………金と銀の火竜以来か！？

「——っ、いや。あのときに比べりゃ！」

不慣れな村での戦い、片腕がちぎられたあの戦いに比べれば。
こんなコト……………。ピンチでもなんでもない。

歯を噛み締め、もう一度奴を睨む。

吼えて、新たに気合を入れなおしたのか。

アイツ、鋼龍クシャルダオラはまっすぐに俺に向かって走り出した。

……………突進。

四足を使ったその突進は、原始的でありながらその威力は充分すぎる。

人間より遥かに早いその動きは、普通に逃げたのでは間に合わない。

「——ッ！」

だが、ここで人間ならではの小ささが好機となる。
圧倒的な巨体であるが故に、クシャルダオラは急な方向転換ができない。

真横に動く俺の動きにはついてこれないのだ。

だが。巨体と奴の特殊能力故に俺もその場から動けない。

「——マジ、かよ！」

四足を使うクシャルダオラの突進。

それは二本足で突進する、飛竜リオレイアやりオレウスより遥かに早い。

そして、本来。

突進する飛竜リオレイアなどは突進後、その巨体ゆえに身動きが止まり。

動けないが故に攻撃のチャンスとなるのだが。

「——、チィ！」

四本足であるからなのか、はたまた風を纏う事で体重を軽くしているのか？

突進後、クシャルダオラはすぐさま振り向き。再び突進をくりかえす。

後ろから攻撃を与える隙すらない。

それどころか、タダでさえ見通しの悪い吹雪の雪山。

しかも、鋼色のクシャルダオラは雪と見分けがつきづらい。

「とと、クソ！」

奴から視線を外さないように、横へ横へと逃げ続ける。
ランスのような盾がない以上、突進は避けるしかないのだ。

……… 2度目の突進。

クシャルダオラは振り返って同じ場所を目指して走り抜ける。
その場には先程、クシャルダオラの背後をとろうとしたスズネの姿。

「——スズネ！」

超重量兵器、豪槍グラビモス。

盾をもつランスの中でも、グラビモスの甲殻を使ったそのランスは
とてつもなく重く。

結果、動きが遅くなる。俺の声に気がついたのか。それとも、元々
その予定だったのか。

スズネは盾を掲げ、鋼龍クシャルダオラの突進を防ごうとした。

——キイン！

高い金属音がクシャルダオラと盾の間で鳴り響く。

あまりの重量に一瞬、顔を顰めるも。スズネは素早く後ろを振り向
く。

スズネを吹き飛ばすことができず、その場で振り返ったクシャルダ
オラとスズネの視線が交差する。

2度目の突進か、それともプレスか？

だが、考えるより早く。奴はその場で威嚇するように吼えた！

「——好機！」

威嚇、それは野生での戦いなら有効な手段なのかもしれない。

だがここは、狩場。

狩場でハンターを相手に威嚇は隙にしかないえない。

威嚇するクシャルダオラの頭部にスズネのランスが突き刺さる。

豪槍グラビモス、その鋭い穂先から内蔵された毒液がクシャルダオラにしみこんでいく。

一撃、弐撃。そして参撃目を当てる瞬間。

——GYAAAAA！

クシャルダオラは大きく吼えると、地に伏した。

「——マジかよ！」

閃光玉を抜かせば、初めて地に伏したクシャルダオラ。

もがきながら倒れるその姿に、胸が高鳴っていく。

そのまま頭部を刺し続けるスズネを横目に、俺は背後へと回り込む。尻尾から後ろ足へと、スズネがつけたであろう傷に鬼斬破を叩きつける。

——やはり、柔らかくなっている。

傷口に刃筋を立てれば、いかに強固な甲殻だろうと切り裂ける。ハンマーや大剣のような力の武器と違い、太刀は技巧の武器だ。柔らかな間接部分や、傷ついた部分を正確に切り裂くことでダメージを与え続ける。

そして……。太刀は切り裂き続けることで鋭さを増し練気を蓄える。

「——オリヤアアア！！」

気合と共に振りぬいていく、鬼斬破。

内蔵されたキリンの雷尾が光り、紫電となってクシャルダオラの肉体を駆け巡る。

——効いているのか？

先程からの違和感。

竜属性だけでなく、雷属性もクシャルダオラには有効なのではないだろうか？

そんな疑問が俺の頭を駆け巡る。

だが、迷っている時間は無い。

そもそも、俺に他の武器は使いこなせない。

切り裂いた傷口を更に抉るために、剣線をまっすぐにして刺突。更に刃を上に向け、右足のバネを生かし伸び上がるように切り上げ

た。

ソレと同時に弾ける鋼の龍燐。
弾け跳ぶ龍燐を目で追いながら、おれは更に斬撃を叩き込む。

—— U G Y A A A A A A !

一際大きい、悲鳴。

その声に、狩りの終りを期待する。

「—— リヤアアア!!」

溜まりきった練気。ソレをココで爆発させるために踏み込む足に力をこめる。

足から腰へ。更に肩から腕へといたり刃先へと収束する。

大きく弧を描きクシャルダオラの体表面で紫電が鳴り響く。

右に左に、眼前で小さく払いを挟み、最後に大上段からの気刃斬りを叩き込む。

もう一撃。踏み込んで斬りつけようとした瞬間。

—— U G Y A A A A A A A !

一際大きな声で吼えた。バインドボイス。
慌てて俺は鼓膜がやぶれないように、耳を塞ぐ。

今度はしっかりガードしたのか。
スズネは一度衝撃を盾で逃がすと、そのままクシャルダオラを攻撃し続けた。

奴はたまらず、もう一回吼えると。
大きくはたき、飛び去っていった。

「――気がついた？」
「ああ」

刃毀れしかけている刃を研ぎながら、スズネの言葉に答える。
横ではスズネも静かにランスの刃を研いでいる。

最後、はばたく風圧以外は感じなかった。
ということは毒が効き始め、風を纏う力がなくなったことを意味している。

「早く研がなきゃな」
「ええ、でも焦りは禁物よ」

モンスターは一定以上の時間がたつと抗体をつくり、毒を体内で中和してしまう。
ソレをさせないためには、常に一定以上の毒を撃ち込み続けなければならぬのだ。
だが、焦りすぎて準備を怠っては意味がない。
俺達は焦る気持ちを押し殺して、砥石で武器を研ぎ。ホットドリンクを飲んだ。

目指すはエリア7。俺達が崩れた雪山から脱出するために通らねば

ならないエリアだ。

氷雪が混じり寒風が吹き叫ぶ、エリア7。

ソコに目指すモンスター、クシャルダオラがいた。

翼は欠けていようと、その姿は未だ健在。

むしろ、威風堂々とした姿は圧倒的な力量さえ感じさせる。

……翼を欠けさせた。

それは、飛竜で言えば翼爪を叩き負ったに過ぎない。

飛竜の場合、更に尻尾を切断。更に頭部破壊までして、やっと捕獲できるということも多いのだ。

それが未だ、翼を破壊したのみ。

ホットドリンクはもう残り1本。

回復薬も残り数本で、閃光玉は2個しか残っていない。

それでも、コレで最後の決戦にするべきなのだ。

目の前にはクシャルダオラ。

鋼龍と呼ばれ、風を纏いし風翔竜。

毒によってその纏いし風を取り除こうと、その力は未だ健在。

その古龍を前にして、俺達は足を進めていった。

狙うは頭部。あらゆるモンスターにとって最大の弱点である頭部は古龍であろうと例外ではない。

それに、良いニュースもある。

あいつ、鋼龍クシャルダオラは下位の古龍だ。

先程拾った龍燐、それは下位としてはかなりの強度だが。上位、それもキリンの上皮と比べると僅かに劣るという。

同じ古龍といえど、キリンはクシャルダオラより体力が少ない。

ならば、奴が上位である可能性は低いということだ。

「いくぜ、ついてこれるか？」

「ふん、アンタこそボウつとしてると置いてくわよ！」

もはや恒例となった口喧嘩をしながら、俺達は鋼龍の元に走っていた。

—— G U O O O O O O !

大気が震えている。

暴風の具現たる姿、風翔竜クシャルダオラ。

風を纏いしその鎧はあらゆる攻撃を防ぐ。

鋼の体、ソレを纏いし風の鎧。

その力はまさに、古龍と呼ぶにふさわしい暴君だ。

……だが、最早その風の鎧はない。

スズネの槍、豪槍グラビモス。
鎧竜グラビモスから削り取られてできたその槍は、敵対するものに
毒を浴びせ続ける。
その毒に犯された奴に、風の鎧はない。

――勝てる。

可能性はこの手に。
古龍クシャルダオラを倒せる可能性に、この手が歓喜に震えている。

吼え続ける鋼龍。

その姿は、俺達を本気で相対すべき敵として見定めている。

奴は更に吼えた後。

後方に跳び退っていった。

……怯えているのか、それとも何か別の攻撃があるのか。

「ケツ――！」

だが、今までの動きでヤツの“クセ”は見抜いた。
後方に大きく跳び退る動き。

それは、プレス。もしくは突進への予備動作。
だがソレは同時に、どうしようもない“タメ”を必要とする。

プレスならば、周囲の風を体内に取り込むのか？
突進には脚力にタメが必要なのか？

……………どちらにしても、ヤツは必ず一回“威嚇”する。

だが、時間にして僅か数秒。

その後、プレス。もしくは突進がこの身を襲う。

故に。

「——ッハア！」

この一撃をもつて離脱する。

人間より遙かに早い、古龍クシャルダオラ。

その一瞬の隙では、攻撃できるのは僅か一撃。

だが、一撃と侮るなかれ。

その一撃は紫電を纏いて、竜種最大の弱点“角”を切り裂くのだ。

——キイイン！！

会心の攻撃は弾かれることなく、小さな火花を散らして何かが弾け
跳んだ。

「——— 良し！」

紫電を纏いし太刀“鬼斬破”

その一撃を与えた後、俺は前転をしながらその場を離れようとする。
だが、次の瞬間。

「馬鹿、チャンスよ——— ケビン！」

「エッ!？」

後ろから聞こえた声に振り返ってみれば、クシャルダオラが悶えるように倒れている。

今の一撃はそんなに効いたのか？

だが、実際。クシャルダオラは倒れ。

その頭部にスズネは攻撃を加え続けている。

「——— マジ、なの…… か？」

なにか、おかしい。

確かにコイツ。クシャルダオラは傷ついていた。

しかも、スズネのランスはコイツにとって天敵に等しい。

だが、それでも。最初に感じたプレッシャーはこんなもんだっただろうか？

古龍という存在なんだぞ？

「——迷ってる、場合じゃねえな！」

だが、今。チャンスなのは間違いがない。

頭部を攻撃しているスズネの邪魔にならないように、俺はそのまま尻尾へと回りこんだ。

そのまま後ろ足、そして尻尾へと斬撃を繰り出していく。

上段から弧を描いて打ち込み、その傷口を抉るように突き。更に切り裂いた先を逆からなぞりあげるように切り上げ。

縦一本の切り傷を何度も、何度も執拗に切り裂き。傷口を広げていく。

—— U Y G A A A A A A A !

吼える獣、クシャルダオラ。

ヤツは一声吼えると、目の前にいるスズネへと前足を振り上げる。

鉄さえ砕きかねない、クシャルダオラの攻撃。

だが、正面に立ったスズネは落ち着いて一撃、弐撃と盾を使い防ぎ続ける。

「——チィ！」

問題は俺だ。

クシャルダオラにそんな気は微塵もないのだろうか。

スズネを攻撃しようとする前足に連動して、尻尾が俺の胸部を強打する。

意識してない攻撃。それですら、俺にとっては致命傷になりかねない。

「一度離れるぞ！」

「——OK、さっさと戻ってきなさいよ！」

スズネに声をかけた後、少し離れて回復薬を飲む。
まずいな、これで回復薬は後一本だ。

スズネのほうを見ると、クシャルダオラは大きく後退し距離をとっている。

…………… コレはチャンスか？

何度も見た奴のクセ。

先程も見た、威嚇の態勢になっている。
今からでは攻撃には遅い。

だが、空に浮かんだ瞬間ならば“閃光玉”が使える。
コチラも体力が少ない。

空から閃光玉で目を眩ませ、叩き落すことができれば。
無防備状態のヤツを叩くことができる。
だが、閃光玉は残り2個。

……ココで外せば後がない。

祈るような気持ちでヤツから目を離すことなく、ナナメに回り込むように走り寄っていく。
正面には立たない。俺達の装備で古龍に真っ向から戦える筈がない。スズネは逆方向に、ランスを引きずりながら歩いていく。

ランスは重い。

装備したまま走ることは不可能だし、武器を構えることが遅れやすい。

何時でも防御できる状態で、真正面に立たないのは正しい判断だ。

だが、ヤツは。

走りよっていく俺達から更に後方へと跳び退った。

「——ツク、間にあわねえ！」

後方に飛び退った後、必ずやる威嚇。

ソレを狙った攻撃は、2度の後退で完全に射程外となる。

だが、次の瞬間。

「……………よっしゃ、イイ子だぜ！」

威嚇の声を上げた後、ヤツはゆっくりと翼を使って空に浮かびあがる。

この後、ヤツがやることはタダ一つ。プレスだけだ。

俺は逸る気持ちを押さえ、閃光玉のピンを抜く。

閃光玉、絶命した時に強烈な閃光を発するという光蟲を使用した道具。

その強烈な閃光は、クシャルダオラの視界を塞ぎ。

ヤツを地に落とすことに成功するだろう。

閃光玉を投げながら、己の目を護る為に腕で目を隠し。…………俺は勝利を確信した。

空に飛び上がった瞬間、ヤツは必ずプレスを吐いた。

そのタイミングは体が覚えている。

ならば、この閃光玉は必ずヤツの視界を塞ぎ。やつの体を地に落とす。

……………そう、今までどおり。プレスを吐いたならば。

視界を焼く白い閃光。

その閃光が収まったことを確認して、俺は。

「……………なん、だ——とー!!」

叫んでいた。

俺が勝利を確信し、視界を塞いでいた腕をどけてみれば。目の前には鋼の壁。いや、クシャルダオラの顔があった。全てを引き裂きし、鋼の牙。それが目前へと迫っている。その牙に食いつかれては、俺のブランゴシリーズなどひとたまりもない。

何とか、身を捻り。その牙をかわすも。

「——ッ、ア！」

その後に来た、その体の突進を避けることはできなかった。紙屑のように吹き飛ばされ、天と地が逆さまになるのを見ながら。俺と同じように吹き飛ばされるスズネを見た。

閃光玉で視界を塞がれ、ガードのタイミングが遅れたのか？それとも、俺と同じように攻撃のチャンスだと思ったのか。

——ドサッ。

受身もとれずに無様に落ちる音が聞こえる。

体中に走る痛み、それを無視して鋼龍クシャルダオラを睨みつける。

鋼龍クシャルダオラ。

存在そのものが天災と呼ばれる古龍。

やつの動き、全てを見切っているつもりでいた。だが、今。確信する。

コイツは最後まで、この攻撃。

空からの突撃を“隠していた”のだ。
考えてみればリオレウスも、空からの毒爪の攻撃があった。
リオレウスに比べて遥かに低い高度ではあるが、ヤツも空を飛んでいた。

同様の攻撃があると考えなかった俺のミスだ。

空からの滑空、ソレは弧を描く閃光玉を追い抜き。

恐らくヤツの背中爆発したのだろう。

視界を塞ぐ閃光玉も、視界にはいなければ意味がない。

ただ、俺達の視界を塞いだだけだ。

今になって、コイツの考えが手に取るように分かる。

他のハンターから逃げだしたコイツは瀕死の重傷だった。

手っ取り早く適当なモンスターを捕食し、傷を癒すつもりだったの
だろうが。

弱いモンスターほど、生存本能は強い。

逃げてしまったモンスターの中、空腹を抱えていたクシャルダオラ
の前に俺達が現れる。

軽く食事を取るつもりだったのだろうが、俺達に予想外の反撃を加
えられたため。

確実に勝つために。

……最後の“攻撃手段”を隠していたのだ。

なぜ、その可能性に思いが至らなかったのか！

「——ッ、ハア！」

痛い――。

引き裂かれるような激痛。全身を襲う痛みに血液が沸騰している。苦悶の声を僅かに出しながら、僅かな酸素を求めて獣のように舌を出す。

――ゼエゼエと、肺を軋ませながらの呼吸は１ミリグラムの酸素すら脳に運ばない。

その生死の狭間で、ありえない幻を見た。

鋼龍、クシャルダオラ。

古龍と呼ばれ幾つモノ異名を持つ、天災にも等しき獣。数多の凶器に傷つけられようと、未だその姿は健在。

ソイツと目が合った瞬間。

――世界が凍りついた。

自然界の常識、その全てを狂わす超越者たる力。

風翔竜の異名の如く、全ての風がヤツを支配者と認め奴にまわりついていく。

放たれる殺気は今までとは比較にならない。

手を抜いていたわけではないだろう、ただ好機を逃がさぬために罠を張っていただけ。

狙われたのは間抜けな俺。

ヤツがわざと作った隙に、まんまとひっかつたのだ。

遙か後方には、倒れて気絶しているスズネの姿。

俺の手には、最早残り一つとなった回復薬。

これをスズネに与えている時間はない。

俺が飲む暇もない。

なにより、呼吸ができない。

ヤツが放つ殺気。

タダでさえ壊れかけた俺の肺がギシギシと悲鳴をあげる。

その目の前で、ヤツはゆっくりと息を吸い込んだ。

— U G Y A A A A A A !

叫ぶ獣、それは勝利の雄たけびか？

雪原にゆっくりと四肢をつき、全力をもって俺達をかみ殺す。

「——！」

五感が凍りつく。

絶対の絶望の中、俺には怪力の丸薬を呑む暇すらない。

いや、呼吸さえ困難なこの状態。

あらゆる薬を飲むことは不可能に等しい。

ヤツの腰が上がる。

雪原に四肢をついたその姿は、人間に例えるなら号砲を待つスプリ

ンターのようだ。

「——ッ、ハ！」

獣の如く息をつく俺の遙か後方には、俺がタダ１人愛した女。
気絶してしまい、最早動けそうもない。

その姿を視界におさめ、俺は最速で己に何ができるかを模索する。

…………… 太刀で倒す？

却下。

もはや、切れ味を失った鬼斬破ではヤツを倒せない。

倒せたとしても、数撃は必要。

一方、この一撃を喰らえばスズネは生き残れない。

…………… 怪力の丸薬を吞む？

却下。

呼吸すらできないこの状況。

更にその暇をやつが与えてくれるとは考えられない。

…………… 爆弾を使う？

問題外。

クシャルダオラが呼び寄せたこの吹雪。

この吹雪の中、湿気に弱い爆弾は使えない。

故に、この瞬間。俺が成すべき事は。

「――UGYAAAAA!!」

鋼の獣。鋼龍クシャルダオラが俺の元へと疾駆する。
俺とヤツの距離は約50メートル。
その距離をもつてヤツは疾風となって俺に襲い掛かる。

「……………ありがとうえ」

身動きすらできないこの状況、クシャルダオラの元に向かうことすら俺にはできそうもない。

……疾駆する鋼の閃光。

巨大な鋼の魔弾と化したその姿。
鋼龍クシャルダオラ、ヤツは俺を新たな“餌”とみなして迫り来る。

目をつぶる。

恐れをかみ殺し、己^{おのれ}が成すべき事を思い描く。

思考は冴えている。

己の戦力も把握している。

鋼龍クシャルダオラを一撃で葬る力など俺にはない。

余分なモノは必要ない。力がない、技も足りない。

片腕はなくなり、せつかく鍛えた鬼斬破は使いこなせない。

ならば。やることはタダ一つ。

俺は右手の鬼斬破を逆手に構え。

ゆっくりと……………雪原に刺した。

柄に右手をそえ、左手は鐔を更に深く刺すようにヤツに向ける。

刃筋が向かうべき方向は鋼龍、クシャルダオラ。

雪原から抜けないように己の全力をもって、太刀“鬼斬破”を押さえつける。

——ニヤリ。

やつが嘲るように嗤うのが分かる。

盾ならともかく、そんな細い剣で我の突撃を止められるのか？と、嘲笑う声が聞こえるようだ。

そう、太刀にはガード性能などない。

大剣のように分厚い刀身ならば盾に使えることもあるだろうが、この太刀にそんな能力はない。

なにより。

ガッツやスズネのように、モンスターの突進に耐える訓練を俺はしていない。

ガード性能が高い武器。それらは、モンスターの突進を食い止める

訓練を必要とする。

ガッツより力もない、経験もすくない。

スズネのように敵の攻撃を受け止める力もない。

そんな俺が対抗できるのは、この僅かな知識のみ。

——ドクン！

心臓の鼓動が上がる。

熱い血潮が体内を駆け巡り。己がすべきことを模索する。

——待たせたな。相棒。

準備は整った。今こそ、オマエと俺でヤツを倒す。

「——ヴオオオオオ！！」

歓喜の声で叫ぶ獣。

彼我の距離は40メートル。

後ろのスズネまでの距離は10メートル。

今から避ければ、その鋼の牙はスズネを噛み砕く。

「——ック！」

残りの気合をこめて、両の手に更なる気合をこめる。
いつもながら時間がない。
だが、これでも最善のスピードだ。

——ガチリ、ガチリ。

撃鉄を落としていく。

俺がやるべきことは防ぐだけではない。

難問は2つ。

ヤツが突進した時にこそ、俺の真価が試される！

……2秒。

わずか数瞬で間合いを詰める獣。

奴との距離はもはや、10メートルと離れていない。

膨大な風を操る、鋼龍クシャルダオラ。

数多の街を滅ぼし、数多のハンターを殺した伝説の獣が俺に牙をむく。

……1秒。

のこり、5メートル。

対するは無銘の下位ハンター。

雷を帯びし太刀を操る、隻腕の狩人。

切れ味の失った太刀を盾にして、鋼龍クシャルダオラを迎え撃つ。

「——ッ、ハァ！」

問題はタイミングだ。

先に仕掛けても危うく、同時でも危うい。

奴が噛み付く。その一瞬に賭けねば、2人ともかみ殺される。

「——ゴアアアアア！」

雪原に疾走する鋼の一閃。

鋼龍が己の名に賭けて、今度こそ標的をかみ殺さんと牙をむく。

あらゆる物を噛み砕く鋼の牙。

体を揺さぶる強風に身を震わせながら、迫り来る鋼の龍を睨みつける。

刻が止まる。

秒に満ため空白、シナプスが俺の脳髓を駆け巡る。

盾など必要ない。

奴を殺すのに刃など必要ない。

全てを捨てて選んだモノ、その真価が試される——。

——ギイイイイン！

鋼龍の牙と人間が生み出せし太刀“鬼斬破”

その拮抗は、僅か1秒ともたなかった。

仮に鬼斬破のほうで、鋼龍の牙より硬度で僅かに勝ろうと巨大な質量はソレを軽く凌駕する。

俺が呼吸する力すらこめて、突き刺した鬼斬破は僅かに火花を散らした後。

ゆっくりと、弾け飛んでいった。

ソレと同時に回転する俺の体。

全力をこめた右腕は太刀に引つ張られるように後方に。

そして、回転するように左腕は前に。

クシャルダオラはそのまま、俺の“左手に”食いついた。

——ギロリ。

収束する殺意。

それは50センチという至近距離で嘲りながら俺を喰らう。

鋼の牙。その硬い感触に俺の左手が悲鳴をあげる。

鋼の左腕。義手ごと俺を喰らう鋼の牙。

それはまだ人体であった、俺の肘から先にも牙を突き立てる。

「——ッ、アアアア！」

軋む体、牙は容赦なく俺の腕を咀嚼する。
後ろでは、気絶から目を覚ましランスを構えるスズネの姿。

「馬鹿が、逃げりゃいいのに」

その姿に苦笑した。

己が限界であろうと、まだ俺を救おうというのか。

「ま、だから。——そんなアイツだから」

命をかける“価値”があると。
俺は最後の“銃爪”をひいた。

光る火花、弾ける葉莢。火薬の臭いが左腕を包み。

——次の瞬間、轟音が俺の左腕から鳴り響いた！

轟音は鋼龍の口内で鳴り響き、俺の鼓膜を突き抜ける。
鳴り響くは勝利の号砲。

今こそ、この手に。

「貴様の命」――

鉄が溶け、焼け爛れる臭いと共に。
俺の左腕に激痛が駆け巡る。

コレが、最後の手段。非力な俺が身につけたタダ一つの相棒。
左腕はくれてやる。変わりに、貴様の命を。

「――貰い受ける！」

鳴り響く轟音、左手から放たれたそれは鋼龍クシャルダオラの体内
で猛り狂った。

）
）

竜撃砲というモノがある。

飛竜がブレスを吐く仕組みを解明して作られた。

人が携行する武器としては最強の攻撃を誇る武装だ。

ガンランスに取りつけられる武装だが。俺の左腕にはコレに近いも
のが仕込まれていたのだ。

元々、俺の腕力はガッツに比べて遥かに小さい。

ガッツならば義手に更に鉄心を入れることで、大剣の一撃を更に強
力にすることができるのだが。

元々の体力が劣る俺に、ソコまで重い義手は使いこなせなかった。

そこで考え出されたのがカラ骨を使った、強化である。

周囲に磁力を生み出し、鬼斬破をつかめるように調整した電磁石の義手。

この中身は謎のままだった。

太古の技術で「もうたあ」とかいうらしいのだが。

この場所には必要ないということで取り外されたのだ。

元々、太刀は手数で攻撃する武器であるため。

中身を軽量のカラ骨（大）にしたのだ。

カラ骨（大）滅龍弾や拡散弾LV3の薬莢として使われるこの骨は耐熱性、強度。

共に問題なく、しかも軽いということで非常に優秀な義手の材料になった。

そして。カラ骨（大）が使えるということは。

この左手なら竜撃砲、もしくはヘヴィーボウガンのように拡散弾が撃てるのではないか？

と考えたのである。

俺達、4人のパーティーは近接武器ばかりでガンナーがいない。

そのため作ったこの武器だが、当然の如く失敗作であった。

そもそも竜撃砲とは、巨大なガンランスだから使えるのであって左手。

それも、肘から先という短い距離では必要な強度が保てなかったの

だ。

火薬量を詰め込みすぎれば、爆発。更に射程距離も短い。それこそ“体内”で爆発させない限り必要な破壊力は得られないことが分かった。

）
）

それでも、この装備を外さなかった理由。それが……このようなときのためだ。

モンスターの体内。特に口の中で爆発させれば、かなりの破壊力を持つ。

モンスターが人、もしくは他のモンスターを襲うときは捕食のタメが殆どだ。

その口は最後に必ず俺を“喰らおうとする”
ならば、追いつめられた時。これを使う瞬間があると思ったのだ。

故に、左手は常に前に。

相手の口に入れる必要があった。

だが、左手。

それも武器をもっていない左手を、コイツ。クシャルダオラは警戒するだろう。

意味がない行為ほど目立つことはない。

ここまで用意周到に罠を張っていたモンスターだ。
俺の先に行く可能性は充分にあった。

だから、太刀“鬼斬破”を盾にした。
キリンの雷尾を使った太刀、鬼斬破は確かに名刀だろう。
だが“盾”にするには薄すぎる。
勢いを利用して、クシャルダオラを真つ二つ！
なんて芸当は俺には不可能だ。

だから案の定。ヤツは俺を“愚かな”と馬鹿にした。
細い刀身。それで巨体を誇るクシャルダオラの攻撃を防ぐなど不可能。
ソレを分からず、愚かにも挑戦してきた人間に。力の差を見せつける為に。

わざわざ突進してきたのだ。

俺が太刀を盾にした本当の理由。
それは、クシャルダオラを油断させるためと。
なにより、左手を違和感なく“前にだす”この2つを成し遂げた。

「——ッ、ア！」

だが、代償は大きい。

そもそも竜撃砲は巨大なガンランスだからこそ使えるのだ。
肘から先しかない、義手。

この長さではガンランス特有の放熱をおこなうこともできない。

更に短い砲身で使ったため、義手の指は木っ端微塵。
更に磁力というのは高温に熱せられると磁力を失ってしまう。

指を失った上に、磁力を失ったのではこの義手は2度と使えないだろう。

それでも。倒すことができたのだ。

クシャルダオラから投げ出された俺は、ヤツが黒煙をあげ倒れるのをみながら膝をついた。

「――ケビン！」

叫びながら俺に近づくスズネをみながら。

俺は義手と共に、張りついたゴム質の皮を剥ぎ取っていく。

「――ッ痛！」

焼け爛れた義手の熱に、思わず声を上げる。

だが、このままにしておくわけにはいかない。

素早く剥ぎ取っていると、スズネが俺の前に立った。

「――馬鹿ケビン！ またこんな無茶して！！」

「オマエな、もう少し怪我人を労われよ」

苦笑しながら、肘に張り付いたゴム質の皮を更に剥がした。

ゴム質の皮。それは義手から電流が流れないようにするための絶縁体。

だが、同時に。この皮は火に弱い。

火に弱いゲリヨスから切り取られたこの皮は。
竜撃砲モドキの高熱と爆炎に耐え切れなかったようだ。

高熱に溶けた皮は俺の皮膚に付着して、酷い火傷になっている。

「————— ったく、なんとか生き残ったな」

「ふん、まったくいつもいつも。無茶ばか………り？」

スズネがまだ文句を言おうとした瞬間。

——— ゾクリ、と全身を寒気がつらぬいた。

ガタガタと震える体。
脳内に鳴り響く警鐘。

——— 振り向くな、振り向けば必ず後悔する！

ソコには何もない。何も知らずココから立ち去れ。

本能が、理性が。全てが訴えるその言葉を無視して。
俺はゆっくりと振り返った。

「…………… グルルル」

ボロボロの体。それを無視して立ち上がっている鋼龍クシャルダオ
ラ。

その体は最早血塗れで、口からは血がとめどなく流れている。

体内での爆撃、更には今までの攻撃。

全ての攻撃で最早、瀕死の重傷だろう。

対する俺達もボロボロだ。

俺は片腕がもげたまま、スズネも疲れきっている。

俺はゆつくりと雪原に刺さっている鬼斬破を抜くと。

「——いいぜ、鋼龍。第二ラウンドの始まりだ」

ヤツに切っ先を向けた。

ハッタリだ。もはや俺に策はない。

スズネはボロボロ。おれはズタズタ。

それでも、太刀を構え続ける俺を見下ろしながら。

—— U G Y A A A A A !

鋼龍クシャルダオラは一声吼えると。

ゆつくりと上昇していった。

先程まで吹雪いていた空は晴れ。

冴えた月光が夜空を照らしている。

ヤツはもう俺を振り返ることはなく。
そのままゆっくりと上昇していく。

飛び去る先は、白き月。

輝くその月に、鋼色の影が溶けて……………そして消えていった。

「逃げた……………のかな？」

「つつか、見逃してもらったって感じだな」

俺達はお互いを支えあうように、その場に力なく座り込んでいった。

「強かったね」

「ああ」

「でも、私達やったんだよね」

「……………ああ」

何とはなしに、スズネを見やると。

スズネはコチラを向きながら、ゆっくりと俺の頬に左手を添えた。
熱を持った体に、その冷たい指先が心地いい。

「また。傷つけちゃったね」

「ああ、お互いにな」

苦笑を洩らしながら、俺は右手をスズネの腰にまわす。

「また、義手。作らなきゃね」

「まあな、今から頭が痛えよ」

スズネが右手で、義手が取れた左肘をゆっくりと撫でる。
傷口に触れ、少し痛い。

そのまま、ゆっくりと顔を近づけてくるスズネの吐息は溶けるほどに甘く。

「だから、ケビン」

「ああ」

俺は覚悟をきめ、ゆっくりと前に屈んでいくと。

「——早く、こぼれた血と鋼の龍鱗を拾いにいきましょう！」

そのまま、ずっこけた。

雪原に埋まる俺の顔。

なぜか、目の周りだけ雪が溶けていくのは気のせいだと思いたい。

「何、遊んでるのよ！ 古龍の血に鋼の龍鱗なんてレア素材なのよ。ギルドに売ってもいいし、新しい武器にもなるんだから！ ホラホラ、ホットドリンクの空瓶だして。さっさと古龍の血を詰めるわよ！」

そういうと、雪原に埋まったままの俺をおいて。

スズネは走ってクシャルダオラが飛び立った場所へと駆けていった。

残ったのは雪原に埋まったままの俺。

――俺、アイツのドコに惚れたんだっけ？

<第一部完>

感想は感想提示版にお願いいたします。

感想をいただけると作者が狂喜するのです。

そしてすいません、仕事が忙しくなってきたので一時執筆を休ませていただきます。

豪雪戦線（下）（後書き）

長いので上下編に分けました。

そして気がつけば、アクセス数がとんでもないことになっている！？
ここにちは名無しです。

46,209アクセス ユニークアクセス4,881人。

こんなにみていただけたとは嬉しい限りです。

これからも皆さんが少して暇が潰せる作品が書ければいいなと思っております。

つで、作中でも語られておりますが義手を大砲にするのはオリジナルです。

まあ気がついていらっしやるかたも多そうですが（汗）
すこしでも楽しんでいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2985i/>

モンスターハンター “ 隻腕の狩人 ”

2011年7月6日01時19分発行